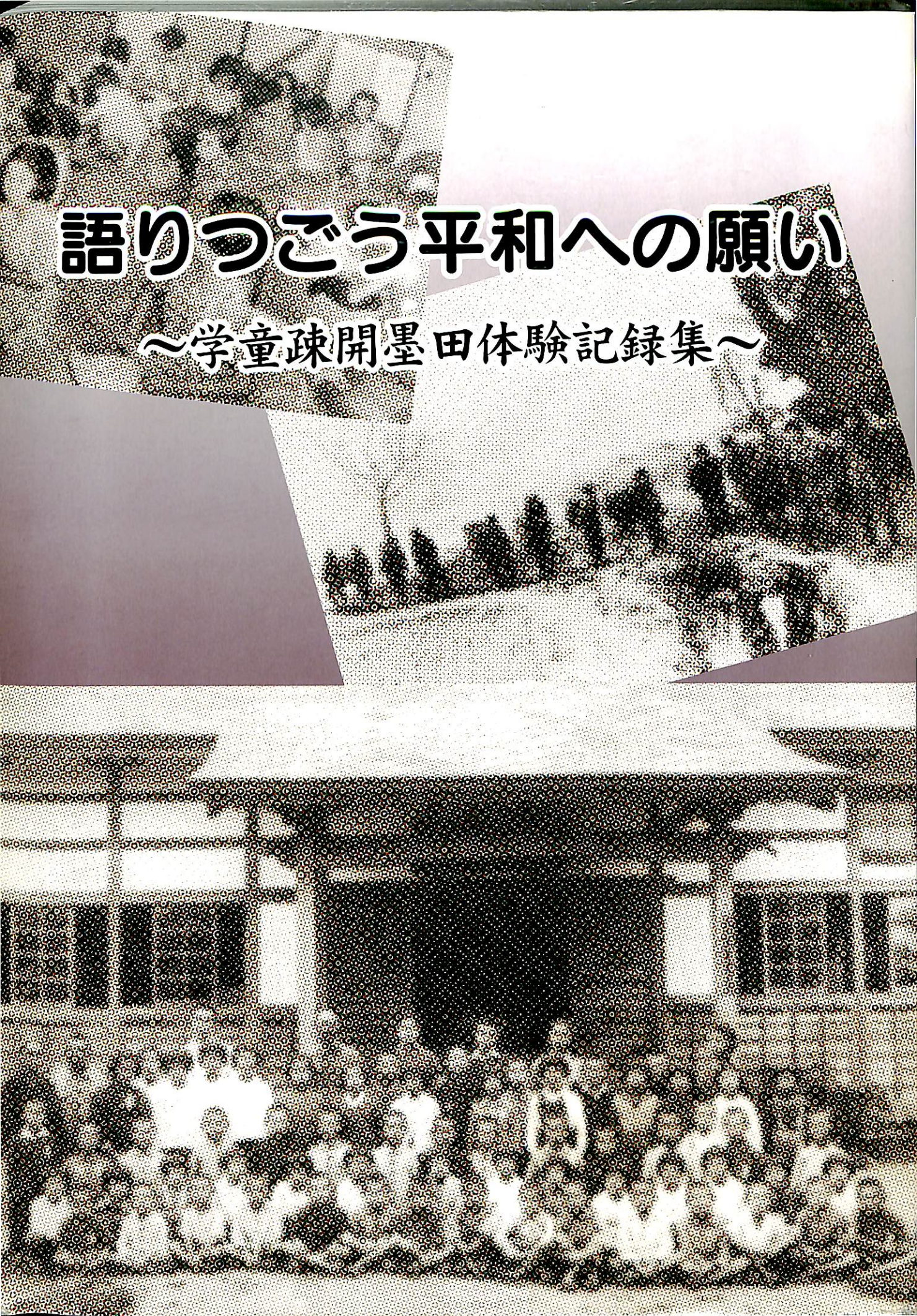
語りつごう平和への願い

～学童疎開墨田体験記録集～



語りつごう平和への願い

～学童疎開墨田体験記録集～



発刊にあたって

今から六〇年ほど前、日本は第二次世界大戦という大きな戦争の渦の中にありました。戦争も後半になると、日本は空襲の被害を受けるようになります。とりわけ首都東京への空襲は激しさを増していきました。

そこで昭和一九年、次代を担う子どもたちを地方へ避難させることになりました。地方の親類などに避難させたのが縁故疎開、国民学校（現在の小学校）の三年生から六年生を集団で避難させたのが学童集団疎開です。

集団疎開先は、当時の本所区は千葉県、向島区は茨城県で、宿舎（学寮といった）は、寺院や旅館などでした。

宿舎によって土地の人の受け止め方や環境が異なるなか、見知らぬ土地で家族と離れ、不自由な生活を続けていたのです。

その後、昭和二〇年三月一〇日未明、東京下町は、大空襲に見舞われました。この大空襲では多くの方が亡くなりましたが、そのなかには疎開していた子どもたちの家族や友達、そして国民学校の卒業式、また、中学校受験のために帰京していた六年生がいたのです。

この空襲で燃え上がった炎の色は、学童疎開先の千葉や茨城でも見えたといいます。その空の色を子どもたちはどんな気持ちで眺めていたのでしょうか。

その後、子どもたちは、さまざまな思いを胸に岩手県と秋田県へ再び疎開して行きました。

あれから六〇年、今年は、戦後六〇年の節目の年にあたります。

そこで、疎開をした方々の体験や当時の思いを次の世代に伝えいくために体験記をまとめ「語りつごう平和への願い～学童疎開墨田体験記録集～」を作成しました。

作成にあたって、体験記を寄稿された方やお話を伺った方など一一一名の方の体験記を掲載することができましたが、時間や字数に限りがあってすべてを書ききれなかった方や紙面の都合で全文掲載できなかった方もありました。また、子どもたちにも広く読んでもらうことを目的としているため、いろいろ編集させていただいた方もありました。このことに対しましては深くお詫びいたします。

また、提供していただきました当時の学校の記章や写真などの資料につきましては、すみだ郷土文化資料館で長く保存させていただくことにいたしました。

どの体験者も、学童疎開が自分にとって決して忘れることのできない出来事であったこと、そしてこれからの子どもたちには決して体験させてはならないという気持ちをお持ちだということを痛感いたしました。

この体験記を通して、寄稿された方々の思いが多くの若い世代に伝わり、日本はもとより世界の平和を改めて認識するきっかけにしていただければと思います。

この体験記の刊行にあたり、御協力いただきました多くの皆さまに深く感謝申し上げます。

平成一七年一二月

墨田区教育委員会

学童疎開への流れ

昭和一六年一二月八日の真珠湾攻撃によって始まった太平洋戦争（第二次世界大戦）は、日々日本側に不利な状況となり、昭和一七年四月一八日、東京は初めて米軍機の空襲を受けた。続くミッドウェー海戦の敗北以来、日本側は制空権を失って東京はおろか、主要都市においても、アメリカを中心とした連合国軍機の空襲は日常的とさえなっていた。

一九年ともなると、七月にはサイパン島が陥落して、戦局はいよいよ激しくなり「本土決戦」は必死の情勢となった。そこで政府は二月二五日に「決戦非常措置要綱」を、続いて三月三日「一般疎開促進要綱」を閣議決定して建物疎開および人員疎開の強化を打ち出した。そして、三月九日、次官通牒をもって、「京浜地域人員疎開の措置要綱」を定めて、各地方長官（知事）に指令した。

これらによると、人員疎開の重点地域の疎開者を甲・乙・丙の三つに区分、乙疎開者として「防空活動の支障になる惧れのある（中略）特に学童―国民学校初等科児童―の疎開」が、甲疎開者に次いで配慮されることになっていた。これは、あくまで縁故疎開を想定したものであって、「疎開の希望はあるが縁故先がないためできない学童のための集団疎開については考究中」となっていた。

しかし、東京都では政府の施策に先立ち、「一八年の春ごろから、老幼の疎開勧奨問題とともに学童を空襲から護るべき適切な措置の必要を痛感して、その具体策を考慮していた」（東京百年史）のである。

そこで、児童の地方縁故疎開を独自に推進するため、三月一〇日、教育局長名で「学童疎開奨励ニ関スル件」の通達を発し、各区長などに対して、その指示を与えていた。

こうした国や都の動きを受けて、春休み中に地方の縁故を頼って疎開した児童は、墨田区では五七八八名（本所区三一五二名、向島区二六三六名）に達した。

縁故疎開児童が増え始めると同時に戦況もしだいに切迫し、また、地方に縁故のない保護者の希望もあって、都は地方の養護施設などを利用して、「戦時疎開学園」として集団的教育を行う計画を立てたが、参加希望者をすべて収容することは不可能だった。このため都では、国民学校三年生以上の児童を関東近県および東北地方に疎開させる計画を独自に立て、その疎開実施要綱を作成するとともに詳細な実施細目も発表した。

その後、いよいよ戦局が不利になったことから、政府は、国民学校初等科児童の疎開を強く促進する目的のため、「学童疎開促進要綱」を閣議決定した。あわせて都が計画していた集団疎開計画を取り入れ、それを国家的施策として実施することとし、学童疎開の具体的な方策として「帝都学童集団疎開実施要領」「同実施細目」を示すにいたった。

こうして、学童の疎開は縁故疎開を原則とするが、それが困難な児童は集団で疎開することになったのである。

都では、一九年七月一六日、都内全国民学校校長会で、都長官から協力の要請を行い、さらに隣組回報などで児童の保護者に主旨の周知徹底および協力を求めて、八月四日から九月二四日までにだいたいの疎開を終了した。この児童の集団疎開は、二〇年三月末日を期限としていたが、その後の戦局のいっそうの悪化によって、一年間延長された。

さて、本区の疎開状況であるが、本所区は千葉県へ八一八五名の児童が一七六の宿舎へ、向島区は茨城県へ六八八三名の児童が一〇九の宿舎に、それぞれ疎開した。宿舎は、旅館、寺院、公会堂、教会などを借り上げてこれに当てた。これが、第一次疎開である。

その後、二〇年三月一〇日に東京大空襲があるなど戦局はますます激しくなり、本土決戦の可能性も出てきたことから、千葉・茨城県は海に近く危険であるとのことで児童を再度他県に疎開させることとなった。本所区は千葉県から岩手県へ二一七八名、向島区は茨城県から秋田県へ二五五九名が再疎開したのである。これが第二次疎開である。

それから三か月あまりで、八月一五日の終戦の日を迎えた。

都は、できるだけ二一年三月の学年修了まで疎開を続ける考えだったが、一緒に暮らしたいという保護者たちの希望と早く東京へ帰りたいという児童の思いを妨げることはできず、一〇月一七日から一一月三〇日までに臨時列車を編成し帰京させることになった。学校が全焼していたり、保護者の強い希望があったりして翌年三月まで継続した学校もある。

こうして、墨田区、当時の本所区と向島区の児童たちの集団疎開生活は終了したのである。

なお、国民学校ごとの疎開先・学寮名・人数は、巻末にまとめて掲載した。

【参考】

「墨田区教育史」（昭和六一年発行）

「語りつごう平和への願い～東京大空襲墨田体験記録集～」

目　次

発刊にあたって
学童疎開への流れ

【学童疎開体験記】

〈本　所　区〉

人生の原点　藤本武雄……2
学童疎開体験記　岡野郷子……4
学童疎開　杉田一雄……7
学童疎開体験記　田中嘉津子……10
私の学童疎開体験　菅原哲也……11
学童疎開の思い出　石井　仁……14
縁故疎開　太田敏栄……17
戦争　三木靜子……19
得難い学童集団疎開体験に感謝　向山政一……22
学童疎開体験記　柴　トミ子……26
学童疎開　千葉から岩手へ　髙橋由春……28
学童疎開の悲しい思い出　滝沢弘子……33
学童疎開体験記　橋本喜雄……36
集団学童疎開のころの体験　林　恒雄……41
学童集団疎開の思い出　酒巻壮宣……44
戦時下の学童疎開と縁故疎開（残留組の学童疎開）　湯川鎮雄……47
学童疎開体験記　吉澤恒雄……51
学童疎開思い出すまま　石倉一郎……54
私の疎開体験　上野川康子……57
語り継ごう平和のために　大野正子……59
学童疎開体験記　鹿田嘉正……63
集団疎開　土田敬子……66
布施村・学童集団疎開の思い出　浪川和夫……68
学童疎開　お寺の住職との交流　三好すず子……72
里に移りて　村田庄二……76
学童集団疎開と縁故疎開の体験　長嶋之夫……79
空襲と疎開の記録　土屋冨貴子……83
疎開　秋月美津江……85

六〇年前を回顧して　上蕨　博……87
戦後六〇年、受け取った小学校の卒業証書　城森　満……88
学童疎開について　田村　昇……92
学童疎開で生き残った姉弟　星野光世……94
戦争が憎い　益子孔一……98
戦禍と疎開　そして予期せぬ別離　溝口順重……102
母の残した教え　八重田賢一……104
学童集団疎開　後藤代三……107
学童疎開体験記　玉川雅雄……111
学童疎開という体験　中島邦子……113
学童疎開体験記　小沢末子……114
学童疎開の思い出　牧　康策……117
千葉集団疎開　朝倉達郎……120
学童疎開の思い出　植木敬一……122
集団疎開体験記　佐々木清江……127
集団疎開　松本章乃……131
みんなひとりで生きた　丸山房子……133
学童疎開　亀山の思い出　三宅冨美江……138
東金学童疎開の思い出　酒井喜美子……141
学童疎開体験記「私の縁故疎開」　樋口　実……143
集団疎開をかえりみて　間宮好枝……146
集団疎開そして縁故疎開　村田繁彰……148
学童疎開の思い出　大橋敏雄……152
学童疎開の思い出　沖田喜代子……156
学童疎開体験記　高橋千枝子……159
最年少の学童疎開　谷　公子……161
学童疎開「私の体験」　長岡瓔子……164
いじめられ　平野義明……167
学童疎開の体験　牧瀬正子……171
昭和二〇年三月　学童疎開の思い出　山崎　格……174
忘れることなんかできない　石井泰代……179
疎開体験　尾野房江……181
学童疎開体験記　勝谷　保……184
学童集団疎開―再疎開―のこと　北橋秀夫……187

府馬修徳院―学童疎開―　佐久間幸子……189
学童疎開　家族との別れ　田島静子……192
学童疎開の思い出　早川巖……193
学童疎開　千葉―岩手　渡辺貞子……198
学童疎開　加茂登千……202
六〇年前を振り返って　杉田利雄……205
若い世代に伝えたい　武田英二……207
学童疎開　東京大空襲そして長崎　徳永洋子……208
ぼくの学童疎開日記　正井伸也……211

〈向島区〉

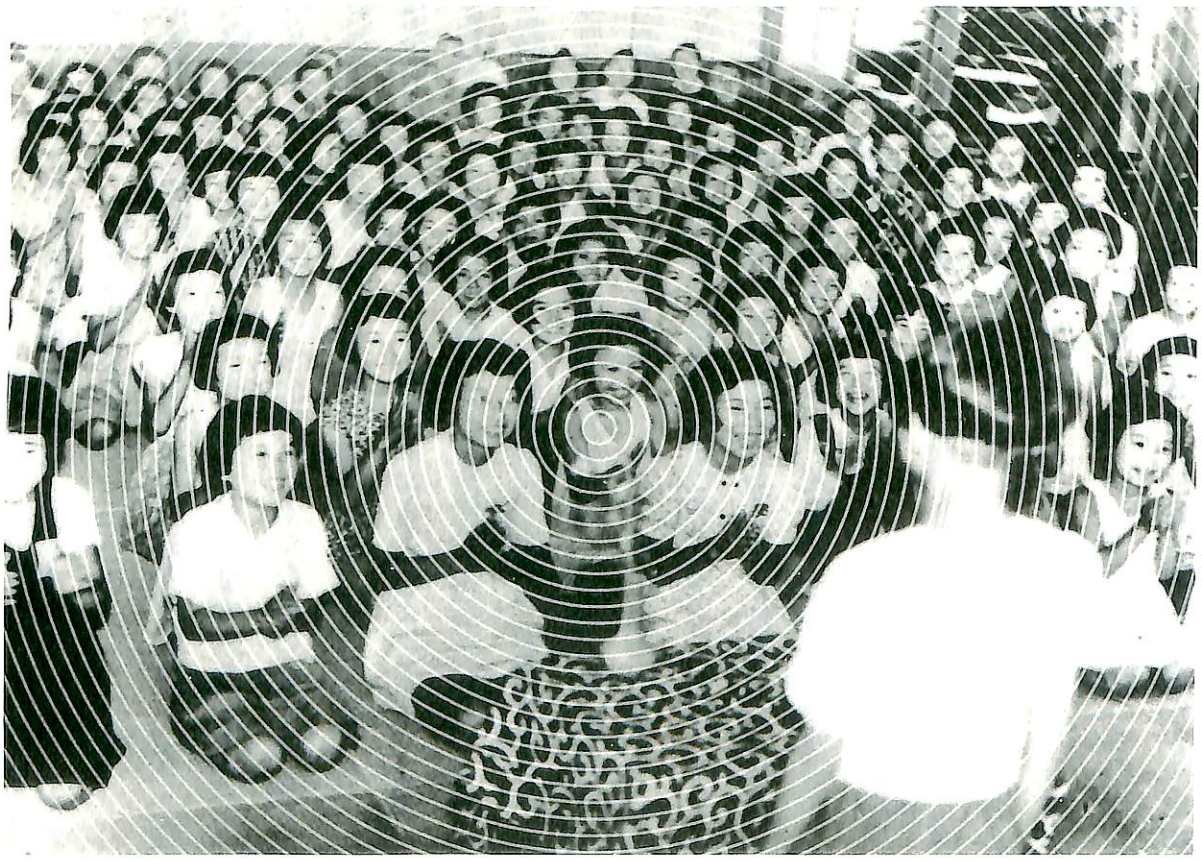
学童疎開　佐野弘明……216
疎開の神様と呼ばれても　角尾禎昭……220
学童疎開の思い出　角田悦子……224
学童疎開体験記　森田佳伸……227
私の学童集団疎開体験　大川慶一……231
私の空襲体験　海老沼賢次……233
忘れ得ぬ日々　北村芳子……235
疎開体験「日本の罪」　中村洋子……239
三枚の写真―非国民と呼ばれたくなくて送り出した親もつらかった―　上村道子……243
疎開体験を語る　千葉脩司……248
学童疎開の記憶　市川五五太郎……251
飢えとシラミとボス　でも、精一杯生きた　並木孝信……253
学童疎開　桜沢京子……257
学童疎開体験記　柴山ヒデ子……260
私の縁故疎開　鈴木裕子……262
私の集団疎開体験記　利根川のほとりの境町の福島屋、岡田屋、瓢亭～八郎潟を見下ろす丘の天王村の自性院～　羽根田尚三……264
空腹に耐えかねて　羽根田整……268
学童集団疎開の思い出　渡辺桂子……270
学童疎開の記　岡本直司……275
ワカモト・カボチャとウワバミ草　鎌倉徳之……279
学童疎開の思い出　児島圭子……283

学童疎開体験記　五月女　健一……285
学童疎開体験記　五月女　達男……287
学童疎開　林　澄子……289
潮来の思い出　土屋百合子……292
学童疎開体験記　増田三枝……295
学童疎開あれこれ　三国智司……298
学童集団疎開の思い出　石谷栄次郎……301
集団疎開の思い出　大黒小の實……306
混迷の中で学童集団再疎開始まる　佐藤五郎……308
私の学童疎開体験　瀧澤良仁……310
疎開地「船橋・尾道」での生活　宍戸弘明……315
「集団疎開の級友と別れて」の記　大塚繁……318
集団疎開の思い出　中村靖……320
学童疎開体験記　川原田叶……323
飢えた日々　城戸房嗣……325
私の学童疎開の思い出　山本善弘……328
太平洋戦争　集団疎開体験記　野田とき子……331

【関係者寄稿】弟・若林一旦の学童疎開　工藤愛子……335
【関係者寄稿】疎開児童を引率「父・大塚竹四郎をしのぶ」　大塚美枝子……337

【資料編】
◇疎開先一覧……341
◇学童集団疎開児童持参品……356
◇学童集団疎開学寮の一日……357
◇学童集団疎開先学寮の献立例……358
◇ことばの解説……359
◇協力者一覧……368
◇学童疎開体験記寄稿者地域別一覧……369

学童疎開体験記



人生の原点

業平国民学校五年　藤本武雄
（旧姓　片田）

「パールハーバー」米国ハワイ、オアフ島にアリゾナ記念館があります。これは二度と愚かな過ちを繰り返さない願いを込めた記念館です。太平洋戦争（第二次世界大戦）の始まりとなった歴史的な場所です。

一九四一年一二月七日（現地時間）未明、日本軍による真珠湾攻撃がありました。これでアメリカは戦死者二〇〇〇名以上の大被害を受けました。アリゾナ記念館は、この攻撃時に撃沈され、今も海底に横たわる「戦艦アリゾナ」の上に建てられた白亜の記念館です。アメリカ人は「Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　Ｐｅａｒｌ　Ｈａｒｂｏｒ（パールハーバーを忘れるな）」を合言葉に日本への戦意を高揚させ、第二次世界大戦に突入して行きました。

今年は戦後六〇年目になりました。振りかえってみると私も戦時中は強制的に東京から学童疎開させられ、家族とも離れ小学生だけの集団生活を余儀なくさせられました。当時小学校五年生でした。小さな下級生の面倒も見なければならず、自分自身の身の回りのことも満足にできない年ごろでしたので、ずいぶんとつらい思いをしました。

最初は千葉県市原市の牛久町に集団疎開をしていました。その後、日本も戦況が思わしくなく、東京大空襲があり、東京方面の上空が真っ赤になるほど明るくなるのが牛久町からも見えました。そうして翌朝、焼け出された東京に住んでいた人々が、一列になり、後から後からとぼとぼと歩いて逃げてきました。まさに生き地獄の有様でした。私たちの学校は下町にある墨田区業平小学校でした。東京の下町一帯は焼け野原になり、家族も散り散りに逃げたか、戦死したか、一時は不明でした。

三月一〇日、Ｂ29爆撃機により、首都東京は大打撃を受けました。集団疎開先で卒業時期を迎えた上級生の六年生は、喜び勇んで東京の我家へ帰京し、大切な家族と再会を喜んだのもつかの間、たった三日間の一家団欒後、大空襲のため小さな命を失ってしまいました。冥福（めいふく）を祈ります。

私たちも千葉県市原地区から、日本の背骨と言われる東北地方奥羽山脈の真ん中辺り、岩手県湯川温泉川尻へ身の安全を守るため集団移動しました。生まれて初めて山の中で生活

するようになり、都会っ子の私たちは毎日山ばかり見ながら、飢えとシラミ、ナンキンムシに責められながら、耐えて生きてきました。私は終戦間近の夏に、栄養失調で自力での歩行困難となり、消化不良（食べる物は、イモ、ワラビ、ゼンマイ、玄米少々、肉類一切なし）で衰弱して病床に伏したままになりました。

一九四五年八月一五日、天皇陛下の玉音放送でやっと終戦になり、九死に一生を得ました。

「国破れて　山河在り」敗戦国日本は、未来への希望も見出せない脱落感、暗い世相、やけっぱちの特攻崩れ、戦災孤児、このような敗戦後の混乱は、日本人誰もが味わった屈辱感でした。しかしそれから数年後、やみ市から生きるためのエネルギーが生まれ、「りんごの歌」が流行するなかで日本人は必死に働き始めました。昨日まで敵国だったアメリカから豊富な物資が流入しました。

私は語学の勉強を始めました。無資源国日本にも、世界にまれに見る美しい山河、海、古都のたたずまいが全国内に気高く残っていました。これからは世界各国の外国人を迎える観光立国をめざすことになると思い、私はホテルマンになることを決意しました。東京ＹＭＣＡ国際ホテル専門学校を卒業と同時に、戦後第一号の超高級ホテルとして東京の日比谷公園前に華々しく誕生した日活ホテル第一期生としてホテル業界に就職いたしました。

便所掃除、食器類の上げ下げ、洗い物、客室の清掃、荷物運びなど、あらゆる下仕事をしながら、サービスの真髄に迫るような厳しい修業時代が長い年月続きました。それから四三年間、私は戦後育ちのホテルマンとして、時代を駆け抜けてきました。ホテルのゼネラルマネージャーまでの道は遠くつらかったのですが、その後、学童疎開の思い出の地、千葉県市原市のホテルの総支配人として次世代を担う若手ホテルマン・ウーマンの育成に務めることができました。

戦時中、学童疎開をし、敗戦間際には東北奥羽山脈の山村まで逃げました。この経験が、私の人生の原点としてあり、「他人に尽くして喜ばれるサービス業」を生きる糧として、七二歳になる現在まで、身体を張って現役を続けている由縁かもしれません。

これからも日本人としての民族の誇りをもって、国際社会において、生涯現役人生を送りたいと願っています。

学童疎開体験記

錦糸国民学校三年　岡野郷子
（旧姓　井上）

私は、小学校三年で、学童疎開に千葉県千葉郡椎名村のお寺に行きました。昭和一九年七月両国駅から、親たちに見送られて、汽車に乗って、中山先生(女性)と一緒に二〇名ほどの友達と旅立ちました。浜野の駅から、暑い中をみんなで歩いてお寺に向かいました。寺では、寮母さんとお坊さんの家族に迎えられました。その夜は、たくさんのごちそうが出されましたが、先生が「おなかをこわすといけないから」と少ししか食べられませんでした。おいしそうなごちそうがたくさんあったのに、残念でした。夜になると、今まで布団の上げ下げなどしていなかったのに、それぞれ自分の寝る布団を敷き、そこに寝ました。当日は疲れていたためすぐ寝ました。

翌日は、朝みんな一緒に一列に並んで顔を洗い、朝食です。さつまいもに御飯がまぶっている御飯、さつまいものみそ汁、竹を輪切りにした御飯茶わんに、少し御飯が入っていました。昨日はあんなにごちそうがあったのに、三時のおやつは、さかずき一杯の塩豆です。毎回御飯はさつまいもの御飯でした。全てさつまいもだったと思います。いつもおなかがすいていました。ハミガキ粉をなめて、空腹をしのいでいました。親に手紙でハミガキ粉を送ってほしいと書いて送りました。手紙は先生が検閲するので、おなかがすくとは書けません。山に登ってシイの実を拾って食べておりました。山にはカゴを背負って杉の落ち葉を拾いに度々行きました。お風呂をたくのに使用していたようです。入浴はみんなで順番に並んで、風呂の中を素通りした感じで、ゆっくり入った記憶はありません。

親が月に一度ぐらい面会に来ました。皆さんの分までお菓子がないので、墓地に行って、そっとお菓子を食べました。学校には行かずお寺でみんなで勉強しました。寺子屋ですね。

男子は、私たちから少しはなれたお寺に疎開していて、ときどき交流がありました。男子の寮母さんは、私たちと一緒に疎開した友達のお母さんでした。彼女は、母子家庭だったので、娘さんと一緒に疎開したのでしょう。夜になると、お月様を見て、おかあさんと言って泣くと、つられてみんな一緒に泣いておりました。このような状態が一か月ぐらい続い

たと思います。中山先生は、私たちにとって、たった一人の親がわりの人です。夜になると毎日男の人が来ていて、私たちは、先生を取られるのが心配で、障子に穴を開けて、みんなで見ておりました。ある日、中山先生から男の野尻先生に変りました。先生が変っても、私たちの日常生活は変らず過ぎていきました。

頭も体も、とてもかいく、皆ボリボリとかいておりました。頭にはシラミがついて水銀なんこうというのを頭にぬって手ぬぐいをかぶって、しばらくおくと手ぬぐいにびっしりと黒いシラミがついていました。髪のシラミは黒いので頭にいるときは、さがしにくい。親が面会に来ると、すきぐしで丁寧に頭をすいてくれ、くしの間にたくさんシラミがついていて取ってくれました。身体のシラミは白く、下着のぬい目に入って、子どもでは取りづらくて困りました。

夜中に友達が、布団に入って来ることがあります。オネショをして、冷たいので、となりの友達の布団に入って来るのです。翌日は、冷たい布団を、自分たちで干します。みんなで散歩しながら、農家の庭先に干してあるかんそう芋を、みんなで食べました。たくさんで食べるので、全て食べつくしてしまいました。農家から苦情がきたことでしょう。口に入るものなら、何でも食べたいと、いつも思っておりました。疎開先では、毎日さつまいもに御飯がまぶっている御飯、さつまいもの煮つけ、さつまいものおやつ、さつまいもづくしでした。一生分、食べつくしたと思います。何もまじっていない白い御飯が食べたいと思い続けました。

集団疎開で自分のことは自分でする、自分の物はきちんと管理するということを学びました。

昭和二〇年三月九日の夜、千葉の私たちの目の前の空が真っ赤になっているのを、みんなで見ておりました。それが、東京大空襲の夜でした。翌日は、たくさんの焼けた紙が落ちておりました。私たちの友達二人の家族が死亡して、孤児になってしまいました。数日後、私を迎えに親が来ました。私だけ、残して死亡したら、孤児になるので、死ぬなら一緒にと迎えに来ました。兄は六年だったので、集団疎開から帰っておりました。帰ってすぐ、大空襲に遭ったので、とてもとまどっていたそうです。私たちの友達は、千葉は危険なので、岩手に疎開することになっておりました。私は北浦和のおばの家に疎開しましたが、B29が低く飛んでいて、とても恐ろしかったです。疎開先には、他の三家族も一緒で、とてもにぎやかでした。二〇年八月終戦を迎え、もう空襲もないので、

焼跡に、バラックの家を建て、錦糸町にもどって来ました。

錦糸公園は墓になっていました。現在の体育館の近辺は、個々の家族ごとの墓があり、ときどき家族が、墓まいりに来ていました。テニスコートの所には、並んで何列もの墓がありました。そこは無名の墓でした。ときどきリヤカーで死体を運んでうめて行く人もいました。雨が降るとガイコツが見えることもあり公園は恐ろしい所でした。昭和二七年に、全部掘り返されて、横網の慰霊堂におさめられました。その後には、皆さんの憩いの場、桜のたくさん咲く、見事な公園に生まれ変わりました。

戦後六〇年を振り返り、戦争のない平和な日本を、守り続けなければと思っております。

学童疎開

錦糸国民学校三年　杉田一雄

―千葉へ―

大東亜戦争が激しくなっていく昭和一九年八月二五日、集団疎開で千葉の浜野へ向かうことになった。

当時は両国駅から千葉方面へ汽車が走っていた。「東京都本所区立錦糸国民学校」の一行は、錦糸町駅から省線電車で両国へ戻り「館山行」普通列車に乗車となった。

学童たちは、まるで遠足や林間学校にでも行くように楽しげにはしゃいでいた。一方親たちは、戦争でもう二度と我が子とも会えないかと思うと、悲しさいっぱいで、いったん見送った子供たちが両国からもう一度錦糸町駅を通って千葉へ向かう姿を一目見ようと高架橋の上に鈴なりになって私たちを見送っていた。手に手に小旗を持って力の限り振り、夏の汗が額に落ちるのも忘れて……そんな暑い一日であった。

こんな親たちの心も分からず、心も軽く身も軽く、やがて一時間半ほどで千葉を過ぎて、「蘇我」「浜野」の文字が見え、浜野駅へと着く。

浜野の駅頭では、町長さん、椎名村の村長さんの出迎えを受け、私たち三年生は意気揚々と一里の道をお寺へと向かった。

―おねしょ―

私たちが着いた所は、千葉県千葉郡椎名村字茂呂「上行寺」というお寺で、本堂を囲んで墓地の点在する薄気味の悪い所であった。

しばらくの間電灯もつかず、夜中に恐ろしくてトイレへ行けず寝小便をする子が毎日四、五人はいた。私は度胸が良かったのでそうしたことはなかったが、隣の友だちのおねしょで、朝、冷たくて目を覚ますことがあった。

本堂の「欄干」には、毎朝、「敷布」が数枚掛けられていて、世界地図の展覧会開催の日ばかりであった。

―お寺での生活―

本堂のはるか前方には立派な山門があり、疎開中ずうっと遊び場所となった。「上行寺」へ着いたその晩は、小学校長をはじめとして、村長、区長（茂呂地区）さん、そして地区のご婦人方の手料理の歓迎を受け、たくさんのごちそうを前に大満足の一日であった。

ところがところが、翌二六日から「ガターン」と食糧事情が悪くなろうとは神のみぞ知ることであった。

それからの毎日は、夏場のことでもあり、サツマイモ、カボチャ、ナス、キュウリ、トマトの連続であった。特に芋とカボチャは「ゆでたり、ふかしたり」、おかずになったりみそ汁に入ったり、ご飯に炊き込んだりと、一日中同じ物が当たり前のことになっていった。それでも幼い私たちは結構毎日の生活にも慣れて、楽しく過ごしていた。

朝は、五時起床、そして上半身（冬に入っても続けられた）で神社まで駆け足で登り、そして六時のＮＨＫラジオ体操（あの懐かしいタカタカタンタンターンタン、タカタカタンタンターン）、手ぬぐいによる「乾布摩擦」、そして元気に山を下り、本堂の周りを清掃して朝食となる。

―村の小学校―

朝食後、村の小学校に通ったのである。区長さん宅を左に見て山道を抜けると、前が急にパーッと開けたように明るくなる。その坂道を下り切ると、正面の小高い山の中腹に小学校がある。小学校は山を切り開いた丘の上にあり、土のグランドが広く、下を見渡すと、田や畑が「千枚田」のように模様がきれいである。

この小学校で、午前中の授業を受けてみなそろって下校となる。雨の日は山道がぬかるむ。区長さん宅前の山道では、いつも数人が尻もちをついて服を汚し、寮母さんや女の先生にしかられたものだ。

―父母の面会とゴマ砂糖―

数十日が過ぎて、日曜日ともなると親たちが面会に来るようになった。私たちは団体生活でそれほど寂しくもないが、手紙で食糧事情を訴えるので、親たちは工夫をこらして面会を口実にいろいろのものを持って来る。

しかし親たちが帰ってしまうと、やがてほとんどの品物は先生に取り上げられてしまう。そこで私たちは智恵を絞っていろいろのことを考え付くのである。

例えば「ゴマ塩」である。これはご飯のときに振り掛けて食べるということで許可になるので親にそのことを手紙で知らせる。ところが、本当のことがわからない親は、まともに「ゴマ塩」を持参ということになる。

面会の時、手紙に書けない内容を（塩を砂糖にすり替える）そっと親にわからせる。そして堂々と、「ゴマ塩」がまかり通るのである。

この「ゴマ砂糖」をこっそりとなめるのが私たちにとって何よりの楽しみであったが、ある日、これを本堂にこぼしてしまいアリがたくさんたかってしまったので、先生にことの

成り行きがばれてしまい、それからすぐに禁止となった。

何しろ三年生の年齢では「ごまかす」のが下手であった。

―命の恩人―

こわい佐藤先生のことである。私たちの親同様に、ある日曜日先生の奥さんが子供さんをおんぶしたり、手を引いたりと二人の男の子を連れて面会に来られた。

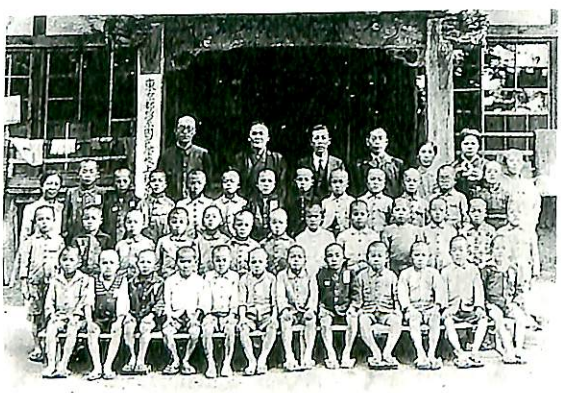
その日の夕食の時であった。私が食事当番で食事の盛り付け中のことだ。（男の子が）、熱いみそ汁をもう少しでかぶりそうになった時に、私が「あっ、危ない」といってかばい、難を逃れることができた。

そこで先生の奥さんは恐縮して、何度も何度も幼い私に向かって「ありがとう」を繰り返しておられた。そして先生が「君の家にも同じくらいの兄弟がいるだろう」とおっしゃられた。そこで、家には一五年生まれと、一七年生まれの兄弟がいることを申し上げた。やけどをしそうになった先生のお子さんは、ちょうど一七年生まれの弟の「芳ちゃん」と同じ歳だった。

兄弟をかばうような気持ちで、自然に先生のお子さんを助けようと、手が出たのかもしれない。そんなことがあってから「こわい佐藤先生」は、いつも私のことを「子供の命の恩人だから」と言ってくださり、食事当番もそのせいか回数が多くなっていった。食事当番は「つまみ食い」ができるのが「特権」である。

そんなこんなで、あの食糧難の時代でも、私だけがなぜか「ふっくらと太って」いるのである。不思議なことの一つである。

私にとっては余りつらくもなく、むしろ楽しい思い出の学童疎開であった。その年の一二月に深谷市へ縁故（母方）疎開して行った。



椎名村上行寺にて

学童疎開体験記

錦糸国民学校四年　田中嘉津子

私は、昭和一九年夏、錦糸小学校四年生のとき、学童疎開として鎌ヶ谷のお寺へ疎開に行きました。たしか三六人ぐらいの同級生だったと思います。

寺の名前を覚えていませんが、大きなお寺でした。寺へ行く途中墓地の中を通るのが、とても怖かった思いがあります。

夜は本堂に布団を敷きつめて寝るのですが、先生が子守歌を歌ってくださると、皆家に帰りたくて皆で毎晩泣きました。

お風呂は外に並んで順番に入り、水汲みとか、お掃除は当番制でした。

私はしばらくして虫歯が痛くなり、先生に連れられて家に帰り、そのまま家にいて、二〇年三月九日に空襲に遭いました。

私の学童疎開体験

日進国民学校二年　菅原哲也

昭和二〇年三月、私は東京都本所区（現在の墨田区）の明徳国民学校の一年生のとき、一〇日未明のB29による東京大空襲で罹災（りさい）し、家も学校も失いましたが、幸いにも九死に一生を得ました。上小岩の親類宅にしばらくお世話になった後、五月に千葉市内に疎開をしていた日進国民学校の二年生に編入しました。ここから、私の学童疎開が始まりました。毎朝の西千葉海岸のランニング、大きな広間での全員での食事と就寝、そして、睡眠中のナンキンムシの襲撃など、どれもが初めての体験でした。その後、さらに戦況が悪くなり、岩手県一関市（旧岩手県西磐井郡萩荘村）に再疎開することになりました。

先生方に引率され五月二五日の夜、上野駅から夜行列車で出発しました。私にとっては上野駅は学童疎開への出発駅なのです。とても天井の高い、大きな駅だと思いました。一関に到着後、みんなで宿泊先のお寺・西光寺まで歩きました。お寺に着きましたが、宿泊設備がまだ整っていなかったため、数日間、近隣の農家に分宿することになりました。私は、お寺のすぐ隣の千葉さんという農家に、六年生と二人でお世話になりました。

千葉家のみなさんは、私たちにおもちをついて歓迎してくださいました。おもちは、なんと塩あんでした。びっくりして、おもちがのどにつかえたことを思い出します。居間の囲炉裏（いろり）には、天井から真っ黒にすすけた自在鍵（じざいかぎ）がさがっており、大きな鍋が掛かっていました。また、農耕用なのか、粟毛の馬が一頭飼われていました。便所が母屋になかったので、真っ暗な夜中に、屋外に行かなければならず、とても怖い思いをしました。千葉さん宅には、同じ年ごろの実の子供たちがいたにもかかわらず、とても暖かくお世話をしてくださいました。

西光寺での集団生活が始まりました。本堂が、児童たちの居間兼食堂兼寝室兼勉強部屋でした。個人の持ち物（私はリュックサックに入れた）は、本堂の裏の薄暗い棚に収納されました。便所は、本堂に接して裏側に新たに作られたので、今度は、怖い思いをする心配はなくなりました。ところが、便所の窓の外は、一面が墓地です。雨の夜には「窓から燐（りん）が燃えるのを見た」などと脅かしあったりしました。

一日の生活は、読経（般若心経？）と乾布摩擦から始まり

ました。毎朝、本堂に正座してお経を上げるのですが、二年生になりたての子供が、先生方や上級生と一緒に唱えるわけですから、声を出してついていくのが精いっぱいでした。そのせいか、六〇年たった今でも、その一部を覚えています。乾布摩擦は、寺の広い境内で行なわれました。班長の号令の下、男児は上半身裸で行いました。朝食は、本堂でみんな一緒にいただきました。食事は、毎回米飯が出されたように思いますが、お代わりなしなので、食欲旺盛の六年生には量が足りなかったせいか、すぐに食べ終えてしまいます。一方、私たち低学年生は、どうしても食べ終えるのが遅いので、空腹の満たされない彼らによくにらまれました。朝食後、低学年生は、みんなで一緒に村の学校に行きました。学校の運動場にはトウモロコシが植えられており、その周りを駆けるリレー競争をしたり、それを収穫してみんなで食べたりしました。

お寺での毎日の生活に触れてみましょう。空襲警報のサイレンが鳴ると、本堂の裏の林に避難しました。本所、小岩、一関と行く先々で、空襲警報のサイレンに脅かされました。ある日、かます（穀物などを入れるむしろの袋）を背負って、磐井川に砂利を採りに行きました。私たち低学年生は、砂利採りよりも川辺での水遊びに夢中になってしまい、作業をしなかった罰としてその場に残されました。みんなが帰ってしまった後も、遊んでいたところ、しばらくして六年生が迎えに来てくれて、無事にお寺に戻ることができました。イナゴ捕りにも思い出があります。農薬などがほとんどなかったので、たんぼにはたくさんのイナゴが発生し、稲を食い荒らします。そこで、みんなでイナゴ捕りに行き、班ごとに収穫量を競います。多く捕った順番に、おやつの量が決められるのです。みんなが競って、ポケットいっぱいにイナゴを詰め込みました。収穫の大小は、はかりで量って決められました。捕ったイナゴは、鶏のえさになるのです。ちなみに、おやつはサクランボだったかと記憶しています。竹を裂いて、自分たちの箸（はし）を作ったり、ワラで縄を編んだりもしました。三度の食事に米飯が出たとはいえ、また低学年生とはいえ、いつも空腹をおぼえていました。そんな時は、それぞれが歯磨き粉（スモカ、ライオンなど）を持ち寄り、味くらべをしながらおやつ代わりに食べました。甘いものに飢えていたので、甘味の強いものが人気でした。その他に、スカンポの茎をかじってその酸っぱい液をすすったり、渋い生栗をかじったりして空腹をいやしました。

最後に、お寺での嫌な思い出をいくつか記しましょう。第一は、シラミです。どこでどうしたのか全く分かりませんが、肌着の縫い目のところ、とくにパンツの股のところに鎖のようにびっしりと付着していました。今でもこれを思うと鳥肌が立ちます。いつも便所に行き払い落としました。この繰り返しでした。よくぞ、発疹チフスにかからなかったものだと思いましたが、それはきっと、確か毎日入った硫黄風呂のおかげだったと思います。

第二は、空腹に耐えかねた六年生が、時折、学校で村の生徒の弁当を失敬し、空になった弁当箱を便所のかめに投げ捨てるのです。よく、先生方の「今日もまた見つかった」という声を耳にしました。幼心にも悲しく、嫌なひびきでした。

第三は、就寝後ののどの渇きです。私は、床に入った後、しばらくするとなぜか必ずのどが渇き、水が飲みたくなります。でも、西光寺の先生方は私には怖い存在で、床についた後は水を飲んではならないという空気がありました。水を飲みたい、水を飲みたいと繰り返し思いながら、いつしか眠りに落ちる毎夜でした。今思うと、これは寝小便を防ぐための、ある種のにらみだったのかもしれません。

第四は、親との手紙のやり取りの検閲でした。私は、疎開中は母にはたった一回しか出しませんでしたが、その返信は開封されて渡されました。

こんなことを繰り返しながら毎日を過ごしていたある日、海軍に入隊していた叔父が、突然私の前に現れました。びっくりして、「どうしたの？」と聞くと、「戦争は終わったんだ」と言われました。私を引き取りに来たのです。私は、先生方や学友たちと別れ、一足先に帰京しました。長かったように思えた私の学童疎開生活も、振り返ればわずか三か月足らずのものでした。

―追記―

昭和三七年五月、一関を訪れ、西光寺の佐藤住職ご一家、千葉さんご一家と懐かしく再会することができました。突然の訪問にもかかわらず、私の一七年ぶりの訪問を大変喜んでくださいました。

学童疎開の想い出

緑国民学校四年　石井　仁
（旧姓　杉山）

白い雲がポッカリ浮かび、抜けるような青い空から夏の強い日差しがギラギラと照りつける七月のある日、私たち、緑国民学校四年一組は、村上治先生以下生徒二七名が両国駅プラットホームに勢ぞろいした。

そして、不安そうな顔をした大勢の父母に見送られて列車に乗り込んだ。やがて、発車時間が来て列車は出発した。生まれ育った町並みを眺めながら（この町とは最後の別れとなるのだが…）一路目的地に向っていった。

総武線の高架の下では、日の丸の小旗を振って大勢の人が見送ってくれた。

私の感覚でいえば、学童疎開に行くということはチョットした長い修学旅行のようなものだと思っていた。後で分かったことだが、それとは全然違うことであった。

列車がどういう経路を通って行ったかは忘れてしまったが、着いた場所は銚子駅の手前の椎柴駅という所だった。

私たちがお世話になった村は千葉県海上郡船木村という所で、村長さんは石毛さんとおっしゃる方で、私たちを大層歓迎してくださった。また、私たちの事情を良く理解してくださり、大変かわいがってくださった。

その夜、宿舎である船木村芦崎の真言宗円養院に到着し、住職の佐藤さんにごあいさつをして、これからの暮しに思いをはせて就寝したのだが、夜半にあちらこちらでおえつがもれてきた。やさしい両親や家族と別れ、未知の土地で暮らすことへの心細さ、寂しさが募ってきたのだと思う。

翌日から船木村国民学校の一室を借り受けて授業が始まった。しかし、日ならずして校舎が軍に接収されて兵舎となってしまった。私たちはやむをえず、お寺の本堂で勉強をした。

集団生活も二か月もすると慣れてきて、授業が終ると田んぼに行ってイナゴ、タニシ、ドジョウなどをとって遊んだ。そのころはまだ食糧事情がそんなに悪くはなかったので、捕まえた虫やドジョウを食べることはなかった。後の食糧事情の悪化のことを考えると大変もったいないと思ったが、それは後の祭りでしかなかった。

初秋のある日、私たちは犬吠岬に遠足に行った。銚子の町までは往復徒歩で行った。まだ、シーズンとしては水遊びが

できる季節であったので、菊浜の砂とたわむれ、昼食は灯台下の茶屋でカツオの煮付を食べた。これは忘れられないほどおいしかった。灯台には軍事上の機密保持ということで入場させてもらえなかった。遊び過ぎたせいか、帰りは途中から日が暮れてしまって暗い夜道を軍歌を歌いながら帰って来た。

昭和一九年はまだ戦局が切迫していなかったゆえか、平穏な日々を過ごすことができたように思う。その中で私自身の想い出に残る事柄は晩秋のある日、母が生後一〇か月の妹を連れて面会に来てくれたことである。赤い手編みの毛糸のケープを羽織った妹を背負って、境内を散歩したことを昨日のことのように思い出す。この手が自分の妹だという実感が私の胸をいとおしさで締め付けた。

年が明けて戦局がますます厳しくなり、私たちも勉強が手につかない状況となってきた。

ある日の夕方、戦闘機が超低空を飛んできた。私たちは日本軍の飛行機だと思っていたが、そうではなくて、アメリカのグラマンという戦闘機であった。先生が布団を賽銭箱（さいせんばこ）の後ろに積み上げてその後ろに隠れるよう指示された。間もなく飛行機が現れて私たちに対して機銃を撃ってきた。そして、二条の弾痕を残して飛び去っていった。しばらくしてから境内に出て弾の痕を見た時、不思議と恐怖は感じなかった。これが戦争というものかという感想しか思い浮かばなかった。

私たちの暮らしていた寺は利根川の岸から三〇〇メートル余りしか離れていなくて、利根川の岸辺に行くとシジミがいっぱい拾える。私たちの仲間で「黄疸（おうだん）」にかかった者がいて、シジミを食べさせようと皆で利根川の岸へバケツを持って出かけた。シジミはすぐバケツいっぱいとれたが先生には甚だしくしかられた。危険だから無断で川岸に遊びに行ってはいけないということだった。

二月に入ると、夜は防空壕（ぼうくうごう）で服を着たままで寝る日が続いた。寒く湿っぽい壕の中に布団を持ち込んで背中を壁にもたせかけて眠っていた。

三月一〇日の夜半過ぎ、寺の裏の農家に焼夷弾（しょういだん）が落ち、間もなく煙が防空壕の中にまで入ってきた。私たちは二手に別れて避難した。一手は銚子方面、もう一方は椎柴駅の方向に避難した。私たちが真っ暗な中で逃げ惑っていた時刻に、私たちの懐かしの本所地区が火の海になっていようとは露知らず、赤く染まった西の空を見ながら、どう

したのだろうと思っていた。

その一週間後から、一人また一人と保護者が（両親が戦災で被害に遭った者もいたから）仲間を引き取りに来た。去る者も残る者もお互いに手を振り涙を流して別れを惜しんだ。

そして、ついに私の番が来た。四月二三日の夜、父と兄が迎えに来てくれた。もしも迎えに来てくれなかったなら、私は一週間後に岩手県に再疎開していたのだ。

翌日、仲間との別れは断腸の思いだった。わずか数か月の共同生活だったが兄弟同然の気持ちになっていた。お互い涙を流しながら、田んぼのあぜ道を手を振り声をあげて姿が見えなくなるまで見送ってくれた仲間の中には、いまだに消息不明の者もいる。

私の学童疎開生活はここで終わる訳だが、今でも定期的に連絡をとり合って、仲間との親交は続いている。ちなみに、会の名称は学童疎開の第一歩を記した駅の名をとって「椎柴会」と名付けた。現在、連絡を取り得る会員は一〇名、会う機会があると必ず学童疎開の話で夜がふけてしまう。

私は、この数か月の学童疎開生活で貴重な体験をした。それは、自立と融和ということである。私は今でもそれを心のよりどころとしている。

縁故疎開

緑国民学校一年　太田敏栄

昭和一八年、当時の東京市緑国民学校初等科一年生の二学期終了時に、家が強制立ち退きの対象となり、東金町堀上へ疎開しました。三学期東金分校に編入学した後、九十九里町へ移転し、片貝小学校に二年の二学期に転校しました。中学校は片貝中学校に一年通学し、二年の春、竪川中学校（旧校舎菊川小）に編入学し、長い疎開生活が終わりました。

幼児期、亀沢町（現在の区営テニスコートがある総武線の近く）に家がありました。南割下水通り（現在の北斎通り）の北側にあった国東幼稚園に通っている時、太平洋戦争が始まりましたが、駄菓子屋にはまだたくさんのお菓子があり、欲しいだけ買えました。鳥モチなども売っており、竹棒につけては近くの公園・屋敷などの木のある所へ行っては、トンボ取りなどして遊びました。まだそのころには大きなオニヤンマなどたくさんいました。

緑小学校に入学するころから、すべての物が不足がちになり配給制度になりました。町から鉄類がなくなり、学校の門に使用していた鉄製の戸などが外され、兵器の材料として供出されていきました。

町では「向こう三軒両隣り」などといって、団結心を固め、防火訓練を盛んにしました。また、大事な施設を防火するために、軍の命令で取り壊すように強制立ち退きが始まり、私の家もその対象（総武線の両側）となりました。両親が地方出身でしたので、福島か千葉かどちらへ行くか相談の結果、身内の多い千葉県の東金町へ行くことになりました。

菊川小学校の五・六年の男女の疎開先は東金にある山の入口の所で、私が行った所はそこから離れた田園地帯の農家でした。通学した小学校は東金小学校分校です。近くの菊川小が同じ東金に疎開したのは、縁があったということですね。

東金から八キロ離れた九十九里町に母の実家があり、二年生の夏休みに遊びに行って、庭先に飛んでいるオニヤンマを竹モチで取ろうと上を向いて追いかけ、たき火の残り火に飛び込み、両足を火傷（やけど）してしまいました。そんなことがあって昭和一九年二学期に片貝小学校に転校しました。

農家もあるこの地区でも食糧は不足し、お弁当はお芋が主で、お芋を持ってこない生徒には先生が自分の物を分けてあげた時もあったと記憶しています。

この地域も安全地区ではありませんでした。各自防空頭巾

を持っての登校ですし、重爆撃機Ｂ29は頻繁に頭上を通過し、空襲警報が鳴るたびに、生徒は防空壕（ぼうくうごう）へ避難しました。幅一メートル深さ一メートルくらいの溝を縦横にたくさん掘り、屋根もなく、上を見ると米軍機が見えました。頭上で空中戦もあり、だんだんと艦載機による空爆も増え、そんな中での東京大空襲でした。九十九里町からも西の空が真っ赤に見え、まるで近くの部落の大火事のようでした。そして終戦になりました。

昭和二五年に私たち七人家族の縁故疎開も終わり、ようやく墨田区竪川に帰ってきました。

縁故を頼っての疎開、受け入れる方は、兄弟の家族とはいえ自分の生活だけでも大家族で大変な時代、快くお世話してくださった四家族の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。すでに四家族とも両親は亡くなりましたが、従兄弟同士、子供同士のお付き合いは今でも続いています。このきずなは大事にしていきたいと思っております。

戦　争

緑国民学校四年　三　木　靜　子
（旧姓　松井）

私の家は本所緑町で呉服屋を営んでいました。通りの向こう側には、本家のおばあちゃんの家もあり小間物屋をしていました。両家ともに五人の子供がおり、合わせて一〇人の子供たちが入交じって遊んだりして、本当に一〇人兄弟のように仲良く暮らしていました。

やがて昭和一六年の一二月八日に戦争が始まりました。国民学校一年生でした。

始まったばかりのころは、まだ普通の暮らしだったと記憶しています。そのうち、徐々に戦争を実感するようになってきました。物がいろいろと不足するようになって配給制度が始まり、何点何点といって物を買うのです。我が家でも衣料切符を持って、てぬぐいとかをお客さんが買っていきました。

そのうちに隣組による防火訓練、リレー式の消火訓練等も行われるようになり、戦争がだんだん大変になってきたことを知らされました。「ほしがりません、勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」などが言われるようになりました。

そして、集団疎開が始まったのです。三年生以上が対象になり、私の家では五年生の兄と四年生の私がその枠内なので行くことになりました。向かいの家では、六年生のお姉ちゃんと四年生になるいとこ、合わせて四人が行くことに決まり、場所はそれぞれ違った所でした。出発した日もバラバラでした。学年ごとに違う所です。

私は一九年九月五日に千葉県我孫子の円性寺というお寺へ行きました。同級生三〇名ぐらいだったと思います。担任だった岡村先生と寮母さん（たしか江頭さん）と共同生活が始まりました。お寺の本堂で勉強し、そこで寝起きしました。地元の学校との交流もできて、野菜作りなどの手伝いもさせてもらい、収穫時には、いろいろといただいてきまして、楽しい思い出も作れました。山の中に入り、フキとかワラビなども取り、小枝拾い、杉っ葉集めをし、田にあるセリ摘み、秋には落穂拾いもしました。また、カエルとかイナゴなども捕まえて、すっかり田舎っ子になっていました。カボチャの種も洗って干し、のちにいって食べたことも思い出されます。

そんな中で、やはり一番の楽しみは家族の面会の日でした。

なんと言ってもうれしかったです。物がない中、父は工面していろいろと持ってきてくれました。我孫子といえば、そのころは行き来するのに時間がかかったので、そう長くいられないので、あっという間に帰っていく母や父（妹たちもたまに来てくれました）の姿をいつまでも見送っていました。

筆まめの父は、よく私に便りをくれました。商いをしながら、また、軍需工場にかり出され国分寺まで通勤する多忙の中、兄と私の所にたくさん手紙を書いてくれました。それも葉書一枚では足りず二枚とか三枚の続き文で、内容も「いつも笑って元気よく」とか「お国のためにガンバッテ」とか、私を元気づける言葉ばかりで、本当に勇気づけられていました。その手紙は、父の形見として大切にしまってあります。そんな楽しいこともありながらあの日を迎えることになるのです。

疎開して半年後の、二〇年の三月九日から一〇日にかけてのあの大空襲があって、下町一帯が焼け野原になったのです。前夜からの空襲で東京方面の空が赤く明るくなっているのを見て、先生は、よく朝、様子を見に行くことになり、先生一人で出かけました。電車も動いているかいないかも分からない中で、先生はとにかく東京へ行って生徒の家族の安否確認をしたい、というお気持ちでしたでしょう。

そして、やっとの思いで帰ってこられた岡村先生でした。皆を集めて報告の時間です。開口一番「悲しいお知らせです。皆さんの家は全部焼けてしまって、何も残っていませんでした」皆は「ええー」と言ったきりで先生の顔を見つめるだけでした。そして、分かった限りの状況を先生は話されました。「誰々さんの家の人は、二人が学校に避難していましたが、あとの人たちは分からなかったです」「誰さんの家族は全部学校にいました」と一人一人に言い渡していき、いよいよ私の家の話です。「松井さんの家族は、とうとう分からず行方不明、消息も得られないとのことでおそらく全員死亡ということです」みんなも私と一緒に泣いてくれました。先生も寮母さんも、その場にいた人みんなで泣いていました。

「お父さんもお母さんも死んじゃって、そしてかわいい妹たちもみんな一緒に死んじゃうなんて」考えたこともなかっただけに、本当にショックでした。「何で私の所だけ全員死んじゃったの」と思うだけで、ただ長い時間ひとりで泣いていました。今まで、勝つまでガンバッテきて、お国のためにとガマン、ガマンの何年間は、わたしにとってすべて空しいものとなりました。

「これでもし戦いに勝ったとしても、これから先、家もなく親もいないのに、兄と私の、子供だけでどうして暮らしていけばいいの？」何の希望もなくなり無気力な子供になってしまいました。

まだ戦争も終わっていないし、本当にこれからどうしてよいのか分かりませんでした。私の中の終戦記念日だと後日思うようになりました。

戦争がさらに広がり、千葉も危なくなり、岩手へ再疎開することになりました。

このころになると、お友達の中には、親や親戚（しんせき）の方が引き戻しにみえ、一人減り、二人減りして、大分さみしい人数になってしまいました。私も兄も岩手行きです。

そして私は、親戚の伯母さんが私たちの親替わりに、これから先ずうっと面倒をみてくれるということでした。母の姉に当たるその伯母さんは、戦争で三度も焼け出されているうえに、三人の子供もいるのです。それなのに私たち兄妹、疎開していたおばあちゃん、いとこの五歳の子、私と同年齢のいとこ、計五人の面倒をみてくれるというのです。うれしかったです。本当にうれしかったです。兄も別のところでこの朗報を知って喜んでいたことでしょう。

やがて先生方の特別な計らいで、私は兄と一緒に東京へ帰る日まで暮らすのです。その前に、やっと終戦の知らせがラジオを通して天皇陛下のお声でありました。八月一五日でした。「もう少し前に終わっていたら、私の家族も死ななかったのに」とラジオを聞きながら思いました。

おそらく母の背中で妹。手を引かれながら「熱いよう！」と叫びながら焼け死んでいった小さな妹。「私だけ、いや、お兄ちゃんとお姉ちゃんだけが残ってしまい、ごめんね」とあやまりたい気持ちでいます。「でも、お父さんお母さんも一緒だから、寂しくないよネ」と言ってみてます。今でも…。

戦後の混乱の中、東京に帰れたのはひと冬越して春になりました。集団疎開もやっと終わりです。

私の新しい人生の始まりです。兄も四月から商業高校へ、そして私はおばあちゃんが待っている津田沼の知り合いの家で、新六年生としての生活がスタートします。

これから先、伯母夫妻の援助を受けてのスタートでした。伯母さん方に感謝しています。本当に有難うございました。

得難い学童集団疎開体験に感謝

緑国民学校六年　向山政一

「今日は僕たち八班が大八車で食糧を飯岡まで買い出しに行きます」班長の森田君が長江先生に報告した。集団生活の第一歩は規律組織から始まる。記憶では学童総数四八名、教師一名、賄いの女性二名、それに教師の家族である。

学童は一班から八班に分割され、一日の日課はすべて班活動によって統一されていた。

朝六時起床、ラジオ体操、洗面、清掃、朝食、後片付け、嚶鳴（おうめ）国民学校まで集団登校、一里（四キロ）の道程である。下校後、宿舎（寺の本堂）にて自習、夕食のための役割分担、食堂整理、午後一〇時就寝。概略の日程だが、常に防空体制訓練は欠かさず行われていた。

さて僕たちの疎開先を紹介しよう。

住所：千葉県旭市琴田三五二一　海宝寺

住職：増田法運

通学校：千葉県海上郡高生三六一〇　嚶鳴国民学校

校長：服部重藏

指導の教師：長江直江先生（両国小学校長で退職）

通学路は砂地が多く、左右芋畑で裸足（はだし）で歩くと非常に熱く感じた。時々空襲警戒警報が鳴ると、逃げる場所がなく近所の農家へ飛び込んだりした。通学距離が一里（四キロ）と長く、帰路の途中、生芋を掘り出してかじりながら帰ったこともあった。

校内生活は「疎開班」「緑組」と称されて別室の教室が与えられ、勉学には問題はなかったが、授業時間外の校庭での遊びとか遊具の利用などではいろいろなトラブルが見受けられた。騎馬戦や竹馬競争など地元学童との対戦は非常に緊張したものだった。「小学生とはいえお前たちは『少国民』という名の『少年戦士』である」と言い聞かされ軍事教練を身をもって体験したのである。

朝（あした）に戴（いただ）く濃紺の星影
夕べに踏みくる野道の月影
生産増産我らが勤めと
鍬（くわ）取り鎌（かま）研ぐ　少年戦士
油に塗れ（まみれ）て額に汗して
鍬取り起さん　東亜の産業
生産増産我らが勤めと　ほほえみ働く　少年戦士

私の記憶による歌詞だが、一生懸命歌った。学校での行軍

では必ず「若き者」の歌唱で歩いた。さらに「月月火水木金金」の歌が続く。

いざ戦いはこれからだ　五年一〇年何のその
戦い抜いて勝ち抜いて　東亜に春が来るまでは
勝って兜（かぶと）の緒を締めよ　月月火水木金金
みんな今日から仲間入り　土曜日曜あるものか

ここに僕の日記の一部を披露する。（原文のまま）

昭和一九年一〇月一日　十五夜

大宮島、テニヤ島　全員戦死

昭和一九年一〇月二日　面会日

「まこも」の運搬、米の運搬、勤労奉仕

昭和一九年一〇月一七日　晴

今日は神嘗祭（※1）だ。僕達四八名は部落に行く事になった。一家に一人づ（ず）つ泊る。僕は後草の浪川源右ヱ門宅、大広間の土間で食事する。銀シャリ飯を頂（いただ）いた。

昭和一九年一〇月一八日　晴

今日は農家の朝この家の子と一緒に学校へ来た。北海道から来た酒井先生の話を聞いた。

昭和一九年一一月七日　晴

今日学校から帰って晝（ひる）を食べて遊んでいるとサイレンが鳴った。僕達は警戒警報だと思ったら加瀬さんが「空襲」と教（教）えて呉（く）れた。第四回目の空襲である

昭和一九年一一月八日　晴

今日は大詔奉戴日（※2）だ。この良き日に運動会をやった。校長先生のお話のあと「御民われ」を歌った。

昭和一九年一一月一九日　晴

明日は青少年団の視閲（※3）がある。緑組は「ひま」（※4）の皮むきをやる。

昭和一九年一二月一七日　晴

今日は日曜日で外出が出た。午前中勉強し午后（後）皆で神代村に行きB29の破片を拾ひ（い）に行った。学校にある田んぼの稲刈りの収穫体験は初めてで、足にヒルがはりついて取れなくなったりした。また、タニシがたくさん取れ夕食のおかずにしたり、イナゴが飛び交うのを追いかけたり、都会では得られない貴重な体験ができたことは将来の生活習慣に大きなプラスになった。

さてここで、恩師長江直江先生について触れておきたい。

先生の履歴は両国小学校から取得したものである。先生は栃木県の出身で東洋大学倫理学科卒業、大正一四年、京都市で尋常訓導に赴任された。この関係からいつも僕たちは京都第三高等学校寮歌を聞かせてもらった。私は今でも時々歌っている。

一　紅萌ゆる岡の花　早緑(さみどり)匂う(におう)岸の色
　都の花に嘯(うそぶ)けば　月こそかかれ吉田山

二　緑の夏の芝露に　残れる星を仰ぐ時
　希望は高く溢(あふ)れつつ　我等が胸に湧き返る

三　以下省略

神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊・孝元・開化・崇神・垂仁・景行・成務・仲哀・應神・仁徳、お経の文句ではない。歴代天皇名である。一二四代までよくもまあ覚えたものである。当時は教育勅語の暗唱とともに重要な課題だった。さらに昭和一六年一二月八日第二次世界戦争の開始により、軍人に賜る勅語「軍人勅諭」（※5）の暗記が加えられた。

苦しい生活の中にも楽しい思い出もあった。就寝前に本堂に大きな蚊帳をつる作業がある。大きな蚊帳はなかなかいうことを聞かない。背の高い児童がいつも利用されてつり輪を引っ掛ける大変な作業だった。こんな時「のんき節」を思い出して、「のんきな父さん　蚊帳を逆につって　これはたまげた大変だ　蚊帳は蚊帳でも屋根がない　おまけにこの蚊帳底がある　ハ　ハ　のんきだね」とはやしたてた記憶がある。

また、秋の夜長のある日、長江先生が余興を見せてくれた。風呂敷を畳に広げ、その上にドンブリ鉢を置き、手ぬぐいで上を覆った。「さてこの中に秋に鳴く虫を七匹入れたいが、みんなで虫の名前を言いなさい。コオロギ、スズムシ、キリギリス、マツムシ、ウマオイ、クツワムシ、ヤブキリ?これで七匹だが、もう一匹入れたいのだが」と言いながら、いきなり風呂敷を引きずったのである。「これが八（鉢）引き目だ」と言って皆を笑わせたのである。

―思い出の数え歌―

いちばん初めは一の宮　二はは日光の東照宮
三は佐倉の宗吾郎　四は柴又の帝釈天
いつつ出雲の大社　むっつ村々鎮守さま
ななつ成田の不動尊　やっつ八幡の八幡宮
ここのつ高野の弘法さま
とうは東京招魂社（現在の靖国神社）

私は時々緑小学校の入口の庭を見ることがある。かつては「緑神社」と呼んで二宮金次郎像を拝んでいた。

昭和二〇年三月二日、中学校受験のため両国駅へ帰着して三月一〇日の大空襲で友人七名を失い、着の身着のままになってしまった。助かったのはライオン歯磨工場の地下防空壕（ぼうくうごう）だった。隅田川には焼けた船が浮かび、周辺の厩橋の上には焼死体がたくさんあった。当時の様子は大空襲記録五〇周年（語りつごう平和への願い～東京大空襲墨田体験記録集～）に載せていただいた。

かつての「少年戦士」は、戦後六〇年の今日を忍耐強く感謝を込めて生きていきたいと思っている。

※1　神嘗祭（かんなめさい）毎年秋、天皇が新米で作った酒や供物を伊勢神宮に奉納する祭儀。明治一二年以降一〇月一七日に行われるようになった。

※2　大詔奉戴日（たいしょうほうたいび）第二次世界大戦開戦（真珠湾攻撃の日）を記念した日。毎月八日。

※3　視閲（しえつ）隊列を組んでの行進を検閲すること。

※4　ひま（ヒマ）トウゴマの別名。種子を搾った不乾性油がヒマシ油。

※5　軍人勅諭（ぐんじんちょくゆ）明治一五年、明治天皇から陸海軍に与えられた勅諭。旧陸海軍人の精神教育の基本とされた。

学童疎開体験記

本横国民学校五年　柴　トミ子
（旧姓　小沼）

当時の住所は、本所区石原町四丁目一番でした。学校からの疎開先は千葉の幕張でしたが、食事が心配なようなうわさで、父母が心配して、父の姉の嫁ぎ先の埼玉県小原村へ縁故疎開することになりました。

五年生の夏休みに、父に連れられて熊谷からバスで小川行きに乗り、二〇分くらいで停留所で降り、かなり歩いて大きな萱（かや）ぶきの家に着きました。前が田んぼでのどかな所だと思っていたら、近くに三ヶ尻の飛行場があるので、時々敵機が襲来するから田んぼの畔（あぜ）に身を伏せるようにと言われました。村の小さな小学校へ転校のあいさつに父と行きました。姉と弟と別れて一人で預けられ、最初は寂しかったですが、お世話になるのですから朝六時前に起きて、廊下のふき掃除・風呂の水運び・ヤギのエサになる草刈りなど、お手伝いの人に教えてもらって一生懸命やりました。

父は教員でしたので、日曜日には面会に来てくれてとてもうれしかったのを覚えています。

学校の二学期が始まると、急に、村の中のお寺に分散して東京の神田あたりから疎開に来た生徒も入ってきたので、教室がいっぱいになりました。でも、にぎやかで楽しかったです。

一〇月ごろになって東京の空襲がひどくなり、二年生の弟も預けられ、二人で小原小学校へ通っていましたが、一か月半くらいたった時、私が学校から帰る前に弟を連れて父が東京に帰ってしまったのです。その理由は、一一月五日付で長男の海軍少尉の戦死の公報が入ったからだったと思います。その意味が二年生の弟には分からないために静かにしていないので、姑の悲しみにふれたのでしょう。伯父も次男も兵隊に行き、留守宅の伯母は大変だったと思います。

三月一〇日の夜中にガタガタ震えながら東京の空の真っ赤な色を見て翌朝手紙を出しましたが、居所不明で戻ってきました。

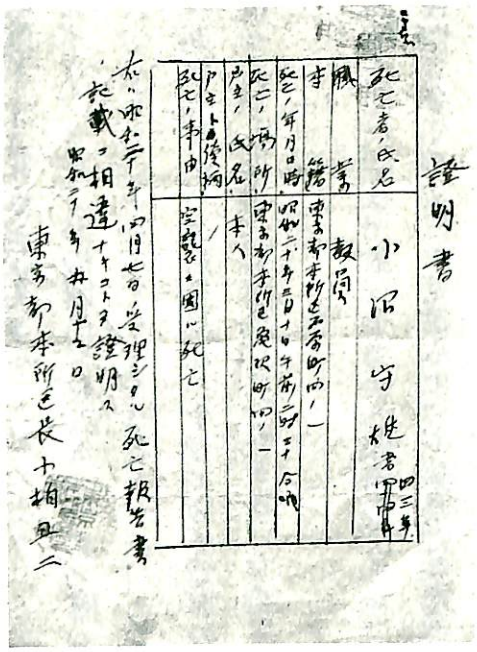
終戦後、皆、疎開の人たちは自分の家に帰れたのでしょうが、私は帰る家もなく、父、母、姉、弟全滅です。幸い親戚（しんせき）会議の結果、小学六年生が終るまでは伯母が預かってくださって小原小学校で、その後は父の実家である児玉郡青柳村へ移って女学校へということになりました。中学、

高校と六年間お世話になり、児玉高校を卒業し、縁あって浦和へ嫁いでもう五〇年になります。夫もあり、子どもにも二人恵まれましたが、何となく寂しいのは私だけではないでしょう。

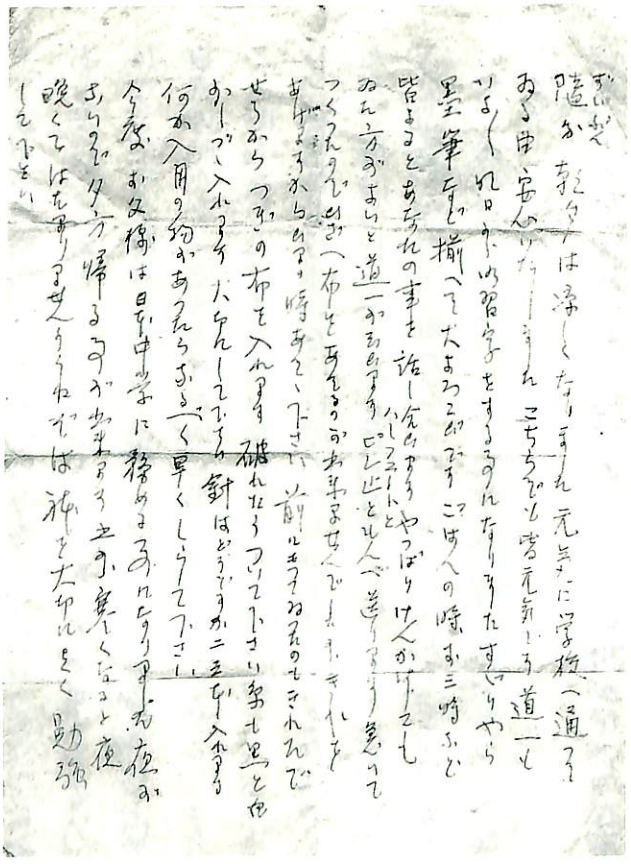
共立高等女学校の二年生だった三歳上の姉は、勤労動員で工場で働いていたので疎開できなかったのです。現在生きていてくれたらと思う日々です。

今でも、疎開先で母からもらった手紙をコピーして、時々出してみます。大切な物です。

東京大空襲でなくなられた方々、戦争で亡くなられた方々のご冥福を祈ります。



父・小沼守雄の死亡証明書



母からの手紙

学童疎開　千葉から岩手へ

本横国民学校五年　髙橋由春

昭和一九年、サイパン島を基地とするアメリカ軍の東京空襲が予想され、六月、学童疎開令が出され、すぐ実行された。

私たち本横国民学校児童も千葉県へ疎開と決まり、八月二七日、校門で多くの父兄が見送る中、千葉県安房郡吉尾村長安寺へと出発した。長安寺の住職は太地玄亀という、酒、魚、肉は一切口にせず高潔な方丈様だった。

日課は起床後、点呼朝礼、各班の指定された場所の清掃、それが済むと方丈様の朝のお勤めに全員一緒に参加。その後方丈様よりいろいろとお話を聞き、朝食もともに済まし、授業が始まり、日によって午後の授業がある時もある。放課後、山へ杉葉など薪拾い、それが終わると自由時間。夜は、食後、自由時間や自習など。消灯前には点呼があり、全員で「海ゆかば」を歌う。後から「疎開学童に賜る歌」も歌うようになった。

村の人たちは遠くから大勢の子供たちが来たので非常に協力的だった。野菜なども各部落の婦人会などから寄付があると、近くの農家から大八車を借りもらいに行った。主に力のある友達が志願して、遠くは大山、曽呂の方まで出かけ、夜になって帰る時もあった。食事も当時としては恵まれていた。夜食の時など、食べきれない女子のどんぶりがリレーされてくる時もあった。まだ食べられる男子が自分のどんぶりに移し、夜中に食べていた。村の人たちが子供に肉を食べさせようと、境内の竹やぶで牛を殺した。それを聞いた方丈様は、「殺生禁断の地で、何たることをするか」と大層の立腹と聞いた。肉や魚が出る時は、ご本尊様の前に幕を張って食事をした。

地元の吉尾国民学校も協力的だった。鴨川海岸への行事遠足も一緒に行った。この時は朝雨になり、作ったおにぎりが朝食となった。このようなことが何回かあった。その度に、寺の奥さん、祖玄さん（修行中の尼僧）、寮母さんなどが夜中におにぎりを作っているのを、私はトイレに行く途中見た。鴨川への行軍の帰り、一級下の疎開先を訪問した。

秋になると、隣村の主基国民学校から学芸会の招待があり、行くと大福が用意してあった。校長先生から「僕たちの好きな主基村で大福を食べたことを一生忘れないでください」と言われたのを覚えている。

吉尾の学校で運動会があり、私たちも招待されることになり、予行演習の帰りに歩いていると、誰かが「あれは何だ」と言った。見上げると見たこともない一条の白い筋が高空に輝いていた。「一番端に白く光っているものがある。飛行機かもしれない」と誰かが言った。サイパン島に飛行場ができ、偵察機がいよいよ来たか、東京が空襲されるかと思った。

正月には記念写真を撮ることになった。晴れ着を着て、皆で写真に納まった。また、各部落に疎開児童を招き、一日ゆっくり遊び、ごちそうしようという企画があり、班ごとに皆出かけた。

私は足のオデキがひどく衛生室に入室していた。それを見た先生は不びんに思い、もう一人いた女子の佐藤さんと私と三人乗りして、自転車で連れていった。途中坂道で自転車の勢いがなくなり、転倒して三人とも田んぼの中に落ちたこともあった。

冬の寒い夜中、便所へ行った時、その手前から廊下がビショビショに汚れていたことがあった。私はぞうきんできれいに掃除をした。お勤めの時、方丈様の話に「良いことは、人が見ていなくてもやりなさい。こういうのを陰徳という。陰徳あれば応報あり」と教えられていた。私は冷えた体で布団の中へ入ったこともあった。

皇后陛下が疎開している皇太子殿下をしのばれ、疎開学童全員に恩賜のお菓子と御製の歌を賜ったことがあった。

つぎのよを　せおふべきみぞ　たくましく
ただしくのびよ　さとにうつりて

面会に来た父兄や児童を引き取りに来た父兄から聞いて、東京が空襲でやられたらしいとのうわさが広まった。ある朝のお勤めの後、先生が「東京が空襲で焼けた。一面の焼け野原で残った家は一軒もないそうだ。人も大勢死んだ。この中にも親兄弟が死んだ人がいるかも知れないが取り乱さないように」と言われた。

私も親はどうなったか。もし死んだら母の兄弟の所に行くようにと手帳に住所を記していたので、そこへ引き取られると思ったが、幸い我が家は全員無事だった。しかし、友達の中には両親とも死に孤児になった人もいた。

ある夜中、ふと目を覚ますと、ゴウゴウ、ゴウゴウと地上すれすれに飛ぶ大編隊の爆音、誰か目を覚ましたかと首を上げて周りを見たが、皆熟睡していた。その音は、四十分から五十分ぐらい続いたか。やがて音が遠のき静かになった時、時計を見ると一時四〇分くらいであった。東京方面を空襲し

ての帰りの編隊と思われる。もうこのころは空襲に慣れ避難することもなかった。

やがて、房総も安全の地とならず、より安全の地を求めて岩手県へ再疎開することになった。そのころ我が家は山梨県甲府の善光寺町に落ち着いていた。母が「岩手は遠い。迎いに行くのが大変だから帰ってこい」と迎えに来た。荷作りして、朝出る時大雨が降ってきた。雨を見ているうち、友達と別れるのが嫌になり「母ちゃん、俺、皆と一緒に岩手に行くよ。母ちゃん一人で帰ってくれないか」と言い、母を一人で帰してしまった。

五月一七日、長安寺をたつ前に最後のお勤めをした。木魚をたたく祖玄さんの目に光るものがあった。人の生死を極める修行をしているお坊さんも別れはつらいのかと思った。疎開で来た時は一一〇余名いた人数も、このころは約半数の五〇～六〇名だったと思う。

鴨川を午後出発した私たちは、千葉で電車に乗り換え、故郷を通過するときは夜になっていた。錦糸町を出た電車の窓にぴたりと顔をつけ外を見た。一面の焼け野原の中に専売局、報恩寺の三重塔、母校本横国民学校、やがて我が家のあたり、電話局、ヤマワセトモノ店などのコンクリート造りの建物がなつかしい姿を見せてくれた。

上野駅の構内を歩く時、学生服に日の丸の旗をたすきがけ、これから軍隊に入ると思われる人を中心に友達が円陣をつくり、肩を組みながら歌を歌ったり、ワッショイワッショイと声を出し見送る光景が随所に見られ、まさに戦争たけなわの感があった。僕らもやがて学校を卒業したら、あの人たちのように軍隊に入るのだろうと漠然と思った。夜行の疎開学童の専用列車に乗り、上野駅をたったのが十一時半くらいだったか。翌朝海岸を走る車窓から日の出を見た。誰かが福島県の平のあたりじゃないかと言った。午後、花巻から軽便鉄道に乗り、一本杉で降り、太田国民学校で歓迎式があり、やっとお寺に着いた。しかし、そこは一級下の五年生が入る寺で、僕らはその先の寺へと向かった。途中道の両側に桜が咲いていた。のどを渇かした佐々木君が脇を流れる小川の水を飲み、先生に注意された。着いた所は、清水寺、住所は岩手県稗貫郡太田村。ここが私たちがこれからお世話になる所だ。日課は、長安寺にいた時同様、点呼、朝礼、掃除など。朝のお勤めはなくなった。また、鷲見先生が作詞した清水学寮歌をともに歌った。午前は授業、午後は自由時間が多かったように思う。桑の木に実がなるころ、友達と小雨の中を食べに行き、

ぬれながら口の周りを紫色に染めたこともあった。「お寺の前の通りをずうっと行くと、飛行場があるぞ」と誰かが言った。時間のある時二～三人の友達と見に行ったことがある。双発の軽爆撃機がいくつか並んでいるのが見えた。

ある日の授業時間に、先生が「晴耕雨読」と書き、誰か読める者はいないかと聞いた。谷君が手を挙げ「せいこううどく」と読んだ。先生がこれからは食糧事情が厳しくなる。自分たちで食べる物は自分たちで作ることが必要だと言われ、天気の良い日は農作業、雨の日は勉強すると言われた。村の馬場を借り、昌歓寺にいる五年生と共同で農作業をした。都会育ちの私たちには、炎天下の農作業はつらかった。人生の汗の半分くらいはここで流したと思うくらいだ。やがて岩手県も空襲される時があった。しかし、敵機はいつ来るか分からない中で農作業をすることになった。作業にかかる前に、先生が「爆音が聞こえたら、誰でもよい。聞こえた者が大声で『爆音』と言え。それを聞いたら、皆上空から見えない所、たとえば木の下、ヤブの中、溝の中などへ身を隠すように」と言われた。やがて農作業の最中に「爆音」の声があり、皆一斉に身を隠した。頭上を爆音が通り過ぎて行った。

翌日は朝から警報が発令された。農作業は休み待機することとなった。やがてゴウゴウと敵機の爆音が聞こえた。先生から「爆音の絶え間に観音様の森へ避難せよ」と指示があり、素早い者は早速避難した。

やがて二度目の爆音が聞こえてきた時、誰かが「おい、来て見ろ。飛行場が空襲されてるぞ」と教えにきた。爆音の遠ざかるのを待って、森の端に行ってみると、燃え上がる黒煙をバックに、数機のグラマンＦ６Ｆが両翼の機銃から射撃の火線と黒煙を吐きながら、機銃掃射をしつつ急降下攻撃しているのが見えた。入り乱れて攻撃する敵機を迎え撃つ友軍機なく、また、対空砲火も沈黙したまま、敵のなすがままにまかせていた。飛行場から立ちのぼる煙は一日中続いた。

ある日、町田さんの所へ兄さんが特攻隊で戦死したとの知らせが届いた。それを知った妹さんが「兄ちゃんが死んじゃった」と大声で泣き出した。それを見て、戦争はひどいものだと思った。しかし、僕らもやがては志願して死ぬ時が来るんだろうなと密かに思った。

八月一五日、朝から抜けるようによく晴れて暑い日だった。「今日は重大な放送があるから、皆良く聞くように」と言われ、農作業は休みだった。正午、本堂正面に据えたラジオの前に、住職、先生、皆が並んだ。ラジオからは言葉が流れ出

たが、ピイピイ、ガアガア雑音が多く、何を言っているのかぜんぜん分からなかった。夕方、誰かが「あの放送、今度ソ連と戦争を始めるからみんな頑張れと言ったんじゃないか」と言った。夜の食事の時、先生が「日本は戦争に負けた」と言われた。皆泣いたがどういう訳か自分は泣けなかった。

その後、食事の時、食器を落として割る者が続いた。自分も落とした。ある日先生が「食器を落とす音が聞こえるが、落とした者は手を挙げろ」と言われた。自分も手を挙げた。先生は「日本が負けたので、気持ちの落ち着きがなくなったのだろう。しっかりしろ」と言われた。

戦争が終わり、疎開の目的もなくなり、ただブラブラ日を送ることが多くなった。子供を引き取る父兄が次々と来て寂しくなっていった。やがて、観音様のお祭りがあるらしいとうわさが伝わってきた。屋台を作って、演芸大会もあるらしいとのことで、疎開学童も歌と踊りの上手な子が出て、花を添えることになった。このころは、消灯前の「海ゆかば」も「疎開学童に賜りたる歌」も歌わなくなっていた。

どこからともなく秋の気配が忍び寄ってきたある日、空襲で孤児となった山下姉弟が東京の施設に送られることになり、二人で境内を出ていく時、寮母の熊谷さんが後を追って「きっと面会に行くから頑張るんだよ」と励ましていた。

朝夕の寒さが厳しさを増すようになったある日、先生が「清水寮は一一月三〇日をもって解散することになった。親に迎いに来るように通知を出せと言われた。このころは全部で六名くらいだった。一一月二九日、母が迎えに来た。三〇日、朝食を済ますと、足の悪い私は、一足先に花巻駅へ向かった。

私たちは疎開のお陰で空襲から身を守り、無事に過ごすことができました。このご恩は一生忘れてはならないと思います。

学童疎開の悲しい思い出

茅場国民学校三年　滝沢弘子

昭和一九年五月ごろ、当時茅場国民学校三年生だった私は、祖父と母、妹二人の五人（父は軍人で出征中）暮らしで、それなりの普通の生活をしておりました。

戦争がだんだんと激しくなり三年生から六年生までが、千葉県山武郡に学童疎開に行くことになりました。当時は、千葉に行くには両国駅から汽車に乗り、煙を吸いながらの旅行でした。

当日、二人の先生（斉藤・八ヶ谷）と生徒三〇人ぐらいが一緒に両国駅に集まり、私の家からは母が見送りに来てくれました。

荷物は柳行李（やなぎごうり）一個程度しか持っていけませんでしたが、我が家には柳行李がなく、革のトランクに母がいろいろと向こうで必要な下着や足袋（たび）、着替えの洋服などを入れてくれました。汽車が駅を出る時には、見送りに来てくれた家族との別れがつらく生徒全員が涙、涙の別れでした。

先生二人に寮母さんと二時間ぐらいで農村の山あいのお寺（薬師寺）に着きました。着いてからトランクを開けて整理していた時、妹が大切にしていた着物までが入っていて、また母親の愛情に触れ涙にくれました。

お寺には「庫裏（くり）」があり、私たちの生活はそこで始まりました。勉強も寺子屋風にその庫裏で先生や住職の坊さんに教わりました。終了時間近くになると、先生が本堂の時計を見てくるよう順番に生徒に指名し、指された生徒は時計を見に行きましたが、ほとんどの友達は時計が読めず、寮母さんに教わって先生に報告していました。

近くには小さな飛行場があるらしく、空襲が時々あり、裏山に度々避難したことを覚えています。夜間には靴を履いて寝ることも多くなり、戦争がだんだんと激しさを増しているのを肌で感じました。

また、一番楽しみな食事に関しては、大盛りのお新香と雑炊でしたが、今でいう「苦い米」も経験しました。

千葉に疎開中、母が三回ぐらい、妹を連れて慰問に来てくれてとてもうれしかったのですが、うれしさとつらさのあまり母の胸で大声で泣きました。

お寺のお祭りの日には、近所の農家に二～三人ずつでお泊りに行きましたが、大変歓待してくれて、おいしいジャガイ

モ料理などのごちそうが山ほど出て、食べすぎておなかを壊したことも今では良い思い出です。

農家の手伝いにも行きました。二月ごろ「わら草履（ぞうり）」を履き、素足で麦踏みのお手伝いをしましたが、とても寒く足が冷たかったことも覚えています。

いつごろかは覚えていませんが、全員にシラミがわくようになり、衣類だけでなく女の子には毛ジラミもわき、その後疎開生活をしている間はシラミと「ズーッ」と一緒の共同生活でした。

六年生は、三月になると卒業式に出るために東京に帰りましたが、後で聞いた話ですが、三月九日の東京大空襲でほとんどの人が焼け死んだそうです。かわいそうな出来事でした。

私の家もその空襲で焼け落ち、想い出の品々も焼けてしまいました。また、友達の両親や家族が亡くなった方々も大勢いました。

昭和二〇年五月になり、千葉もいよいよ危ないということで、安全な地域として岩手県一関に行きました。

ここは、なんと「静かで平和な所」で、本当に戦争をしているのかと不思議な気持ちでした。連れて行かれたところは安楽寺というお寺さんでした。千葉のお寺では「庫裏」の生活でしたが、安楽寺では広い「本堂」での生活でした。

お寺では、お葬式が度々あり、通夜が終わった晩などは、お仏壇に安置された棺桶の脇で寝ることもあり、板箱のすき間から仏様が見える時は、とても怖かったことを今でも覚えています。朝は全員でお寺の掃除をしましたが、お仏壇の裏側も交代で掃除しました。裏側の通路の両側にはたくさんの骨壷が安置されてあり、怖い気持ちいっぱいで大急ぎでぞうきんをかけたことも今では思い出です。

日一日と暑くなり、農家の手伝いに良く行きましたが、今まであまりしたことのないつらい草取りなどの毎日で涙の日々を過ごしました。

しかし、また楽しいこともありました。農家の畑に行く時の野道や畑には「野いちご」や「桑の実」などがたくさん実っていて都会生活では味わえないおいしく珍しい果物を友達とワイワイ言いながら感謝していただきました。

そんなことをしながら毎日を過ごしているうちに、八月一五日の終戦を迎えました。

その後、お寺には東京から友達の家族が少しずつ迎えに来るようになり、一人減り二人減っていくうちに、十月になる

と、私にも祖父が寒くなる前にと迎えに来てくれました。うれしくてうれしくて「オジイちゃん！」と飛びついていったことを今でもはっきりと思い出します。オジイちゃんとは二人で一〇時間くらい、満員列車での立ち通しの帰京でした。

東京に着くと、すでに父も戦地から帰っており家族全員がそろった楽しい生活を想像していましたが、家も思い出の数々も何もかも焼けておりました。それからは祖父と両親、姉妹三人の六人家族が六畳一間の長屋生活でした。

その当時は大変苦しい生活でしたが、ほとんどの方々が同じような生活をしていましたので、あまり苦にならず、これから家族全員で頑張ろうと皆で誓っていた毎日でした。

今ではすべてのことが「良きに悪しきに」つけ思い出として頭の隅に残っています。

戦後も六〇年が過ぎ、日本は本当に平和な国になりましたが、世界には今でも同じような苦しみを味わっている国がまだまだたくさんあります。

それ故このような戦争を二度としてはいけません。こんな友達をなくし親兄弟を失い、家や財産、思い出の数々を失う悲しくつらい生活を、次の世代を担う子供たちに経験させたくはありませんから。

こんな悲しい思い出はもう結構です！

学童疎開体験記

茅場国民学校三年　橋本喜雄

「集団疎開先は、千葉県山武郡芝山村観音寺。縁故疎開先は、栃木県佐野市堀米二七二。残留先（当時の自宅の住所）は、東京都本所区柳原町九ノ二」

この住所は、七〇歳になったばかりの今でも、よどみなくすらすらと口に出せるのには、我ながらびっくりしています。

昭和一九年七月に当時の国民学校初等科三年以上六年までの生徒は学童疎開をすることになり、集団疎開、縁故疎開、残留の三つの方法がとられました。私はこれら三つの方法すべてに関係がありました。

私は、昭和一〇年（一九三五年）四月に、現在の東京都墨田区江東橋（残留先と同じ）で生まれました。総武線錦糸町駅南側にある丸井とウインズのビルの間の道を南に行くと、三〇〇メートルほど先にある竪川にかかる牡丹橋を渡り、二つ目の道を右へ曲がった所にあった駄菓子屋の長男として、すぐ近くにある茅場国民学校（初等科三年まで）に通っていました。

学校は牡丹橋のすぐ北側にあって毎日歩いて通っていました。そのころの川には、両側に直径五十センチくらいの大きな丸太がたくさんつなげられ、浮かんでいて、小魚やアメンボが泳いでいました。

ある日のこと、学校の帰りに一人の男の人が川の中へ「ドブン！」と落ちたところを目撃しました。私はびっくりして立ちすくんでいたところ、通りがかりのおじさんが急いで自分のズボンを脱いで、水の中でもがいている人に向かって橋のたもとからズボンの片方の端を差し出して、つかむよう大声で叫んでその人を助け上げました。この辺は下町で人情の厚い人たちが多く、皆で助け合って生活していました。

昭和一九年八月に右足のひざに水がたまる関節炎を患いましたが、水を抜いたら治ったようでした。その時三年生だった私は、間もなく集団疎開で千葉県のお寺に行くことになりました。

各生徒はリュックサックを背負い、両国駅から汽車に乗って、まるで一泊旅行の遠足気分ではしゃぎ、車内もにぎやかでした。ところが一週間ほどたつと、皆さみしがり、担任の先生は大勢の子供を抱え大変でした。

板の間にキチンと座り、食事をしたり勉強をしたりしまし

たが、なかなか身には付きませんでした。そのうち私の右足の関節が痛み出し、正座ができず、ホトホト困り、自宅へ何回か手紙を出したことを覚えています。とうとう九月の終わりに母親が私を迎えにきて、残留組として本所の自宅から病院へ通うこととなりました。

後で分かったことですが、その後間もなく米軍の上陸があるかも知れないと、九十九里浜に近い千葉県、茨城県に集団疎開していた学童は再疎開することが決まり、他県に移ったようでした。海岸近くには、米軍の本土上陸に備え、壕（ごう）をたくさん掘ったということです。

その後、本所の自宅の周りが爆撃され、焦土化しつつあったため、戦火を逃れて妹と二人で栃木県佐野市にある親戚（しんせき）の家へ縁故疎開することとなり、昭和一九年一二月七日に佐野市の堀米国民学校へ転校しました。

生徒たちはグループごとに裏山にある八幡神社へ戦勝の祈願に出かけお参りしました。

そのころの私たちは、日本は絶対に戦争に負けない、負けることはあり得ないこととして、こんな歌を歌っていました。

もしも日本負けたなら　電信柱に花が咲く
焼いた魚が泳ぎ出す　絵に描いたダルマが踊りだす

この他、お山の杉の子、軍歌などで、特に印象に残った歌は次のようなものでした。

勝ち抜く僕等（ら）少国民　天皇陛下の御為（おんため）
死ねと教えた父母の　赤い血潮を受けついで
心に決死の白たすき　かけて勇んで突撃だ

そのころに覚えたメロディはどういうわけか忘れません。天皇陛下とは国、国とは父母、兄弟姉妹すなわち日本人自身と思っていました。

縁故疎開の親戚の家は、わりあい大きな家でした。

東京から約一〇〇キロメートルも離れた所なのに、八幡神社のある裏山の山腹に陸軍が横掘りの壕を掘って、戦車が上空の敵機から見えないように木の枝で覆っていました。町の道路から八幡神社へ行く石だたみをまたいで、無限軌道（戦車などの車輪の外側にかけた端のない帯状の装置）の跡がくっきりまっすぐ二本、神社の鳥居に向かっていたことが今でも目に浮かびます。

戦車隊の将校たちが民家に宿泊していましたが、私の疎開先の家にも一人の将校が泊まっていました。その将校はやさしい人で、甘いものがないそのころにカンパンやコンペイト

ウをいただき、妹と大喜びしたことが思い出されます。（後日分かったことですが、作家の司馬遼太郎さんが、当時従軍していたこの戦車隊のことを記述していました）

昭和二〇年二月ごろになると、佐野の上空にもB29の大編隊が白い胴体をキラキラさせながら、低く重いエンジン音を響かせて太田の方角、小泉の飛行機工場の方へ飛んでいくのが昼間はっきりと見えました。艦載機も時々飛んできて、空中戦をやっている音が聞こえました。

父や母が東京から交代で来てくれ、また、お世話になった親戚のおばさんが親切にしてくれましたので、そうさみしくはありませんでした。

親の話によると、二月二五日に東京神田方面が焼け野原になったとか、本所の自宅にも焼夷弾の直撃を受けたということでした。幸い当日雪が降っていて不発に終わり、家の庇（ひさし）と瓦（かわら）を壊されただけで済んだとのことでした。

親が東京に戻ったあと、三月一〇日になったばかりの真夜中に、近所の人たちが騒々しかったので外に出てみると、南の方角（東京方面）の上空がボワーッと薄赤く輝いているのが見えました。大人たちは東京が空襲でやられていると話をしていました。本所に残していた両親、赤ん坊と五歳の妹たち、祖父のことが心配で、一緒にいた妹と無事を祈りました。

朝になって、父を東京の堀切という所にある親戚の家に残し、全員が無事に私と一番上の妹がいる佐野の家にたどり着きました。何の連絡もなかったので、やっと安心しました。

話によると、自宅に不発弾を受けた二月二五日に焼け残ったガレージが近くにあり、家族は他の人と一緒にこのガレージの中で、火の粉を夜通し払いのけながら明け方まで過ごしたとのことでした。その後しばらく目が痛くてどうしようもなかったようです。

牡丹橋より隅田川寄りにある三之橋のたもとに、母の実家（おけ屋）がありました。おばさん（母の一番下の妹）が六年生で受験のため、本所緑町の実家へ疎開先から一時帰宅していて、三月一〇日の大空襲に遭い、そのおばさんの父親と兄と三人で一緒に逃げ、江東橋の下の川の中に入ったきり、おばさんのみが行方不明となってしまいました。わざわざ受験のために東京に来なければ、命を落とさずに済んだ、と聞くと残念でたまりませんでした。私の父と祖父は、本所で焼け出された後、江戸川区の小岩にあった会社の住宅へ移り住

み、父は引き続き工場へ通っていました。

八月一四日に、母と二人で疎開先の佐野からこの小岩の家へ行って一泊し、翌一五日早朝に、やはり母と私の二人で千葉の方へ買い出しに出かけました。買い出しといっても、着物を農家に持って行き、米とか芋とかの食糧と交換することでした。農家でラジオの声が流れていて「本日正午に重大放送があるから聞くように」と何回も同じ放送がありました。

一二時前に小岩に到着し、会社の住宅の人たちと玉音放送（天皇陛下の放送）を聞きましたが、ラジオの雑音が激しく何を言っているか私自身はさっぱり分かりませんでした。このあと妹たちが待っている佐野へ、東武電車で帰途につきました。駅に着くとすでに暗くなっていました。駅の階段で、母が「もう灯火管制がなくなるよ。これからは、夜は真っ暗でなく明るくなる」と教えてくれましたので、日本が負けたのだとはっきり分かりました。この時の実感として、何か気が抜けたような気がしましたが、併せてホッとしたことを覚えています。

九十九里浜近くに壕を掘って敵を迎え撃つということで、私たち集団疎開に行った者たちが他県に移り、縁故疎開の佐野では山腹に横穴を掘り陸軍の戦車が待機していることから、私は本土決戦は必ずあると思っていました。場合によっては私たち子供でも爆弾を背負って敵の戦車の下に飛び込む気概でいました。

自分の家を焼かれ、おばさんを失い、多数の民間人（軍人はもちろんのこと）が殺されたということを考えると、戦争は兵隊さんだけの戦いでなく国民全員に多かれ少なかれ影響するもので、絶対にしてはならないものであると痛感しています。

一度戦争をしてしまうと、戦時下では周りの状況からして反対できないような仕組みとなってしまうもので、ちょうど津波が自分に押し寄せてきて一人ではどうしようもなく、もがきながら大量の水に押し流されてしまうのと同じようなことになるでしょう。

疎開先で壕が千葉県にしろ、栃木県にしろ、方々で掘られましたが、このような壕は全国どこにでもまだたくさん残っているようです。軍隊がなくなり、壕のことが忘れ去られ、風化し、何も知らない人が土地を造成し、家を建てたらどのようになってしまうでしょう。土地の陥没、崩落があった場合に、誰が処理するのでしょうか。国や市（区）では土地の所有者が決まっている所まで補修をしてくれるのでしょう

か。最近小学生が壕の中で探検をしていて亡くなりました。

六〇年もたってまだ残っている身近な問題は、壕のみでなく、遺棄された化学兵器、地雷、原爆による白血病等々、世代を超えて、また世界中で戦争の影響が人類に与え続けていくもので、決して他人ごとでなく風化させてはならないと思います。

学童集団疎開のころの体験

茅場国民学校三年　林　恒雄

私は、五人兄弟の末子の早生まれで、昭和一九年学童集団疎開の時は小学校三年生、すぐ上の兄は六年生、その上は三中（現在の都立両国高等学校）の生徒でした。長兄、長姉は学業を終え家の手伝いをしていました。下の三人はともに茅場国民学校へ通学しました。現在の丸井錦糸町店の南側に、都の駐車場公社ビルとその隣の空地のところに茅場国民学校が南向きに、三階建てのコの字型の校舎で建っておりました。向かって右側が雨天体操場兼講堂で、その東側は立ち退きが始まっていたのか、茶色の土の見える公園でありました。螺旋階段（らせんかいだん）のついたしゃれた照明がついており、改まった時には、大礼服（※1）を着た校長先生があいさつをする風格のある学校でした。門前に文房具屋があり、門脇ではシンコ細工（※2）を売るおじさんや紙芝居を見せるおじさんがいました。

私の家は三中の西側で大横川に面して材木商を営んでいました。店と倉庫の間に防空壕（ぼうくうごう）が掘られてありました。

二学期に入る前、夏休みだったか列車に揺られて、三～六年生の学童集団疎開が行われました。千葉県山武郡の各村のお寺に入りました。私たち三年生は、横芝駅で列車を降りてから横芝の小学校の校庭に案内され、長机の上に盛られたトマトをごちそうになりました。私など大嫌いだったトマトでしたが、車酔いをするので控えていたせいか、空腹でやむなく口にしたところ、おいしくておなかを満たしました。それ以来トマトが好きになりました。

観音寺前のバス通りからTの字に入った門前町は一〇〇メートルほどあり、両脇に露店が出ており、長い石段を登った中ほどの所に寺の坊があって、そこが集団疎開の宿舎で勉強部屋となりました。横芝の観音寺で、さらに階段を登るとお堂があり広い境内がありました。

宿舎となったお寺の玄関を入った所に、先生方の居間があり、その左側に五年生の女生徒の座敷、その隣が三年生男子の座敷となっていました。幅五尺くらいの縁側が、これらの座敷をコの字型に囲って裏庭に続いており、便所や風呂がこの奥の方にありました。

先生方は三人ぐらいで、養護のおばさんが二人ぐらいいたように思います。一番の責任者の男の先生は、六年生の兄の

担任で、友広先生といい、六年生の集団疎開先の真福寺と掛け持ちでありました。先生は時折、裏庭で軍刀を抜いて目通り五センチくらいの木を一刀の下に斜めに切り倒すさまを、そっと見かけることがありました。

自習が多く、勉強はあまりしなかったように思います。五年生の女の子は、神武天皇以後の天皇の名を暗唱していたので、私たちは自然に口ずさむようになっていました。

敵機来襲で、皆縁側に集められ、防空頭巾をかぶって背を外側にして座らされました。高射砲が打ち上げられ白く輝くさまや豆粒ほどの銀色の飛行機が悠然と飛ぶさま、線を描いて落ちていくさまも見えました。

お小遣いは疎開当時、円か銭か単位がはっきりしなくなりましたが、三銭だったかお金をもらって門前町に下り、生のさつま芋の大きいのを食べました。おいらん（さつまいもの一品種）が一番おいしかったです。転んで膝を化膿させ、生芋を食べていたせいかなかなか治らず、家から塗り薬を送ってもらいやっと治りましたが傷跡が残ってしまいました。霜が立つころになると、一銭五厘の小遣いでふかし芋の小さなのを上のお堂の広場で買って食べ、また柿をむいた皮を干したのを食べたりしました。

友達三、四人で私の兄のいる真福寺へ、二里ぐらいの山路を歩いて行きました。兄と会い楽しい一時を過ごし、秋色の雑木林を踏みながら「お山の杉の子」の歌を大きな声を出して歌い、足早に帰りました。

そのころだったか、友達の津村君のお母さんが訪ねてきました。当時町会長だった私の父が病気で容態が悪いとかで、一度会っておいた方が良いと私を連れにきてくれたのです。久し振りに家に帰ると、電灯笠に風呂敷を掛け、明りが外に漏れないようにしており、軍管区情報に耳をそばだてていました。洋服を着たままで寝たりしていました。腸チフスでしたが幸い大丈夫のようでしたので、数日後学童疎開先に帰りましたが、国鉄線路に近い家屋の取り壊しが進んでいました。

寒くなるにつれ夜尿症の子が増え、また、シラミつぶしは皆の日課になってしまい、熱湯で寝巻きを洗ってもなくなりませんでした。

落花生をみそあえにしたお菜はとてもおいしく、私たちは首を長くして待っていました。保護者がお寺にみえると、先生方がおいしいものを食べている、と子どもたちがぼやくことが多くなりました。

三月一〇日、よく晴れた朝でした。庭に出て、裏に行く左側は三間ほどの平地を残して、小高い斜面の赤松の交ざった雑木林でしたが、雪の残った林地はよくすけて見えるものでした。灰が山地一面に落ちていたのに驚いて、五年生のお姉さんたちに聞くと、原因は分からないがお札の燃え残りもあったとかで、何かが遠いところであったのだと思うようになりました。

何日かすると、二、三人別々に親が訪れてくるようになりました。一週間ほどたった夕方、顔をぼんぼんにはらしたご婦人がやってきて「恒雄、元気だったね」と呼び掛けてきました。優しい母を見まごう形相（ぎょうそう）でした。

翌朝皆と別れて、母と東京に出ました。三中で休んでから、茅場小学校へ転校の届出をしに参りました。「防空壕に死体があるからのぞくんじゃない」と注意されて歩きました。

空襲を受けた日、六年生だった兄は、二、三日前に東京に帰ってきており、私を除く家族全員が前の三中で難を逃れられました。零時過ぎまで、父と長兄は消火のために新辻橋の方へ行きました。姉の話だと「裏の川に焼夷弾（しょういだん）が落ちてきて雨戸が吹き飛ばされました。家族全員で三中に逃げ込み、地下室にトランクを下ろしたが煙があぶないと、そのままで教室を追われるように移動して、最後は建物の外側で皆無事を確認することができました。母だけは、なんとしても生きて私に会わねばと二丁目側の学校の塀のところで助かりました。焼け出されたのち、焼け跡にあった菓子屋のあめの塊を拾ってなめ、小岩の知人を尋ね、筑波の工場に身を寄せ今日に至ったとのことでした。父の郷里の三重へ行くために、国鉄の両国鉄橋を歩いて暗い中を渡りましたが身がすくみました。

学童集団疎開児で引き取りにこられない児童は、第二次疎開で岩手に行きました。

その後、五年生の疎開体験文の要約が「菊川小学校補遺」に掲載されました。

※1　大礼服（たいれいふく）宮中の儀式・饗宴のときに着用した礼服。文官・武官の違いなどにより区別があった。第二次世界大戦後廃止。

※2　シンコ細工（しんこざいく）うるち米を洗って乾かし、ひいて粉にしたシンコを水でこねて蒸したものを花・鳥・人物などの形に作り色を付けた細工物。よく露店で売られる。

学童集団疎開の思い出

柳島国民学校六年　酒巻壮宣

終戦後、社会が落ち着きを取り戻してきたあたりで、学童疎開の経験のある人たちから「あの時の生活は惨めでつらいことばかりで、実に嫌な思い出であった」と、異口同音に聞いておりました。しかし、私たちの場合はまったくそのようなことはなく、非常に楽しい日々で、ほんとに良い経験をさせてもらったと思います。

昭和一九年八月初めごろ、それこそ遠足にでも行く気分で最寄りの錦糸町駅に集合し、両国駅から汽車で五井駅まで行き、乗り換えて三ツ又駅で下車しました。途中駅では女生徒も含め何人か仲間が降りて行き、その駅では私たち六年生一五名となぜか四年生も同数ぐらい降りました。出迎えには見慣れぬおじさんやおばさんたちが馬車などをそろえて待っておりました。皆さんにこにこして非常に明るい感じでした。その馬車に四～五人ずつ分乗し約一里半ぐらいの山坂のある道を目的地の寺に向かいました。湿津村勝間にある竜性院という寺が私たちの宿泊先でした。

寺に着いて整列しましたが、連れて来てくれた部落の人たちは誰も帰らず傍らに、にこにこしながら立っているのです。何で帰らぬのかと思ったぐらいです。そのうち先生が説明を始めました。実はこの寺に泊まる予定であったが、台所、便所など宿泊設備ができ上がってないので、工事が仕上がるまで六年生、四年生一人ずつを一組として部落の農家に分宿させるという訳です。

東京から出発前に寺あてに送った布団や着替えの荷物は、それぞれの農家にすでに届けられており、学童たちが到着するのを待つばかりだったようです。農家ではどんな子供が我が家に来てくれるのか楽しみであったようです。ですから駅から寺までの途中「お前（めえ）名前何ちゅうんだ」などとしきりに聞かれたものです。先生から六年生一人、四年生一人の名前を呼ばれ、返事をした者から、次々と迎えに来たおばさんたちに連れられて、それぞれの家へ引き取られて行きました。

私は四年の相沢君と一緒で、連れられて行った家は深山という家でした。その家では五歳の坊やと四歳のお嬢さん、それにおばあさんがおり、みんなにこにこ顔で出迎えてくれました。後で知ったのですが、ご主人は出征しており、おばさん（敏子さん）の弟さんはすでに南方の戦場で戦死をされて

いるとのことでした。五歳の坊やを「おぼう」、下の妹を「おじょう」と呼び合っているようで、私たちもそう呼ぶようにしました。

この部落では同姓が多いので、皆お互い屋号で呼ぶようなので私たちもそうしました。この家は「上の家（かみのうち）」といいます。その外いろいろありましたが間もなくほとんど覚えるようになりました。

さて、翌日から寺の学校に行くべく朝食を家族と一緒にとって、弁当を作ってもらい「行ってきます」と我が家を出ます。その日から江戸時代の寺子屋のような学校通いが始まったのです。

女手一つで二人の子供を養い、義母の面倒を見、農耕馬を飼いその世話もし、その上今度、我々二人の面倒も見なければならなくなった敏子おばさんの御苦労を見て、私も一生懸命お手伝いをしようと感じました。敏子おばさんはどんな時でもいやな顔一つせず、むしろ疎開の子供がこの家にいることを誇りに思っているようでした。部落全体が裕福なのかも知れません。どこの家も大きく、通用口の外に普段使わない表玄関があり、昔の武芸者でも「頼もお！」と声を掛けるような雰囲気の家でした。

二か月ぐらいして、どうやら寺の準備ができたのでいよいよ寺に戻ることになり、私たち二人分の布団や荷物を馬車に積み込み送ってもらいました。私たち全員のお世話をする寮母さん三名や先生も別の農家から戻ってきて、この日から全員が寺で寝起きするようになりました。ただ、風呂だけは初めから作るつもりはなかったらしく、寺での夕食後に今まで世話になった農家へいただきに行くことになりました。日曜日は休校なので朝食後はそれぞれの農家へ行きお手伝いをさせてもらいました。秋には、稲刈りや芋掘り、自然にある山芋掘りなどいろいろさせてもらいました。

ある日、学校の行事で栗拾いに山へ入りましたが、雑木林にある栗の木ではあまり実がなっておりません。一生懸命探してもそう多くは収穫できないのです。そんな折、林と畑の間の隅に大きな栗の木を見つけました。見たらいっぱい実がなっております。「よし！」とばかりゆすったり登ったりして背負いかごがいっぱいになるほど収穫し、勇んで寺へ帰り、寮母さんたちに見せてお褒めの言葉をもらい得意顔になったものです。ところが翌日、部落の長（おさ）が来て先生に苦情を言ったそうです。あの栗の木は脇の畑の持ち主の物で一夜にして丸裸にされたとのこと。「きっと疎開の子供たちだ

っぺ」ということだが、一応、長が事情を聞きに来たとのことでした。しかし部落の皆さんの雰囲気は前と変らず非常に好意的でしたので安心したのです。そればかりか毎週一回鳥肉の炊き込みご飯が出るのですが、これも部落の皆さんが持ち回りで鶏を一羽ずつ、きちんとさばいて提供してくれるとのことで、私はありがたいものだと思いました。

そんな生活が続くうちに年が明け、二月初旬、東京からの連絡で、六年生二人の実家に焼夷弾（しょういだん）が落ちて、家族は無事だが家は丸焼けになったと先生から聞かされ「畜生アメリカめ、きっと仇は討ってやるぞ」と先生、寮母さんともども全員で号泣したものです。

その後間もなく、三月には六年生は卒業のため帰京するらしいとの話が出てきました。日々楽しく過ごしているのでそんなに帰りたいとは思っておりませんでした。帰る日が三月三日と決まり、直前になって急いで準備をする始末でした。戦況が悪化し汽車の都合もあり荷物は後回しとなり、身の回りの物だけを少し持っての帰京となりました。四年生を残し、お姉さんと慕っていた寮母さんとの別れは大変つらいことでした。お世話になった勝間部落の皆さんとの別れもこれまた非常につらい思いでした。「元気だったらまた来なよ」「忘れずにきっと来るんだよ」お互い目に涙を浮かべてのお別れでした。

その一週間後の昭和二〇年三月九日の夜、あの東京大空襲により下町一帯は全滅。風の便りにせよ何にせよ、勝間部落の六年生一五名のうち消息の分かっている者は私を含め三名だけです。部落に残った四年生、寮母さん三名は、その後岩手県に再疎開したとは聞きましたが、その後の消息は全く分かりません。ただただ皆さんが無事でどこかに元気でおられることを祈るばかりです。

あれから六〇年が過ぎ去ろうとしております。お世話になった勝間部落の方々にはなんとお礼を申し上げて良いか、言葉で言い表せません。私個人では、その後お世話になった「上の家」には二度お訪ねしたことがありますが、部落の中でも疎開を受け入れたこの事実を知る人が段々少なくなってくるのではないでしょうか。今のうちならまだ間に合うことでしょう、何とか部落の方々にお礼の言葉を申し上げたいと思っている昨今です。

戦時下の学童疎開と縁故疎開（残留組の学童疎開）

牛島国民学校六年　湯川鎮雄

私の世代は、中国大陸で戦禍の話題が伝わってきた世相の中で生を受けました。幼少期には国内では不況の嵐が吹き荒れ、貧困の差は激しさを増し、東北地方では飢饉（ききん）の噂もながれ、子女の人身売買もささやかれていました。

都会地では「大学は出たけれど」ではありませんが、退廃的なムードがただよっていたのでした。そんななかで私は当時の東京市牛島尋常小学校へ昭和一四年四月に入学したのです。校暦は古く教員室に続く校長室には、明治の元勲 榎本武揚が書いたといわれる「牛島学校」の扁額（へんがく）が掲げられていました。

入学して間もないころ、戦前最後のオリンピックの開かれたベルリンでの日本選手の活躍で話題が盛り上がっていました。そんな時、次期オリンピックが東京に決まったのでした。しかし、この開催のことは一～二年前から話題になっていて、一五年は紀元二六〇〇年の年回りで、歌の文句にもなっていたのです。

ところが年末になるとそんな話題もいつしか消えていました。

明けて一五年春には二年生になり、ちまたでは学童に対する呼び名も少国民という言葉で表されるようになっていました。

国際連盟脱退（昭和八年三月）のあと年月は過ぎ、限られた友好国に世界を見てきた我が国は「日独伊三国同盟」という名のもとに世界にアピールしたのでした。国内では日増しに物資が欠乏して、隣組組織が強化されてきたのもこのころでした。

翌一六年には三年生となり、この年から剣道部・柔道部の朝稽古が許され、登校前が原則で五時起き、当時の少年には圧倒的に剣道が人気がありました。この年に地域ごとにボーイスカウトのような少年団組織ができたのです。学校も新学期から国民学校と名称が変ったのです。秋も二学期の終わり、そろそろ冬休みの話題が出始めた一二月八日、太平洋戦争の開戦でした。

一七年ともなると、緒戦の連勝を手掛かりに、国民総動員令の名のもとに「大東亜共栄圏」「神国日本」「神風」「欲しがりません勝つまでは」など戦意をあおる標語を多く耳にするようになってきました。

四年生ともなると、歴史・地理・修身などの教科時間が多くなってきました。世間では隣組組織の強化が図られ、警防団、在郷軍人なども目に付くようになりました。当時の歌で隣組を歌った「とんとんとんからりんと隣組　格子を開ければ顔なじみ　回してちょうだい回覧板　教えられたり教えたり～」などがはやっていました。秋ごろになると戦況はだいぶ激しさを増してきたようでした。

一八年春、五年生になり教科のなかに剣道を始め柔道・銃剣の時間が正課となり、女子には薙刀（なぎなた）の授業が入ってきました。

修身の「桜井の別れ」で楠木正成・正行親子の別れの場面などは、学芸会の演目や音楽の教科書の歌詞にもなっていました。本居宣長の「敷島の　大和心を　人問はば　朝日に匂ふ　山桜花」これなどは祖国を思い親兄弟を慕って、身は組織にゆだねるという意味に使われていました。このころになると東京上空にも空襲警報が出るようになり、愛してやまない隅田公園の言問橋の浅草側、橋のたもとから聖天様下の今戸橋までの間には高射砲陣地が築かれたのです。

一万メートル上空を飛んでいる飛行機が尾を書くように飛行機雲をなびかせて飛んでいき、高射砲弾は七～八〇〇〇メートルのところで、昼間の花火のように白煙を上げていました。校舎の屋上から眺めると、首都防衛をするように気球でネットを張り巡らせてあるとのことでした。

一九年も二月ごろになると五～六年生は、建物住宅の強制疎開の手伝いで、押上・業平地区へ解体作業に行きました。それは何人かでロープを使って引き倒す作業でした。そうしたなかで新年度から始まる学童疎開の身体検査が始まったのです。教員室には時折軍刀を提げた軍人さんが姿を見せるようになっていました。

一九年四月、最終学年の六年生です。この年から朝の体育の鍛錬と称して、マラソンで牛島神社までの往復が日課となったのでした。防空訓練では、鉄筋コンクリート三階建ての校舎の下は防空壕（ぼうくうごう）になっていて、廊下からの出入り口での避難訓練が度々あったのです。防空壕内は大勢の児童で息苦しさは大変なものでした。

五月に入り、牛島学校は千葉の姉ヶ崎への学童疎開となり、私は体調不良で集団疎開組には入れず、残留組となってしまいました。同級生のいとこと妹（五年生）は千葉へと出発して行きました。四クラスが二クラスずつになりましたが、残留組は縁故疎開もあるので三分の一ぐらいになっていまし

た。朝の武道の練習はなくなり、六年生は新聞配達の勤労奉仕が始まりました。新聞配達といっても専売制は廃止されて四大新聞だったか五大新聞の戸別配達です。百世帯くらいを、各世帯別の新聞台帳を見て仕分けして配達に出ます。A新聞の家にB新聞を入れてしまうと、それから先が全部ずれてしまう、そんな失敗などが思い出されます。そうした生活のなかにも来春の中学受験の準備をしなければなりませんでした。

夏休みも終わり、秋の声を聴くと、東京も頻繁に昼夜を問わず警戒警報、空襲警報が多くなり、五～六年生は戦闘帽・防空頭巾・ゲートルは必需品となっていました。食料の欠乏は激しく、米粒の少ない雑炊を食べて二〇年の正月を迎えたのです。

三月の声を聴いても例年になく寒さは厳しく感じられました。それでも三月七日ころだったと思いますが、千葉へ集団疎開していた同級生が進学受験のために帰校したのでした。その後に起こったあの忌まわしい東京大空襲に遭遇したのです。私のいとこはあの夜に黄泉（よみ）の国へと旅立ったのです。私たち家族は激しく延焼した母校（牛島）の一隅で助かったのでした。前日まで楽しみにしていた卒業式、準備していた中学入試も自然消滅してしまいました。

三月一三日、焼け野原となった言問通りを家族で、上野駅へ向かって歩いて行き、夜も一一時は過ぎていたでしょうか、やっと列車に乗れて母の故郷である新潟へ向かったのです。母の故郷は蒲原平野で穀倉地帯とのことでした。それで縁戚（えんせき）の家に着いたのは一四日も夕方になっていました。長い列車の旅でした。縁戚の人たちの尽力で、町にある県立中学を受験できたのでした。

二〇年四月には中学生となれました。町には男子中学校と女子中学校があり、教授たちは老齢の教師と女教師が多く、学年は五クラスもあり、上級の四～五学年は三クラスしかなかったのです。授業は午前中だけで、午後は軍事訓練か勤労奉仕でした。田舎（いなか）での勤労奉仕は、大部分が出征兵士の留守家庭や遺族家庭への農作業でした。そんなことのできない都会育ちの者は、町に一か所だけある丸善精機という工場での通信機の部品作りでした。その作業にしても砲金部品のすり合わせで、一二～一三歳の男子は削り過ぎて不良品を出し、しかられてしまったことなどが思い出されます。

そうしたなかで八月一五日を迎えたのでした。短い夏休みのことで、真夏の太陽の正午、ざあざあと雑音の多いなかで

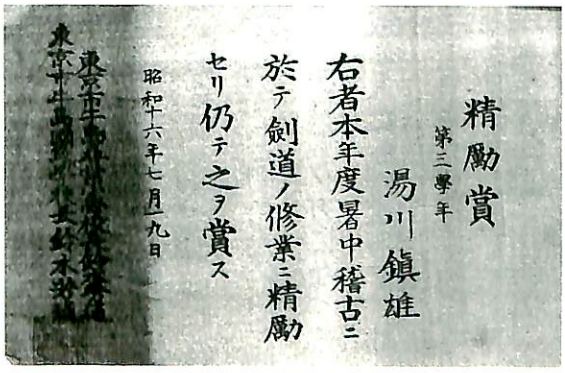
終戦の詔勅を聴いたのでした。

穀倉地帯とはいえ食糧事情の厳しさは感じられるようになっていました。なすこともなく九月、登校すると講堂の黒板にだれが書いたのかこんな詩が書かれていました。「三千歳（みちとせ）の　歴史輝く　日（ひ）の本（もと）の　今米英に降る悲しさ」張り詰めた気持ちでの生活が一気に切れたようで忘れられない詩となりました。

九月も終わり一〇月の声を聴いて、教室にも授業らしきことが始まりましたが、それは教科書の墨塗り作業でした。少ない専任教師ごとのこの作業は消さずに残ったところでも、次の授業ではそれも消します。国語、歴史、地理などに多かったのです。英語などは三学期になって、謄写版（ガリ版）刷りが配られました。

それよりも社会現象なのでしょうが、三学期になって、戦時体制で中学を三年修了して陸海軍に志願していった先輩たちが、来期の進級に備えて学校に復校してきたのでした。彼らは兵役訓練を受けてきた一六～一七歳になっている青年です。なかにはつなぎの飛行服を着て長いマフラーをして、校舎を囲んでいる高いプラタナス並木の陰で後輩にリンチを加えている様は、経験したものでなければ分からないことでしょう。目標を突然にプツっと切られた彼らのことを考えた人がいたのでしょうか。田舎で生活をしていた私が思うのだから、これらの若者は都会地でもいたはずで、どんな気持ちで暮らしていたのでしょう。

都会では食料の切迫はますますひどく、穀倉地帯の蒲原平野での収穫は田畑が荒れ減収しているのに、供出米に対する官憲の検査は厳しさを増していました。そうした生活環境のなかで青年期を迎えたのでした。


精勵賞
第二學年
湯川鎭雄
右者本年度暑中稽古ニ於テ劍道ノ修業ニ精勵セリ仍テ之ヲ賞ス
昭和十六年七月一九日

剣道暑中けいこの精励賞

学童疎開体験記

牛島国民学校　五年　吉澤恒雄

―法光寺―

牛島国民学校五年一組（男子）は、千葉県市原郡市西村新堀法光寺に学童集団疎開となりました。出発の日のことは定かではありませんが昭和一九年五月ごろだったでしょう。両国駅から蒸気機関車に引かれた列車で五井まで行って小湊鉄道に乗り継ぎ、上総三叉の駅から二〇分ほども歩いたでしょうか。中村先生に率いられた五年一組三四、五人は法光寺に着きました。寮母さん一人、お手伝いの女性二、三人が交代で私たちの世話をしてくださいました。

―中村常次郎先生―

先生は、当時六〇歳過ぎだったと記憶しています。今では珍しいことだと思いますが、五年一組は入学以来、中村先生が担任でクラス替えがありませんでした。学級編制は、確か生まれ順で、遅生まれが一組、早生まれが二組でした。東京にいたころ、宿題を忘れたりいたずらをしたりすると、廊下に立たされてしかられました。戦後五、六年たって、クラス会を開きましたが、先生は一回目に出席されただけでお亡くなりになりました。お年だったからと言えばそれまでですが、お世話になっただけにもっともっと長生きしていただきたかったと思っています。

―仮設トイレ―

仮設トイレは墓地の中に作られ、本堂からスノコの渡り廊下で行くようになっていました。暗やみの中、一人で墓地へ行くのは怖くて、渡り廊下の途中で用を足してしまう子がほとんどでした。冬になるとこれが凍ってツルツル滑るので、なおさら怖さが増しました。そればかりではないでしょうが、寝小便も多くて毎日寝小便をするという子もいました。さすがに寝小便は恥ずかしいものだから、布団を濡れたまま畳んで本堂の隅に積んでしまうのです。すると、上下の布団は小便臭くなって、本堂も何となくにおうようになりました。寝小便の癖のある子は集団疎開できないことになっていたそうですが、夜中の墓地の怖さを思えば寝小便もやむをえないと言えるでしょう。

―シラミ―

お風呂は三日に一回くらいでしたので、特別不潔にしていた訳ではありませんがシラミがわきました。下着の縫い目などに住み着いて、血を吸うのでかゆくて仕方ありません。暖

かい日には先生の「虫取りはじめ」の号令で皆裸になってシラミ退治を始めました。下着を大釜で煮たり、ＤＤＴを振りかけたりしても退治できませんでした。今、思い出してもかゆくなります。

―農家のお手伝い―

法光寺では本堂に寝泊りしていましたが、布団を畳んでそこが教室にもなりました。勉強は午前中の一、二時間くらいで、午後は農家のお手伝いによく行きました。はじめは農家を訪ねて「お手伝いはありませんか」と聞いて歩いて、そこでお手伝いをさせてもらっていましたが、その後、それぞれに行く家が決まってそこを「シンセキ」と呼んでいました。三軒も四軒も掛け持ちする子もいましたが、私は長堀さん一軒だけに決めていました。季節によって忙しさが違うのでお手伝いも毎日ではなくて、ならせば月に一〇日くらいでした。長堀さんは、お爺さん、お婆さん、若夫婦、中学生くらいの子供というご一家でしたが、大変親切にしてもらいました。父母から離れていただけに気持ちのうえでは本当に親戚（しんせき）の家に行くような気持ちでした。麦踏み、田植え、稲刈り、野菜作りなどいろいろなお手伝いをさせてもらいました。晩御飯を食べさせてもらうのが魅力でしたね。寮とは違って銀シャリが甘くて、おかずがなくてもおいしくてうれしく思っていました。帰京の前にごあいさつに行ったとき「もう一度おいで」と言われましたが、現在まで一度もお尋ねできないままなのが悔やまれます。若夫婦といってもご存命ならもう百歳を超えていらっしゃると思います。クラス会のとき、法光寺を再び訪ねようという話が出ましたが、とうとう果たせないで今日まできました。

―炊事当番―

学寮での楽しみは、週一回の炊事当番でした。農家のお手伝いに出かけ、晩御飯をごちそうになって来る子が多かったからでしょうか、食事の量は空腹に苦しむほどではありませんでしたが、質も量も十分とは言えませんでした。炊事当番の特権は、御飯をそれぞれの竹の食器に盛り付けた後、お釜の底のお焦げを食べられることでした。米と麦が半々の御飯でしたが、しょうゆをちょっと垂らしてほおばるとなんとも言えずうれしかったものです。

―面会―

なんと言っても、父や母が変わりばんこに面会に来てくれるのがうれしかったですね。お互いの無事を確認しあうのはもちろん、差し入れが何よりの楽しみでした。大福もち、お

はぎ、麩菓子、おこし、フルヤのキャラメル、あんパン・・・思い出すだけで口の中が幸せになるのです。頭痛もちの私でしたがあんパンは私の頭痛の妙薬で、食べると痛みが治まってしまうのでした。ちなみに私の家は薬屋でしたが。

―寂しさ―

B29の「空襲」で西の空が真っ赤に染まっていました。自分は千葉にいるから空襲は受けませんが、親兄弟は無事でしょうか?自分は一人だけになってしまうのではないでしょうか?そんな思いが浮かんでは消えていきました。数日後、面会に来てくれた母の無事な姿を見たとき、うれしくて抱きつかずにはいられませんでした。手紙を書いても届くのに半月近くかかったころの話です。電話などもちろんありません。私にとって「学童疎開」ということばの響きは、「寂しさ」なのです。

―私の学童疎開―

幼くして親元を離れた一年間の集団生活。学童疎開は、長い人生の中では「いい経験だった」と思います。でも、子供たちには絶対にさせたくない経験なのです。

(談)

学童疎開　思い出すまま

外手国民学校六年　石倉一郎

「バンザーイ」「バンザーイ」大勢の見送りの人々の声がこだまする両国駅を、我々外手国民学校集団疎開児童が出発したのは、真夏の暑い太陽が照りつける昭和一九年八月二七日だった。

私たちは非常時に両親の足手まといにならぬようにと、まるで出征兵士が出発するような雰囲気の中、緊張感につつまれながら元気に見送りの人々に手を振って、一路、疎開地千葉県夷隅郡布施村長福寺へと向かった。日増しに戦局が激しさを増すとき、六年生の私たちは、周囲の状況に子供ながら非常時に対する気構えができていたのか、車中では父母と別れる寂しさは感じず、まるで遠足の気分になっていた。

大原駅に到着した私たちは、これからの日々を送る長福寺に向かって黙々と歩いていった。寺では、村長さんを始め、寺の御前様一家と村の人々に暖かく迎えられ、寺の大広間での歓迎会があったが、その時の思い出は、食卓に並んだトウモロコシのおいしさしか記憶にない。

男子生徒一組佐藤先生、二組本木先生と二班に分かれ、本堂を中心に左右に分かれた大広間が我々の生活の場になった。布団の上げ下げから、清掃、食事、勉強と規則正しい日々の明け暮れに寂しさを感じるひまなどなかった。しかし、間もなく東京の親から来る手紙が着き始めると、手紙を読む友のまわりを囲んで一緒に故郷の様子を語り合う輪ができた。その輪がとけたとき、手紙を持ったままポロポロ涙を流している友がいた。我々も例外ではなく部屋の隅で泣きながら何回も手紙を読み返していた。すべての一人一人があどけない小学生になっていた。

生活になれてきたころ、朝の勉強が終ると自由時間には、近くの田んぼで泥遊び、小川での水遊び、また、山登りやカエル・ドジョウ釣りと集団生活の楽しさを充分にたん能した。

勉強はほとんど寺の広間で、朝食後三時間の授業だった。村の学校へは表敬訪問ぐらいで月一回ぐらいだった。来年の中学受験があるため皆一生懸命だった。田舎のことで警戒警報のサイレンも鳴らず、勉強に集中できた。

秋になって村祭りの日、村の鎮守の森でお神輿（みこし）の渡御（とぎょ）を楽しくを見ていた時「東京からお母さんが面会にきている」と寮母さんが迎えにきてくれた。いそい

で寺へ飛んで帰ると、弟を抱いた母がニコニコと立っていた。「お母さん」と大声で言ったつもりが声にならず、涙があふれて、そのまましばらく二人で向き合ったまま、涙でくしゃくしゃになって、お互いの顔を見合っていた。体中の堅苦しさが一瞬ぬけて、何ともいえない安らぎを感じ母のあたたかさを初めて実感した。

寺の風呂場工事が遅れ、私たちは近所の農家に、班を作って「もらい風呂」に、夜、出かけた。どの班も農家の人々に大歓迎を受け、風呂上りに「おなかすいてるんだろ、うんと食べてけ」と、いつもたくさんのごちそうをふるまってくださった。私たちはこの風呂の日を最大の楽しみにしていた。

冬近くなって、食糧事情が悪くなったのか、ご飯からたまに「おじや」が出るようになったりした。私たちは空腹感から裏山の畑で生イモを掘ってかじったり、田んぼのタニシを取って食べるようになったが、それを先生に見つかって大目玉をくらった。先生も我々の体を心配してのことで、今思うと先生のつらい気持ちがよく分かる。とはいっても、空腹とお菓子がほしい思いに耐えられず、甘味の代用には当時のハミガキ粉や「わかもと」の薬が甘くて、本当にお菓子の代用になりおいしかった。そこで我も我もと東京へ「送ってください」と便りを書いた。後で胃腸薬を食べて、余計におなかがすいたような気がする。

長福寺のご家族との親交は、本当に子供のようにかわいがられた思い出として残る。親身になって面倒を見てくれた寮母さんたち。夜毎お風呂をいただきに行った農家のご家族との団らん。また、村の方々のご協力などで、私たちは本当に幸せな時を過ごせたと思う。それ以上に本木・佐藤両先生のご苦労を忘れることはできない。最後まで気持ちの休まる時がなかったと思う。

中学校受験及び卒業式のため、六年生は東京に引き上げることになり、それが三月一日と決まった。それから三月一日を私たちは一日千秋の思いで待った。それまでの緊張感が抜け、心の中からうれしさがこみ上げたり、急に悲しくなったりして、子供心はおおいに揺れ動いたことを覚えている。帰京前夜、村をあげて送別会を催してくださった。村長さんから「これからも頑張ってください」と励ましの言葉をいただき、一同心の中に新しい出発への決意を抱いた。

大勢の村の人々に見送られて長福寺を出発して、途中全員元気にラバウル小唄の替え歌を歌って行進した。

「さらば長福寺また来るまでもしばし別れの涙に暮れる恋

し長福寺の山々見れば杉の木影の北斗星」

大原駅に着くと、そこには大多喜方面に疎開していた下級生たちがわざわざ休みを取って見送りにきてくれていた。私たちは大感激し、互いに声を掛け合って別れを告げた。今思うとこの下級生たちの中には三月一〇日大空襲で親兄弟と死に別れた生徒もいたと思う。大空襲の夜、猛火の中を逃げ延びた私たちであったけれども、それ以上に戦況の悪化で岩手県へ再疎開をして、明くる三月まで一年もの間苦労をした下級生の頑張りに敬意を表したい。

帰りの車中、車掌さんが私たちの列車に来て「この列車は敵機の襲撃を受け、そのときに犠牲者が出ました」と砲弾の貫通した穴を指差してその手を座席の方へ向けた。その座席が色が変わったシートになっているのを見て一同しばらく沈黙してしまった。私たちに平和な村から戦場に行くような不安な気持ちがよぎった。その不安は間もなく「現実のもの」となった。

三月九日夜、疎開地からの荷物が到着して、あまり整理もつかぬ時、東京大空襲に見舞われたのである。卒業と中学生へのすばらしい希望に満ちて帰京したのに、この空襲で多くの友達を失った。何のために今まで疎開をしていたのか、運命の「いたずら」として片付けられない体験をした。生き残った私たちは、友達の分まで一生懸命頑張ろうと心に誓った。

私たちはこの激動の時を体験して「どんなに平和が大切か、戦争がどんなに人々を苦しめ、その上世界を滅亡にさらすことか。戦争は二度とあってはならない」と、これからも永く語り継いでいきたいと思う。

―追記―

五年ほど前、男子と女子の同期生有志で、お互いの疎開地のお寺を訪問した時、長福寺住職より当時玄関前にあった表札を渡され感無量でした。「外手国民学校長福寺学寮」と墨で書かれていました。これは現在、外手小学校に保管されています。

私の疎開経験

外手国民学校四年　上野川　泰子

私は昭和一九年八月、小学校四年生のときに墨田区本所の外手国民学校から、千葉県夷隅郡千町村の行元寺に学童疎開をしました。疎開してすぐは寂しくて、寺の回廊に出ては夜空を見て泣いていました。私たち生徒を引率してくれたのは、当時一八歳の代用教員、桜井先生一人でした。まだ高校生くらいの年ごろで六〇人の生徒を束ねていらしたのは、今考えるとびっくりします。

大きな本堂いっぱいに布団を敷いて、生徒全員で寝起きをしていました。もちろん、本堂のふき掃除も子供たちでやりました。トイレは本堂の片隅に一か所あるだけです。お寺なので、お位牌（いはい）や仏像などがたくさんあって夜はとても怖く、何人かずつまとまって行ったものです。寝る前などは一度に何人も使えるわけもなく、仕方ないので外に一列に並んで、みんなで用をたしたことを覚えています。もちろん、ちり紙などないのです。

つらかったのは、お寺が山の上にありそこの井戸を使うとかれてしまうので、山を下り田んぼを越えて遠く向こうの山裾にある井戸から、生徒六〇人が洗面器を使ってバケツリレーのように水を運んだことです。水をくむところと、あけるところには保母さんがいました。やっとたまった水を沸かして、小判型の小さいお風呂に一〇人ずつ交代で入りました。毎日ではなく、一週間に一度くらいです。最後の方は真っ黒の泥水のようなお湯で、入るのが気持ち悪いくらいでした。それでもシラミがわいてしまうので、回廊で向かいあって座り、一人がすきぐしでシラミを取るのを、向かいの人が「一匹、二匹」と数えながらつぶしたものです。

近所の農家に農作業の手伝いに行くこともありました。「親元を離れてかわいそうに」と言いながら、手作りのおまんじゅうや草もちをごちそうになったことを、ありがたく思い出します。

昭和二〇年三月の空襲で、東京の夜空が真っ赤に染まった様子は、千葉のお寺からもよく見えました。焼け焦げたお札が、風に舞って飛んできました。そのときは、まさか東京から飛んできたものだとは思いもしませんでしたが、後から、その日に東京が空襲にあったことを聞きました。

「房総半島も危ない」ということで、私たちは岩手県花巻の志戸平温泉に再疎開しました。昭和二〇年五月二五日のこ

とです。私を岩手まで送ってきた父は「東京は全滅だ」と言って帰りました。実は、三月一〇日に墨田区本所の家を空襲で焼失し、そのとき私の兄弟四人が亡くなり、残った家族は小石川に疎開していたのです。その後、行き場がなくなった親と残った兄弟は、私がいた千葉の行元寺に縁があってお世話になりました。

岩手の疎開先では「シラミがわくから」と、温泉地なので何度もお風呂に入れられましたので、千葉のときよりは清潔でしたが、とても空腹でした。男子はアカトンボなどを捕まえて羽を取って焼いて食べたりしていましたが、私にはどうにも気持ち悪くてできませんでした。なかには、あまりの空腹と親恋しさに疎開先を逃げ出して、花巻駅で連結器に足を挟まれた子もいました。

私は終戦の知らせを志戸平温泉で聞き、そこで父に迎えられて再び行元寺に行き、千町村小学校に往復八キロの道を歩いて通いました。でも、家族の元へ帰れたことはとてもうれしかったものです。

そのような経験を、孫にも常々話して聞かせていましたが、孫がその年ごろになったので、平成一五年の夏に行元寺に連れて行きました。六〇年もたったので道路もきれいになって、ふもとの村はだいぶ変わっていましたが、寺はそのままで、当時、私と同い年くらいだった現住職も私を覚えていてくださって、お風呂くみの話などいろいろ話してくださいました。

とにかく、いろいろ経験しましたが、みんなが大なり小なり同じ苦しみの生活だったので、意外と素直に受け入れられました。このような時があったからこそ、現在、ものを大事に、人を大事に、と思えるのではないかと思います。

語り継ごう平和のために

外手国民学校六年　大野正子

激動の昭和という時代は、子どもだからと甘やかされは許されませんでした。今、生きている子どもたちはあの「苦しい、ひもじい、貧しい、悲しい、寂しい」ことを知りません。あの時代を再び子どもたちに体験させないために私たちが語り継がなければならないと思うのです。

平成一七年三月九日　青い美しい空　平和な空！　六〇年前の三月九日の空にしてはならない！

私自身に、友人に、戦争で亡くなった大勢の方たちのために、あの苦しかったことを風化させないために、毎年三月九日近くなるとK子ちゃんに便りを出すのです。

「今年は東京大空襲六〇年！　あちこちでイベントが開催されているようです。年月の流れの早いこと！　六〇年前の三月二日、疎開先の千葉から帰った日のことが昨日のようです」

昭和一九年八月一〇日、外手国民学校六年生の私は縁故疎開先がなく学童疎開に参加しました。

千葉県夷隅郡中川村にある妙泉寺が私たちの受け入れ先です。ご住職さん、奥さん、息子さんたちは私たちの面倒を良く見てくださいました。今でも感謝しています。

私たちの学習、生活の指導者として先生が二人、寮母さん二人がいました。

食事は貧しく、ご飯、みそ汁、漬物が定番です。たまにプラス一品ぐらいあったでしょうか。横目で当番が配る食器の中の量を比べます。飽食の現在では考えられないことです。

寺で勉強することもありましたが、近くの学校の教室で授業を受けることもありました。縄綯い（なわない）やカマス縫いをしました。なかなかじょうずになれませんでしたが見よう見まねで頑張るしかありません。手は荒れガサガサになったり血がにじむこともありました。今のように手につけるクリームがあったわけではありません。

寺の庭から外に出ることはありませんでしたが、学校の往復の時、お百姓さんの家の庭に柿がたわわにぶら下がっている風景は今でもはっきり目に焼き付いています。「食べたい！」

風呂は、現在のようにひねれば湯が出るわけではありません。水を汲み、まきで湯を沸かし、石けんも配給。寺の風呂

とはいえ大勢が入るのですから並大抵のことではありません。一週間に一回ぐらい入ったでしょうか。「清潔に」は死語でシラミ、ノミに悩まされる日々でした。毎日入浴することが当たり前の現在では考えられないことでした。

掛け布団一枚しか持っていない私は、寒くて眠れない朝を迎えたこともあります。子どもとはいえプライドがあります。かい巻きや毛布を持っている友達もいます。ある日、K子ちゃんに「一緒に寝よう」と持ちかけました。彼女はすぐ「うん、いいよ」と言ってくれたのです。その夜からの有り難かったこと！しばらくして面会日に毛布が届いた時のうれしさは忘れられません。家族はどんな無理をして調達したのでしょうか。

電気毛布の暖かさを感じる時、あの時の寒さも同時に思い出すのです。後にK子ちゃん（二一年ぶりに再会できた大切な友）にあの時のうれしかったことを言うと記憶力の良い彼女なのに「そんなことあったっけ？」と思いやりの台詞（せりふ）をいただきました。

今のように履物が何足もありません。一足を大切に大切にしたのです。ある日、寺の裏庭に大きな防空壕（ぼうくうごう）をみんなで掘ったのです。素足です。冷たく感覚を失っていたはずです。心の中は皆同じですが決して口に出せませんでした。この防空壕掘りのことは私の記憶にないのですが、記憶力抜群のK子ちゃんの談です。

つらいことや寂しいことを家族に訴えたくても手段がありません。今のようにポケットから携帯を出しておしゃべりできる世の中がくるなんて誰が想像したでしょう。家族への手紙は先生が検閲し、泣き言が書かれていれば書き直され、家族が安心する文を書きました。

単調な生活の中でうれしかったこともありました。面会の日です。今考えると大変な思いをして千葉県まで来てくれたのだと思うと、旅立った家族への思いは募ります。食べ物はその場で食べるだけだったように覚えています。

もう一つ大きな思い出があります。好きな所に外出できる日がありました。兄弟のいる人は兄弟の疎開先（だいたい県内の近場だったと思います）へ行きました。K子ちゃんと私は兄弟がいないので、五年生の時の担任の男先生がいらっしゃる疎開先へ行きました。先生は大変喜んでくださり、その時の状態を表現するなら「食えや歌え」の歓待振りでした。久しぶりの満腹感！いつまでもこの感触が続くよう祈ったことも覚えています。

昭和二〇年三月二日。男子は中学校、女子は女学校受験のため疎開先から東京へ帰ってきました。三月九日までの記憶は薄いのですが、その夜、母は私の大好きな酢の物を作ってくれたのです。半分は明日のお楽しみに残しておきました。その夜があの大空襲の日です。

姉は近所の人と残り、私と母の逃げる先々は火の海です。母は川ならと思ったのでしょうか、隅田川の方に逃げましたが焼夷弾（しょういだん）が次ぎから次ぎに落とされます。必死で必死で逃げます。煙のために目が明きません。道には逃げ遅れた人々が倒れているのです。何度つまずいたかしれません。夜が明けるころ、B29の姿は見えませんでしたが、空は煙と赤い火の粉に染まっていました。

姉と二葉国民学校で会う約束をしていたので、倒れている人々につまずきながら二葉国民学校に向かい、到着して目に入った光景はすさまじいものでした。

熱いのでプールに入ったのでしょう。沈んでいる人、前屈みになっている人、プールの縁に倒れかかっている人・運動場には真っ黒になって倒れている人、赤ちゃんを背負ったまま倒れている人、子どもの手を握っている人、この光景が夢であってくれれば良いと思いました。一人として生きている人はいません。姉と会えなかったことは言うまでもありません。家の焼け跡に行ってみると防災頭巾をかぶってショボンとしている姉がいます。互いに無事であった時の喜びは忘れられないことです。

三人は喜び合ったのもつかの間、差し当たっての生活を考えなければなりません。川崎にいる兄の家まで徒歩で行く途中、震災記念堂（今の東京都慰霊堂）で乾パンをもらいました。三人無事であったことにホットすると、昨日半分残した酢の物が残念でなりません。後々酢の物を食べる度に思い出すのです。

その後、幾多の苦しさを乗り越え、それぞれが平和を願いながら安定した生活に根付いたころ「卒業式をしていない。できないだろうか」という願いから、三〇年過ぎた昭和五〇年五月一七日、四二歳になって卒業式を挙行していただきました。万感胸に迫るものが去来したことは言うまでもありません。

数人で会う度に疎開時代の苦しい思い出も懐かしく語れるようになったのです。「行ってみたい！」衝動にかられ、お世話になったお寺に伺いました。

平成二年四月一八日（水）、四六年間それぞれの人生を歩

みながらも、常に再びあの戦争をしてはならないと一人ひとりの胸に秘めていたはずです。苦しかった思い出も笑いながら語り合える幸せを感じる一瞬でした。当時のご住職さんご家族も、代がかわっておりましたが、本堂に案内され当時の写真も保管されており、涙があふれ感謝の気持ちでした。

一人ひとりの興奮したまなざしの中は、永久（とわ）に平和な世の中が続きますようにと語りかけていました。

※昭和五〇年に教育委員会、学校のご配慮により卒業式を挙行していただきました。その時、欠席なさった方の卒業証書をお預かりしています。お気づきになりましたらご連絡ください。

（連絡先・墨田区教育委員会事務局生涯学習課）

学童疎開体験記

外手国民学校五年　鹿田嘉正
（旧姓　新澤）

昭和一六年一二月八日太平洋戦争が始まったが、昭和一九年に入ると東京にも戦時色が濃くなり、建築物の強制疎開や若宮公園での焼夷弾（しょういだん）による消火訓練、町内の各所で出征兵士を送る姿が数多く見られるようになった。

そして、八月ごろから学童疎開が始まった。

父兄や大勢の人たちに見送られ、両国駅から汽車で木原線の上総中野駅に着く。私たちの宿舎は駅前の鈴木屋だった。二階の大広間に落ち着くと、地元の人たちが冷たい麦茶を出してくださった。そのおいしかったこと、今でも忘れられない。行李（こうり）に衣服とか食料品を入れて、父がチッキで送ってくれた。

着いてからしばらくは、夜になると親元から離れた寂しさのあまり泣く子が多かった。（私もその一人）

当時、私たちの五年一組は五〇人近くで、世話してくださるのは若い保母さん一人だったので、なかなか手が回らなかったようだ。

今でも思い出すのは、シラミの卵がパンツの縫い目にぎっしりつまっていて、パンツを一斗缶で煮沸していたことだ。なぜかは知らないが、そのシラミのことを「ホワイトチィチィ」と言っていた。

また、朝、布団から起きると、ノミが血をいっぱい吸っていて、動かないでいるのを一匹一匹捕まえるのが日課だった。本をめくるとナンキンムシも出てきた。

私たちの先生は数学が好きだった。特に分数計算が得意で、よく勉強した。

それから近くに部隊があり、兵隊さんたちの慰問をしたり、燃料の足しにと松の木の根っこを掘るのを手伝ったりした。

ときどき近くの薬局で「ホシミクローゼ」を買ってきて、お菓子代わりに食べたり、八百屋の店先に柿の皮の干したのを安く売っていたので買ったりして食べた。すごく甘かった。でもそのあと、ふんづまりになって困った。

なかでも一番の楽しみは、恒例行事になったマラソン大会だった。私の好敵手だった辻行哉君を抜いて、いつも一番だった。先生が欄間（らんま）に横紙で順位を書いてはってくれた。すごくうれしかった。あとは、父兄の面会日。物資不足の折から親が一生懸命手当てをして、お菓子や食べ物など

を持って来てくれた。

二回目の面会日が昭和二〇年三月一〇日ということで、指折り数えて待っていたが、夜半から東京の方角が真っ赤になり、朝早くから火傷（やけど）をした人や眼をやられた人たちが大勢近くの病院に来た。そこで初めて、東京が大空襲に遭ったことを知った。本所、深川地区も全滅したとのことだった。

当時、私の父母と兄、生後六か月の弟が亀沢町にいた。一緒に逃げて助かった兄の言葉によると、両国と錦糸町の間のガード付近で別れ別れになり、あとで探したが焼死体があまりに多く、また炭化したために判別不能で、ずいぶん探したが分からなかったとのことだった。

その後、千葉県の高空を飛行機雲をはきながらB29の編隊が飛んできた。ある日など、二階の戸を開けて外を見ていたら、屋根すれすれにグラマンが飛んできた。目の前だったので操縦士の顔がよく見えた。あとで、機銃掃射により多くの人が死んだことを知る。

また、近くの山中にB29が落ちたとのことで、大勢で見に行った。ジュラルミンの残がいの中に、風防ガラスが溶けてころがっていた。乗員たちはパラシュートで脱出したものの、捕らえられ、西畑国民学校の校庭で処刑されたと、後で聞く。

記憶違いがあるかもしれないが、御歌の「御民（みたみ）あれ　生けるしるしあり　天地（あめつち）の　栄ゆる時に逢えらく思えば」を毎日歌っていたことを覚えている。

私たちのいた千葉県も艦砲射撃があるらしいということで、昭和二〇年五月ごろ、岩手県稗貫郡の志戸平温泉に第二次疎開する。食糧事情は極端に悪くなってきて主食は大豆がほとんどだった。ただ、「いかの塩辛」だけは毎日よく出た。野に自生していた「スカンポ」もよく食べて飢えをしのいだ。

宿が温泉旅館だったので、お風呂にはよく入った。でも、お湯に入ると、余計腹がへるのには閉口した。

八月に入って、重大放送があるらしいということで、広間に全員集合させられる。あとで終戦の玉音放送だったことを知った。そのときは「ガーガー」と雑音ばかりで聞き取れなかったが、戦争が終ったということだけは理解できた。みんなで「東京に帰れるぞー」と喜んで大騒ぎしていたら、先生に「日本は戦争に負けたんだ。無条件降伏したんだぞ」と言われ、大いに怒られた。

その後、岩手県にも進駐軍がジープに乗ってやって来た。ガムやチョコレートをくれたが、鬼畜米英の教育を受けていたので本当に怖かった。

終戦後は、何もしない毎日だった。教科書も真っ黒く塗られ、読むところが少なかった。

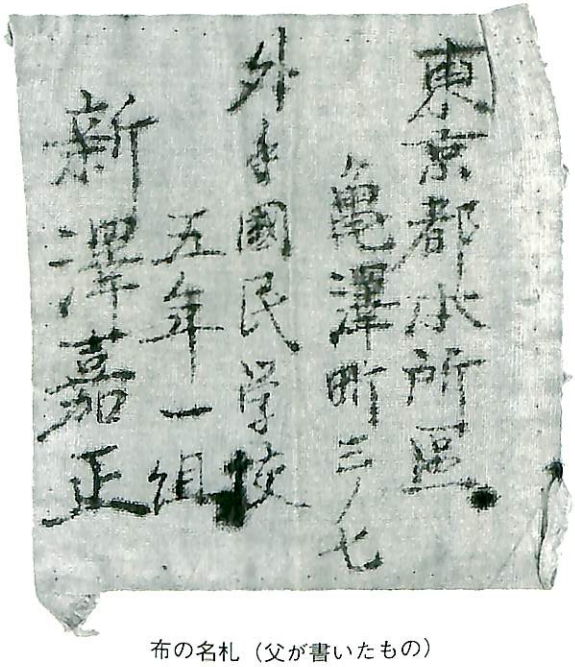
その後、東京に帰る。帰るとき、裁断したままのカーキ色の服地とするめ一〇枚、ほたての缶詰を数個もらう。東京に着いて、秋葉原駅の高架から見た下町は、あたり一面の焼け野原だった。また、上野駅の地下道を通っていたら、数人のMPたちが通る人全員に、頭からDDTの粉末をぶっかけていた。街には戦災孤児や浮浪者があふれていた。

私は、幸いにも、弟が縁故疎開で先に行っていた新潟県柏崎市野田村の伯父の家に引き取られた。三年間お世話になったが、今でも、新潟県柏崎市立野田小学校の同窓会に呼ばれ、親交が続いている。

―後記―

両親には、早く死に別れた私ですが、自分の子供たちには戦災のくわしいことは何も話していません。この機会にと、あのころのことを思い出しながら書いてみました。あんなにやさしくて、何も悪いことをしていない亡き父母が、何で殺されなければならなかったのかという気持ちで、当時は一杯でした。

今なお、世界各地で戦火のため戦災孤児が増えていることを思うとき、心が痛みます。



布の名札（父が書いたもの）

集団疎開

外手国民学校六年　土田敬子
（旧姓　輿水）

私たち六年生女子は、昭和一九年八月二八日から昭和二〇年三月二日まで千葉県夷隅郡中川村行川、興榮山妙泉寺（ご住職は渡辺顗静様）へ集団疎開いたしました。

引率の先生は、一組山崎郁子先生、二組武田寿美江先生、保母さんとして二〇歳前後の若い高野先生の三名でした。武田先生は、期間半ばで結核にかかり東京に帰られてしまいました。一班から七班まであり、各班約八名の構成です。

お寺が小高い丘の上にあるので、日常の水運びが大変です。中腹にある井戸からくみ上げて上まで運ぶのですが、慣れない仕事なのでとても疲れました。働き者のNさんは、みんなの倍も頑張るので先生の信頼が絶大でした。

水が大切なので、お風呂も三日から四日に一回で、みんなシラミに悩まされました。お天気の良い日には布団干しをして日なたで下着姿のままシラミつぶしです。Kさんは頭中おできになり、仕方なくバリカンで髪を全部刈り取り坊主になりました。おできのかさぶたをはがすと、中からシラミがぞろぞろと出てきます。私も足のかきこわしたおできの傷跡が、六〇年たった現在でもいくつも残っています。

午前中は勉強、午後は「縄綯（な）い」や「叺（かます）縫い」の作業です。本堂の前の道端に座り込み、わらを三本で三つ編みに綯（な）っていくのですが、簡単のようでなかなか上手にできず苦労しました。

また、タニシを取りに田んぼに入りました。田んぼにはヒルがたくさんいて足に吸いつかれてしまいます。払いのけようとしてもなかなか離れず、やっと取り去ったときは血を吸われているのです。

イナゴ捕りもしました。飛び跳ねるイナゴをわいわい騒ぎながら追いかけ、捕ってきたイナゴは蒸して羽と足を取り夕食のテンプラに、タニシはみそ汁の実となります。イナゴの天ぷらは、すごいごちそうでした。

お寺が鉄道の線路際にあるので、夕食後自由時間になると東京が恋しくて、月明かりに見える線路を見つめては涙を流したものでした。

父母の面会も切符に制限があるため、たまにしか来てもらえません。面会に来る父母から食べ物をもらってはいけないのですが、たいていの人は内緒で何かしらもらい、荷物検査

で処分に困りお手洗い（くみ取り式）に捨てて見つかったり、食べ過ぎて下痢をしてしかられたりしました。私はお金をもらい（これもいけないことなのですが）お守り袋に入れて隠し、薬局で薬を買いお菓子代わりに食べたりもしました。今思うに、この薬は栄養剤か「わかもと」のようなものではなかったかと思います。

朝食の前にラジオ体操をするのですが、いざ食事となると冬はみそ汁が冷えきってしまっているので、熱いみそ汁が飲みたいと思ったものでした。

つらいことばかりではなく、楽しいこともありました。ご前様が私たちを小湊へ連れて行ってくださいました。小湊参拝を済ませた後、鯛ノ浦の鯛を見てまいりました。渡し舟のような小さな舟で、船頭さんが櫓（ろ）をこぎ、エサをまくと鯛が群をなしてピチピチと海面に重なりあい、初めて見る光景にみんな歓声を上げました。昭和一九年一一月のある日のことでした。

東京の空襲がだんだん激しさを増すにつれ、敵機の通り道の疎開先でもたびたび警戒警報が発令されるようになりました。丘の中腹に横から穴を掘って防空壕（ぼうくうごう）も造りました。

私たち六年女子は女学校受験のため、昭和二〇年三月二日、東京に帰ってまいりました。そして三月一〇日未明の東京大空襲に遭い、多くのお友達を亡くしてしまったのです。本当に悲しいことでした。

昭和五六年三月一日、母校外手小学校の近くのお寺で、亡くなった同期生の三七回忌法要を男子、女子共同で行いお友達の冥福を祈りました。

当時を振り返り、ずいぶんひもじい思いもしましたが、にわかに大勢の児童を受け入れざるを得なかったお寺のご前様・奥様を始め担任の先生方の、食糧確保、生徒の健康維持など、そのご苦労は並大抵ではなかったと思います。改めて感謝の気持ちでいっぱいでございます。



疎開学童　小湊参拝（昭和19年11月）



外手国民学校　6年女子

布施村・学童疎開の思い出

外手国民学校六年　浪川和夫

世の中が大変な不況であった昭和八年一月に、隅田川を目の前にした本所区厩橋一丁目（現墨田区本所一丁目）で私は生まれた。小学校に入学した時には日中戦争がすでに始まっていて、その後昭和一六年一二月には、あの真珠湾攻撃の日米開戦により世界戦争が始まった。小学生は少国民と呼ばれ、小学校は国民学校と名称を変えた。生活物資も極端に不足し、すべてが配給制に代わっていった。「欲しがりません勝つまでは」とたたき込まれ、小学生にも徹底した軍国主義の教育を施された。その後世界戦争は、ミッドウェーの海戦以降連合軍の巻き返しにあい、サイパン諸島がアメリカ軍の手に落ちてからは、アメリカの爆撃機の航続範囲となり、日本本土に対する空爆も激しさを加えていった。

このような背景の中で、昭和一九年になると都会の小学生は、政府の方針により敵機の空襲を避けて、強制的に地方へ疎開させられることになった。地方に親類縁者のある者は、親戚を頼って地方の小学校に転校し、地方に親戚知人のない生徒については、各区別に各県の山村部へ集団疎開することになった。

本所区は千葉県への集団疎開が決まり、外手国民学校の六年生男子八二名は、外房線大原駅から約一〇キロ近く山の方に入った布施村の硯山長福寺というお寺で、家族と離れて生活をすることになった。

それは昭和一九年の八月の夏の日照りの強い朝であった。集団疎開に行く小学生は、それぞれがリュックサックやランドセル、手に身の回りの荷物を持って、学校の校庭に集合した。まだ集団疎開の意味も深く理解していない私たちは、不安も半分あったが、まるで遠足にでも出掛けるようにはしゃいでいる者もいた。校長先生の訓示があってから、列を組んで見送りの父母たちとともに両国駅へと歩いていった。当時の両国駅は、千葉方面への始発駅となっており、蒸気機関車（SL）に連結された客車八輌に、学年別に分乗した。

出発のベルが鳴り、見送りの父母たちの万歳の声、中には涙で顔をくしゃくしゃにしている母親の姿が何人も見受けられた。父親たちの「頑張れよ」という声、走り出した列車の窓から懸命に手やハンカチを振る子供たち、列車が見えなくなるまでホームで手を振り続ける父母たち、家を離れ父母からも離れてこれから未知の地で生活する不安と寂しさが襲っ

てきて、急に列車の中は静かになってしまった。

列車は、三時間もかけてようやく大原駅に到着した。六年生男子はここで下車して、約一〇キロの道程を、夷隅郡布施村に向けて歩き始めた。六年生の女子を含めて下級生は、大原駅より大多喜方面へ分散するために大多喜線（現在の夷隅鉄道線）で、さらに山間部へと進んでいった。疎開児童の中には、兄弟姉妹で集団疎開をする家庭もあったが、この日から、兄弟姉妹が別々に生活することになった。

六年生の男子は大原駅で下車した後、列を組んで歩き出した。荷物は布施村の農家の方が、馬車を持って迎えに来てくれていたので、荷台に積んでいただき、身一つで歩いて行った。途中照明もない暗いトンネルを二か所過ぎ、休憩を取り、軍歌を歌いながら歩いたが、目的の硯山長福寺に到着したときは、長距離の行進で全員がクタクタに疲れ切って、座り込んでしまった。

宿舎の長福寺は本堂を真ん中にして左右に畳を敷いた広間があり、右側を六年一組、左側を二組の生徒が使用することになった。長福寺の住職を私たちは御前様と呼んだ。私たちを優しく迎えてくれ、その後、折にふれ時々講話をしていただいた。

それぞれの組に一名ずつ寮母さんがついて我々の世話をしてくれた。二人の寮母さんは親子であった。私の一組はお母さんで、年齢は五〇を過ぎて、子供たちには比較的厳しく接する寮母さんであった。二組の寮母（娘）さんは二〇代の優しいきれいな方であった。一組の私たちは、子供心にも、二組の生徒をうらやんだものであった。

一日の生活は、起床すると、まず各自で布団を片付け、歯磨き洗顔が終わると前庭で体操、朝食後は文字通りの寺子屋教育で、一・二組の担任の教師が国語、算数、修身の教科を主体に授業が行われた。布施村の小学校は遠く、収容力がなかったので、やむを得ないことであった。午後はすべて自由時間であり、お寺の裏山へ登ったり、田んぼのあぜ道を駆け回ったり、竹を切ってきて竹細工をしたり、溜め池でフナや蛙を釣ったりの、都会では経験できない田舎の遊びを堪能（たんのう）し、またいろいろな遊びを自分たちで創造した毎日であった。

八〇名からの子供が集団で生活していると、当然のように腕力の強い者がガキ大将となって主導権を握り、今でいう「いじめ」も発生するようになった。また、次の段階では、その「いじめ」を受けた者をかばって正義派がグループを作

って対決したり、子供の世界にも次第に派閥が生まれた。「いじめ」を受けても、相談するところも泣きつくところもないその中で、お互いが集団生活を続けていくための要領と知恵を習得していったのであった。

日がたつにつれて、物資の不足はさらに厳しく、一日三食、育ち盛りの子供たちの胃袋を満足させるほどの食糧はなかった。空腹のあまり親から送ってもらった整腸薬を隠れて飲み過ぎて逆に腹を壊す者も出るほどであった。

一か月に一度ある面会日に、食糧や物資の少ない中で、どのように工面してきたのか、父母たちが運んできてくれた食糧を、とかく自分の子供だけにと考えがちのところを、全員に平等にと配慮、教師が皆で分けて食べるようにしてくれたことが、子供心にもとてもうれしく感じられた。

お寺には子供たちが入る大きな風呂がないので、毎日ではなかったが、夕食後五～六名ずつに分かれて、近所の農家へもらい湯に行った。ある農家で、子供たちの空腹を見かねて、蒸したサツマイモを食べさせてくれたところ、次のもらい湯の日には前日の二倍の人数がその農家へ押しかけたこともあった。人手の少ない農家に迷惑を掛けるということで、その後庭先に子供が七～八名一度に入れる露天の風呂を作り、ドラム缶で湯を沸かして入ったりした。それでもいつの間にかシラミがまんえんして、下着や寝具、身体や髪の毛の中にまで付着して、かゆさのために皮膚を赤くしている者も続出した。

ご自分の家庭を離れて、そのような状況の中で我々子供たちの世話をしてくれた教師や寮母さんたちのご苦労は、戦時中とはいえ並大抵のものではなく、いまでも感謝している。

時折庭に出て空を見上げると、上空高く、白い雲の線を引いて、米軍機が東京の方向へ飛んでいくのが見受けられた。昭和二〇年に入ると米軍の艦載機による襲撃が始まり、一か月に一度、子供に面会に来る父母たちが途中で列車を襲撃され、駅に停まっている貨車の下にあわてて逃げ込んだなどの事態も起きた。お寺の周囲はのどかな山村地帯であるが、山の陰から突如として艦載機が現れて、農作業をしていた農婦を驚かせたなどの話も伝わってきた。房総半島は、敵機の侵入路となっており、上陸地点とも見られていたため、決して安全な場所ではなかったのである。

昭和二〇年三月一日我々六年生は、中学受験と卒業のために、全員東京へ帰ることになった。それぞれの荷物をまとめ、半年間お世話になった長福寺の御前様夫妻や寮母さんたち

に、お礼と別れのあいさつを済ませ、駅までの長い道程を、皆家に帰れるうれしさいっぱいで歩いていった。列車に乗り、懐かしい両国駅に着いたのは、その日の夕方に近い時間であった。中学受験に夢をふくらませて、うれしいはずの帰京が、それぞれの運命の分かれ道となるのは、それからわずか一〇日後のことであった。

三月一〇日未明に始まった大空襲は、一夜のうちに東京の下町一帯を壊滅させてしまった。この空襲で三月一日に帰京した集団疎開の仲間たちの約四〇パーセントが犠牲となってしまった。あの疎開先のお寺で幅をきかせたガキ大将君も、一家全滅行方不明者の一人だった。せめてあと半月、帰京が遅かったら命を落とすことはなかったと思うと本当に残念であり、運が悪かっただけでは済まされないような気がする。大空襲は、木造家屋の密集している下町に大きな被害をもたらし、一家全滅の家庭も多く、疎開先に残った下級生の中にも、一夜にして戦災孤児となってしまった例も、多々あると聞いている。その下級生たちは、千葉県が敵軍の上陸地点となり、真っ先に戦場となる可能性があるとのことで、東北地方へ再疎開させられた。後になって聞いた話であるが、列車が下町の被災地を通過するときに、窓のブラインドを下ろさせて、その惨禍を見せないようにしたという。しかし幼かった下級生が、家族が全滅、自分が天涯孤独の孤児になったことを告げられた時の小さな胸の中を推し量ると、改めて戦争の無惨さと愚かさを考えずにはいられない。

私たちは、今の若い人たちには、とうてい経験できないような体験を、小学生の時にしてきた。

戦争の無惨さを子供心に存分に染み込ませているだけに、このような体験は二度としたくないし誰にもさせたくない。

今日、集団疎開の体験を思い出すとき、その体験を自分の心の中だけで風化させてはならない。今は亡き当時の仲間たちの冥福を祈るとともに、次の世代へ語り継ぐべきだろう。

学童疎開　お寺の住職との交流

外手国民学校六年　三　好　すず子
（旧姓　山崎）

弟を送り出し、涙を流している母の後姿、父は一〇センチほどの木を「帰って来る時は、どんなになっているかな」と記念に植えている。

私は遠足にでも行く気分で、昭和一九年八月二八日、リュックを背負い、紙芝居と水筒を手に家を出る。校門には名残り惜しんでいる家族がいる。校長先生のお話、君が代合唱、万歳三唱し、門を出る。「行っていらっしゃい」「万歳、万歳」の声に、なんだか急に悲しくなり涙があふれる。両国駅へ向かう両側はいっぱいの人垣だ。ホームに着いた時には、みんなの顔は涙で光っている。笑おうとしても、誰一人笑う人も、おしゃべりする人もいない。姉が手を振っているのが見える。

夷隅郡中川村行川妙泉寺が、私たち外手国民学校六年女子七〇名余りの疎開地だった。山崎郁子先生、武田寿美江先生と女学校を卒業したばかりの高野寮母さん、村の人で渡辺寮母さん、ご住職の渡辺顕静・きくご夫婦にお世話になるのだ。

中川の駅には、婦人会の人、土地の生徒たちが日の丸を持って出迎えてくれていた。お寺の坂道にはオモトが両側に植えてある。途中に井戸があり、玄関に着く。八名から一〇名ぐらいに分かれて、一班から八班までに。私は六班で六畳の部屋に八名だ。一番の仲良し益田さんは七班で離れてしまい少々寂しい。次に、着いた日に、先生より村の子供たちに何かをあげたいのでと言われ、大事に持ってきた千代紙、ぬりえを渡した。

親の反対を押し切って参加した私は、弱音を吐くこともできない。自分の布団はもちろん、洗濯も掃除も一人でしなければならない。洗濯は井戸水で、山の上なのでくむのに大変だ。家で何一つしたことのない私は、ほうきの使い方さえ知らず、友達に嫌味を言われて一人泣いた日もあった。いつ終わるか知れぬ戦争、いつかきっと両親の元に帰れる。その日まで我慢しなければならない。そんな毎日だった。

着いた日の夜、消灯してからすすり泣く声が、一人、二人と聞こえてくる。とうとう私も布団をかぶって泣いてしまう。翌日の朝礼で「昨夜泣いた人」と怒られ、またもや泣けて、高野寮母さんが慰めてくれたのがうれしかったが、それがまたみんなの嫌味となって返ってくる。

中川の駅にはよく列車を見に行った。「この線路を伝って歩いたら、東京に帰れる」と真剣に友達と話をしたこともあった。（後日駅へ行くことは禁止となる）

石原二丁目の面会の日は、他の人より遅く一〇月二日だった。一二時一〇分、中川駅着の列車で母と小一の弟が来てくれた。面会の人が帰った後は下痢や腹痛になる人があるので、私たちからは、本堂で面会者は一緒にと決められてしまった。別れがつらい。一緒に帰りたいと思ったが、隣の家の芳子ちゃんが今日から参加するのでうれしかった。でもご病気で担任の武田先生、いつも優しかった高野寮母さんが帰ってしまい、また心細くなってしまう。

週二回出す手紙も先生の検閲があり、一回に決められる。毎週家から届く便りのうれしかったこと。近所の子や不参加の百々さんからの便りには元気になる。東京では、切手、ハガキが自由に手に入らなくなったこともある。後日聞いた話だと、「西畑に疎開した弟はよく手紙をくれるが、すず子からは来ない」と父が寂しく話していたと。

持って行った本は、全部一か所に集められ自由に読めるが、夜は消灯が早く読めない。

朝は太鼓の音で起き、乾布摩擦（夜も寝る時にする）。掃除は、洗面所二か所、本堂前、道から仁王門までの長い石段、水くみ坂、庭と広い。朝礼で一日の日程を聞いて、東京方面へ最敬礼。「海ゆかば」の合唱。食事となる。

週一回は、近くの中川国民学校の裁縫室で勉強をする。他の日はお寺で長机を並べて勉強だ。算数、国語、歴史が主で、図画は疎開生活を描く。午後は藁縄い（わらない）、それを使ってカマス縫いをする。その数をグラフにはられ、みんなで争ったものだ。裏に小さな山があり、五分山といっていた。かごを背負って、杉の葉、マツボックリ、小枝を取ってきて燃料にする。稲刈りの後の田んぼには、イナゴやタニシを取りに行く。ヒルにかまれて痛い思いもしたが、それが食事の時の一品となる。サツマイモの茎も取りに行きよく煮て食べた。当番で駅近くの農業組合へかごを背負って野菜をもらいに行く。これは都会育ちの女の子には重い当番だった。

お風呂は週二回。丸い風呂桶（ふろおけ）が三つ並んでいて、ほとんど洗い場もない。髪も洗えずシラミがわき、かゆいのを通り過ぎ痛くなる。頭を丸坊主にされた人もいた。

夕食は、時折海に近い大原や勝浦の婦人会の好意でお魚が届けられ、ごちそうと喜んだ。

朝は、ご飯の上にバターが乗り、第一の栄養源だった。お

やつは、はじめは少しあったが、一日おきがだんだんなくなり、毎日が空腹だった。そんなことで、少しでもご飯の盛りがいいといじめの的になる。

秋には、皇后陛下より疎開児童にと、ビスケットが贈られた。集団生活で、自由に食べられる唯一のお菓子。毎日一枚ずつ食べる。食べ終わった袋ににおいが残っていて、袋を開けてにおいをかいで、空腹を満たしていた。

夜、自由時間は、受験に向かって勉強したり、手紙を書いたりした。

御前様（住職のことをこう呼んだ）は、よく紙芝居をしてくれた。今でも心に残っているのは「くもの糸」だ。班ごとに歌ったりおしゃべりして、楽しい時もあった。

「一二月に入るまでは、靴下も足袋（たび）も履いてはいけない。戦地で戦っている人を考えれば我慢ができる」と御前様の言葉。暖房もなく、冷たい板の間や外の掃除の素足はつらいことだ。麦踏みもそうだ。霜柱の立っている麦を踏むのはつらい仕事だった。

大原まで歩き遠足があった。帰りは列車で帰ってきた。二班に分かれて、勝浦の乳銀杏（イチョウ）を見て、誕生寺、鯛の浦へ。手こぎの舟で、船頭さんが船べりをたたくと、たくさんの鯛が集まって、大きな鯛が飛び上がってエサを取りに来るので、みんなで大拍手で喜んだ。

父や母も、西畑東福寺の弟のところに面会に来ると、途中下車して来てくれる。両国駅を一番にたつと、中川へ九時四五分なので、一一時にはもう中川を出て弟のところへ行く忙しさだ。そのころは切符も手に入りづらく、幾時間も行列をして買い求めていたようだ。

二月の中ごろ、突然母が来た。一緒に西畑の弟のところへ行った。驚いたのは、すぐに弟の荷物を広げ、一枚一枚衣類のほころびやボタンを直しているのだ。弟が当分不自由のない生活ができるようにしておくのだと言っていたが、それが最後になり、三月一〇日以後、母は行方不明のままである。どんなにか心配で眠れない日であったろうか、私も親となって、しみじみと思ったものだ。

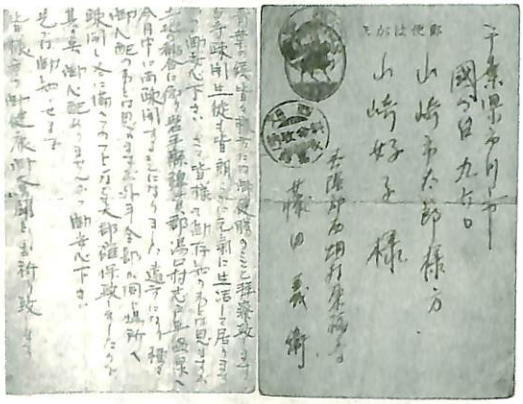
「数日で、卒業と受験のために帰ることができる」そう思っただけでうれしさを隠し切れない。御前様に悪いからと先生からいつも「静かにしなさい」とお小言。御前様の顔からも、笑顔が消えたみたいと、本堂へご機嫌伺いに行ったりする。

村の人々が、お土産にとおもちをついてくれ、本堂へ一人

一人いただきに行く。「ありがとうございました」というのが精いっぱい。「元気でね」という御前様の言葉を耳に、別れの悲しさに涙が出る。半年前、何とかして家に帰りたいと泣いたことも忘れて。わざわざ誕生寺まで行って、みんなの無事を願ってお守りをいただいてきてくださった御前様。

二〇年三月二日、我が家に着いてそれから一週間後、あの焼け跡に、再三、御前様は足を運んで私たちの安否を確かめ、その結果の名簿には、七二名中、三分の二の人の名前に赤で×（不明者）がつけられていた。

両親と離れ、寂しさと空腹に耐えてきた半年間は、いったい何であったろうかと思う。



弟、武司の再疎開の通知のハガキ



ご住職よりいただいたお守り



疎開荷物の荷札



本堂に入る前の仁王門



岩手の疎開地の全景

里に移りて

外手国民学校三年　村田庄二

学童疎開と聞いてすぐ思い浮かぶのは皇后陛下が疎開学童に賜ったお歌です。

次ノ世ヲ　背負フベキ身ゾ　タクマシク
正シクノビヨ　里ニ移リテ

戦後六〇年になるのですが、今でもすらすらと口に出せます。ここに歌われているように、私たちは日本の未来を背負う子供として都会を離れて田舎に移りました。

昭和一九年八月二八日、外手国民学校三年生だった私は、千葉県夷隅郡大多喜町の藤本屋旅館に疎開することになりました。その後、岩手県志戸平温泉に再疎開、さらに山梨県に縁故疎開することになります。

当時の住所は本所区厩橋二丁目でした。町会は出発前に閻魔堂（えんまどう）で送別会を開いてくれました。引率の先生は豊浦先生でした。着いたときに、特別な歓迎行事はなかったように記憶しています。

大多喜で一番の思い出は、泳げるようになったことです。当時、外手にも明徳にもプールはなく、疎開に行く前は泳げませんでした。夷隅川で遊んでいて、おぼれるような深いところに行ったとき、フッと身体が浮き、それ以来泳げるようになりました。友達もみんな泳げるようになりました。先生について教わったのではなく、遊んでいるうちに泳げるようになってしまった、という感じです。この当時の子供たちは、遊びの中でいろいろなことを身に付けていったのだと思います。

勉強のことはあまり記憶にありません。旅館で座学だったのかどこかで二時間くらい授業があったのかはっきりしません。キビガラで飛行機を作った覚えがありますが、工作の時間だったのか遊びだったのかはっきりしません。スプーンやフォークを小刀で作ったことも覚えています。

ジャガイモ入りのご飯、うすいみそ汁、食べ物は十分だったとはいえません。空腹だったのは確かですが、盗みにいくほどではありませんでした。何回もよくかんで食べれば、おなかがいっぱいになると言われ、何回もかんだことを覚えています。ある時、大多喜ガス会社（天然ガスだったと思います）の人たちが、いっぱいサツマイモを持ってきてくれたときに、我先に取り合って先生に怒られたことがありました。

大多喜町の近く、中川村の妙泉寺（ここにも外手国民学校

から学童疎開していました）に駐屯していた兵隊さんが、松根油（しょうこんゆ）を作るために松の根っこを掘っていました。油といえば、当時はガソリンがなくバスは木炭自動車でした。木炭自動車とは、バスの後ろにカマと煙突がついていて、そこで木を燃やして走るのです。石油がないから仕方がなかったのでしょうが、物がない中での工夫というか発明でした。

昭和二〇年三月一〇日、東京大空襲がありました。三月一一日に一人だけ面会に来た人があり、空襲のことを聞きました。幸い、私の家族一〇人は全員無事でした。面会といえば、私は次男なのですが、長男と次男では扱いに雲泥の差があったように思います。父は長男の面会に行くのですが、私のところはいつも母でした。長男と次男では力の入れ方が違っていたのです。ひがみかも知れませんが、「長男と次男ではかわいさに差がある」とよその人に言われたことがあり、そのとおりだと思っていました。

昭和二〇年の五月か六月ころ、千葉から岩手へ再疎開することになりました。このときは、豊浦先生のご家族も近くに疎開されました。出発の直前に、校長先生が「東京大空襲で石原付近は丸焼けになり全滅状態であったことは、君たちに伝えられなかった」と泣きながら話してくれました。岩手に行く途中、両国駅から一面の焼け野原を見て「すげぇな」の一言でした。隅田公園が目の前に見え、残っているのは土蔵やコンクリートの建物だけでした。

再疎開先は、岩手県稗貫郡湯口村志戸平温泉の志戸平学寮というところでした。花巻からチンチン電車で行くのですが、窓から見た、カレーライスを食べている一家の光景がうらやましく、今でも覚えています。後になってのことですが、寮から脱走した者がチンチン電車から落ちてけがをしたと聞いたことがありました。

志戸平温泉の寮は、季節旅館というか湯治場のような壊れそうな建物でした。温泉の湯量が少ないので、廊下に「貯め湯」という湯を貯めておくところがありました。このころ私はカイセンという伝染する皮膚病にかかっていましたので隔離され、特別扱いでした。皮膚病の治療には温泉が良いというので、一日に何回も入りました。一日に七回入ったのが最高記録でした。

隔離されていたので、かなり自由な行動を取ることができました。寮から抜け出して民家に行き、おばあちゃんに親切にしてもらうようになりました。囲炉裏（いろり）でジャガ

イモをやいてもらったり、おかゆにアズキの入った「おしるこ」を食べさせてもらったりしました。岩手から山梨に行くときに、迎えに来た父に「ここだけは、礼に行ってほしい」とねだって、お礼に行ってもらいました。

志戸平はもみじの素晴らしい、クルミの産地です。青いクルミのアクを抜き、ようじでほじって食べるのですが、渋で唇が真黒にはれあがったこともありました。

志戸平ではいつも空腹でした。農家の庭先に干してある干柿やクルミ、クリなどを盗んで食べました。夜中に寝巻きの上に服を着てリンゴ園にリンゴを盗みに行ったこともありました。寝巻きの上に服を着ていくのは寒いこともありますが、帰ってきたとき便所で服を脱げば先生に見つかっても怒られないからでした。

今度は縁故疎開で山梨県東八代郡一宮に疎開になりました。いつごろだったかはっきり覚えていませんが、父が迎えに来て連れていかれました。

田舎の番長と相撲をとって、運良く上手投げでしとめたことがありました。もし負けていれば、「疎開のボコ」と言われてよそ者扱いになるところでした。

食べ物は、オネリやほうとうで、ご飯は大麦の混ざったものでした。父母の実家がある愛知県知多から煮干を送ってきたので、みんなに分けてあげたら、急に態度が変わったこともありました。山の中で物々交換の土地柄だったのですが、煮干は珍しかったのかも知れません。

山梨には昭和二〇年一一月二日までいました。この日で、私の疎開生活は終わりました。

学童疎開を振り返ってみると、私にとっては抵抗がないものでしたし、空腹を除けば窮屈な思いもありませんでした。寂しさも感じませんでしたし、ただ迎えが来るのを待つだけのものでした。ですから、今になって学童疎開についてあれこれ言う気はありません。時代の流れの中で、自分なりに情勢に即応できたと思っています。

私にとって学童疎開は「よき思い出」です。

（談）

学童集団疎開と縁故疎開の体験

言問国民学校五年　長嶋之夫

現在、我が国では少子化にともない、子供が貴重な存在になりつつありますが、六〇年前の私たちは別の意味で「国の宝」と言われました。次代の戦争要員としてです。何事もお国のためと教育されたので、東京を離れることになんの抵抗もありませんでした。

昭和一九年の夏休みの終わりに、校庭に集合した五年生男子約四〇名は、担任の先生と、公募で採用された寮母さん二人とともに、家族と別れ、千葉県君津郡平岡村高谷（現在の袖ヶ浦市）の延命寺に向けて出発しました。今なら、車で約一時間で行けるところを、汽車を乗り継ぎ、久留里線の馬来田駅からは約三キロを歩いて、一日がかりで着いたお寺は、八〇数段もある石段の上に山門があり、本堂はそのまた奥にありました。

地元の方々の歓迎を受けた後で、自分たちの荷物を片付けていると、あたりが暗くなってきました。お寺には電気がなかったので、ランプでの生活が始まりました。薄暗い部屋に落ち着くと、遠足気分が吹き飛んで、急に寂しくなったのを覚えています。

ぐっすり眠りこんだ夜中に、寮母さんが、一人ずつ順番に起こしてくれました。寝小便をしないようにです。便所は本堂の裏手にあり、暗やみの中を小さな石油ランプを頼りに行かなければなりません。ゆらゆらゆれる炎で自分の影が壁に映るので、怖くてたまりません。何人かで固まって、扉を開けたまま用を足しました。終わると急いで戻るので、扉がバタン、バタン音をたて、住職さんにちょくちょく怒られました。

翌朝から、規則正しい生活が始まりました。まず、布団や蚊帳（かや）の片付け、食事の準備、食後の洗い物、部屋や境内の掃除と、自分のことは自分で、また、皆でやることは協力してやりました。他に、炊事の手伝い、ランプの掃除などは当番制でこなしました。

お寺は高台にあるので、井戸ではなく、飲み水は裏山の洞穴からわいて出る清水を、竹筒で炊事場まで引いて使っていました。

食器洗いが楽になるように、孟宗竹（もうそうちく）の節を使って大中小の食器を作り、各自名前と模様を彫って使いました。割れる心配がないので重宝しました。

風呂は小さいので、とても全員が入るのは大変なので行水で済ませていましたが、地元の方のご厚意で、四班に分かれて「もらい風呂」ということになりました。風呂上りにおやつをごちそうになるのが楽しみでした。

寺子屋風におぜんを並べて勉強しましたが、そのうちに、平岡小学校の一室を借りて通うようになりました。軍歌を歌いながら、二キロくらいを歩き、学校が見える坂のところまで来ると、整列をして一斉に立小便をしました。多分、学校の便所をなるべく使わないようにしたのだと思います。誰言うとなく、この坂を「小便坂」というようになりました。

手紙は週二回出せましたが、検閲があるので「帰りたい」などとは書けませんでした。

辛抱できずに逃げ出した者がいましたが、駅で怪しまれて連れ戻されました。彼はこの後も三人で雨の中を決行したものの、やはり失敗しました。

境内にある大きな柿の木が、たくさんの実をつけました。住職さんから全部をいただいたので、一生懸命実を落として全員で分けました。渋柿でしたので、荒縄にヘタをさして干柿にするようにしましたが、ほとんどの者は、味見をしているうちに食べ終わってしまいました。

一〇月末に面会があり、私は母と二か月ぶりに会いましたが、このころになると、皆との生活が楽しくなってきたので、一緒に帰りたいと思わなくなっていたのが不思議でした。

だんだんと、上空をB29が、青空に機体をキラキラ光らせて通るようになりましたが、友軍機はほとんど見かけませんでした。

ある夜中に、そのB29が、帰りがけに一キロほど離れたところに爆弾を一つ落としていきました。衝撃で、棚の上のものが落ちました。飛び起きて、あわてて防空壕（ぼうくうごう）へ逃げ込みました。翌日、現場を探検に行きました。すり鉢状の大きな穴があいていて、周りの木々は根元から千切れていたので驚きました。

私たちはいろいろな遊びをして過ごしました。雨の日は、部屋と廊下で将棋をしたり相撲をとったり、天気になると、山百合の根を掘りに山歩きをしたり、小川をせき止めて魚を取ったりしました。騎馬戦もよくやりました。

裏山の山道には小さなお地蔵様がたくさん並んでいて、頂上には大きなお地蔵様がありました。この山道を利用して、きもだめしをしました。提灯（ちょうちん）をたよりに、暗やみの中を頂上まで行って、そこに置いてある紙に名前を書

いて戻るのです。これは皆が達成しました。でも、正直怖かったです。

だんだんと寒くなってきてもけっこう薄着で過ごしました。乾布摩擦も毎日朝礼の時にやりました。その成果か、風邪をひく者はあまりいなかったような気がします。

お正月には、おもちも食べられました。地元の方々の暖かい心づかいで、あまりひもじい思いをせずに過ごせたことを、いまさらながら、ありがたく思っています。

いつのころか、電灯がつくようになり、ランプ生活から解放されました。

一月に、皇后陛下からビスケットが配給になりました。東京の家族に食べさせようと、半分くらいを集めて、たまたま東京へ行く人に預けたところ、その家の子が食べてしまって大騒ぎになったこともありました。

三月に入って、中学受験のために東京へ戻ることになった六年生男子のいるお寺を訪問し、一つの布団に二人で寝て戻りました。

三月六日に、木更津駅で六年生を見送りました。その三日後に、東京大空襲がありました。東京の空は真っ赤に染まり、言い知れぬ不安にかられました。次の日から、続々と親が来て「向島はほとんど焼けてしまったけれど、私を含めて三人の家は焼け残った」と知らされました。皆ショックで、涙が止まらない状態でしたが、私は複雑な思いをしました。

六年生になるころに、岩手県へ再疎開することが決まり、縁故疎開に変わる人が増えてきました。私も、父の生家（千葉県香取郡山倉村）へ移ることになり、迎えにきてくれた親戚（しんせき）の人と一緒に、持てるだけの荷物を背負い、八か月間過ごした仲間と延命寺に別れを告げました。

千葉駅で、東京に帰らずに、総武線千潟駅で降り一二キロを歩いて夜中にやっと着きました。薄暗い部屋で生活を始めた私は、六年生に編入されましたが、空襲の間をぬって農園で働かされました。勉強はほとんどしませんでした。学校では、いじめられもしましたが、仲良しの友達もできました。艦載機の機銃掃射も受けましたが、無事でした。

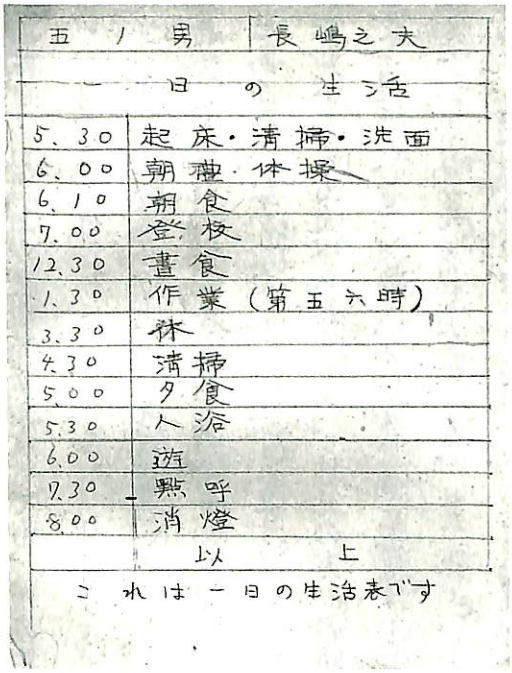
父の生家でも、男手を軍隊にとられていたので、何でも手伝わされました。田植えの手伝い、ヒルと格闘しながらの田んぼの草取り、豚や鶏の世話もやりました。

終戦のことは、近所の人が教えてくれましたが、何か気の抜けたような感じがしました。

家の都合で年末までいた間にも、稲刈り、脱穀などを手伝

いましたが、蚕の世話が一番こたえました。

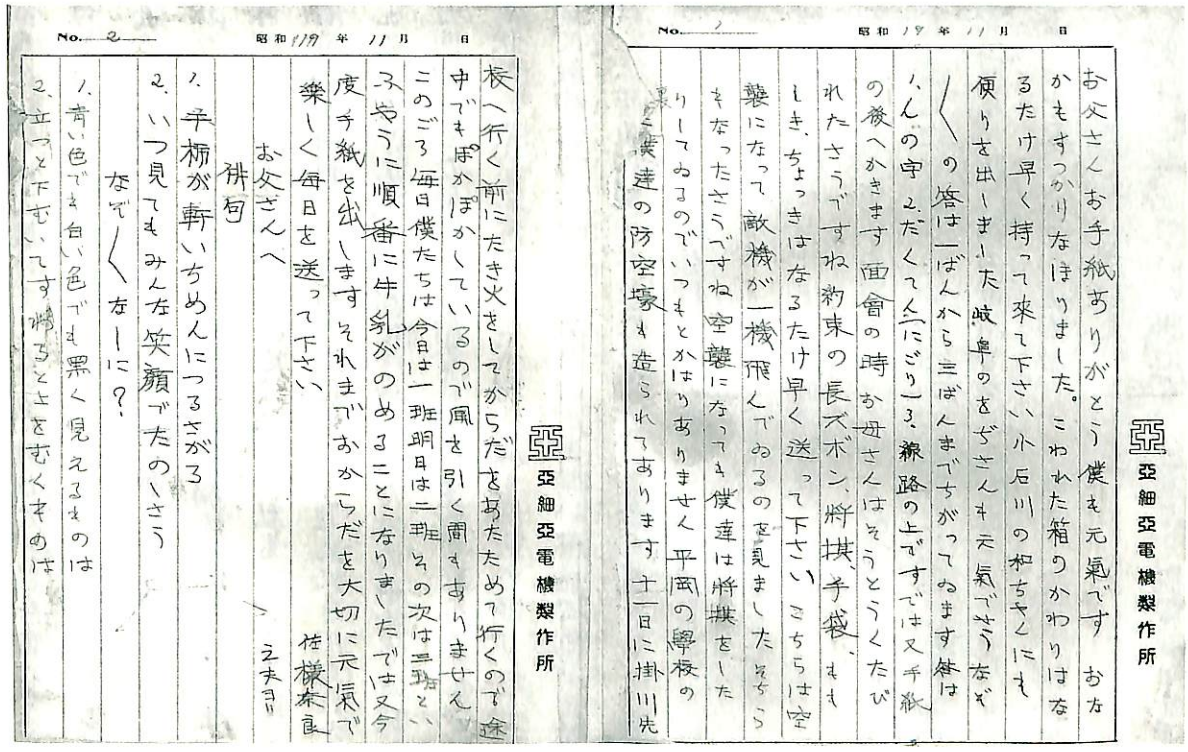
一年四か月の疎開生活を終えて、六年生の三学期から母校に戻りました。この間に、貴重な体験をしましたが、あの東京大空襲を体験しなかったことが、幸いだったと思います。



五ノ男	長嶋之夫
一日の生活	
5.30	起床・清掃・洗面
6.00	朝禮・体操
6.10	朝食
7.00	登校
12.30	晝食
1.30	作業（第五六時）
3.30	休
4.30	清掃
5.00	夕食
5.30	入浴
6.00	遊
7.30	點呼
8.00	消燈
以上	

これは一日の生活表です

疎開先の１日の生活表



No. 1　昭和19年11月　日

亞細亞電機製作所

お父さんお手紙ありがとう僕も元氣です　おなかもすつかりなほりました。こわれた箱のかわりはなるたけ早く持って來て下さい小石川の和ちやんにも便りを出しました岐阜のをぢさんも元氣でせうなぞ〳〵の答は一ばんから三ばんまでちがってゐます答は1.んの字 2.だくてん（にごり）3.線路の上ですでは又手紙の後へかきます面會の時お母さんはそうとうくたびれたさうですね約束の長ズボン、將棋、手袋、ももしき、ちょっきはなるたけ早く送って下さい　こちらは空襲になって敵機が一機飛んでゐるのを見ましたそちらもなったさうですね空襲になっても僕達は將棋をしたりしてゐるのでいつもとかはりありません　平岡の學校の僕達の防空壕も造られてあります　十一日に掛川先

No. 2　昭和19年11月　日

亞細亞電機製作所

校へ行く前にたき火をしてからだをあたためて行くので途中でもぽかぽかしているので風を引く間もありません　このごろ毎日僕たちは今日は一班明日は二班その次は三班とい　ふやうに順番に牛乳がのめることになりましたでは又今度手紙を出しますそれまでおからだを大切に元氣で樂しく毎日を送って下さい

お父さんへ　佐様奈良　之夫より

俳句

1. 手柄が軒いちめんにつるさがる
2. いつ見てもみんな笑顔でたのしさう

なぞ〳〵なしに？

1. 青い色でも白い色でも黒く見えるものは
2. 立つと下むいてすゆると上をむくものは

父への手紙

空襲と疎開の記録

言問国民学校二年　土屋冨貴子
（旧姓　作野）

私は、昭和一八年四月に言問小学校に入学しました。

家族は、父・桂太郎、母・妙子、長男・隆之（小学校六年生）、長女・弘子（四年生）、本人・冨貴子（一年生）の五人でした。

昭和一九年夏。兄は言問小学校をすでに卒業。姉と私はそれぞれ進級していました。姉弘子は五年生なので、三年生以上の学童疎開で千葉県君津郡平岡村字三個（現在の袖ヶ浦市）弘福寺へ疎開。二年生の私（冨貴子）は残り、中学生の兄も動員で工場へ行っていました。

三月一〇日未明の空襲で焼け出され、言問小学校で二晩過ごし、知人宅へ。

空襲の夜、両親は隣組の組長のため最後まで残ると、お向かいのSさん親子に私と兄を託しました。Sさん親子に助けられ無事に逃げ、Sさんのお母さんの実家へ落ち着き、そこで迎えに来た母と再会を喜びました。その後二日ほど学校で過ごし、あとは知人の家に父と母と私、兄は寄宿舎と分かれて過ごしました。なお、空襲の翌日と翌々日ぐらいに、実家の墓のある長命寺の隣の万国という料理屋（あのあたりはやけのこりました）のおかみさんが、手を真っ赤にして、あるだけのお米を炊いておにぎりにし、通る人に食べさせていました。とてもすばらしいことでした。

四月になってから、いつまでも他人の家に世話になっている訳にもいかず、私も三年生になったので、千葉の疎開先へ連れていかれることになりました。母に連れられて一泊がかりで東京から千葉へ行きました。私を置いて母は帰りましたが、私はただ姉に面会のつもりで来たので、少々ガッカリしたのを思い出します。

三月一〇日には、疎開先では、本所方面から紙片やらトタンまで飛んできたそうで、卒業式に向けて帰宅した六年生を気づかい、真っ赤な空を見て皆泣いたそうです。

五月になると千葉も九十九里から米軍が来るとかで、岩手に行くことになりました。岩手県江刺郡黒石村正法寺です。千葉では一番チビだったので村のお兄さんが駅までおぶっていってくれました。

正法寺では、千葉より少し人数が多くなり、食べ物が少なく大変でした。よくフキを取りに行かされ、いつもフキを食

べていたせいか、いまはあまり食べたくありません。自分の名前と同じで皆に「フキ、きらいだ」と言われました。

その年の八月（昭和二〇年）終戦。

九月ごろに母が迎えに来てくれて、両親の疎開先の山形に合流しました。ここでやっと親子五人が一緒に暮らせるようになったのですが、山形では、疎開者の足元を見て高値をつけた家しか借りられなかったりとか、父と兄が胸を悪くして、兄は休学しているのに、一二月三一日に大八車に荷物を積んで追い出されたりと、山形では良い思い出はありません。

千葉と岩手では、皆さんに良くしていただいたので感謝しています。

結局、東京に帰れたのは、私の中学卒業を待って昭和二七年になりましたので、言問は卒業していません。皆さんどうしているかとてもなつかしいです。

疎開

中和国民学校六年　秋月　美津江

―疎開―

昭和一九年、六年生の時、母の故郷の埼玉県へ疎開した。小学校まで歩いて一時間あまりかかる農村だった。

疎開したばかりのころ、学校の帰り道で、男の子数人に囲まれて「あいの子！疎開っ子！」と、よくからかわれた。私の髪の毛が茶色っぽく少し癖っ毛だったから？私が運動靴をはいていたから？そのころ田舎では、みんな稲わらで編んだ草履（ぞうり）をはいて通学していた。

体操の時間に、男の先生に背中を平手でビシャ！とたたかれた。「なんだ！このなまっ白い！」とどなられた。この小学校の生徒は、パンツ一枚で、裸、裸足（はだし）で、運動場を走っていた。竹やりを持って、わら束を目がけて走った。私も一生懸命に走った。

疎開して間もなく、夏の雨の日のことだった。女学生だった姉のおさがりの雨靴をはいて近所の友達と集団登校した。みんな一斉に私の足元を見る。気がつくと友達はみんな裸足で通学…。私は靴を片方ずつ、ストーンと田んぼの方へ足で投げ飛ばした。みんなびっくりした顔、そしてニヤッとして近寄ってきた。「ハハハ…」みんなで笑った。なんだかうれしかった。夏の雨の日、裸足で通学、ちょっといい思い出。

―敗戦　貧乏　そして母のこと―

昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲で家が焼けた。そのころ埼玉の母の実家に預けられていた私は、家族と父の故郷、群馬へ再疎開した。広い土間のある大きい農家だった。でも私は居候。食べる物はあまりなかったように思う。

あるとき学校帰りに、お友達が新聞紙に包んだものを私にそっと手渡してくれた。中にナスが五つぐらい入っていたのを覚えている。母は、お礼にと茶筒の中に大事にしていたスルメを一枚持たせてくれた。知らない土地に疎開して、母は他人の親切がどんなにかうれしかったのだと思う。その時のお友達の顔も名前も覚えていないのが残念だ。

八月敗戦、私たち家族は父の実家を出て、せまい六畳一部屋の生活…。いつかきっと東京へ帰れることを信じて。

一年遅れて女学校に入学。自転車で通学する友達を横目で見ながら、わたしは一時間早く家を出て歩きで通学した。自転車によく乗れないから？ではなく自転車を買ってもらえな

いからである。母の「なんとか女学校に行かせたい。お嫁に行くときのためにも」との思いもあって、あまり勉強の好きでない私を学校に通わせてくれた。その後、学制改革で六三三制となり、女学校四年間のつもりが六年間通うことになってしまった。

お弁当を持って行かれない日もあった。お友達に「どうしたん?」と聞かれると「ちょっと胃が痛くて食べられないんよ」と言って校庭の隅で過ごしたりした。朝、ご飯を炊くとお弁当だけ詰めて、後はおかゆにしてみんなで食べる。

そんな生活の中、忘れられないことがある。母のことだ。お裁縫の時間に、先生から「ゆかたを縫うからゆかた地を一反(いったん)持ってくるように」と言われた。私は母になかなか言い出せず、裁縫の時間になると先生に怒られていた。「あんた、また忘れたん?今度忘れたら通信簿2にするよ!」と。夏も終わりに近いころ、母が自分で毎日着ていたゆかたをほどいて、洗い張りをして私に持たせてくれた。(母はさらしのじゅばんと腰巻姿である)「みんな仕上っちゃったよ!今ごろ持ってきて」と先生に怒られながら、居残りで一生懸命縫った。家へ持ち帰り、母が手伝ってくれて、一晩で縫い上げて学校へ持っていった。母が「よく縫えたねえ」とほめてくれた。なんだかとってもうれしかったのを覚えている。そして通信簿は、しっかり裁縫2がついていた。親しかった友達に、その通信簿をなぜか得意そうに見せたのも覚えている。「ウッソー」と友達がおおげさにびっくりした顔をした。(理由は誰も知らない。今でも…)その時のお友達、きみ江さん。今、同じ町に住んでいる。

いつの間にか、七二歳。穏やかな日々。

六〇年前を回顧して

中和国民学校六年　上蕨　博

私が卒業した国民学校は、現在の江東区に隣接した本所区菊川という町にあり、いまの墨田区の南部に位置します。学校ができたのは一八七五年（明治八年）、昨年（平成一六年）創立一三〇周年を迎え、区内でも最も古い歴史ある学校です。

昭和一六年に始まった太平洋戦争も、しだいに負け始め昭和一九年ごろには、とうとう東京も空襲の少ない地方に疎開が始まり、中和小学校も三年生以上六年生までの五五八名の生徒が、千葉県君津郡（現在の富津市）に集団疎開しました。私は当時六年生で環村という、のどかな鹿野山のふもとの村に学童疎開しました。当時六年生の在籍者は約三六〇名、そのうち約半数の一七〇名が村の三か所に分かれ、集団生活が始まりました。男子は環国民学校（養蚕室を改造した建物）と千手院へ八七名。女子は興源寺に八三名。私は学校組で村のほぼ中心に位置する場所に、今でも、昔の面影こそありませんが、学校はあります。特に疎開中に大変お世話になったのは、村の婦人会の方たちの暖かいご支援でした。食べ盛りの子供たちに不自由なく食糧の調達が順調にできるか、そのご苦労は容易ではなかったに違いない―と今でも感謝の念でいっぱいです。

また、いま思い起こしたことに印象に残っているのは、三月一〇日の東京大空襲の時のことです。もちろん一〇〇キロ以上離れた所ですから、町が炎につつまれている様子など伺い知ることは不可能ですが、学校から北の方角（東京方面）の小高い山の上空が、一面真っ赤に夜空を染めている光景が、今でも鮮明に脳裏に焼きついています。しばらくすると灰がやたらに降ってくるではありませんか。私は子供心に「これは大変なことになってしまった」と直感しました。

それから三、四日して父兄会の役員の方数名がお見えになり、東京の様子を話されました。それはまさしく地獄そのものだと説明されたのです。

あれから六〇年。確かに今の日本は平和になっています。しかしながら、世界のどこかで殺りくが繰り返されています。そうした中で私たちは、「戦争は二度と繰り返してはならぬ。戦争の悲劇をこれからの若い人たちに決して味わってもらいたくない」という思いで次世代の人たちに伝えていきたいです。

戦後六〇年、受け取った小学校の卒業証書

中和国民学校六年　城森　満

―死んだことになっていた私、そして再会―

「おーい、城森が生きているんだって！」「生きているんだってよー」

東京大空襲と敗戦から六〇年がたった。言葉に表しきれない苛烈（かれつ）かつ残酷な空襲の実態をありのままに知ってもらおうと、被災者たちが六本木ヒルズのテレビ朝日のショールーム・「ウム」で、昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲展を開いた。その会場を訪れた当時の本所区中和国民学校卒業生たちが、空襲で亡くなった人々の一人ひとりの写真を見つめ、当時のことを語っていたとき、主催者の一人であった妹が中和小学校の名前をささやいている声を耳に止め、「中和小学校の方ですか？」と声をかけた。妹が自分は中和にいたことと私の名前を語ったことから、私が生きていることが友たちにわかったという。

妹からの電話で上蕨博君たちに会ったこと、そして彼が私に会いたがっていることを知った。私にとっては青天のへきれきだった。

その夜、上蕨君から電話があった。「城森、お前元気でいるのか？みなが君に会いたがっているんだ」「うんおかげで何とかここまできているよ」「小枝も山崎も皆川も会いたがっているんだ。三月の二七日両国駅前のホテルで四時から小学校と、我々六九期の祝賀会をやるから。そして君は卒業証書をもらっていないだろう。校長さんに頼んで出してもらうから必ず来てくれよ」

「はい、わかった」と返事をしながら、私の頭の中では六〇年前の千葉県君津郡環村の小学校の養蚕室を四つに仕切った集団疎開の寮がボーっと浮かんできた。

当時一緒にいた友たち何人かの顔が浮かんできた。上蕨、確かにその寮で一緒にいた。半世紀を過ぎた今、その時代の記憶を一度に呼び起こすことは難しい。三月二七日が待ちどおしかった。日一日と近づくその日を待っていた。

当日、近年近づいてくる平和の危機へ向けて神奈川県下での集会が終わり電車を乗り継ぎながら、会場へ飛び込むように入っていった。

パーティはすでに始まっていた。彼から聞いた話だが、その日、現中和小学校の校長先生からの卒業証書の授与と、読売新聞の記者が見えての取材があることが伝えられていた。

広間では団らんの最中だった。私は上蕨君に礼をいい荷物を降ろして席に着こうとしたとき、私より少し小さい同級生が抱きついてきた。「城森！会いたかったぞーっ」ひょっと見たら小枝らしい。「あっ小枝だ！」私は彼にしっかり抱きついた。彼も私と四つにくむように背中に強く手を回した。そして彼は私に言った「お前を待っていたんだ」そのとき私の目に熱いものが浮かんでくるのを感じた。そして上蕨君に、さらに私がもっとも親しかった山崎進君、そして机が隣で家が近く良く取っ組み合った皆川君と手を握り合い、抱き合った小枝君と山崎君の家には良く遊びに行った。次々に手を握り抱き合う中から戦時下の当時の六年の姿が一つ一つ私の記憶によみがえってきた。「君のうちへ行って騒いで、鎧（よろい）を触って怒られたんだよ」と隣の森君が言った。その話を聞きながら彼の記憶が少しずつ目を覚ましてきた。

私の意識は、六〇年前の母校中和の六年生の時代の中をさまよっていた。そして誰かが言った「城森、お前は自殺をしたという話も出ていたんだよ」この言葉にさすがに私もあ然とした。その後何の音沙汰（おとさた）もなく、あの言葉には言い表せない巨大な爆撃ですべてが灰じんに帰し、多くの人がこの被害で家族を失いまた全滅した。友たちも立ち上がれないままいるのではと思いつつ時を過ごしていた私。

そしてパーティの席で、現在の菊池校長から六〇年目の卒業証明書をいただいた。

――生死を分けた学童疎開、父「かわいい子供に旅をさせよう」――

昭和一九年六月の閣議で学童疎開が決められた。大都市に住んでいる三年生以上の生徒で、縁故疎開のできるものを除き、そのほとんどを強制的に安全と思われた地方に疎開させることになった。九月の半ば過ぎ子供たちは先生に引率されて両国駅から旅立っていった。中和小学校では六年生は当時の千葉県君津郡環村に男女別々に住み込んだ。

その疎開の日が近づいてきたある日、子供をどのようにさせたらよいのか悩んでいた父が、母親に、「かわいい子供に旅をさせよう」といった。この言葉が親子の生死を分けたのだ。そのころ日増しに悪くなっていく戦況と、日本は絶対に負けないという暗示とのはざまで誰もが揺れていた。

疎開の当日、先生に引率された六年の男子は、汽車とバスを乗り継いで環村小学校の体育館に居候を始めた。当時は朝六時起床、就寝は九時だった。広い板の間に、自分の家から持ってきた布団をそれぞれが並べて敷き、すき間風の入ってくる床の上でその日その日の生活を始めた。はじめのうちは

宮城礼拝、体操、散歩などもあったが、出されてくる食事は茶碗一杯のご飯と、朝はみそ汁、漬物、昼は野菜の煮付け、夜は、野菜の煮付け、まれには魚が出たときもあったが。

今これを読んでおられる皆さんの食事と比べてほしい。茶わん一膳のご飯も、盛り方はふわふわ、すかすかの底が見えるような盛り方。これで育ち盛りの子供たちの満足は得られるわけがない。私を含めて同級生たちが走っていったのは乾物屋と薬屋だった。買えるものは青海苔、コショウなどわずか、そして当時のわかもと、わかまつ（胃腸薬）、ユベラ（女性ホルモン）など口に入るものは片っ端から小遣いで買ってきて口に詰め込んだ。

二、三か月すると東京から親たちが尋ねてくるようになり、その時々で子供が渇望する食べ物が少し口に入るようになったが、これとてその場しのぎだった。子供たちは寮の玄関に立ち、バスが止まるたびにそれを見て、親たちの訪れを「〇〇のうち来たぞー」と誰かが知らせた。

そのうち空襲が激しくなり、北九州、次いで各地の軍事施設、工場、続いて銀座、本所区の竪川町の一部爆撃を受けた。

三月四日に父が来た。そして「ベルリンを囲んだ連合軍へのドイツ軍の反撃は最後の、そして一時的なものだ、でも心配は要らないよ」といって帰った。そして母が三月七日に尋ねてきた。雪の日だった。私は母の手を握った。このときなぜかこの冷たい母の手にこれが最後なのかという予感が走った。

そしてあの両親と生死を分けた三月一〇日の夜がやってきた。その夜、私は布団の中でうとうとしていた。友達と管理人さんが外で「東京の空が赤くなっているよ」と話しているのが耳に入ったが、そのまま寝込んでしまった。少し時がたって夢の中で「城森のうち来たぞー」と友の声がした。父はソフトを直した戦闘帽、母は防空頭巾をかぶり、一番下の弟は母の手縫いのつりズボンをはいていた。弟尭（たかし）を抱き上げて、「お姉ちゃんとやっちゃんは？」と聞くと「公園に逃げたよ」といった。抱き上げた弟の軽かったことをいまでも覚えている。この三人は私に別れを告げに来たのだ。妹と、次弟は間違いなく猿江公園に逃げて命拾いをしていた。両親たちは先に逃げた二人を探しにあちこちを訪ね歩いて逃げ場を失ってしまったのだ。

その後、兄弟は母の実家に引き取られ血縁者と他人に挟まれて小さいながら必死に生きてきた。そして東京大空襲に続

いて沖縄戦、さらに広島、長崎の原爆で日本は三一〇万人といわれる命を失って降伏をした。

一九四七年五月三日、戦争を全面的に否定する新憲法が施行された。その恒久平和の精神はこの第二次大戦で失った多くの命への誓いであるとともに、敗戦後の日本のあり方を世界に示していた。廃きょになった祖国そして精神的な支柱を失った国民の心に、乾いた砂に水が浸み込むように広がり深まっていった。もう徴兵されなくて良いのだ。子供心に安心と、心の中に日本の未来がさし示された思いがあった。

私は母の実家を早く飛び出し働きながら学校を出た。歴史をひもとくと、その時代、時代で民衆を支配する権力者たちとそのあくなき侵略欲のはざまで、民衆は強制され、自らは望まない戦場での殺し合いをさせられてきた。そしてこの歴史の中で命を失う多数の民衆。さらに自分と家族は安全な場所に身を置いて民衆の死を悼もうとしない支配者たち。この歴史の繰り返しが二〇世紀までの姿であった。この世紀に日本の人口とほぼ同じ一億一〇〇〇万人の命が戦争で奪われているのだ。

戦争中、クリスチャンであった父とその仲間はお互いに「死んではいけない。生きて帰ってきなさい」と励ましあっていた。また、「戦争は人類史上最大の犯罪である。」とも語っていた。父は戦前に二度アメリカを尋ね、この国の日本とは比べものにならない力を知っていた。そのため父は「この戦争は負ける」と言い切っていた。そして戦争が終わったら平和な日本を作ろうと、友人たちに声をかけていた。

私たちの青年時代には「青年よ、再び銃を取るな！」「教師よ、教え子を再び戦場に送るな！」さらに「婦人よ、夫や子供を再び戦場に送るな！」という合言葉で平和を大切にしながら人生を歩いてきた。戦争が始まれば必ず誰かが死ぬ。さらに戦争が深まれば大勢の人たちが死ぬ。このことは許せない。そして許してはならないことではないのか。

私は、六〇年目に受け取ったこの卒業証明書の意味は何なのかを今考えている。

そしてこれからも、子や孫の世代を再び戦場に送らないための努力を、人生の課題として続けようと心に誓っている。

学童疎開について

中和国民学校五年　田村　昇

当時、私は、本所区菊川町二丁目七番地に居住しており、中和国民学校へ通学していました。家業は、父が運送業を営み、家庭経済は火の車ではなかったかと思います。

一九四四年六月ごろかはっきりと覚えがありませんが、私たちのクラスは先生に引率されて、両国駅から学童疎開へ出発いたしました。ホームでは、両親、兄弟との別れに、全員が涙、涙でありました。疎開先は、千葉県君津郡秋元村にある東田寺というお寺でした。

木更津から二〇キロ以上木炭バスに揺られ、疲れて着いた時にはまた涙でした。何しろ汽笛も聞こえない山奥で、周りは小高い山々に囲まれていました。うっそうと茂る木々で昼間でも暗い環境にみなびっくり、寂しさが募りました。

学童疎開生活の中で思い出すことは、とにかく腹が減って何でも口に入れたくて、すぐ近くの芋畑に行き、手でサツマイモを掘り出し、土がついたまま生でかじったり、また、柿の木に登り渋さもかまわず食べたりしたことです。大根も畑から引き抜き、そのままかじりついたのを覚えています。これらのことが重なり、農家から苦情をもらい、先生から厳しくしかられたことが思い出されます。

疎開生活も二～三か月過ぎたころ、昼食時に三名がいないことで大騒ぎになりました。先生が駐在所に届けて、村の人々を集めて捜索に当たりました。幸いに、日が暮れたころに帰りましたが、クラス全員が動揺していました。親恋しさの逃避行だったのです。高い山に登れば汽笛が聞こえると思い登って行きましたが、途中で道に迷ったのでした。汽笛が聞こえてくる方向に歩いていく予定だったようです。事実、私もその気持ちはありました。いや、皆がその気持ちはありましたね。親、兄弟に会いたい気持ちです。

一一月ごろから、艦載機P51、グラマン、大型爆撃機B29が飛来し、攻撃を受けるようになりました。お寺の横手の竹やぶの中の防空壕（ぼうくうごう）にいたときのこと、P51が低空飛行で機銃掃射をしてお寺の屋根に二つ穴が開きました。怖い思いをしました。

一九四五年三月九日の夜九時ごろ、空襲警報で、先生と共に全員が防空壕に入り避難しました。B29のエンジン音が、グオン、グオン、グオンといまだに耳についています。私がうつらうつら寝ていた時、先生の声で目が覚めました。「全

員外に出ろ。鹿野山の方を見ろ」三月一〇日午前三時ごろでした。西の空が真っ赤に焼けていました。東京空爆の赤い空でした。夜が白々と明けるころ、竹やぶの葉がサラサラサラと音がするので、よく見ると一〇円札や一円札の燃え殻でした。全員がショックを受けたまま西の空を見つめながら、「憎きは鬼畜米英だあ！」と叫びました。

当時は、戦時政策の中で、私たちは日本国を守るため全員が軍人になることと教えられ、そのことに誇りをもち、友達同士で「僕は海軍」「いや陸軍だ」などと話し合い、エスカレートしたものです。疎開先周辺の山へ行軍したり、竹やり訓練をしたり、お寺の本堂での勉強に精を出したものです。

それから二週間後の三月末ごろ、伯父さん二人が辛い思いをして東田寺まで私を迎えに来てくれました。その日は、木更津からのバスは運休で二〇キロ強を歩いてきたとのことでした。大変お疲れのようでしたが私は大喜びでありました。これで、父母にも兄弟にも会えると思ったのです。この東京大空襲の直後からは、親たちや親戚（しんせき）の方々が、毎日のように私たちのクラスメートを迎えに来ていました。

私が、父母兄弟の安否を尋ねたところ、警視庁の刑事課に所属していた伯父は、「今、一生懸命探しているところだ」としか言ってくれません。事実を知らされたのは、母方の実家に引き取られて一か月過ぎたころでした。伯父はいつ話そうかと迷っていたそうですが、「実は全員死んだ」と聞かされました。父、母、弟、妹二人。燃え盛る赤い炎の中で、逃げ惑いつつ死んでいったのかと思うと本当に胸が痛みます。当然、遺体は見つかりませんでした。クラスメートの中には、私と同じく学童疎開により生き延びて、一人ぼっちになってしまった者は多くいると思います。その後の情報は知る由もなく現在まで生きてきましたが、本当に戦争への憎しみと悲しさは変わりありません。

今回、応募されました皆さんの学童疎開体験記録集が、戦争を知らない青少年の皆さんに、少しでも多く読まれることを希望いたします。

学童疎開で生き残った姉弟

中和国民学校五年　星野光世

私の生まれは、東京都本所区（現東京都墨田区）。家は菊川町でおそば屋を営んでいました。両親と兄弟五人、若い衆（いとこたち）が三人の大家族。店は場所にも恵まれ、毎日が忙しく活気づいていました。

昭和一五年、わたしは地元の中和尋常小学校へ入学しました。「みなさんは紀元二六〇〇年という記念すべき年に小学校に入学され、とても幸せです」と先生が話されたのを覚えています。夜になると祝賀ムードが高まり、家の近くの大通りを花電車が走り、大勢の見物衆でにぎわったのを思い出します。〝金鵄（きんし）輝く日本の・・・〟の歌い出しで始まる紀元二六〇〇年の歌もずいぶんはやりました。

その翌年、昭和一六年一二月、太平洋戦争が始まり、学校も尋常小学校から国民学校に改められ、徐々に戦時色も濃くなり、昭和一九年に入ると三年生以上の小学生は都会の学校に通えなくなりました。縁故疎開か集団疎開のどちらかに決めなくてはなりません。私は中和国民学校から集団疎開に行くことになりました。疎開先は千葉県君津郡小糸村にある天南寺というお寺です。周りには田んぼが広がり、小高い山に囲まれたのどかな農村地帯でした。近くのお寺には同じ中和国民学校の三年生が集団疎開で来ていました。三年生ではまだまだ両親に甘えたい年齢なのに・・・、お国のため、戦争に勝つため、と幼い子供までが教育され頑張っていたのです。

私たち五年女子の担任は湯沢とき子先生、お若いピチピチした先生でした。まず私たち生徒を四グループに分け、第一小隊から第四小隊と名付けました。軍隊と同じです。次に二小隊ずつまとめ、第一中隊、第二中隊と呼び、最後に総括して一個大隊と呼びました。

朝は、先生の笛を合図に起床し乾布摩擦が始まるのです。夏から始めたのが効果的でした。

冬に入ると前夜のお風呂上りのタオルが廊下でカチカチに凍っていることもありましたが、寒さは全く感じませんでした。

うれしかった思い出は、親元を離れている集団疎開の学童にと、皇后陛下より恩賜のビスケット一袋ずつをいただいたことです。大きな菊の御紋章入りの大判のビスケットでした。お菓子には縁のない戦時中でしたので生徒全員大喜びだった

ことは忘れられません。

夏が過ぎ、秋も深まり、そろそろ肌寒さを覚えるころ、生徒の一人にお母さんの縫ったはんてんが送られてきました。温かそうなきれいな柄のはんてんを見てうらやましくなり、仲間たちが次々お母さんに手紙を出して送ってもらい、全員が母親手づくりのはんてんを着て疎開先でのお正月を迎えました。みんなではんてんを取り替えて、かくれんぼをした時はおもしろくて。しゃがんだ後ろ姿は誰だかさっぱり分からないのですから・・・。

翌年（昭和二〇年）三月一〇日、疎開先のお寺の境内に大量の燃えかすが飛んできました。私たちは外に出てあとからあとから降ってくる大量の燃えかすを何も分からないまま眺めていました。一週間ほど過ぎたころ「東京の本所・深川が空襲に遭ったらしい」そんな声が噂のように流れてきました。しばらくすると焼け出された家族が生徒を引き取りに来たのです。そこで初めて、東京、本所の大惨事を知り、あの日大量に降ってきたのは東京大空襲の燃えかすだったと分かりました。

その日から一人、二人と疎開の仲間たちが迎えを受けて引き取られていきます。両親そろって迎えに来た生徒は一人もいません。母親が一人助かり、迎えを受けた生徒は本当に幸せでした。生徒の半数ぐらいがいなくなったころ、私の番がきました。迎えに来たのは母方の伯父です。突然「お父ちゃん、お母ちゃんは死んじゃったよ」と言われました。その時不思議と涙は出なかったのです。両親を亡くした仲間を見ていたからでしょうか。「とうとう自分の番がきた」そんな気持ちでした。

昭和一九年八月私が集団疎開をしたあと、その年の暮れに母は二人の妹と弟を連れ、母の郷里千葉へ疎開をしました。東京には父と旧制中学へ通っていた兄の二人が残りました。そして東京大空襲―。東京にいた父と兄、たまたま上京した母と、赤ちゃんだった妹の四人が帰らぬ人となりました。父は無類の子煩悩でした。かわいがられて育ち、残されたわたしたち姉弟三人は、三月一〇日の空襲を機に一八〇度転落し、田舎の親戚（しんせき）を転々とする戦災孤児の生活が始まりました。私一一歳、妹八歳、弟四歳の時でした。

最初は母の郷里千葉に引き取られました。二か月ほど過ぎたころ、「子供の養育は父方の義務」と言われ、父の郷里新潟に連れて行かれました。

そこには、大黒柱の叔父を兵隊にとられ、年老いた祖母と

幼い三人の子供を抱えた叔母がわずかな農業をやっていました。そんなところへ私たち三人が転がり込んだのだから大変でした。三度の食事はおろか、毎日きつく当たられ子供心にも針のむしろに座らされているようなつらい日が続きました。余りのつらさに千葉に住む伯母の許へそっと手紙を出しました。「毎日食べる物がなくおなかをすかしています。そのうえ怒られてばかり、つらい思いをしています。そちらへ帰りたい。迎えに来てください・・・」

ある日のこと庭に立っている私の傍らへ、険しい表情の祖母が近づいてきました。手には一枚の紙が握られています。「何だ、これは！」見るとそれは私が千葉の伯母あてに出した手紙の下書きでした。―全部捨てたはずなのに―私は黙ってうなだれているだけでした。

そんなある日、隣村に住む叔父が「今夜ひと晩だけ・・・」と言って私たち姉弟三人を迎えに来ました。険しい山を越え夕方やっと叔父の家に着きました。そこにはすごいごちそうが用意されていました。白い御飯はおなか一杯食べられ、甘いおはぎは大きな皿に山盛り、まさに天国でした。食事が済むと叔母（父の妹）が突然「今日からお前たちは、ここの家の子になるんだ」と言ったのです。私はこの言葉に強い衝撃を受けました。叔母の膝に抱かれている乳飲み子を含め、そこには六、七人のいとこたちがいたからです。「そのうえ私たちを本当に育ててくれるのだろうか。それなら、なぜ、ひと晩だけと言ってだまして私たちを連れ出したのか・・・。いや、きっとまた知らない所へ連れて行かれるに違いない。そして私たち三人バラバラにされてしまうに違いない。」不安は限りなく続き、心を苦しめるのです。その夜、容易に寝つかれない布団の中で私は心を決めました。「そうだ。この家から逃げよう」

翌朝、すきを見て妹と弟を連れ逃げ出しました。夢中で走りました。逃げたことに誰かが気付き、追いつかれ連れ戻されたら大変です。どんな目に遭うか分かりません。四歳の弟も二人の姉（私と妹）と一緒によく頑張って走ってくれました。どのくらい走ったでしょうか、そこは清水がポコポコわき出ている山頂でした。八月というのに、あちこちに雪が残っています。ここまでくればもう大丈夫。フキの葉をコップ代わりにして三人で冷たい水を飲んだとたん、堪えていた悲しみが一気に吹き上げてきました。逃げては来たものの帰る家はない、頼る両親はもういない…。

「お父ちゃん、お母ちゃん。どうして私たちを残して死ん

じゃったの―」思わずつぶやき泣けてきました。妹も泣き出しました。何も分からない四歳の弟の目にも涙があふれていました。

過ぎた七〇年の私の人生のなかで、この時ほど苦しかったことはありません。大人になってからのどんな苦労よりも重くつらいものでした。

知らない山道を一日中さまよいながら、夕方やっと祖母の家にたどり着きました。案の定「何だ、お前たちは！」祖母は大声で怒鳴りました。黙ってうなだれている私たちを見て〝逃げてきた〟と察し、急に声を落としました。「そうか、父ちゃんの生まれた家が一番いいのか、さあ上がれ」祖母は初めて涙で私たちを受け入れてくれました。

怖かった祖母も本当は優しい善人だったのです。

私たち姉弟三人、今では孫たちに囲まれ、平穏に過ごしております。

自分の力で生きてゆけない幼い子どもたちが、悲しい体験を強いられる戦争が二度と起きないよう祈りながら書き留めました。

戦争が憎い

中和国民学校六年　益子孔一

私の家は、本所区竪川三丁目にあった。明治時代から、祖父が薬局を営んでいた。

昭和二〇年三月一〇日の大空襲で、祖父、祖母、母の三人を失った。父は当日不在で、私は千葉県に学童疎開をしていて助かった。私は、小学校六年生までの一二年の間、「くすりや」の一人っ子として大事にされ、かわいがられて育った。

その一人息子が、ある日突然に「学童疎開に行きたい」と言い出したのだから、家の人々は、大変に驚いたことだろう。意を決した理由の一つは「六年一組のみんなと一緒に集団疎開に行くことになった」という担任の岡澤先生のひと言があった。先生がご一緒なら大丈夫。友達も一緒である。二つには、来年の三月、卒業の時には、東京に帰れるという期待感があった。「それまでの七か月を辛抱と我慢で乗り越えればよい」であった。

家の人々は、私を手もとから離すことに、それこそ断腸の思いであったろうに。察するにあまりある。

出発の日は、昭和一九年八月二四日で、暑い日だった。午後、両国駅（始発・終着駅）に集合して、汽車で千葉県君津郡環村へと向かう。途中、木更津付近にさしかかると、東京湾沿いに要塞（ようさい）があるからと、窓のよろい戸を降ろさせられた。

やっと、上総湊駅に着いたのは、夕方だった。そこから、何台かの屋根のないトラックの荷台に大勢が分乗して、環国民学校へと向かう。

環村の方々は、私たちを温かく迎え入れてくださった。食事の賄いも良かった。東京では、水分が多くかきまぜると御飯が浮いてくる雑炊しか食べられないのに、麦が入っているが白米が食べられた。

たくさんのおかずはないが、しぼりたての牛乳を、毎朝飲ませてくださる。どんぶりに牛乳を注ぐと表面に薄皮が張る。東京では口にすることができないものだった。うれしかった。

夜になると、宿舎の学校からほど近い郵便局のそばのお宅に、お風呂をもらいに行く。その往復の道、両側の田んぼからはカエルの鳴き声が、とってもにぎやかに聞こえてくる。東京で育った私には、初めての経験であり、とても強烈に感

じた。

昭和一九年九月一一日、六年一組の三二名が環村寺尾の千手院に引っ越した。

千手院の食事も、学校での賄いと変わらないが、家庭的な味で、とてもおいしくごちそうになった。順番を決めて、御飯のお代わりができることがうれしかった。みんな競ってお代わりをした。

千手院での毎日の生活は、ラジオ体操と、手ぬぐいを腰に下げた岡澤先生を先頭にして、松並木の参道をかけ足することから始まる。それから、牛乳、朝食、勉強となる。

薪背負いをしたあとにいただくゴマおむすびのとてもおいしかったこと。

当時、はやった「お山の杉の子」を歌いながら、ドングリを拾った遠足…などがあった。

私たち数人がグループを作り、お風呂をもらいに行くところは、小柴区長さんの手前のお宅である。秋の夕暮れどきのこと、数人が一列になって、丘の林の中の一筋の道を、落葉をサラサラと踏み分け歩いた。そんなに深くない林を抜けると空が開け、道の両側にあるサツマイモ畑が、夕日に染まっていた。そんな光景が、いまだに思い浮かぶ。

疎開児ら　もらい湯に行く　落葉みち

踏む音しきり　黙して歩めり

お寺の小俣三代おばさん、小柴区長さんをはじめとする寺尾地区の方々、環村の皆様方は、よく私たちの面倒をみてくださった。心より厚く御礼を申し上げます。

東京から父母たちが訪ねてくれる面会日が、月に一度あった。衣類やお菓子など持参してくださるので、待遠しかった。東京の様子など、近況も聞かせてくれる。楽しみだった。

祖父が病気になり、私の顔を見たいということで、冬に一度竪川に帰ったことがある。母が迎えに来てくれて、両国駅から竪川まで歩いた。夜だったが、ガソリン臭さが鼻をつく。環村の空気は、きれいなんだと感じた。

昭和二〇年三月九日から一〇日にかけての深夜、「東京の空が真っ赤に染まっている」という話し声を布団の中で聞いた。なぜか震えた。その日以後、級友の父や母たちが迎えに来る。一人減り、二人減りして残り少なくなったころ、父がひょっこり迎えに来た。母はどうして来ないのだろうと、いぶかしく思った。

大森区に住まう叔母（母の妹）のところに行くのだが、祖父母と母の様子を、父はちっとも話さない。

高架線の汽車の窓から、竪川の様子を見る。ところどころにコンクリートの建物が残っているが、焼け野原である。南北に走る三つ目通りが探せない。

両国駅で下車し、御茶の水駅のホームで電車を待つ間、父が家の人たちに代わって迎えに来てくれたのだと信じたいが、私は雑踏の中に母がいないかと、その姿を目で探し求めていた。もしかしてと、不吉な方へと考えてしまう。いや違う。心の中で打ち消しもするが、現実となる事が怖かった。

大森の叔母の家に着く。

床の間に、白い布で覆われた箱を見つけた。父は「実は、祖父、祖母、母が戦災で焼死したんだよ」とはじめて口を開いた。もしかしての思いが本当になってしまった。それまでの我慢をこらえきれずに、大声をあげて泣いた。

どれほどの時間を泣き続けたか、いつの間にか、泣きくたびれて眠ってしまっていた。

戦争が、私の運命を大きく変えた。国策であった学童疎開に加わって、私は助かった。しかし、人の命、財産、すべてを奪ってしまう戦争が憎い。

昭和二〇年七月、父の故郷である山形県に、父とともに再疎開して、現在に至る。私は七二歳になった。

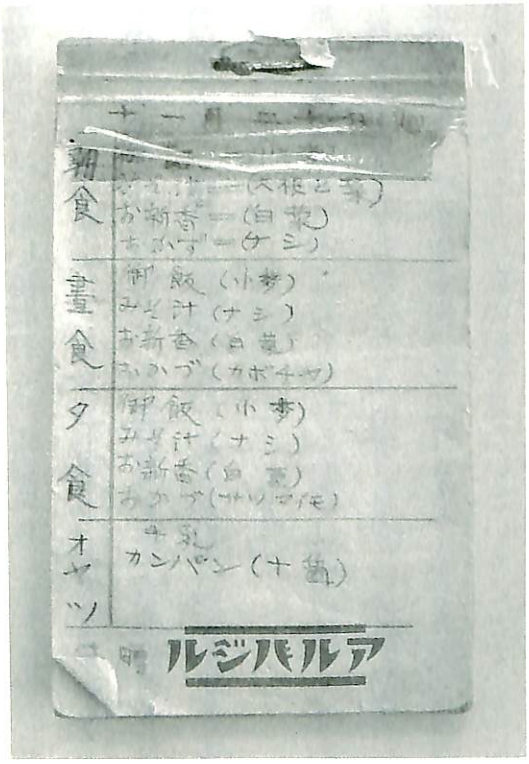
―付記―

祖父、祖母、母、三人の名前は、平成一三年三月、「東京空襲犠牲者名簿」の中に収めていただき、いま、「東京空襲犠牲者を追悼し平和を祈念する碑」の中に安置されている。

「熱かったでしょう」「苦しかったでしょう」と思うと、やりきれない。

「霊よ　やすらかに」と祈る

合掌



疎開先での献立（本人メモ）

一月十八日朝書く

毎日寒いですネ 朝起まで二階の戸を明
けると家根が霜でまっ白です
毎日風も引かずに元気で勉強して
居ますか……？ 寒いでせうから シャツや
毛糸の洋服や深山着て下さい
外に心配はないけれど 孔一が寒くは
ないかと それが一番心配です
お正月になって六ちゃん 啓ちゃん（直ちゃ
んは三晩泊りました）光世、光正、玄子
子、間米さん、光夫さんなどきました
ゆ中し元気で暮してゐますから安心して
下さい 此頃変った事もなくて手紙に書く
事柄がないので つひ手紙出しませんが
便りがなくても心配しないで下さい
一日々と東京へかへる日が近づいて嬉しい
でせう こちらでも早く三月になればよいと
日ばかりかぞへて楽しみにして居ます
孔一はしっかりした強い人となって
えらって来るでせう 何か困った時は、お世
しい岡澤さんや高橋さんに御相談なさ
いネ ではくれぐれも御身大切に サヨウチラ

母からの手紙



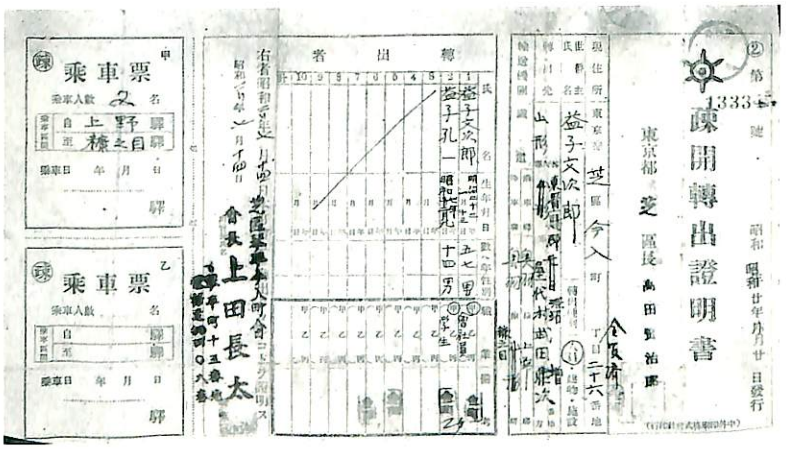
中和国民学校の記章と名札（布）



転出証明書



罹災証明書



疎開転出証明書

戦禍と疎開　そして予期せぬ別離

中和国民学校六年　溝口順重

―疎開への旅立ち―
親兄弟　見送る中和小（国民学校）あとにして
上総（千葉県）君津の環村
集団疎開の終着地
見納め本所区（墨田区）あとにして
遠足気分の学童のせ
両国駅発　列車はまさに
運命路線を走り出す

―秋深し―
日々が過ぎ　疎開の辛（つら）さ母恋し
寂しき想（おも）いに涙して逃げて　ひとり裏山に
泣く友　名を呼び探し出し
連れて戻る落葉の小道
ともに涙で想いは同じ
落葉踏む音　心に空（むな）し　すごく寂しい・・・

―冬（疎開先のお寺、千手院）―
白梅のほころぶ庭　日だまりで
イガグリ坊主の友たちと
暖を求めて押しくらマンジュウ（当時の遊び）
夕暮れに近くの農家に風呂通い
もらった芋など口にして
寒気で凍ったパリパリの
手ぬぐい手にし　家路へと

―はじめての面会―
虫の知らせか便りして
母と弟（二歳）初めての面会もはや終り
夕暮れせまる田んぼ道　名残り押しみつ　バス停へ
甘える弟（チャー坊）我が背（せな）に
永遠（とわ）の別れの送る道
悲しき運命（さだめ）の母子（おやこ）連れ
今も母の別れの言葉　背にした弟の
ぬくもりが　よみがえり　胸を突く

―東京大空襲（三月一〇日）―
赤々と西空そめてはかなくも
幾多の親子　友兄弟　永遠（とわ）の別れ　今始まる
それさえ知らず眠たげにまぶたこすりて
震えつつ　眺めた空　東京の

（この夜、大勢の人たちが亡くなる。もちろん、面会に来てくれた母も弟もそして妹も。父は町の消防団だったので消火を懸命にしていて全身大火傷したが、かろうじて一命をとりとめた。）

―去りゆく友―

再会胸に今日もまた　一人二人と去る友の
異動証明　役場まで　明日は我と祈りつつ
涙流して　受け取りに走る田舎道
迎えに来る友の父や母たちに
我が家の消息たずねても
目に涙して語らずに去る後ろ姿に
　悲しみがグッとこみあげる
（ヤッパリ僕の家族は全滅か！）
　残った六名の友も！

―終わりに―

様々な暗雲流れ世は変わり
時は移れど我々は　ともに父と母となり
（今はおじいちゃん、おばあちゃん）
ひたすら願う子どもらに
悲しき想（おも）い少なかれと
二度と踏ませじ　この悪夢
明るく幸せで生きられる世の中であってほしいとひたすら
心から願う。

母の残した教え

中和国民学校四年　八重田　賢　一

これから申し上げることは、実際にあった話、真実のことです。

昭和一六年一二月八日、米英と我が国が戦争状態に入り（太平洋戦争、第二次世界大戦、大東亜戦争といろいろ呼び名はありますが）次第に敗色が濃厚となった昭和一九年夏のことです。（当時小学校を国民学校と言っていましたが）三年生以上は空襲が激しくなる前に都会から離れ、安全な場所である他府県に学童疎開をするように東京都から命じられ、私どもの学校（中和国民学校）は君津郡内のお寺にまいりました。

忘れもしません八月二四日、両国駅から汽車に乗り、まるで遠足にでも行くかのように、車中ではしゃぎながら木更津で降りました。今では鹿野山マザー牧場とかで観光地として名が知られるようになりましたが、当時は大変不便な所でした。しかし、四方を山に囲まれ真ん中に小糸川が流れ、環境的には申し分のない、小糸村の大野台長谷寺という住職不在の廃寺同然のお寺で、四年生男子ばかり約三〇名が生活を始めました。

翌二〇年二月二五日、朝から大雪の日曜日なので朝食がいつもより遅く九時ごろでしょうか、朝食を食べておりますと誰かが「半鐘が鳴っている」と言うのでしばらく耳をすまして聞いておりますと、突如、敵の艦載機による機銃掃射の攻撃を受けました。先生の「伏せろ」と言う号令で机の下に潜りましたが、テーブルの上の食器（アルミ製の弁当箱、ボウル）に機関銃の弾がピンピン当たる音を今でもはっきりと覚えております。

敵機が去った後、元の席に戻ると、障子のすきまから本堂の廊下伝いに白い煙が入ってくるではありませんか。誰かの「本堂が燃えている」との声に、何も持たず雪の中を裸足（はだし）で逃げました。後ろを振り向くと、お寺は一面の火の海でした。（ちょうど同じ日に、中和国民学校の前の竪川二丁目、一丁目の一部が空襲で焼けたと後で聞きました。）幸い私ども誰一人、死者、けが人はありませんでしたが、すぐ近くの農家の娘さん（小学五年生）が風邪で寝ておりましたところ、体に弾を受けて即死しました。私どもの身代わりのような気がしました。

お寺が焼けたことは、すぐに東京の父兄に伝わり、一刻も早く我が子の元気な姿を見ようと、三月五日に全部の父兄が集団で面会に来ることになり、私のところでは母と姉と弟の三人がまいりました。お寺が焼けて行く所のなくなった私たちは、当分の間近くの農家に二、三人ずつ分宿させていただきました。他の父兄はその日のうちに帰りましたが、なぜか私のところだけは一晩お世話になりました。

その夜、母は廊下に高く積まれていた「家の光」の雑誌を取り出して、もう三月とはいえ寒く、こたつに入りながら読んでくれました。絵入りで昔の兄弟の物語でした。

山があるために隣の町に出るのに、遠回りして行かなければ行けず村人が大変苦労していました。そこで兄弟でトンネルを掘って村の人々を楽にしてあげようと思い、両側から掘っていったのです。今日では、ダイナマイトとか削岩機で掘るのは容易ですが、当時は鑿（たがね）と槌（つち）で岩を砕き両側から掘っていったのです。弟は「今日こそ向こうから兄さんの槌の音が聞こえてくるのではないか」兄さんも「今日こそ弟の槌の音が聞こえてくるのではないか」と双方がそれを唯一の楽しみに、雨の日も風の日も休まず掘り続け、十年かかって完成し、そのお陰で村人は大変便利になり暮らしやすくなったという物語でした。

そのときは、ただいい話だなあと聞いていました。

しかし、その四日後、東京大空襲により、母四〇歳、弟五歳で尊い命を奪われたのです。私は、その後の人生を歩んでいく過程において、母は最後に「人間はこれぞと決めたことは、途中どんな困難があろうとも、必ずやり遂げるという強い意志と、正しい信念で何事も進んでいかなくてはならない。そして人のためになる立派な人間になりなさい」このことを幼い私に教えていったのではなかったのではないかと思いました。

人間は自分一人で大きくなったのではないことや、今日まで多くの人々のお陰で現在の自分があることを忘れてはならないと思います。

着の身着のままで農家に分宿し約一か月お世話になり、その後、大井戸の万福寺での生活で小糸村の人々から温かい援助の物資をいただきました。布で作ったランドセル代わりの青色の肩掛け袋に一冊の手帳が入っており、一ページ目に俳句が一句書かれてありました。

親竹に　勝りて伸びよ　今年竹

当時の私たちの境遇をよく表している句だと、今でも私の

胸に強く残っております。

私も昨年古希（こき）を迎え、残された人生をこの母の思いを心の中に刻み、強く生きていきたいと思います。



小糸村長谷寺の疎開児童たち
（最後列女性二人が寮母、その前頭に包帯を巻いている白シャツの男子が筆者）

学童集団疎開

本所国民小学校六年　後藤代三

昭和一九年七月の中ごろかと思われます。ハッキリとした日時は残念ながら覚えておりません。私どもは男女組でありました（現在の共学）。疎開が決まった時は男子二二名、担任嘉茂一男先生の奥様と寮母さんの吉井キヨ（キオ?）さん、総勢二五名。両国駅から汽車に乗って千葉県館山駅に向かいました。どのくらいの時間がかかったのでしょうか。車内では親兄弟と別れて見知らぬ土地への旅立ちで、寂しさや不安の気持ちであったのをうっすらと思い出します。

館山駅に着いた私どもは、安房郡国府村字府中にある宝珠院というお寺へと歩き始めました。道程は約三・五～四キロくらい先だと思います。道中東京ではあまり見慣れない田園風景が続きます。やがてお寺に着きました。お寺の人や土地の人々が出迎えてくださいました。一通りのあいさつが済み、今夜からこのお寺にて寝起き生活するのだと思うと、改めて寂しさが込み上げてきました。先に各自の荷物は東京より送っておいたので確認しながら荷ほどきをし、休む間もなくタ食の支度でした。

ここでの食事は先生の奥様と寮母さんとで賄ってくださいましたが、食器の出し入れ、洗いなどは当番を決めその人たちがやりました。水は井戸水です。これが大変な作業で竹の棒の先にバケツを結び、このバケツの中に水を入れ汲みあげたのです。炊事用の水、風呂用の水、特に風呂の方が大変でした。小判型の木の風呂おけにいっぱいにし、薪に火をつけ湯にします。一二歳の子供が井戸より汲みあげる一回の量などささいなものです。それも何人かによって作業をしていました。この風呂に全員が入ります。中には入らなかった人もいたようでした。

夜も更けてきていよいよ寝る時間になりましたが、全員が夜具を持ってきたのではなく、布団を敷き終わったときに何人かの人が立ったまま辺りをうろうろし始めました。今夜は誰それさんとの間で寝るようにと言われて第一夜は収まったのですが、翌日からは順番もしくは気の合った同士で寝ていたのを覚えています。

食事の内容は寂しいが、いたし方ないものであったかと思います。食器はアルマイトの弁当箱が茶わんがわりで、みそ汁のわんがアルマイトだと思います。箸（はし）は木でありました。箸入れに入れて各自が保管していました。いつのこ

ろからか一升瓶二本を持って近くの集乳所に行き、搾りたての牛乳をいただいてきて、それを全員で分けて飲みました。この牛乳のおいしかったこと、今でも思い出します。来る日も来る日もこの牛乳で大変救われました。日によっては味の違うのにも気付きました。それは後日土地の人に聞いて分かったのですが、牛の食べた物によって味に違いが出るのだそうです。この土地の農家では四～五頭の牛を飼っていました。

夏も過ぎ秋に入るころ、農家に農作業の手伝いに行くようになりました。このころ農家では働き手が不足していました。稲刈りや脱穀、落花生の取り入れなどいたしました。足手まといになるような子供たちでも、大勢でやれば結構な力となったようでした。後日「何名はどこそこの農家へ手伝いに行くように」と先生から言われたことを思い出します。お手伝いの帰りまたは後日になって、農家の人よりお礼の農産物がお寺に届けられました。食事を賄っていてくださった吉井さんは、この物を大変喜ばれていました。

秋は食べ物が野山にたくさんありました。稲刈りの終わったたんぼでは大きなタニシがたくさんとれました。バケツに一杯ぐらいとるのは訳なかったのです。山際にはミカン畑があり、枝いっぱい実を付けていて、学生帽子に一杯五〇銭でした。ネーブルや夏ミカンもなっていました。川ではフナやウナギが結構釣れました。これらは言うまでもなく食事の時に出ていました。昼はこのようなことをして気は紛れていますが、夜となると気持ちは沈みがちでした。布団の中に入ってしばらくすると、ススリ泣きする声がしばしばありました。

お寺の本堂の前で寝るということは、考えにはありませんでした。夜中に用足しに行く時、外にある便所にはなかなか一人では行けません。かなりの勇気が必要でした。

冬も近くなるころ、全員が先生に引率され山に木を切りに行きました。これは冬の暖房にする炭の材料でした。決められた寸法に切り、リヤカーに乗せ、ふもとまで下ろします。これを農家の人の手によって炭にしてもらいました。これらのことは都会ではとうてい経験できるものではありません。食事の内容がほんの少し余分であり、親元を離れてきていた寂しさがなければ、楽しい集団生活であったかも知れません。

ある時先生から「いつの日といつの日の二回に分けて親が面会に来る」との話がありました。とてもうれしかったです。

会ったら何を話そうか、あれもこれもと思っていましたが、何を話したか今は覚えていません。ただ一つだけは覚えています。東京の空襲のことです。親が面会にこられなかった人もいました。

年も明けたころ、先生から私どもは三月一日に東京に戻ることになったと知らされた時は小躍りして喜びました。今までのお寺での生活、野山にて遊びほうけていたことなど一瞬にして頭から消えてしまったのをようく覚えています。

それからは何をするのにも浮き浮きして元気が出ていました。明日東京に帰る前夜はごちそうでした。甘い甘いぼたもちでありました。小豆ときな粉の二種類でした。三月一日の朝、待ちに待った日がついにきました。お寺の人、土地の人々に見送られ館山駅まで歩き始めました。

半年余り過ごしてきたこの地とも今朝でお別れかと思うと、何やら一抹の寂しさが沸いてきました。館山駅より汽車に乗り、東京の両国駅へと向かい、夕方には半年前旅立った本所国民学校の校庭に立っていました。そこには大勢の人々が出迎えに来てくださいました。「ただ今全員無事に戻って参りました」という内容のあいさつを私がしたことを思い出します。母親は隅の方で涙ぐんでいました。三々五々、我が家へと向かいました。

この時喜びを満面に表していた同級生が、一〇日後に半数以上の一二名が死に、残り一〇名のうち生存が確かめられた人は五名、残り五名は音信がありません。生存者のうち一人は群馬、一人は北海道、私だけが出生地に現在元気でおります。

疎開中は、何不自由もなくとはいかないまでも、結構楽しかったです。東京ではなかなか味わうことのできないことを体験することができ、また立場の異なっている同じ歳の二〇数名の人々と、二度と経験ができないお寺での共同生活ができたこと、半年間と短い間とはいえ自分の身の回りのことをしてきたことなど、今となっては懐かしささえ覚えます。

二〇数名の私どもを何事もなく東京に戻された嘉茂一男先生夫妻、寮母さんの吉井キヨ様の計り知れないご苦労があったことを今さらながら思い起こし、感謝の念でいっぱいです。

先生夫妻とは平成一四年ごろまでお付き合いがありましたが、吉井キヨ様はいろいろと手をつくしましたが、現在までお会いすることができません。このことが心残りであります。

六〇年前私どもが学童集団疎開をし、昭和二〇年三月一日に疎開先より帰り、三月一〇日のあの東京大空襲によって半数以上の人々が死んでいったことに対して、大きな大きな疑問を今日までも永遠と持ち続けています。誠に不幸なことと思います。

学童疎開体験記

本所国民学校五年　玉川雅雄

第二次世界大戦まっただ中の昭和一九年八月二五日、私ども本所国民学校（東京都本所区亀沢）三〇〇余名は千葉県安房郡南三原へ学童疎開をした。学年別に分散し、私たち五年生男子四〇名ほどは迎按寺で、先生と世話役の寮母さん二、三名と集団学習生活を始めた。我が家を出る時は、旅行にでも行くような気持ちで仲間一同、両国駅から親兄弟に見送られて房洲の疎開先へ向かった。

寺は小高い場所にあったので、下の道路端の井戸から水をつるべでくみ上げ、坂道を登り、寺の前に造った風呂場に運び、山から取ってきた薪を燃やして湯を沸かした。みんなで協力して風呂に入り共同集団生活をした。

朝は先生の号令で目をさまし、食事の後は、午前中、宿舎で勉強を、午後は自由時間で思い思い好きな遊びをして楽しんだ。すべて遊び道具は手作りだった。

週に何度か交替で五、六名ずつグループになり大八車を引き、村役場まで長い道程をお米と野菜の配給をいただきに行った。子どもながらに自然とわが身を守るため、土地の子どもとの争いに負けないよういつも五、六人で行動を共にした。

親元から離れて二か月ほど過ぎたころ、私どもの宿舎に親兄弟が四組ずつ順番に来ることになり、そのときのうれしかったことは今でも忘れることができない。幸い、私の親は抽選で最初に当たり、一番に会いに来てくれた。仲間四名で駅まで迎えに行き、途中で手作りの懐かしい食べ物を食べた。

それも束の間、昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲で仲間の家は皆焼け、多くの家族まで失った。小生も大事な姉（女学校一年、十一才）を失くした。姉の死は後で知ったが、涙が出て止まらなかった。種々思い出して…。

その後戦争もいよいよ激しくなり、私ども学童は千葉では危険だということで、岩手県花泉（山里）に再疎開した。五月中旬のことで岩手までは一二時間もの長い汽車の旅だった。花泉の駅に着くと、村の人たちが私ども学童を暖かく迎えてくれた。千葉からの荷物の着く間、準備の都合もあって、二か月ほど村の家庭に二、三名ずつ分宿をした。村の人たちは、親同様に暖かい気持ちで私どもを励ましてくれた。田植えも、ヤギの乳しぼりも体験することができた。

昭和二〇年八月一五日、終戦と同時に少しずつ親元へ帰っ

て行った。寒い厳しい東北地方の冬を少なくなった学童が一つの宿舎に集合し力を合わせて乗り越えた。

二一年三月中旬、私ども学童一同と先生は、全員そろって上野駅に着き、そこで解散した。

その後、全員がそろって会うことはないが、昔をしのび当時の仲間が元気でいることを心から望んでいる。

六〇年を過ぎた今でも、岩手県のお世話になった人々との文通は続いている。

学童疎開という体験

本所国民学校三年　中島邦子

昭和一九年八月ごろに、自らの意志で学童疎開に参加しましたが、両国駅ホームでの家族の見送りはなく、とても寂しい思いで東京を離れました。（見送りがなかったのは、「別れがつらくなる」という学校側の通達だったとか）

外房線の南三原駅から東光院という寺に着き、薄暗い本堂脇の棚へ各人小さな荷物を納め、明日からの生活の期待と不安を感じながらの第一歩が始まりました。

疎開先での生活は、非常につらく苦しい記憶ばかりではなく、子供心にも楽しみだったことの一つに、当番制で牛乳を毎朝取りに行ったことなどもありますが、二、三忘れることのできないことを記しておきます。

食べ物＝家族からの「大豆の炒り豆」を大切にしていたら盗まれて泣いたこと

衛生＝しもやけ、手足のひび切れで痛かゆくて眠れなかったこと

友人＝近くの寺の兄さんが帰京し（卒業式のため）亡くなったため、毎日泣いてばかりいましたので、皆で歌を歌って慰め合ったこと

生活＝生活面で種々お世話をしていただいた地元の女性（高梨さん?）、手のかかる子供たちに優しく親切にしていただいたこと

私個人としては、一足先に帰京し緑町四丁目の焼け跡で家族の死を確信しました。あまりの驚きで涙も声もなく、ただぼう然と立ち尽くしたままでした

この後、栃木県へ縁故を頼り疎開し、地元の学校へ通学し「東京っ子」ということで、身なりの違い、言葉の違い、持っている物の違いなどで、ことごとく笑われ、いじわるをされ、盗まれもし、遊びの仲間に入れてもらえずでしたが、いつの間にか「田舎の子」として日々楽しい生活となりました。

川遊びで泳ぎを覚えたこと、キノコ狩り、野草採り（特にシラミ退治用のセンブリ）、薪拾い、田植え、田の草取り、うなぎの仕掛け、畑の仕事の手伝い、風呂の水汲みなどの農業体験、村の祭りなどの行事、貧しくても元気ですばらしい田舎暮らしをしました。

今日平和な生活において、戦争という暗く悲しい過去を消し去ることはできませんが、子供時代の体験は、大変貴重なもので、現在にも生かされていると感じています。

学童疎開体験記

横川国民学校三年　小沢末子

六〇年前のことなので、どこまで覚えているか定かではありませんが、記憶のあるかぎり書いてみたいと思います。

私の生まれた所は太平町三丁目一四番地。精工舎の正門前であの大時計を朝に夕にと見てきました。錦糸公園を我が家の庭のようにして遊んでおりました。錦糸小学校へ入学、そしてすぐ柳島小学校へ転入。戦争の方も激しくなってきて、精工舎がねらわれる恐れがあるから離れるようにと言われ、私たち家族は横川の方へ引っ越しました。横川小学校へ転校、そこから集団疎開。三年生の夏の八月でした。

千葉県印旛郡（今は成田市）佐倉の宗吾霊堂正門の横にある佐倉旅館でした。家族と別れ、まだまだ母親にも甘えたい年ごろ、それなのに集団で二五人ぐらいだったと思います。着いたとたんにみんなで大声で泣いたことを覚えています。その後も何日間ぐらい、朝起きては泣き夜床に入ってもいつまでもクスンクスンと寝付けない夜が続いたことでしょう。疎開先の家の裏に成田から宗吾霊堂までの短い路線があって、そこを電車が通り過ぎるとみんなで線路に耳をあてていつまでも聞いていました。「この電車に乗れば家に帰れるのだ」「線路はどこまでもつながっている」と子供のころは思っていたのです。「ゴトン、ゴトン」いつまでもそこから離れることができませんでした。

宗吾駅のそばに絵をかくことの好きな吉岡さんというお兄さんがいて、絵を教えてくれたり紙芝居を作ったりして私たちを楽しませてくれて、それがなによりの楽しみと遊びだったのです。旅館のお姉さんにもずいぶん優しくしてもらいました。おやつのこととか洗濯のことまで。そのお姉さんは節子姉さんで私たちも「節子姉さん、節子姉さん」となついていました。先生は時間があれば勉強を教えてくれました。

地元の農家の人が芋など掘った後に行って、指位の細い芋の根を拾って来て食べたものです。芋の葉も食べました。そのときはとてもおいしかったことを覚えています。

そのうちに空襲の方も激しくなり、警戒警報と空襲警報で外へも出られなくなり、部屋の中でみんなで肩を寄せ固まっていました。夜は着の身着のままで防空頭巾を枕にしていて、いざというときは急いで防空壕（ぼうくうごう）の中へ逃げ込みました。防空壕といっても芋など蓄えておく穴で、天井は低く下は板が敷いてあるだけで電気もなく真っ暗でした。

一人が泣き出すとみんな泣き出してしまいます。先生に怒られました。みんなが大声で泣けば「敵の飛行機に聞こえて爆弾を落とされるから静かにしなさい」と。

三月一〇日の夜のことでした。バーンバーンと竹の燃える音が聞こえてきました。先生が壕から出て「東京の方が真っ赤に燃えている」と大声で叫びました。その声に壕から出てみると、真っ暗だった夜空が昼間のようになってみんなの顔が見えました。声も出ませんでした。「東京が丸焼けになってしまった」と人々は話していました。私たちは何が何だか分からず、ただその場に立ちすくんでしまいました。

一週間が過ぎたころから学童の家族の人が迎えに来て、一人去り二人去りとだんだん少なくなってきました。私の父親も姉と迎えに来ました。思わず「母ちゃんは」と聞きました。すると父さんは「どこかではぐれていなくなってしまった。そのうちに来るだろう」と言っていました。

私たち家族は、母方の伯父にあたる岐阜の田舎に行くことになりみんなに別れを告げました。伯父の家に少しばかりの荷物を持ってたどり着きました。子供だった私には良く分からなかったけれど、厄介者が来たとばかりに冷たくあしらわれて「お前たちが来ても住む所がないから裏の小屋に住め」と言われ、そこへ入ることになりました。電気もなく、ただ床には板が並べてあるだけでした。三月とはいえまだまだ寒い日でした。夜はランプの光だけでした。なんとか学校へも行けるようになって、遠い道を歩いて子どもの私の足でも三〇分はかかったでしょうか。学校の行き帰りに村の子供たちに「焼け出された」とか「疎開者」だとか「家なし子」だとかののしられて、田んぼの中へ突き落とされたり、川の中へ投げ込まれたり、小石を投げられたり、どのくらいいじめられたことでしょうか。でも我慢しました。泣きませんでした。母ちゃんが帰って来るまではと。家に帰っても慰めてくれる人もいません。抱きしめてくれる人もいません。自分なりに強くならなくてはと自分自身を慰めるしかありませんでした。父は近所の農家の手伝いに行って朝から夕方まで帰ってきませんでした。帰って来るときは食物をもらって来てそれを食べていました。それでも小学校、中学校と卒業することができました。

私は東京へ行く決心をしました。東京で姉が商売をしているのでそれを頼りに上京しました。母に会えることも信じて。姉の商売を手伝いながら洋裁学校に通わせてもらいました。姉の商売関係の人からお見合いの話もあって、どうせ誰かの

世話になるのならお見合いをして結婚をしようと思い、二〇歳で結婚しました。幸せでした。主人もやさしい人で自営業を営んでいるので私もその仕事を教えてもらいながら年月が過ぎました。

今では、子供や孫たちに恵まれて本当に幸せな日々を送っております。

―追記―

この原稿を書き終わってから、私は佐倉宗吾霊堂へお参りに行って来ました。日暮里から宗吾霊堂まで京成電車でわずか一時間たらず。こんな近い所にあったのに今までどうして行けなかったのか残念でした。

学童疎開の思い出

横川国民学校六年　牧　康策

昭和一九年八月、都市部の縁故疎開先のない三学年以上の小学生を対象とした集団疎開が始まり、東京都本所区の学童はお隣の千葉県へ行くということになった。子供たち自身に分かっていたことは「この戦争を勝ち抜くために大人の足手まといにならぬよう、中学生になるまで田舎でしっかり勉強して帰ってくるのだ」ということぐらいで、遠足気分そのままに両国駅から喜び勇んでの出発であった。

横川国民学校の六年男子は千葉県君津郡富岡村（現在は木更津市と袖ヶ浦市に分割合併）。私たちの六年二組（太田篤治先生、寮母山田英子さん）は富岡村の油屋別館（写真）で数えると二一名の仲間と一緒である。一組（井上有一先生、のちの前衛書家・寮夫風間さん）は私たちの近くの別宅寮というところに決まった。

「油屋別館」は古びた昔風の旅館で、門を入ると玄関の前にこんもり築山と井戸があり、二階建ての一階にご主人たちが住まわれ、二階の襖（ふすま）仕切りの四畳半四間の襖を取り払って広間にしたところが私たちの住いだった。

疎開して一～二週間目ぐらいが家が恋しくなる時期、広間の三方向の障子戸を開けて木の手すり越しにいろいろな庭木や近くの田畑を眺めながら望郷の念をかみころした。

もちろん粗末なものではあったが、私たちはちゃんと三度の食事（主食は豆の混ざったご飯）を与えられた。太い竹を短く切った竹筒がご飯茶碗、やや細い竹を切ったのが湯飲み、そしてみそ汁やおかずは普通のどんぶりや茶わんに盛られた、しかし小学六年と言えば今も昔もよく食べる年ごろ、おなかはいつもすいていたのであろう。自然と何か食べられるものはないかということになり、庭のイチジクの実を食べたり、畑でつかまえたトンボの頭と羽をむしって火鉢であぶって食べた。それはひもじさのあまりというより元気な男の子たちのたくましさといった方が近い。

着ていた服も上等で清潔というわけにはいかない。上着とズボンはずっと家から着てきた一張羅（いっちょうら）で我慢していたが、下着類は毎朝玄関先の井戸端のたらいの中に山のように積み上げられ、寮母さんが木の洗濯板で一生懸命洗濯をしておられた。山田英子さん、もし生きておられたらお年だろうとは思うけれどもお礼を言いたい気持ちでいっぱいである。

朝起きると歯磨き、洗面、体操、掃除そして朝食。後片付けをして寺子屋式の午前の勉強が始まる。太田先生は今思えば本当にまじめで几帳面（きちょうめん）な先生だった。先生が記録された七か月間にわたる「寮日誌」の一部が「横川の歴史（昭和五七年刊）」に掲載されているので参考にさせていただく。先生は親代わりとなって私たちを分け隔てなく注意深く世話をしてくれた。私には仲間たちの大きなトラブル、病気、けがなどの記憶がないから、実際には先生は私たちの知らないところで衣食住全般にわたって大変な苦労をされていたことだろう。

午後は体育を兼ねて野外作業、近くの田んぼの草取りやひえ抜き、薪集め、そして大きなカゴを背負って三～四名のグループで各部落を順番に回って野菜をもらってくる野菜取り。お金を払った記憶はないから村民の善意だったのであろう。今でも「下郡」とか「田川」とかいくつかの部落の名前が思い出される。

楽しい思い出は父母の面会。戦時下で父親たちは忙しく、各家庭それぞれの事情もあり、来てもらえなかった仲間もいたと思う。私には母がもんぺ姿で風呂敷（ふろしき）包みを背負い、他の二、三の母親とともに来てくれた。共同生活だから自分の子供だけに特別の差し入れをするわけにいかない。全員へのささやかなお土産を置いて私たちと一緒に昼食を食べ、その足で久留里のお寺に集団疎開していた弟（四年）を訪ねたと思う。その弟は空襲で母が死んだために、このあと二度と母の顔を見られぬままに、この年の五月に遠く岩手県まで再度移動することになる。

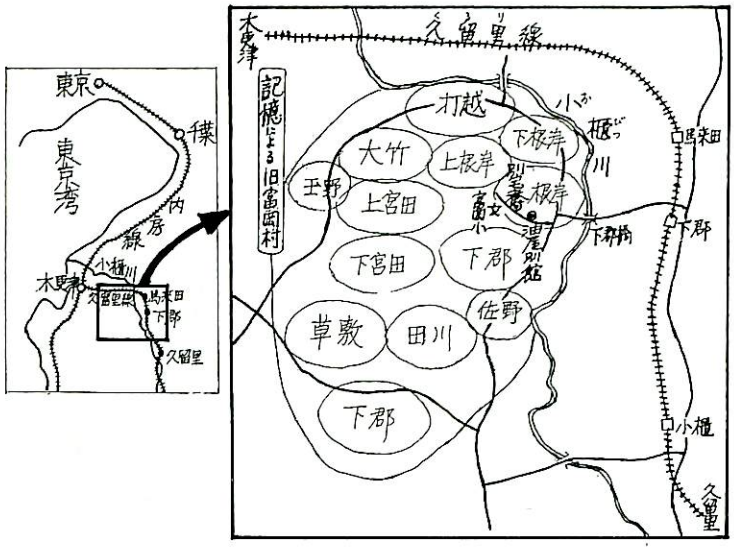
もう一つの楽しみは家からの手紙やハガキ。私には姉（五歳年上、小児まひのため歩けなかった）からのハガキが心に残っている。その姉も母とともに空襲で亡くなった。

昭和二〇年の正月も富岡村で迎えたけれども特別の思い出はなく、そのころから「あと何日あと何日」と帰る日を楽しみにしていたに違いない。そして遂に三月三日の朝が来た。一人一人リュックサックを背負い油屋別館に別れを告げる。馬来田駅までの道を歩いて帰りの汽車に乗ったときは、おそらく最大の喜びであっただろうと思う。

持ちきれない荷物は柳行李（やなぎごうり）に詰めて別便で家へ戻ってきていたが、その掛け縄がまだほどかれぬまま部屋の隅に置かれているうちに、あの三月九日の夜半を迎えた。この東京大空襲で私も九死に一生を得たのだが、六年二組は太田先生を初めとして何人かの仲間を失ってしまった。

空襲のあと、私は父、兄と別れて長野県中野市の叔母の所へ縁故疎開し九月に東京へ戻った。岩手の志戸平温泉で集団疎開を続けていた弟は、十月になって中三の兄が父の代わりに迎えに行き二人で東京へ帰ってきた。

今残された写真を眺めていると「いろいろつらいこともあったけれども、みんなよくがんばったなぁ」という思いがこみ上げてくる。



記憶による「旧．富岡村」の地図



油屋別館２階、昼食前の集合写真

千葉集団疎開

小梅国民学校四年　朝倉達郎

昭和一九年（一九四四年）八月末、我々四年二組及び第二次出発の学童たちは、母校小梅国民学校（現在の小梅小学校）に集合、当時、千葉方面の終着駅だった両国駅から戦時対策（大東亜戦争＝第二次世界大戦）のため、親兄弟に見送られて学童集団疎開に旅立った。

蒸気機関車（ＳＬ）で内房・木更津経由、久留里線で終点亀山駅に到着（その後、武器製造のため、亀山―久留里間の線路は供出された）、途中の松丘駅には先発の学童たちが我々を出迎えにきていた。

亀山駅からいくつかの部落を過ぎ、玉川村蔵玉の円盛院（住職は軍隊に入っていた）という無人の寺が宿舎に割り当てられ、教師一人、寮母（東京から）一人と現地の手伝いのおばさんと学童約三〇人の生活が始まった。

当時の資料を見ると、小梅国民学校の生徒は、松丘村に二六五人亀山村二七五人が、寺院、旅館などにクラスごとで分宿（蔵玉小学校の百年誌によると、泉滝寺に五年生三〇人、円盛院三年生三〇人とあるが、正確には円盛院四年生）。

我々は午前中一～二時間程度寺で授業。週に一～二回地元の蔵玉国民学校の教室を借りて授業、午後は作業、雑用、自由時間が基本で、あまり一生懸命勉強したという記憶はない。山間部にある部落なので、広くない田畑と柿の木（当地は干柿の産地）そして小櫃川、今までにない田舎暮らしと集団生活、戦争中とはいえ、親兄弟と離れてしまった環境は、小学四年生にはつらいことだった。

生活が始まって数日を過ぎると、一部の学童はホームシックになり、夜、床に入るころには、泣声が毎日のように響いていたが、寮母さんや先生の励まし、また、皆で歌った「昔昔その昔、シイの木林の……太郎よお前は良い子供……」などの合唱に励まされ徐々に落ち着き、川遊びや干柿作り、地元の子供たちとのブチメ（竹で作った玩具）遊びなどの日々が過ぎていったが、寒さが厳しくなる冬は大変だった。

朝の洗顔は、坂を下った水路で裸になって乾布マサツ、そして暖を取るため、寺の隣にある神社の裏山で杉の落ち葉を一抱えずつ拾ってこなければ、たき火で温まることができなかった。また、当時シラミが発生し、殺虫剤がなかったので、順番で風呂に数人ずつ入る訳だが、次に入る組が風呂に入った学童の脱いだ下着のシラミつぶしをしながら前の組が出て

くるのを待っていた。

暖房は炭火鉢だがその木炭を隣村の山奥の炭焼小屋まで取りに行くことは遠く重たくて難儀だった。当時の部落には物品を売る店は一軒もなく、親兄弟と連絡を取る方法である手紙を出す郵便局があるだけだった。三度の食事は不自由しなかったが、間食するものがなく親に送ってもらったわかもと（胃腸薬）を、人のいない学童の荷物置き場になっていた本堂の中で、こっそりオヤツがわりに食べていた。我々のところでは幸いにも米の主食が出てきたが、隣の部落の上級生は、我々の寺の前を通って主食の調達に歩いていたのを覚えている。

そして年が明け、昭和二〇年（一九四五年）三月九日の夜のラジオで東京方面に敵機の大編隊が近づいていることが放送され、次の日の朝（三月一〇日）東京方面の晴れた青空が真っ赤に染まっている異常な風景に皆驚いた。（東京大空襲＝B29爆撃機約三〇〇機、落とされた焼夷弾三〇万発、死亡者約一〇万人）そして房総の山奥に空から燃えカスが灰色や黒色の雪のように降りそそぎ、学童たちの不安をつのらせた。昼過ぎ真っ黒にすすけた人たちと道で会い、その人が我々が東京の集団疎開の生徒だと分かると東京は全滅だと教えてくれた。特に母校小梅国民学校の対岸の隅田公園には高射砲陣地もあり、敵機の爆撃の目標になることは想像できた。ただ、親兄弟の無事を祈るだけだった。

次の日に、在京の先生が報告に見え、学童の通学区域の家屋の罹災状況を地図上に書いて説明してくれたが、家族の消息については不明で、生徒たちの不安は一層ひどくなった。

数週間過ぎると、疎開中止とのことで親たちが学童を引き取りに現れるようになり、千葉での集団疎開は終わることになったが、親が引き取りにこられない生徒は岩手県に再疎開となり、大変な辛苦を終戦になるまで強いられた。



円盛院（昭和56年撮影）
疎開当時と外観はほとんど変わっていない。

学童疎開の思い出

小梅国民学校六年　植木敬一

昭和一九年八月二八日朝、小梅国民学校児童は学童疎開に出発した。

当時六年生だった私は、仲間三五、六人と学校の校庭に集まって、両国駅まで歩き「国技館口」から列車に乗った。小梅国民学校児童の集団疎開先は房総半島の真ん中あたり、千葉県君津郡松丘村と亀山村であった。松丘村には、六年男子が「吉祥寺」と「幸田寺」に、四・五年男子が「岩田寺」に、三年女子が「松本旅館」と「川越旅館」に分宿した。亀山村には、四・五・六年女子が「織本旅館」と「亀山旅館」に入った。「男女七歳にして席を同じうせず」の時代であり、宿舎割にもよく表れていると思う。

私は六年一組だったので松丘村の一番山奥の「吉祥寺」という古いお寺にご厄介になることになった。吉祥寺では、本堂とその両脇の部屋に寝泊りした。廊下の一番奥に、疎開児童のために急いで造った便所があり、廊下と便所の前は墓地になっていた。真っ暗な夜、この便所に行くのは本当に怖かった。怖いのは私だけではなかった。便所に行っても怖くて奥まで行けず、途中で用を足してしまう。小便で板の間がぬれる。次の者はぬれた床を踏み、そこで用を足してしまう。次の朝には、トイレ中小便だらけの有り様だった。これぱかりは、先生から何度注意されても直らなかった。六年生の男子とはいえ、皆怖かったのである。

食事は、お寺の大黒さん（※1）が作ってくれていた。大黒さんは、家族と私たち疎開児童のお米を一緒に炊き、家族の分を先に別にする。残りを私たちが食べることになる、当然限られた分量しかない。六年生の食べ盛り、盛り切りのどんぶり飯ではらいっぱいとはいかない。父母が面会に来る度に、私たちはご飯が足りないと訴えていた。お寺生活が一か月ぐらいたったころ、急に大工さんが建て増し仕事に来て、炊事場とお風呂ができた。多分、担任の遠藤先生と父母が話し合って造ってくれたものだと思う。そして、ハナちゃん、テルちゃんという村のお姉さん二人が食事の面倒を見てくれることになった。その後は、食事も何とか間に合うようになった。（遠藤房吉先生、江東区大島在住、三年前にご逝去）

どこの集団疎開でも同じだろうが、私たちの宿舎でも「シラミ」に悩まされた。一か月ぐらいたったころから「シラミ」がわき出し、下着だけでなく洋服の襟首にも現れた。自分で

着ているものを脱いで捕まえたり、友達同士で外から見えるのを取りあってプチプチとつぶしあったりした。しまいには、「自分の分身」（シラミを分身と言えるのかどうか）を、敷居の溝の中に並べて「シラミ競走」させて遊んだこともあった。

勉強は、最初のうちは松丘村の小学校の体育館で、急ごしらえの間仕切りをした「教室」へ通って勉強をした。炊事場と風呂場ができたころから村の学校にも行かなくなり、お寺で朝食後、先生に二時間くらい勉強を教えてもらい、後は自習と称して村の農家に一人か二人くらいずつで手伝いに行き始めた。最初は農作業の邪魔になっていたのではないかと思う。

農家で昼食をごちそうになり、夕方、食べ物のお土産をもらって帰ってきた。このお土産が楽しみだった。お寺には、二、三人くらいが残った。それぞれ行く農家が決まっていたので、父母が面会に来ると、誰それの親が来たので迎えに行って来いと先生に言われ、迎えに行ったものであった。私も友達に誘われて、農家の手伝いに行くようになった。仕事は、その時期、時期の「稲刈り」、「干瓢（かんぴょう）干し」、「麦踏み」などで、お陰で農家の仕事をかなり覚えた。

農家の手伝いをするようになってからは、食生活は急に豊かになった。食料が足りすぎてしまうようになったので、弟や妹が面会に来ると必ず食料のお土産を持たせ、また私たちが面会に行く時も、必ず持って行くようになった。

村の人たちにも大変よくされた思い出がある。疎開したてのころ、はらがすいて農家の柿をもいで食べていた。学校帰りに友達が木に登り柿を取っていたところ、その家の人に見つかり大声で怒られた。木の上にいた友達は、驚いて落っこちて腰を抜かしてしまった。「黙って他人のものを採るのは泥棒だ」と言われた。「欲しければちゃんと話をしなさい。話せばいくらでもあげるのに」と言われ、帰りには、背負いかご一杯に柿をもらい、腰を抜かした友達は小父さんにおぶさって寺まで帰ってきた。

自然薯（じねんじょ）の芋を掘っていたら、農家の人に見つかり「この細長い芋はちゃんとした道具がなくてはうまく掘れない。これを黙ってとってはだめだ」としかられた。「つるの途中にムカゴという実がなっているから、それをゆでて食べなさい。うまいよ」と教わった。食べられる木の実、草の実も教わった。夏には川で魚釣り、冬には「オッカブセ」と呼ぶ小鳥を捕まえる道具など、農家の方には本当にいろい

ろなことを教わった。

村の中を小櫃川が流れている。学校に行くには遠回りをしなければならない。お寺から一直線に行く近道は「チョンチョン橋」であった。小櫃川の浅瀬に打ち込まれた「丸太杭」の頭を〝チョンチョン〟と渡るから「チョンチョン橋」である。この近道は、浅瀬で流れが速く危険だということでじきに通行止めにされてしまったが、後で魚釣りのいい釣り場になった。自分たちで川魚や小鳥を捕まえて食べていた。食料が豊富になってからは、豚を飼っている農家（「豚屋」と呼んでいた）に残飯を運んだこともあった。この豚屋さんには、疎開から帰る前にあいさつに行き、豚肉をたくさんもらいお寺で煮て食べた。

そうこうしているうちに、お国のためと称して「鉄材供出（※2）」が始まり、久留里～亀山間の線路が外されてしまった。私たちは子供心に、線路まで供出しなければならないほど鋼材不足なら、東京の家では針もなく、さぞかし大変だろうと考えた。そこで村の雑貨屋に行き、鉄の縫い針を買い集めた。友達同士で「一の一」何本と「一の二」何本、というように交換することもあった。父母が面会に来たときに、その針を渡したら大笑いされてしまった。我ながらけなげなのだったと思う。

元気の良い友達が、林の中で遊んでいるうちに竹の切り株を踏み抜き、竹が足の中で折れてしまう大怪我をしたことがあった。森田さん（あだ名は「兵長」、小梅国民学校の小使いさん）が近くの農家からリヤカーを借りてきて、町の病院まで運んでくれた。たまたま風邪をひいていた私も、大怪我の友達と一緒に病院まで運ばれた。線路まで供出する時代だから、農家に自動車などあろうはずもなかった。

他にも、線路供出につながる思い出がある。仲間の一人が寺から脱走を計ったときも、「線路がないから、そう遠くまで行けないだろう」と皆で手分けして探した。案の定、間もなく脱走者は連れ帰られた。脱走者も線路供出にはかなわなかった。

昭和一九年の終わりから新年になると、都会の空襲が激しくなった。

昼間、松丘村は爆撃機の東京への進入路の真下にあたるので、B29が悠々と飛んでいくのが見える。B29の大きな機体の後を日本の小さな戦闘機が追いかけて行く。煙がいくつか上がったかと思うと、戦闘機が煙を吐いて落ちていく。目の前で、日本の戦闘機が落とされるのを見せつけられるのは、

子供心に悔しくて仕方がなかった。

夜には爆音がゴーゴーと聞こえる。私たちの上空を通って空襲を掛けるのである。爆音が通り過ぎてしばらくすると、東京・川崎・横浜方面の空が赤く染まっていく。後で嫌というほど思い知らされるが、当時の疎開地では、空襲の悲惨さは実感としてなかった。ぼんやりと、赤い空を眺めていた。

東京に帰る三月が近づいてきていた。六年生なので東京で中学受験をしなければならないのである。帰る前日の三月四日、父母たちが迎えに来てくれた。遠藤先生が粋な計らいをしてくださった。父母共々、それぞれ手伝いに行っていた農家に、お別れと称して一泊させてもらうことになったのだ。農家に出入りしていなかった者も先生のお骨折りで泊りに行くことができた。疎開生活最後の「良い思い出」であり、今でも忘れられない。遠藤先生のお計らいと地元農家の方々の暖かいお心に深く感謝している。

明けて三月五日、宿舎の「吉祥寺」に、帰京する学童と出迎えの父母が集まった。前の晩「お泊り」をさせてくださった農家の方々も、お寺まで見送りに来てくださった。それから、線路のある久留里駅までみんなでテクテク歩き、列車に乗った。東京の家に着いたのは夕方であった。

学童疎開から十数年たって、六年一組だけのクラス会を開くようになった。小梅小の地元に住んでいる数人が幹事役となり、私が連絡係となった。以来毎年、遠藤先生を招待しクラス会を開いた。遠藤先生の奥様（旧姓田中先生、松本旅館の三年女子の担任）にも来ていただいた。「兵長」の森田さんを呼んだこともあった。疎開の思い出話に花が咲き、クラス会は夜遅くまで続いた。残念なのは、「吉祥寺」でお世話になったハナちゃん、テルちゃんを呼べなかったことである。

村の学校に通っている時、遠藤先生から松丘村松本旅館の田中先生に手紙を届けたり、逆の使いを頼まれたりすることがあった。オマセな郵便配達人は、お二人の雰囲気から、封書はきっと恋文（ラブレター）だろうと勘ぐり、そっと水で封を開けてみた。がっかり。ただの業務連絡文書だった。けれど、戦後すぐにお二人の先生がご結婚なさったので、子供心の勘ぐりもまんざら〝ハズレ〟ではなかったようだ。クラス会で話したら、奥様はニコニコされているだけであった。（ここに記すことも開封のことも、奥様からお許しをいただいている）

クラス会は、遠藤先生が亡くなった今から三年前まで続い

た。先生が亡くなった時には、地元にいる者、時間を都合できた者が多数集まり、通夜葬儀のお手伝いと野辺の送りをさせてもらった。

三月一〇日の大空襲で、小学校の卒業式は行われなかった。卒業証書は、中学入学に必要な者だけが「ガリ版刷りの卒業証書」、「ガリ版刷りの通信簿」をもらいに行った。

今から思うと、小学校時代に親から離れて集団生活をしたり、お百姓仕事を手伝ったり、人生の良い体験をさせてもらえたと感謝しています。今も続く友達の心の交流、遠藤先生はじめ農家の方々の「暖かい心」は私の宝物です。学童疎開には辛い思い出もありますが、「人間性の尊さ」をつくづく学びました。

※1　大黒さん（だいこくさん）僧侶の妻の通称。

※2　鉄材供出（てつざいきょうしゅつ）金属類回収令により国に鉄材を供出すること。

集団疎開体験記

小梅国民学校六年　佐々木　清江
（旧姓　片桐）

六〇年前の夏の日、私たちの集団疎開が始まりました。

東京都では、昭和一九年六月に学童を空襲から守るために、三年生から六年生までの集団疎開を決定しました。

田舎に親戚（しんせき）や知人のいる人は、縁故を頼っていく縁故疎開をしました。

私の両親は東京生まれで、田舎には親戚も知人もなかったので、四年生の妹と私は集団疎開に行くことになったのです。

転校してきて二か月ぐらいで、クラスの人たちともなかなかなじめず仲の良い友だちもいませんでした。そんな中で始まった集団疎開は、不安でとてもつらいものでした。

私たちは、千葉県の亀山村に疎開することになり、いよいよ出発の日、隅田公園の中にある学校を出発し、両国駅まで整列して歩いていきました。

私の家は吾妻橋のそばにありました。そこを通る時沿道で見送る人の中に、真っ白いかっぽう着を着た母の姿を見つけました。もう我慢できなく泣けて泣けて涙が止まりません、「お母さん」と母の側に飛んでいきたかったのですが、そのまま私は目を押さえながら歩いていきました。母も夜になって、泣きながら歩いていた私を思い泣けてしまったそうです。

両国から乗った汽車は疎開児童専用だったと思うのですがとても混んでいました。遠足だったら楽しいでしょうけど。みんなの気持ちも、どんな所に行くのか不安だったと思います。

長い時間汽車に揺られ亀山村に近くなると初めて見るちっちゃな無人駅をいくつもいくつも過ぎて、ようやく山の中の終点の亀山駅に着きました。その時、みんなの顔が汽車の煙で真っ黒でした。列車から降りた途端、ミンミン、ジャージャー山の中の全部のセミの大合唱、あまりのすごさで他の音は何も聞こえません。六〇年たった今も、このセミたちの鳴き声は集団疎開の記憶の中から聞こえてきます。

駅の前にはこれからお世話をしてくれる旅館の人や、お寺の人が迎えにきていました。他のクラスと別れて私たちの着いた旅館はトンネルを出た所にある赤い橋を渡ってすぐにある鉱泉宿でした。硫黄（いおう）のにおいがプンプンしてい

ました。

宿に着くと、私たちの荷物が先に着いていて庭に山積みになって、そこに一羽のアヒルが私たちを見ていました。宿のおじさんが「あなたたちの荷物をアヒルが守っていたんだよ」と言ったそのひと言とアヒルのかわいさに、ずっと緊張していた私たちの気持ちがとけたようでした。

宿の周囲は山に囲まれ、窓から見ると山はとてもきれいな緑でいっぱい、空は澄みきった水色、「すごいなあ、田舎って」東京っ子の私は、こんな鮮やかな自然を初めて見て驚いていました。

午前中は掃除をしたり、座敷に座って勉強しました。また、薪を山に取りに行ったりもしました。みんな背中に背負子（しょいこ）を付けて汗をかきながら山を登りました。東京ではしたことのない屋外での共同作業はちょっと楽しいものでした。

しかし、時々ホームシックになり無性に東京に帰りたくなりました。でも、クラスの中に歌をたくさん知っている人がいて、いつも楽しそうに歌っていました。私たちも覚えていっしょに歌っていると、帰りたい気持ちが少し薄らぐのです。が、ある日、先生に私は聞きました。「かぜをひくと帰れますか。熱が出たら帰れますか。」思い出すと恥ずかしくなりますが、帰りたい一心だったのです。私だけでなく誰だって両親の所に帰りたかったのです。そのころの標語で「欲しがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵」と言われ、みんな、我慢、耐えること、それはいつか勝利につながると洗脳されて。ですから「帰りたい」なんてみんな言わないで我慢していたのです。

一か月ぐらいして、山に薪をとりに行って足をねんざして歩けなくなったので東京に一時帰ることになり、しばらく、東京の学校に通いました。東京では残留組といって身体の弱い人や何かの理由で疎開に行かれない人たちがいました。

授業中、警報のサイレンが鳴って家に帰ることもありました。家に着く途中に、もう敵の飛行機B29が頭の上を飛んでいて、とても怖い思いをしました。

足も治り、また亀山村に戻ることになり、今度は四キロメートル離れた妹たち四年生がいる旅館に行きました。そこには、五、六年生数人がいて姉妹いっしょにいられる所でした。

そこには体の大きな若い寮母さんがいて、私たちのお母さん代わりをしてくれました。純朴な人で田舎言葉で私たちを

しかったり、世話をしてくれました。私たちは頭も体もシラミだらけだったので、寮母さんは洗濯物をいつも大きなお釜で煮ていました。

たまに、村の学校に行くこともありました。村の子の帰った午後に、わらじをはいて学校までみんなで歌を歌いながら歩きました。荒鷲の歌（銀翼連ねて南の前線…）とか勇ましい歌を歌っていました。そして、自分たちにも元気をつけていました。田舎の学校は木の校舎で校庭は広々していました。何年か過ぎて行ったら近代的な校舎が建っていて、その後ろにあの懐かしい木の校舎がありました。

たまに、親たちが来る面会日がありました。朝から宿の前に出て待ちます。親の姿を見つけた時はもううれしくて、夢中でかけ出します。その足は何だか地面から離れて浮いているようでした。しかし、親の来なかった子たちは、とても悲しく寂しかったでしょう。私も、この思いを何回か経験しました。

親の来た人は、面会に来なかった友だち四～五人を誘って宿の前の丘に行って、母の作ってきたおはぎや、大豆のいったのを食べました。親の帰った夜は、あっちでもこっちでも先生に見つからないように、フトンをかぶって大豆を食べるのです。先生が回ってくるとじーっとしていて、いなくなるとポリッ、ポリッと音をさせないように食べるのです、あのころはいつもおなかがすいていて、薬のわかもととか栄養剤を、お菓子のように口に入れていました。たまに、農家の人たちがおもちやさつま芋をごちそうしてくれました。

夜はグループごとにコタツに入って手紙を書いたりトランプをしたりして遊びました。

ある日、グループの中の人がけんかをしました。全体責任になり横に一列に並べられ、順々に先生から、ビンタをされました。男のようなこわい女の先生でした。その後、罰として遠くの神社まで行かされました。夜の山の中は漆黒（しっこく）のやみです。私は班長なので一番後ろです。わらじなのでみんなが歩くたびにペタッペタッと音がするのです。辺りは静まり返ってシーンとした中、だれもいない私の後からまたペタッペタッと音がするのです。心臓が止まりそうでした。神社でひとりずつ鈴を鳴らすガラン、ガランという音があたりの静けさを一層増し、やみの中に、オバケが出ないかイノシシが来ないか怖くて震えていました。

東京では経験できないことをしていた私たちも、卒業を控え三月七日に空襲の真っ直中の東京に帰ってきました。二日

後、三月九日の夜からの空襲では、隅田公園に逃げ助かりました。卒業で帰った人が大勢亡くなりました。そんな状況の中でとうとう私たちは卒業式もなく、それきり別れたままになりました。

次に、それから三〇年ほどたった昭和五〇年代に、小梅国民学校に転校してくる前に在籍していた本所国民学校の卒業式が竪川中学校（本所国民学校は、現在の竪川中学校の敷地にありました）で行われ、卒業証書を受け取りました。

疎開地からの私たちの荷物も両国駅で焼かれました。その中に父の手作りの木のトランクが残り、ふたの内側にきちょうめんな父の字で、小梅国民学校六年三組と名前が書いてあります。六〇年過ぎた今も衣類を入れ当時を思い出します。

私の人生の中で集団疎開は大きな経験の中の一つになっています。勝つまでは、と耐えたこと、つらかったこと、支えあうこと。

集団疎開

小梅国民学校四年　松本章乃

昭和一九年、私は小学校四年生でした。

当時の小梅国民学校（本所区）現在の墨田区立小梅小学校です。たしか八月ごろだったと思います。三年生から集団疎開が始まりました。行き先は千葉県君津郡亀山村織木沢（織本旅館）でした。何にも知らない私たちはまるで遠足にでも行くような浮き浮きした気持ちで大勢の父母たちに見送られて、両国駅から出発しました。お父さん、お母さんたちは皆、泣きながら手を振っていました。それが何を意味するのか私たちには知るよしもありませんでした。

そして宿に着き一日、二日とたつうちに、やはり何か違うと気が付き、夕方になると東京の方に向かって一人立ち二人立ち、そして一人が泣き出すとそれにつられて全員の大合唱になってしまいました。でもだんだんとそれにも慣れて、いつしかあきらめというか、現在自分たちがおかれている立場を少しずつ分かってきたのでしょう。

ある時私は風邪を引きました。しかし村にはお医者さんはいませんでした。それで寮母さんが私をおぶい、冷たい雨の中、隣村のお医者さんに連れて行ってくれました。

駅までの遠い道程でした。途中あまり高くない山に差し掛かった時に、山の頂上から煙が立ち昇っていました。「あれは何だか分かるかい」と、寮母さんが私に聞きました。私が頭を振ると寮母さんは「あれはね、伝染病で亡くなった人を火葬にしている煙だよ」といいました。昔、地方では皆土葬にするのだそうですが、伝染病なのでそのままでは菌が外に出るので火葬にしたそうです。その話を聞き一層寒さを感じました。

また、ある時は、十五夜の夜は皆それぞれの家の縁側にお月見の供え物がたくさん並べてあり、それを子供たちがそっと家の人に気付かれないように取りに行きます。家の人は見て見ぬ振りをしてくれるのだそうです。都会っ子にとっては何にも勝るごちそうと楽しみでした。

勉強はといいますと、村の学校で、毎日ではなかったと思いますが、午前中は村の子供たちが教室を使い、午後は私たちに教室を開放してくれました。その時ばかりは運動場で思いっきり手足を伸ばして遊びました。だんだんと戦争が激しくなってくるので、あまり落ちついて勉強をするというわけにはいきませんでした。

集団の生活にも慣れてそれなりの楽しみも見つけました。物のない時代でしたが、それでもまだ千葉にはいくらかの食べ物はあったようでした。しかしそれは宿のご主人が、私たち東京の子供たちは小さいのに親元から引き離されて寂しい思いをしているからと、一生懸命私たちのために、食べ物やその他もろもろのことをお世話してくださったお陰だと思っています。

しかしそれなりの楽しい生活もそう長くは続きませんでした。戦争はだんだん激しくなり、千葉の上空は東京を襲撃する飛行機が引きも切らず通るようになり、毎日毎晩、近くの防空壕（ぼうくうごう）に入るようになりました。ある時などは、昼間なのに急に頭の上が真っ暗になり何かと上を向くと、まるで大きな鳥が羽を広げて飛んでいるようでした。東京へ行く偵察機でグラマンと言うんだそうです。真っ黒で、絵もなく、字もなく、音もなくて東京の方へ飛んで行きました。

そして何日かたったある日（三月一〇日）、夜中に起こされて東京方面を見ると、真っ赤に空が染まっていました。子供心にも何が起こっているのか分かりました。ただただぼうぜんと立ちつくしていました。

いよいよここも危ないということになり、それぞれ子供たちを親元に帰すか、それとも今度、たしか秋田に移すかということで、何らかの形でそれぞれの親元に連絡があったと思います。それから間もなく、一人、二人と子供たちを連れに親が見えるようになり、だんだんと宿も寂しくなり、いつ迎えに来てくれるか分からないまま、毎日毎日、親の来るのを指折り数えて待っていました。

後わずかという時に、やっと父が国民服に帽子をかぶりゲートルを巻いて、リュックサックを背負って迎えに来てくれました。そのときのうれしかったこと。しかし友達や先生、そして優しく接してくださった宿の人たちとの別れが悲しいのと複雑な思いで父にしっかり手を引かれて、それほど長い日々ではなかったけれど学童疎開生活に別れを告げました。

昭和二〇年四月一〇日でした。忘れもしません私の誕生日でした。

みんなひとりで生きた

小梅国民学校三年　丸山房子
（旧姓　丸山）

炎天下の道を、アリのように長い行列が両国駅まで続いていた。昭和一九年七月の夏休みは、学童疎開という運命から始まった。

親たちとは校庭で手を振ることもなく別れて、もんぺに半袖シャツ、リュックを背負い、その上に空襲に備えて防空頭巾を乗せ、ひもを首に回して縛り、肩から斜めに水筒を提げ、運動靴という姿で歩いていった。

その年の四月、私は隅田公園の中にある満開の桜に囲まれた小梅国民学校の三年生になったが、戦況はますます厳しい状況の様子で、家の前の舗道の敷石がはがされて防空壕（ぼうくうごう）が作られ、玄関脇には防火用水が置かれていた。毎朝登校すると四方拝（しほうはい※）から始まって、延々一時間の朝礼が続き、授業は周囲の学校が軍需工場に変わったために、教室は多いときには七〇人の生徒でぎゅう詰め状態であった。

木更津から久留里線に乗り換えて「松丘」と「亀山」へと、三年生から六年生まで、全校生徒はクラスごとに決められた宿泊先に分散していった。

千葉県君津郡松丘村川越旅館、二間続きの座敷に二〇数人の女の子が固まって暮らす生活が始まった。私は家から送られてきていた身の回り品の行李（こうり）、布団、食器、洗面道具などすべてに友達とは少し違う物を持たされて、ずっとひどい目に遭うことになってしまう。

例えば洗顔の水は洗面器に一杯分と決められていたので、小さな洗面器では、少ない水でうがいをして顔を洗わねばならないし、布団は大人用であったために一番早く起きて畳み、就寝の時は最後に敷く羽目になってしまうのだった。小柄で体力のない私に布団はとても重かった。

初めは、勉強も座敷でやっていたが、先生とは食事のときに顔を合わせるだけで、いつの間にか私たちは一日中勝手に遊んでばかりいるようになっていった。（後で聞けば先生は一七歳だったとか）

そして自然発生的に、ボス格の女の子が支配するようになり、すべての行動を管理するようになる。それぞれが大切にしている宝物を取り上げたり、ご機嫌を得るために自ら差し出す者もでた。彼女は時折その品々を見せびらかすのであった。私への母からの小包に入っていた人形も、彼女の指示で

誰かに持っていかれたことに気付いた時ばかりは、必死で取り戻しに行った。その剣幕に気おされたのか、あっさりと返してくれた。

旅館のすぐ横の道を行くと松林の丘に続いていて、天気のよい日は、そこにたくさん落ちている松ぼっくりを拾っては、ままごとのお金にして遊んだ。丘の上から村を見下ろすと、美しい景色がはるか遠くまでつながって、その向こうに東京があり恋しい家族がいるのだと思うと、決して口に出してはいけない「帰りたい！」という思いが胸いっぱいにあふれてくるのだった。仲良しの友達同士でも、少国民としての教育を受けていたし、帰りたいという言葉は禁句であったから、お互いに自分の心の中を語り合うことはなかったのである。

一日のうちで一番楽しみな食事がしだいに粗末になってきて、いつもおなかをすかせていたせいか、私は日記帳に食べ物のことばかり書いていた。

ある時、庭に干してある柿の皮を誰が食べたのかという詮議があり、先生に四、五人が呼ばれて、きつくしかられていた。旅館のおばさんが、豚のえさにするために干してあったのだというのだ。

冬になり、火鉢が座敷に一つずつ置かれた。二個の火鉢の周りに別れて座り、手をかざすと、どんなに詰め合っても大勢過ぎて、火鉢の真ん中で炭が暖かそうに燃えていても、小さな手は届かない。そんなふうに子供たちがどんな状態に置かれていても、誰も構ってはくれない毎日だった。

年が明けると連日の空襲警報と防空壕への避難が続いていたが、三月九日の夜中に東京方面が真っ赤に燃えているのを、皆で丘の上にたたずんで眺めていた。「私の家はどうなっているのだろうか？」炎が天まで溶かしている。「これからどうなってしまうのだろう？」布団の中で目を閉じても、さっき見た空がまぶたの中で燃え盛って眠れなかった。翌朝、一面に白い灰が丘を覆っているのを見て、空襲がどんなにすごかったかを知ることになる。

ほどなく、親たちが子供を引き取りに来て、焼け出された様子や地域の惨状を話しては、田舎の親戚（しんせき）に疎開するからと次第に人数が減って、最後に七人だけが残された。そして、私も居残り組になり、帰りたいという思いは封印されたままになった。

五月、残された全校生徒に、新しく一、二、三年生が加わり再疎開をすることになり、岩手県の黒沢尻駅（現在の北上駅）に向かうが、交通が途切れ途切れの状態だから大変な旅

になった。両国駅から上野駅まで歩き上野駅で乗り換えるわずかな時間に祖父と父が会いにきてくれた。渡された黒い皮袋の中に食べ物が入っていて、夜行列車の中で、一緒の席に座った年下の子供たちと分け合って食べながら、「ほんの少しでも帰れたら良いのになあ」と、窓に映る自分の顔を見詰めながら、「どうせ戦争で死ぬのなら家族と一緒にいたい」と考えると、切なくて胸の中が涙でいっぱいになるのだった。

目が覚めると、列車は残雪と満開の桜とりんごの白い花や新緑の木々に囲まれた田園の中を走っていた。

立花村正洞寺が、これからの生活の場になった。大きな由緒ある立派なお寺の本堂にある広い座敷で、一年生から五年生までの男の子も女の子も一緒の四〇数人と、四人の先生と三人の寮母さん、、廊下には仮設の棚が作られていた。

しかし非常時の状況下では、荷物が届くまで、かなりの日数を要するために、三人ずつに分散して村の家に預けられることになった。今度は近くの小学校に村の子供たちと混じって勉強することになっているため、預けられた家のおばあさんが持たせてくれたアルミのお弁当箱には、ご飯がしっかりと詰められ、野菜の精進揚げが添えられていて、心のこもった優しさがうれしかった。

その後荷物が届き、お寺に帰ってからも、東京に帰る日まで週末になると、その家に行っては泊まってくるようになり、シラミだらけの汚い女の子を、よくまあ世話をしてくれたものだと、大人になってからも恩返しを兼ねて現在まで親交を続けている。

お寺では、食事はカボチャやジャガイモの塩ゆで、ご飯は仏壇のお供え程度の量だったりで、特に男の子はいつもおなかをすかせていた。

お風呂は一度だけドラム缶で湯を沸かした中に順番で入ったが、それきり入浴はしなかったから、皆相当に汚かったことだろうと思う。

時折空襲警報が鳴ると、山の中に逃げて、山吹鉄砲を作ったり野イチゴを食べたりと、戦争の影響はあまり感じずに過ごしていたが、家族からは、手紙が来ることも出すこともなくなっていった。

朝、廊下で一列に並び、乾布摩擦をしている時に下着から、出てきて動いているシラミを見つけると、指先でチョンと弾いては床に落として……。たぶん、つぶすのも面倒だったのかもしれない。

ある夜、男の先生が「おいしかった食べ物を言ってみよう！」ということになり、皆が生き生きした表情で「あんパン！」「カレーライス！」「大福！」と叫ぶと、先生は「うん！うまいよなー！」とまるで目の前に置かれているような気分でこたえるのだった。

八月一五日。小学校の廊下に整列して聞いた終戦の勅語は、ラジオから流れる雑音で聞き取れなかったが、先生から戦争が終わったことを聞かされた。青い空と蝉時雨（せみしぐれ）の中で校舎は静まり返り、誰もが無言のままでいた。それぞれが、感じたものは何であったのだろう。「日本が戦争に負けた！」そしてこれからどうなってしまうのか。不安と安堵（あんど）の思いが交錯（こうさく）していたのかも知れない。「おうちに帰れる！」ひそかな希望が敗戦のニュースを押しのけていた。

間もなく世話になっていた村の家も出征兵士が帰ってきた。

北国の冬は早い。秋になり帰宅の予定は一一月下旬と決まったが、引き取り手のない子が何人か残ることになった。その子たちのために、薪を集めに毎日山に入った。もう寒くて、かじかんだ手に息を吹きかけながら木の枝を集めてひもで縛り背負ってくるのだ。四年生の私は女子では最年長だったから、何でも先に立ってやらねばならなかったのだ。

帰宅の夜行列車はひどい込みようで、窓ガラスはなく、冷たい風がびゅうびゅうと容赦なく吹き込み、乗車口から通路も便所もびっしりと人が乗っていて、身動きもできない状態の中を席に三人掛けで座っていたが、時間がたてば皆おしっこがしたくなる。それを寮母さんが、順番に抱っこしては窓からさせるのだが、風がおしっこを吹き飛ばして、寮母さんの手はびしょびしょであった。私はその時の光景を生涯忘れることはできない。六〇年の月日がたってしまった今でも、思い出すたびに、胸が熱くなってしまう。

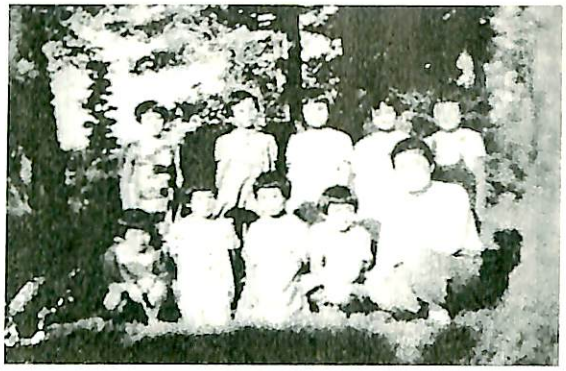
朝日がのどかに柔らかく差し込む上野駅から帰る途中の、瓦礫（がれき）と廃墟（はいきょ）の街を歩き、雷門の仲見世の前を通ると、人影もなく、焼けた建物が、以前のまま浅草寺まで続いていた。

学校の校庭で解散して、待っていた母と焼け残った家に帰り、私の学童疎開の生活は終わった。

※四方拝（しほうはい）四方のさまざまな神々を拝むこと



世話になった家の人たち



松丘村(千葉県)丘の上で先生とグループで



正洞寺(岩手県立花村)住職と先生、寮母さん、子どもたち



黒岩国民学校四年生全員といっしょに

学童疎開　亀山の思い出

小梅国民学校四年　三宅冨美江
（旧姓　片桐）

昭和九年一〇月本所区緑町三丁目で生まれ、四年生までこの土地で育った。人情のある下町だった。私が四年生になったころ、両国から線路沿いに百メートルが道路拡張のため何の賠償もなく強制的に家を取り壊されることになり、田舎のない親は伯父の住んでいた吾妻橋一丁目に引っ越した。緑町と違い住みづらい所で、転校した学校にもなじめなかった。

そんな生活の中、戦争もだんだん激しくなり、周りでは縁故で地方に越す人がふえていた。田舎のない私たちは姉と二人、集団疎開組に入った。家族と離れた経験のない私は、遠足にでも行くような気持ちが心の隅にあった。母は二人分の布団や持っていく物をそろえてくれた。父は二段重ねの引き出しを作ってくれた。引き出しの後ろには「小梅国民学校四年三組片桐冨美江」と墨で書いてくれた。今でも私の仕事場の手の届くところに置いてある。ただ一つの父の形見だ。

疎開先は千葉の亀山、今思えば東京から近く、海からも近い一番ねらわれやすい所ではなかったかと思う。出発の日は、夏の太陽が照りつけ暑い朝だった。両国まで歩き、改札口で見送りの父兄と別れた。その時はあまり寂しさの実感はなかった。電車が動き出し、私は座れず入り口で立って外を見ていた。建物の上で、男の人が電車に向かい手を振っている。その人はまぎれもなく父と兄だった。緑町の大黒湯を壊した跡地で、もしかしたら我が子が気付いてくれるのではと思い、一生懸命手を振ってくれていたのだ。その姿を見つけた私は、手を振り返すことも声を出すこともできず、ただ胸の中が熱くなり涙がにじんだ。転校して間もなくのことで親しい友もなく、自分だけ特別の態度をとることができなかったのだと思う。父と兄は、両国の改札口で別れ、急ぎ緑町の元の家跡にいれば姉か私が見つけてくれると思ったに違いない。今でもこの情景を思う時、私は済まない気持ちと家族の愛情の深さに泣けてくる。

―亀山での生活―

亀山駅に着いた皆の顔は一様にススけた顔をしていた。駅は木造の小さな駅だった。陽の光が強く土の乾いたにおいと木々の緑、蝉の鳴き声がとても印象に残っている。旅館のおじさんが迎えにきて各組別に別れていった。織本旅館までは小一時間歩いた。夕方になり、皆浴衣に着替え、誰言うとな

く「田舎の子、田舎の子」とはしゃぎ先生にしかられた。さすがに夜になり床に入り始めて、親と離れたことを実感し、あちこちで「クスン、クスン」と泣き声が聞こえてきた。毎日寂しい時は皆で「誰か故郷を思はざる」の歌を歌った。

日がたつにつれ、東京恋しい人が増えてきた。何しろ食べ物が足りないのだ。育ち盛りの子供が、お皿に薄く盛られたご飯では足りっこない。食事当番の時は、少しでも盛りの良さそうなのを自分のお膳に置いた。先生は大人なので少し盛りが良い。それがうらやましかった。

しばらくして誰から始めたのか、クスリを飲むことがはやった。親に頼み栄養剤を送ってもらった。ワカモトやビタミン剤一ビンを数日で飲んでしまう。飲むのではなく腹の足しに食べてしまうのだ。時には、腹具合の悪い時でも絶対おなかが痛いとは言わなかった。食事抜きにされるのがつらいからだ。東京もそのころには食糧難でなかなか食物は送ってもらえなかった。たまに小包を送ってもらっても食物は私たちの手元にはこなかった。どこで抜かれていたのか、今になっても考えたくもない。

それでも面会の時だけは親たちがおはぎやのり巻などリュックいっぱいにして持ってきてくれた。その時だけは腹十二分に食べた。親は一生懸命工面してくれたのだろう。面会も、だんだん戦争が激しくなってきたので亀山まで来ることができなくなり、回数も少なくなった。

私たちのそばの公民館に五年生の男子組がおり、そこへよく伝令役で友達と二人で行った。帰りには先生が必ずサツマ芋をくれた。「ここで食べて帰りなさい」と先生は言った。今の芋と違い水っぽくおいしいとはいえないが腹の足しになりうれしかった。また、山へ行くと柿を取り、手ぬぐいに包んで帰った。渋柿なので手ぬぐいが茶色になり、先生に知れてしかられた。誰言うとなく干すと甘くなることを知り、夜フトンの中で食べた。

お正月の雑煮（ぞうに）は初めてどんぶりで食べた。中身は八ツ頭の大きなのともち二個だったが、疎開して初めて腹にこたえた食べ物だった。そのもち代も親たちが集めて正月用に送ったと、後で聞いた。

二月ごろには、友達の中でも縁故疎開に切替えて帰って行く人が出てきた。ある日、父と兄が急に来たことがある。先生が私に「お父さんとよく話しなさい」と言った。何を言われるかドキドキした。父は「東京も空襲があり川口の方に越そうと思う。お前を迎えにきた」と言う。私は「帰らない」

と言い、父は念を押した。私は今すぐにでも帰りたかったのだが、言えなかった。父と兄は、がっかりした様子で帰っていった。その夜先生は皆に言った。「片桐は偉い。迎えにきても帰らなかった」と。私たちはいつも言われていた。「今迎えにきて帰る人は非国民だ。島流しにあう」と。そのことは父に言えなかったのだ。夜フトンの中で泣いた。一緒に皆の所に帰りたかった。後悔した。「お父さん、お母さん、兄ちゃん」といつまでも泣いた。

父たちは三月九日を吾妻橋で迎えた。亀山からも九日の晩、西北の空が真っ赤になっているのが見えた。焼けた紙切れも庭に飛んできた。東京の皆は大丈夫なのか皆で心配した。父たちは焼け出され隅田公園から草加まで命からがら逃げたそうだ。その後京橋の知り合いの家に移った。亀山の方も岩手県に疎開先が変わるという話が出た。

四月に入って父と兄が迎えにきた。その時は有無を言わさず「東京に連れて帰る」と言った。わたしも一緒に帰る気持ちになっていた。父は三月九日に死ぬ思いで逃げ、家族が無事だったので「お前一人が岩手に行っても、東京がまた焼けて孤児になるより死ぬ時は皆一緒だ」と言った。（その時点で亀山に残っている人は半分くらいだったろう。岩手に行った人はどうしていただろうか）その日のうちに父と兄と混んだ電車で、東京に帰り有楽町駅に降りた時の全身からホットした安堵感（あんどかん）、今でも覚えている。今までの緊張が解けた瞬間だったのだろう。

東京に帰って間もなく、近くの歌舞伎座に焼夷弾（しょういだん）が何発も落とされ、防空壕（ぼうくうごう）は危ないので築地の本願寺へ逃げた。本当の空襲の恐ろしさを知ったのは、それからだったが、いつも一緒に父母も兄も姉も弟もそろっている生活だった。

―追記―

疎開児に皇后様からビスケットをいただいたことがあります。その時詠まれた歌です

次の世を　背負ふべき身ぞ　逞（たくま）しく
　正しくのびよ　里に移りて

節をつけてうたったことを思い出しました。また、毎日の食事の時には、必ず次のことを言っていただきました。

箸（はし）取らば　天地御代の　恩恵み
　祖先や親の　恩を味わえ

四年生で意味が分かっていたのでしょうか。今回書いてみて初めて意味が分かりました。七〇歳にして。

東金学童疎開の思い出

菊川国民学校六年　酒井喜美子

今でも生々しく記憶がよみがえる思い出は、菊川国民学校の六年生の時のことです。日本の敗戦が色濃くなり始めた昭和一九年八月に千葉の東金町へ学童疎開しました。五年生、六年生の男子は八鶴湖畔の本漸寺へ、女子は東金高女の寄宿舎へ行きました。

両親と涙ながらの悲しい別れをして汽車に乗り、東金駅で下車しました。駅前通りでは、両側に東金町の人々や国民学校の生徒さんが鼓笛隊で出迎えてくれました。私たちの落ち着いた東金高女の寄宿舎は木造二階建てで、門を入ると左側に井戸がありました。私たち六年三組の三六名は、二階の中央階段の左手の部屋で生活をともにすることになりました。次の部屋は四組の生徒、その先の大部屋には五年生が入りました。荷物が着き、各々トランク、柳行李（やなぎごうり）などを整理し、部屋の壁側に一列に並べ、少しでも広く使えるようにしました。

授業は山添いにある東金国民学校の第二校舎で行われました。自由時間は山へシイの実を拾いにいって食べました。また、片貝海岸へ地引網にも行きました。

児童と父兄との面会も、数人ずつ順番にありました。我が子のためにおはぎや赤飯などいろいろ持ってきて一緒に食べ、涙ながらに東京に帰っていきました。日を追って戦争の足音がしのびより、父兄の面会もままならなくなりました。

毎日空襲の連続で、夜も洋服を着たまま眠り、枕元には防空頭巾、運動靴を置いておきました。昼も夜も警報が出ると校庭を走り、裏山をよじ登り、横穴の壕（ごう）に何度も避難しました。

この日は横穴の壕に入ったきり外へ出ることができませんでした。飛行機が胸に響く音で飛来しては爆弾を落とし、これでもか、これでもかと襲いかかる攻撃で、私たちは真っ暗な壕の中で身動きせず、ただおびえていました。この日のことを私たちは決して忘れることができません。

戦争は激しさを増すとともに物資欠乏となり、このころは食糧さえなくなりました。毎日わずかな「すいとん」だけでした。食器は竹の節の所を切り、深さ八センチくらいに切った器でした。「ああ、今日はすいとんだ。」と器をのぞきこむと、卯の花（おから）を固めた団子に小麦粉をつけたのを汁の中に入れたので、箸（はし）でつかむとバラバラに散り、

ただのお吸い物になってしまいます。

いろいろの思い出を残し、三月一日、卒業式と受験のために帰京しました。そして三月九日の東京大空襲により、同級生の半数以上が亡くなり多くの犠牲者を出しました。私も火に追われ、姉と兄と江東橋の上から川に飛び込み奇跡的に助かりましたが、兄は十五歳の若い生命を失いました。

亡き友の霊を慰めるために、生存した人たちで三三回忌まで法要を続けてまいりました。友をしのぶ石碑を学童疎開地の本漸寺境内を出た山門前の八鶴湖畔に建てました。同じ苦楽をともにした友達のご冥福を心から祈っております。

同窓生が今なお固い友情で結ばれているのは、こうした集団生活の中で生まれたもので、耐え忍ぶ強い精神修養ができたことは非常な誇りでもあります。

平成元年一〇月に疎開の思い出を語り合う会がもたれました。東金の地で、当時お世話していただいた方と疎開児童が四五年ぶりの再会をしました。その時、寮母さんが「少しでも量を増やそうと考えて調理した」と話をされていました。私たちの体を常に気づかってくださった寮母さん、毎日の食事の支度にご苦労をおかけした炊事場のおばさん方に深く感謝しております。

東金の美しい自然は変わらず、疎開地の東金がますます発展しますように、そして皆々様がご健勝でありますように心よりお祈り申し上げております。

時は移り変っても、人々の心は変らず、優しく親切にされましたことはいつまでも忘れません。私たちは生きている喜びと、残りの人生を有意義に過ごして参りたいと思っております。


疎開児童45年ぶりに再会

国民学校跡や九十九里浜に感慨深げ

23人思い出談議

郷土研究好会らが企画

平成元年10月８日千葉日報北総版記事


疎開当時の菊川国民学校児童

学童疎開体験記「私の縁故疎開」

菊川国民学校二年　樋口　実

その日の放課後、私は、妙にせかされる気分に襲われ、駆け足で大子国民学校からの帰り道を急いだ。私が一年前、東京の家族と離れ、茨城県最北部にある大子町に縁故疎開して、寄宿している伯母の家に帰り着いてみると、やはり予感が当たって母と妹たちの姿はなかった。

それでもなお、田舎のだだっ広い家の中を、あちこちと母の姿を求めて探し回る私に気付いた伯母から、「かあちゃんたちは、昼前の汽車で東京へ帰ったよ」と告げられて、ついにあきらめた私であったが、それが、母や妹たちとの永遠の別れになるとまでは気付いていなかった。

前日に行われた学校の学芸会で、私が演じたアメリカ兵の将校が、「ヘルプミー」と英語で叫びながら、両手を挙げて日本軍に降伏した姿がおかしいと、これを見物した母から昨夜からかわれた私は、そのとき、むきになって母の胸に飛び掛って行ったものだ。その際、私を受け止めてくれた母の身体のぬくもりだけは、六〇年後の今も忘れることができない。

昭和一九年の春になると、戦況は極めて険しくなり、私どもが暮らしていた旧本所区竪川町周辺でも、首都防空対策の一つとして、例えば、菊川国民学校の周囲を取り巻く家屋は強制退去させられ、空き家となった家は防空団員の手で縄を掛けられ、引き倒されて間引かれた。

幼い児童に対する疎開政策がとられたのもその一環であり、私の家では、翌期に国民学校三年に進級する私が児童疎開の対象となったことから、母の強い意思により集団疎開ではなく縁故疎開をすることとなって、昨春、茨城の伯母の家に移転していたのである。

私の一〇歳上の長兄も、府立三中(現在の両国高校)を卒業後、旧制高校の受験に失敗した後、徴兵逃れもあって、同じ伯母の家へ寄宿して、私と同じ大子国民学校の代用教員になっていた。

母たちが茨城から東京へ帰って三、四日後の午後のこと、私が級友たちと授業終了後の教室掃除をしていると、教員の兄があわてて駆け付けて来た。私を廊下に呼び出すと、東京の家が空襲にあったことを告げた。

昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲については、茨城北部の田舎に住む私どもには噂さえ届かず、もちろんラジオでも

報じないから、知るはずもなかった。たまたま、東京で省線の運転手をしているいとこがいて、無料で汽車に乗車できたことから、二日がかりで何とか列車を乗り継ぎ、その日の昼、伯母の家までたどりついて、私の家の被災を知らせてくれたのだという。

当時のラジオ放送では、常に「我が方の損害は軽微なり」で済まされていたから、三月一〇日の東京大空襲の被害がどのようなものであったかなど、地方にいては予想もつかないのだ。このとき、教員の長兄から、「いとこたちともに東京へ行って来るので、気持ちをしっかり持っているように」と言われた私は、教室の廊下で、ただ涙を流すばかりであった。

他方、このとき父親は、いっそ家族全員での疎開をと考え、父の郷里である山形の親戚（しんせき）へ折衝のために行き、東京を離れていたため、被災を免れたという。

結局、本所の家に残って勤労奉仕をしていた姉と次兄、それと、わざわざ空襲の前日に茨城から東京に戻った母と妹二人の計五人の家族が、このときの犠牲者となった。

後日、山形からやっとの思いで上野駅に帰り着き、家があった現地を訪れた父は、家の裏手にあたる菊川国民学校の無残に焼けただれたコンクリート校舎を除き、周囲は全くの焼け野原となっている惨状を目にして、ぼう然自失するのみであったという。

家跡の地下壕（ちかごう）もすっかり焼け落ちていて、焼け跡から掘り出されたものは、すすけたアルミの鍋一個だけであった。

菊川国民学校校庭に隣接する公園には、すでに大きな土の山が盛り上げられ、学校の講堂内とその周囲で被災したおびただしい数の遺骸は、とりあえず公園の土中に埋め込まれたのであった。

父親は、近間の横川、竪川などの河川周辺も捜し回ったが、そこここになお残置された無残な遺骸から、家族と判別できるはずもなく、山形から持参した握り飯がすえて食えなくなるまでの二、三日の間、ぼう然と周辺をさまよった挙げ句、あきらめて、茨城北部にいる息子たちの疎開先に戻ったのであった。

あれから六〇年を経た今、戦災を逃れた父と兄もすでに亡く、一人生き残っている私は、縁あって茨城の一隅に居住しているが、三年に一度ほどは、旧本所区竪川町を訪れ、菊川小学校の校庭で遊ぶ児童たちの元気な姿を道路ぎわから見つ

める。その後、同公園の南角にある榎稲荷にもうで、その傍らに建つ戦災犠牲者を供養する菩薩像に両手を合わせることで、母や兄姉たちの霊にわびている。私の気持ちとしては、もはやわびるしかないのだ。

ちなみに、この菩薩像は、石黒様の寄贈と記されているが、もしかすると、かつて父が勤めていた石黒製材工場のご主人かもしれない。

集団疎開をかえりみて

菊川国民学校四年　間宮好枝
（旧姓　金谷）

両親と妹を戦災で亡くしました。

昭和一九年、当時本所区竪川二丁目二四番地に、両親と妹一人そして私の四人家族でいました。私たち姉妹は菊川国民学校へ入学いたしました。

四年の時に、上級生とともに千葉県山武郡大網町新増旅館へ集団疎開しました。男子生徒はお寺でした。疎開した当時は寂しくて泣きました。一人が泣くとみんなにうつります。家に帰りたくなった時、何人かで駅から線路を東京方面へ向かって一駅くらい歩いたこともありました。昼間は勉強していたと思いますが、当時の記憶がはっきりしません。

戦争も激しくなり空襲警報もたびたびです。夜間の空襲は大変です。起きて着替えをすませて避難しなくてはなりません。泣いている生徒もいました。たぶん救急袋だと思いますが、肩からかけて防空頭巾をかぶり手をつないで山の奥の防空壕（ぼうくうごう）へ避難しました。

昭和二〇年三月一〇日未明、あの大空襲が起こりました。西の空が何日も鉛色でした。生徒のご両親が命からがら逃げてこられて「ほとんどの親御さんは死んだ」と話していたのを聞きました。私たちはいつまでも泣き続けました。

それから何日後か分かりませんが、たぶんここにいては危ないということでしょうか、約七か月お世話になりました千葉県から、三月か四月ころだったと思いますが、岩手県の岩手山の近くの岩手屋旅館（だったと思います）に再疎開しました。

四年生から五年生になりました。そこでは毎日が勉強よりも勤労奉仕が多かったと思います。開墾がほとんどです。山を切り崩し、木の根っこ、草の根っこ、石ころなどを取り除きました。それから草むしり、大きくなったジャガイモの葉についたテントウムシを手で取りつぶしました。時々は村のおうちへ行きお風呂と食事をいただきました。また、自分たちの食糧として山へ山菜採りに、枯れた木々を薪にと持ち帰りました。

私はお友達とも寮母さんとも大変仲良くしていただきましたので、それなりに毎日楽しくしていました。いろいろお手伝いをしました。雑炊をたく火加減の番や盛り付けて配膳、食事の後は村に流れている堀で食器洗いなどをしました。

時々はお部屋で勉強しました。自習の時は漢字書き取り、ソロバンを一生懸命やりましたので大変上達しました。

また、地元の小高い丘の上にある小学校へ時々勉強に行きました。旅館から小学校まで整列して行きました。校門の前で全員で一礼して校内に入りました。

八月一五日終戦。当日は大変なお話があるということで、みんなラジオの前に集まりました。天皇陛下のお言葉でした。そこでもみんなで泣きました。

詳しいことは分かりませんが、身寄りの分からない生徒は戦災孤児院へ行くと聞きました。私は薄い記憶をたどり、小さいとき家族とたびたび遊びに連れていってもらった親戚（しんせき）の住所を、ところどころ思い出して手紙を出していただきました。それでも手紙は着いたようです。一〇月ごろでしたか、遠い岩手県まで迎えに来てくれました。

翌昭和二一年三月法要をするために、一月の末に東京へ向かいました。父親が勤めていた会社、当時墓地になっていた猿江公園、家族で住んでいた住居跡など全部尋ねましたが手がかりはありませんでした。再び住居跡にもどり、土を掘り返し家族の形見になるような物を探しました。鏡台のあったところに髪にさすピン止めがグニャと固まりになっていた物、私と妹で遊んだオモチャ箱のあったあたりでおままごとに使ったガラスの食器がこれもグチャと固まって出てきました。父の形見も見つけて持ち帰り供養をしました。

今はこちらにいますので、春と秋のお彼岸と命日には、慰霊堂へ伺っております。お盆には、故郷のお寺とお墓は欠かさずお参りしております。

集団疎開そして縁故疎開

菊川国民学校四年　村田繁彰

私は、昭和一六年、名称が小学校から国民学校になった年の入学生です。そして一二月八日大東亜戦争が始まりました。初めのうちは勝ち戦の報道ばかり、確かに昭南島を落とし提灯行列などしました。

一七年には空襲警報のサイレンは鳴りませんでしたが、B25が来襲し、亀戸の上空で大きな飛行機に小さな飛行機が迫り落とされました。噂では亀戸精工舎の門のそばに落ちたとのこと。それも日本の飛行機でした。

一八年になると授業のなかに、モールス信号、手旗信号などが入ってきました。また、学校に隣接する家は軍隊が来て強制的に取り壊しました。学校の窓は角材でふさがれ日中の授業にも電気をつけていました。学校には防空頭巾、ゲートルなどを常に持って行きました。

一九年になり三年生以上に集団疎開の話があり、田舎のある人は縁故疎開、そうでない人は集団疎開ということになりました。

三年生の男女と四・五年生の女子は千葉県大網に、四・五年生の男子は千葉県土気に、六年生の男女は千葉県東金に集団疎開する事に決まりました。私は土気に、三年生の妹は大網に、一年生の弟は家に残りました。身のまわりのものは先にチッキで送り、両国から汽車で土気に向かったのが一九年の八月の下旬か九月の上旬でした。

四年生は千葉県山武郡土気町本壽寺でした。五年生は当時大網と土気の間にトンネルがあり、その右の山の上のお寺に疎開しました。四年生担任は瀬底先生、五年生は豊岡先生でした。

土気駅は踏切手前にあり、線路左側の道沿いに学校、町役場があり、高等科の生徒と国民学校の児童が並び、高等科の生徒は木銃を持っていました。学校で歓迎会をしてくださいました。トウモロコシにサツマイモだったと思います。大変なごちそうです。当時東京では、家でのご飯には、米にフスマやカボチャの種が混じり、レストランのご飯には米に乾めんが小さく折って入っていました。当然、野菜も食物もすべて配給制でした。充分においしくいただいた記憶があります。歓迎会が終わり、校門を出て左に曲がり右側の線路沿いに大網方面にしばらく歩きました。踏切がありました。右に曲がり、渡り切ってすぐ左に曲がり、幅三尺（約一メートル）く

らいの山道を登りました。登り始めの右側は野原で雑木林に続いて開けてきました。畑があり、また右に曲がりました。右側の最初の家が和尚さんの住まい、そして井戸があり、一四～一五間（約三〇メートル）離れて本堂がありました。そこが私たちの宿舎でした。五尺～一間（約一八〇センチ）の回廊があり、前には高さ六尺（約一八〇センチ）以上周囲六尺もあるコンクリでできた天水おけのある本堂でした。

その夜に先生が私たちを集め、一班から一〇班に分けました。一班一〇名前後だったと思います。私は四班でした。同じ班にはいつもの遊び仲間、同じ町内のS君、T君が一緒でした。班には班長・副班長・給食係の三役が作られ、班長にS君、副班長に自分、給食係にT君、一班の班長が当時の級長です。当日の夜から困ったのが便所でした。かなり離れていましたが、本堂の前、右にはお墓が見え、後ろが竹やぶ、その竹やぶの前が便所でした。大人は先生ご夫妻と寮母さんが四、五人いましたが、起こすわけにはいきません。班員全員に声をかけ、用を足しに行くのですが、五燭（しょく）の電球に黒布がかけてあるので、暗さと竹やぶの音ですごく怖かったのです。

朝、太鼓の音で起床の声がかかり、各自が布団をたたみ布団部屋に班ごとに積み、天水おけのボウフラを分け柄杓一杯の水で洗顔し、井戸水一杯の水で歯を洗いました。その後本堂の前に班ごとに縦に並び各班長が点呼をとり、それぞれ先生に異常のなかったことを報告し、前後左右に手を開き乾布摩擦をし、体操をし、終了後散会。各班担当場所を掃除して朝食。そして自習でした。

次に困ったのが風呂でした。風呂場ができていなかったので山を降り、農家にもらい湯に行くのです。三班ぐらいまでが行くうちに風呂場ができ、四班の人はもらい湯には行かないですみました。

昼食、夜食もちゃんとした食事でした。幾日もしないうちに午後から学校に行き授業を受けるようになりました。そのうちに牧場をしているたしか石井さんという方の家に、起床後三人で牛乳をいただきに行くようになり、一〇時にそれを飲みました。農業委員会に頼んで芋飴も取りに行きました。食事には肉も出るときもあり、食生活は東京にいるときより恵まれていたと思います。九月の終わりか一〇月の始めに運動会がありました。私たち疎開組の徒競走の番になり、一組目に私は並び先生の号令がかかり構えました。そのとき、隣の役場の半鐘が空襲警報を告げました。急いで逃げ帰りまし

た。それ以来、夜に空襲が多くくるようになった気がします。空襲になると竹やぶの中の防空壕（ぼうくうごう）に逃げるのです、すると缶詰二個とふかしパン二個が配られます。空襲解除になると缶詰は返しますが、パンは翌日のおやつになりました。

そのころから皆、体にかゆみを感じるようになりました。ある日、通学路の野原のところで裸になり、下着を見るとシラミがいっぱいいるのが分かり、全員が裸でつぶしました。最初に言い出したF君は下着を捨てました。無理もないことです。風呂は各班全員で家庭用の風呂おけで五分間の間に終了しなければならないし、よく面会に来る家庭と来ない家庭があり、その差は大きかったと恩います。

その間、四班の班長が歯痛で自分が付き添い大網の歯医者に行きましたが、結局手術をすることになり、東京に帰りそのまま戻って来ませんでした。そのため自然に自分が班長になりました。

ある夜に度胸試しをする事になり、山門まで一人ずつ行き証拠を持って帰って来るのです。なかには行かなかった人もいましたがいじめたりからかったりはしませんでした。

先生や和尚さんにはいろいろ教えていただきました。毒をもった蛇の見分け方、ドングリとシイの実の違い、全員でリヤカー一杯の渋柿を買いに行き皮をむき干し柿を作り、畑に芋を作付けし下肥をまき、炭を焼き取り出すなどさまざまなことを教わりました。

良いことばかりではありません。先に言いましたように、親が面会に来られない児童のなかには「帰る」と言い、線路を歩き出す人もいたのです。そのたびにみんなで引き止めるのに必死でした。また面会にきた母親と別れるのがつらく、毎度泣く人もいます。

一二月になり、私は二五日が祖父の一周忌のため、二四日に東京に帰りました。その夜、浅草に焼夷弾（しょういだん）が落とされ、そのすさまじさは見た人でないと言い表せないと思います。

二〇年一月五日だったと思いますが母の実家に行きました、茨城県北相馬郡布川町馬場に家があります。夜着いたのでご飯がなくそばがきを初めて食べました。翌日から住まいに行きました。祖父の経営していた芝居小屋でした。土間に六畳、段差がある奥に押入のある九畳の部屋でした。田舎なので映画館も兼ねていました。

実家の前の家にいた同年の人が級長でしたので、同じ疎開

組の仲間のようにはいじめられませんでした。

そして三月九日に父が米を二升とカンナ、ノミ、ノコギリ、バリカン、カナヅチを持って来ました。父は一九年に傷病兵で帰ってきてまだ病が治っていなかったので発熱し、その夜は泊まりました。夜中に空襲があり、東京方面が真っ赤に染まっていました。翌朝、私は学校に行きました。校庭に燃えかすが落ちてきました。それも大きくて数も多かったのでびっくりしました。家に帰ると父はいませんでした。母に聞くとおにぎりを持って東京に行くと出たそうでした。夜、父が帰って来ました。布佐の駅から、上野駅へは不通だったので成田に行きましたが、そこから先には行けないので、おにぎりを逃げてきた人に渡して帰って来たとのことでした。翌日、父は東京に向かいましたが、その結果は話してくれなかったように思います。

二、三日すると、家の前を罹災者が大勢通ります。その姿は衣類はボロボロに焼け、顔手足はやけど、やっと歩いていました。

四、五日目に、徴用に行っていた叔父、家で働いていたOさんが来ました。そこで初めて、私は東金に疎開していて卒業式のために帰京していた六年生のいとことその兄姉、また、土気に一緒に疎開していた四年生のはとことその家族の行方が分からないと言うことを聞きました。

結果は、はとこたち家族は全員死亡、いとことその姉だけが助かりました。いとこの兄は泳げるので、火除け（ひよけ）の刺し子を着ていたのに早く川に飛び込み、次々に飛び込んでくる人たちの下敷きになり亡くなりました。女たちは泳げないので、どうしようもなくなるまで橋の上にいて飛び込んだのがよかったと言うことでした。いとこの手にはやけどの跡がいまでもあります。

土気で一緒にいたT君は、菊川国民学校の校内を逃げ回り、昇降口二階の窓から授業時間を知らせる鐘を吊るしてある庇（ひさし）に飛び降り、助かったと後で聞きました。

二一年八月、東京に来て菊川公園を見たとき、そこは焼けた自動車の山でした、二二年三月に来たときは、そこには四五一五人の人が点々として埋められていました。

学童疎開の思い出

二葉国民学校六年　大橋敏雄

昭和一九年、私が六年生の夏休みまでは日本は戦争に勝っているとばかり報道されていました。突然サイパン島が玉砕し、東京も爆撃範囲となり、空襲の被害から逃れるために国民学校初等科三年生以上は疎開しなければならないという緊急措置が採られました。集団疎開か縁故か決めなければならず、私の場合は翌年の進学のこともあり集団疎開に行くことに決めました。

昭和一九年八月二六日朝、両国駅より、本所区に指定された千葉県長生郡に出発しました。六年生男子は約一〇〇名、女子は約七〇名で往きの列車の中は遠足気分ではしゃいでいました。茂原駅に着くと町の人がトラックで出迎えに来ていました。男子は長南町の長福寿寺、女子は豊栄村の称念寺と水上村笠森の大勝館に分宿することになりました。

目的地の長南町の長福寿寺の近くで降り、これからお世話になるお寺に向かいました。先ず三途川に渡してある今にも壊れそうな木の橋を渡り、大きな山門をくぐると両側に松の並木が続き、大きな本堂が静かなたたずまいを見せていました。整列して進んでいく時、みんな親元を離れこれから暮らす寂しさより緊張感で胸が締め付けられる気持ちになりました。本堂には、随所に菊の御紋章があり、子供の手でもふた抱えもある黒々とした太い荒削りの柱がありました。聞くところによると織田信長の比叡山焼き討ちの時に焼け残った根本中堂の柱をはるばる京都から運んできたものとか。またご本尊の前には桓武天皇勅許の大きな金色の額がかけてあり大変由緒のあるお寺とのことでした。

本堂での生活は、内陣の横にある大太鼓を六時に担任の吉野先生がたたき鳴らし、起床の掛け声とともに起き、自分の布団を片付け、分担してぞうきんがけや掃き掃除をしました。終わると本堂の前に整列し、上半身裸で毎朝二キロほどの田舎道を大きな声を出しながら駆け足をしました。それから朝食でした。育ち盛りの子供のことですからいつもおなかをすかしていました。戦時下で食料がなく稲を刈った後の水田に入ってタニシを拾い、食事係のおばさんがみそ煮にしたのを夕食のおかずとして食べました。さつま芋のくきの煮物も食べた記憶もあります。なかでもおいしかったのは朝食に一かけらの大きなバターをご飯の上に乗せて食べたことでした。ご飯はさつま芋がたくさん入った代用食でしたが、熱いご飯

にバターがほどよく溶けて口の中がとろけるようなおいしさでした。

農家のお手伝いで、田んぼに入って田の草取りの作業をしていると、大きなヒルが足に吸い付いて血が止まらないと言って大騒ぎになることもありました。

秋には山にチョマという麻の代用になる草を採りに行きました。軍服や雑のうにするとのことでした。

北風の吹く冬には丘にある畑に行って麦踏みをしました。寒い中でなぜ麦踏みをするのかたずねると、霜柱が立って麦の根が浮いてしまうので、丈夫に育てるためには何回も麦踏みをするとのことでした。都会生活では知らなかったいろいろなことを覚えたことも大人になってからのよい経験となりました。

疎開するまでは食料不足も知らずにおやつを食べ慣れていた私たちは甘いものを欲しがり、知恵を絞って長南町に一軒しかない星野薬局へ押しかけ、のどの薬で「チミコデ」という甘いシロップを買い、また少しでもおなかの足しにと、胃腸薬の「わかもと」「オブラート」まで買い込むほどでした。一〇〇人からの食べ盛りの男の子たちが押しかけるので、お店では先生の許可がなければ薬は買えなくなってしまいました。みんなおなかをすかし、みかんの皮の干したのまで、苦いばかりでしたが、良く食べたと思います。東京から着いたばかりの八月に、本堂の階段に並んで撮った写真と帰京の時同じ場所で撮ったのと比べると、どの児童も太ももや腕がまるまると太っていましたが、六か月あまりで帰る時はみんなやせ細っていかに食物が不足していたか物語っていました。

二月に入ってからだと思いますが、空に大編隊の戦闘機が見えたのでみんなで本堂の前に出て「日本にもまだこんなに飛行機があった」と全員が「万歳、万歳、万歳」と叫んでいました。そのうちの二、三機が急降下してきてバリバリと機銃掃射をしてきました。敵襲と気がつき、あわてて本堂の中や木陰に逃げ込みました。この時の飛行機はグラマンという艦載機で実弾が近くに撃ちこまれました。これが自分にとって戦争という初めての恐ろしい体験でした。

悪いことばかりではなく楽しいこともありました。町の鎮守様のお祭りで奉納子供相撲大会があり、疎開児童の中からも代表が出場して次々と勝ち進み、花を持たせてくれたのか優勝までしました。また、「たるみこし」を造っていただき町の中を練り歩きましたら、地元の人々がさすが本場の相撲と祭りの盛んな江戸っ子だと、やんや、やんやと手を打って

はやしてくださいましたが、子供たちを励ます温かい地元の人たちの心遣いだったと今になって思えてきました。

疎開生活も長くなり、物資不足で石けんなどもなく、下着にシラミがたくさんたかり、下着をドラムカンに入れて熱湯で消毒しても卵はなかなか死にませんでした。髪にもシラミがたかり頭を剃った人もいました。

三月五日、卒業のために東京へ帰る日が来ました。八月から三月までの半年の期間、大人の言うことを聞かない男子児童を一〇〇人も預かり、骨身を削って食料の調達に奮闘してくださったお寺の長山住職や長南町のたくさんの人たちのお陰で、飢えることなく無事に帰京することができました。

帰京した六日の日は、夢にまで見た浅草の映画館に友達二、三人と映画を見に行った覚えがあります。当時は今のようにテレビはなく、家庭での楽しみはラジオだけで最大の娯楽は映画でした。

夜は定期便のように、毎晩警戒警報のあと空襲警報が鳴り、家の前の防空壕（ぼうくうごう）に逃げ込むのが日課でした。

帰ってきてから四日目の三月九日夜、明日は二葉国民学校初等科の卒業式だということで早めに寝床に就きました。いつもとは様子が違い夜中の一一時ごろいきなり空襲警報でたたき起こされ、急いでいたせいか編み上げの革靴を素足のまま履いて防空壕に入りました。しばらく防空壕にいましたが、母が大きな声で「逃げなければ駄目だ」と言うので壕から出てみると、深川、蔵前、浅草、亀戸と四方を火に囲まれてどこへ逃げたら良いのかわからないありさまでした。もちろん停電で電気もつかず大事なものを外へ出そうと家の中に入ると、天井が抜け落ちてほこりだらけで家の中はめちゃくちゃになっていました。「ともかく子供たちだけでも先に逃げなさい」と母が言うので、三つ上の兄が自転車でリヤカーを引き、いくらか積んである家財の上に五つの弟を乗せて、私はリヤカーを押して避難場所の二葉国民学校へと向かいました。これが母との永遠の別れとは露知らず、戸締りをして後から来るものと信じて逃げました。

焼けている家の明かりで昼間のように明るい空を見上げるとB29が超低空で飛んできてドラムカンみたいな物を落とし、それが途中まで来ると破裂して無数の小さな管になって落ちてきました。それが焼夷弾（しょういだん）だということでした。また、ほかのB29も超低空でゆっくりと飛んできて、先端の銃座にいる若い兵士が逃げ惑う市民を機銃掃射している姿がいまだにまぶたに焼きついて離れません。避難指

定地の二葉国民学校の玄関に着きましたが警防団の人が扉を閉めて、もういっぱいで危険だからよそに行くように言われ、やむなく割下水の方角に向かったものの、すごい西風で火の粉の吹き荒れる中をヤッチャ場めざして、何とか火の粉の来ないところに逃げ延びました。

翌朝、火事で燃え残ってまだくすぶっている町で、母親を探していると、横網は安田学園が避難場所と教えられ、探しに行きましたが見つけることができませんでした。見渡す限り焼け野原となってしまい二葉国民学校へ行くため蔵前通りに出てみると、よほど熱かったのか用水槽に人が頭から入って黒焦げになっていました。石原一丁目の交差点の真ん中でも男女の区別ができないほどの状態で焼け死んでいる人たちを目にしました。

二葉国民学校に着いてみると、昨夜は入れなかった扉が開いていて、玄関ホールの左側には黒いものが山になって上から青い火がぼうと燃えていました。校庭のプールではまさにこれが地獄かと思われるほどの多くの人が中で亡くなっているのを目にしました。私が学校で見たのはまだ一部分で、地下の防空壕や、校内中が死人の山になっていたようです。あくる日には死体は片付けられていましたが、人の形が壁のタイルにそのまま焼きついていました。

結局、母はどこで行方不明になったか分かりませんでした。私が目にしたあの大勢の中にいたと思わざるを得ません。父は召集で茨城県に行っていて不在で、母は行方知れずで、兄弟三人で父の実家の富山県まで命からがら逃げて行きました。私はその時の靴ずれの傷からばい菌が入り骨髄炎（こつずいえん）になり、今でも右の膝下に大きな傷跡が残っています。

昭和四九年三月一〇日、学童疎開から卒業式のため帰京し未明の大空襲に見舞われ生き延びられた同期生百余名が、二九年ぶりに吉野先生をお迎えして思い出多い二葉国民学校で、自分たちの手で晴れて卒業式を挙げることができました。卒業式を済ませて、午後は、生き残った仲間たちとお世話になった長南町と長福寿寺へお礼に伺いました。長山住職の墓前に参り、ご子息の長新師の計らいで、戦災死した学友の三〇回忌の法要を長福寿寺にて営むことができました。

学童疎開の手記を書き始めたら、あの時の記憶が昨日のように鮮明に思い出され、六〇年たってもいえない戦争の悲惨さをまざまざと思い知らされました。そして、今、この平和の時代を生きながらえた幸せに感謝する毎日です。

学童疎開の思い出

二葉国民学校五年　沖田喜代子
（旧姓　和田）

私は昭和一九年当時、東京都本所区石原一丁目で魚商の父、母、七人の兄妹の家族で暮らしていました。二葉国民学校五年生でした。戦争のための国策で、私と弟は学童集団疎開に行くことになり、場所は千葉県でした。八月二六日両国駅から出発しました。駅まで送ると別れがつらくなるとかの理由で、校庭での式の後それぞれの車輌に乗り、旅行にでも行くような気持ちで目的地に向かいました。五年生と三年生の女子は茂原という所へ着き、地元の学校では歓迎会を開いてくださり、スイカをごちそうしてくださったと記憶しています。

私たちのお世話になる所は、藻原寺という上総第一の立派なお寺でした。私たちには何も分からないまま新しい生活が始まりましたが、トイレやお風呂が完成していなくて、お寺のお客様用を借りたり町の銭湯へ行ったりしました。

町には飛行場があり、そこの兵隊さんたちが慰問に来てくださって、子供たちとの交流もありました。平和な生活が続いていましたが戦況はますます厳しくなってきて茂原の町にも空襲があるようになり、学校からの帰り道で機銃掃射に追われることもあり、怖い経験をしました。飛行場があったせいだと思います。ある日お寺にいて空襲があり、箱型で屋根のない防空壕（ぼうくうごう）にみんなで避難した時、頭の上空で機銃戦が見え子供たちがブルブルしているのに、寮母さんと男の先生の口争いが起こりました。「こんな頭の上を流れ弾が危険だから、お寺の回廊の下の中に入れたほうが良い」と寮母さん。「こんな最中に人を動かせるか」と先生。でも私たちは恐ろしくて夢中で回廊の下へ逃げました。

私は記憶がとびとびで月日は分からないのですが、貴重だったキャラメルがたくさん届いたことがありました。たぶん飛行場のどなたかがくださったのだと思いますが、そのキャラメルを夜中に誰かが盗んで食べたらしく少なくなっていたのだそうです。このことで、みんなが調べられてイヤな思いをしたことが、今でも心に澱（おり）として残っています。

そして三月九日の夜、私はなんのせいか眠れず、外の強風のうなりを聞きながら、また、本堂（寝ているところ）の天井の四隅の暗い影におびえながら一夜を明かし、朝、庭を見たときの驚き。そこには焼けただれた紙などが一面に散らば

っていたのです。私たちのいたお寺は、深い森に囲まれていて四方が見えませんでしたので何のことかは分かりませんでした。

東京の空襲らしいと先生が上京して調べて来ましたが、その内容は手紙と共にしばらくは知らされませんでした。

そして、一人ずつ呼ばれ事情を説明されました。私の家も焼け、弟が亡くなったようだと知らされましたが、末の弟は縁故疎開で田舎へ行ったので本当だとは思えませんでした。(後で、やっぱり違っていました)

その三日前の三月六日には、他の寮にいた六年生の方たちが帰京するので見送りに行ったのに、その何人かの人が犠牲になられたようでした。

家を焼かれ家族バラバラになって、まして千葉も危ないとなっては、二次疎開の話が出たらしく岩手県に行くことになりました。

新学期に入って、四月の下旬ごろ再疎開に向けての準備が始まりましたが、私は前年の四年生のときに病気をしたこともあり、寒い東北ではムリではないかと、母の田舎の埼玉へ帰ることになりました。一級下の弟は岩手へ行くことに決まり、母と一緒に弟の寮へ行きました。一宮の奥のほうにあった東村分教場という所で、そこは小高い場所にあり東京湾が見え東京方面も見えました。泊まった夜に空襲があり、夜空に照明灯の浮かんでいるのが見え、空が真っ赤に染まっていたのを初めて見ました。

私が疎開生活に別れて埼玉の田舎へ帰ることは大変でした。汽車に乗るのに切符が買えず、母は傷痍軍人(しょういぐんじん)にお金をあげて切符を買ってもらい、やっとのことで真っ暗な田舎の村へ帰ってきました。そのころの親は大変だったと今更ながらしのんでいます。

その後一二月に、弟は父が迎えに行き岩手から帰ってきました。

戦争中は自分だけでも大変な生活だったのに、見知らぬ疎開児童たちの面倒を見てくださって、本当にありがたく思いました。世の中が落ち着いて何年かたって、母と私は岩手のお世話になった方々にお礼のごあいさつに訪れました。町の学校に二葉の机や椅子が残っているのを見せてくださいました。無理にお願いしたのでしょうから、その見返りを、国や都、区はお返ししたのでしょうか。

私も古希を過ぎました。六〇年もたったなんて夢のようです。現在こんな良い世の中なのに、不平や不満がうずまいて

悲しい限りです。少し昔に戻りませんか。

まだまだいろんなことがあって書ききれません。

後は霧の中にとどめておきましょう。

そうそう最後に思い出したことがありました。その後、茂原には二度行きました。一度目は母と妹たちと、二度目は私一人で。そのとき、お寺の様子が違っていたのでお聞きしましたら、何年か前の地震でこわれて改築したそうでびっくりしました。私は同じ県に住んでいても知らなかったのです。茂原の町もすっかり変わり、裏山には公園が整備され市民の憩いの場になっていました。お寺には私の気持ちだけでしたが、お賽銭（さいせん）を入れさせてもらい帰ってきました。

歳月って本当に早いものですね。

学童疎開体験記

二葉国民学校六年　髙橋千枝子

サイレンの音と共に防空壕（ぼうくうごう）に滑り込みます。皆の避難を確かめ、父はいつものように消防署に出かけました。今夜はいつもと違いB29の数も多く飛んできます。そのうち、北の空を見ると焼夷弾（しょういだん）がバラバラと降ってきていました。火の手も上がりはじめ、家の前を避難の人たちが通り、異様な雰囲気を感じました。

私たちは、父から家は燃えないから逃げてはいけないと言われていましたので、父の帰りを待ちました。だんだん煙が多くなり、火も近づいてきます。町会の役員さんからも逃げるように言われ、迷いましたが家を離れることにしました。宿弥神社（すくねじんじゃ）の所まで来たとき、父の大きな呼び声がしたので立ち止まりました。父が皆の防空頭巾を用水おけの水でぬらしてくれたので、かぶり直しました。でも頭巾だけぬらしただけではすぐ乾くからと、父は防空壕から五幅（いつはば）の布団を持ってきて布団もぬらしました。布団の角を大きい順に持ち、下の弟や妹はその内側に入り歩きだしました。火の勢いが強く、風上に向かわなくてはならないので、何回も布団を飛ばされそうになりました。清澄通りまでこんなに遠いと思ったのは初めてです。

しばらくガード下で避難をしていました。大八車に荷物をいっぱい載せ逃げて来る人、着物が焼け焦げている人、いろいろな方が通ります。

朝になり家に行ってみました。きれいに焼け、何ひとつ残っていませんでした。

三月一〇日は私の卒業式なので学校に行きましたが、中に入れる状態ではありません。無理を言って中の様子を見てきてもらいました。それはそれは悲惨なもので、例えようがありません。

隣の人に、鳩ヶ谷に風呂屋をしている親戚（しんせき）があるからと誘われ、一時そこに行くことになりました。日暮里辺りから電車に乗りました。電車の中の人は汚い物でも見るように私たちを見ていて、席を譲ってくれる人はありませんでした。

大勢で世話になったので、顔をそろえて寝られません。顔の脇には足がくるのです。5日目ぐらいに総武線が通っていることを知り、母の実家へ行くことになり、皆にまたの再会を約束し離れました。私は縁故疎開で、千葉県君津郡平岡村

三箇（さんが）に行くのです。祖父は毎日おむすびを持って駅まで迎えに来てくれていました。田舎の人たちも喜んでくれました。これから三箇で疎開生活が始まります。

学校は遠く、一里（約四キロ）も歩かなければなりません。靴を履いて行けば疎開者とか東京者と言われます。祖母に草鞋（ぞうり）の作り方を習い自分で履く物は自分で作りました。学校へ行っても、勉強は山に芝刈り、茶摘み、田植えが主です。田植えのときなど、脚半（きゃはん）は無いし足袋（たび）もないので、素足で田んぼに入ります。足を上げるとヒルが三～四匹付いています。キャアキャア言いながら友達に取ってもらいました。

一番怖かったのは空襲です。東京では毎夜のことでしたから、それほど怖くありませんでしたが、田舎での空襲は学校の帰り、隠れるところがないので小さい森まで駆け、やっと隠れます。一度は隣の麦畑の穂が揺れるほど低空で飛んできて、高射砲の音がし、生きた心地がしませんでした。

水は井戸からくみ、食事の支度はかまどで枯れ木を燃やします。トイレは一番困りました。庭の隅にかめが埋けて（いけて）あり、板が二枚渡してあるだけです。囲いも簡単に板が張ってあるだけ。夏にはブヨが飛んでいてなかなか入れませんでした。

この年はノミが異常発生しました。土間に降りると足に跳ね上がりなかなか捕まりません。妹の足はおできで大変でした。ドクダミをせんじて飲んだり、すりつぶして付けたり。私は手にイボがたくさんできました。台所からナスのへたをもらい、イボに擦り付けました。父は今までの疲れのため高熱を出しました。氷も無く祖父と根雪を探しに行き、根雪で冷やしました。

たった半年の疎開生活でしたがいろいろと体験し、学ぶことが多かったと思います。

今の田舎は都会より良くなりました。蛇口をひねれば水が出、ガスもあり、トイレも水洗です。

一番下の孫が、私が戦災を体験した年齢になり、六年生を卒業しました。この幸せがいつまでも続きますように。

最年少の学童疎開

二葉国民学校三年　谷　公子

本所区二葉国民学校三年生で学童疎開の最年少でした。そのころまでにすでに学校の周りの家屋は、学校を守るために強制的に壊されていましたが、その壊す時に大勢の人が家に綱をつけて引き壊している様子は目に焼きついています。上履きの靴も町では買えず、学校からの配給で、くじ引きでやっと当たっても履きつぶした古い靴をゴムのリサイクルのために持っていき交換しなければ買えませんでした。

八月、家族との別れの日、皆の涙と同じように雨降りの悲しい別れの日でした。両国駅から汽車で千葉県茂原駅まで行く間涙が止まらず、話をした覚えがありません。駅には町の方々が出迎えてくださり、学校だったと思う所で歓迎会を催していただきました。宿舎となる藻原寺へ向かうまで「ガンバレよ」と言っているようなまなざしでした。

新しく持たせてもらった洋傘が見当たらず、子供ながらに物資の少ないせちがらさを実感させられ、早速「洋傘を送って」と手紙を書きました。届いた傘は今では温泉宿にしかないような番傘に大きく名前が書いてあり、一～二回だけ使って後は恥ずかしくて使えず、寮の傘を借りていました。

これから我が家となるお寺はとても立派なきれいな本堂で周りにはたくさんの墓石が並んでいました。トイレは本堂と庫裏（くり）の間の渡り廊下にありましたが、そのころでも水洗トイレに慣れていた私たちには、ギシギシと音がしてとても怖いものでした。間もなく本堂の近くの外に建てていただきましたが、またこれが雨でも降ると墓地のあちこちでリンの青白い炎がチョロチョロと見えてとても恐ろしいものでした。お友達は三年生と五年生の女子で（何組かの姉妹がおりました）、先生方と学校で顔なじみだった用務員のおばさんに面倒を見ていただきました。夜中には悲しくてシクシクしている子もいたり、トイレに行かれなくてそそうをしている子など、おばさんが声を掛けて起こして連れて行ってくださり、大勢の洗濯物を全部片付けてくださいました。毎日毎日外で盥（たらい）でのお仕事は子供心にも感謝でいっぱいでした。

私物は、今では見たことのない方が多い柳行李（やなぎごうり）一つ分と寝具と学用品ですが、きちんと管理していないと隣のお友達の品と混ざってしまいます。また、繕い物はだいたい自分でしましたが、靴下や足袋（たび）などの穴は

どう工夫しても甲と底がくっついてしまって足が入らず苦労しました。考えてみれば三年生、仕方のなかったことだと今さらながら思います。甘い物など何もなく、町の皆さんから届けられたカボチャが甘いもののトップで、うれしいことに本堂の回廊の裏にたくさん積まれてあり、煮物、みそ汁、オヤツにと大活躍でした。「今夜はごちそうよ」という友の声に期待したらそれはうどんでした。家から口さびしい時にと送られてきた紅茶の缶にはゴマ塩が入っていました。食器も、アルミやプラスチックがあるわけではなくお茶わんが木で作ったお弁当箱のような箱で、ご飯も不公平にならないようにと計って盛りつけられていました。

お勉強はお寺から町の学校へ通い、お教室をお借りしていました。ある日学校より遠い所の飛行場に散歩に行き、柵の外に腰かけて格納庫から一機また一機と出てきてきれいに並ぶのを喜んで見ていたところ、憲兵の兵隊さんにどなられました。「空襲警報なのに何してる！」と。びっくりして一度も休まずお寺へ逃げ帰り、後でその日が東京でのはじめての空襲警報発令の時だったと知りました。その後、何度か学校から空襲警報で逃げ帰った時がありますが、あの時のようには走れませんでした。

日曜日には何組かずつ親たちがお土産やらごちそうなど持って面会に来てくれました。一時の団らんを家族でお寺の裏山などで過ごしたりしましたが、また別れが悲しくてお夕飯も食べずに泣いたこともありました。また飛行場の兵隊さんたちが何人かずつ見えて、お互いの寂しさを慰めるかのように遊んだり、歌ったり、絵を描いたりしたことは楽しい思い出になっています。

悲しかった思い出には、お寺にはお風呂がなく町の銭湯へ月に何回か順番に連れて行ってくださいましたが、お風呂屋さんでなく町の心ない人たちに「疎開の子は汚い」と鍵をかけられ入れなくて先生方が困っておられたことです。その後、お寺の裏にお風呂が作られると聞きましたが、三月の空襲までにはできませんでした。

冬には、冷え性の私は、家では湯たんぽを使っておりましたがそれもならず、親が苦肉の策で真綿入りの湯たんぽの袋のようなものを送ってくれました。結構温かかったものです。

家族への手紙の往復も、一度先生の目を通ってから郵送されたり、届けられたりしました。大空襲の後は一切手紙が来ませんでした。家族の安否が気がかりでみんなイライラして

いましたが、家族からの手紙がこない友達への配慮だったそうです。私は幸い家族皆元気だったということで、父の実家の栃木へ行くことになり、迎えが来ました。荷作りからはみ出てしまった洗面器一つを持って田舎へ行きました。

栃木で学校への転入手続きに行きました。学校では教科書も何もないのでそろったら連絡してくださることになりましたが、四年生の一学期中に連絡がなく、そして荷物も着きません。調べたところ、再疎開先に残っていた皆さんの荷物と一緒に行ってしまったとのことで、一学期は学校へ行かれず、したがって終戦時の印象は大人たちから「もう空襲はない」と聞かされた喜びと「いとこたちのお父さんが帰ってくる。ヨカッタネ」と思ったことでした。二学期に学校へ行くと、算数では分数がだいたい終わっていて慌てて母に教えてもらいました。

翌年八月に帰京し、青梅小に二学期から通学し、小学校は四校の門をくぐったことになりお友達も多いのですが、二葉の時のお友達はありません。

一二～三年前、海水浴へ行く途中、藻原寺に立ち寄り、私なりのお礼参りをさせていただきましたが、あんなに大きく美しかった本堂もずっとこじんまりと、また、本堂から山門までマラソンした距離も短く見え、山門から入ってきたお葬式の輿（こし）の行列を見てお神輿（おみこし）に見えて喜んでしまったことなど回想してきました。

孫たちがあのころの私より大きくなった今、学んだこともたくさんあり成長の糧にはなりましたが、三月九日の夜、お寺の外の防空壕（ぼうくうごう）で真っ赤に染まった東京方面の空を胸がつぶれる思いで眺めていた気持ちには、誰にもなってほしくないし絶対させてはいけないことです。

戦争を体験し、脳裏に実際問題として焼き付けている最年少は私たちだと思います。

今まで一番おいしかったのが茂原のお寺で食べた「区から差し入れられたといわれる四枚切りのバターとお砂糖がのせてあった食パンでした」なんていう悲しいことのない時代が長く長く続いてほしいと思います。

学童疎開「私の体験」

二葉国民学校四年　長岡瓔子
（旧姓　藤屋）

昭和一九年の夏、私が二葉小学校の四年生の時に学童疎開に行くことになりました。姉は女学校、兄は中学校へ入学していましたが、当時は戦争のため、勉強はほとんどせずに軍需工場で働かされ、下の弟はまだ七歳だったので、私だけが行くことになりました。

母に「来年の三月までよ。三月になったら帰ってこれるから、先生の言うことを良く聞いて、お友達と仲よくしてね」と言われ、それを信じ、校門のところでニコニコ手を振り、二人の女性教師に引率され、級友たち四～五〇人くらいで、千葉県長生郡鶴枝村の安楽寺で疎開生活を始めました。

勉強は、土地の学校へは通わずにお寺でしましたが、教材も不足し、全く昔の寺子屋の状態でした。友達の父兄は度々面会にきて、うらやましく思っていました。でも私の家では、印刷業で子供も多く、生活もそう楽ではなかったので、何度も来てくれるということはできませんでした。そんな私を気遣って、母と姉が度々手紙を書いてくれました。父は一度、父兄の方々数人で、紙芝居を持って慰問に来てくれました。母も一度、下の妹を背中におんぶし面会に来てくれました。

衣類も食料も何でも配給の時代で大変なのに、私の好物ののり巻を作ってきてくれて大変うれしく思いました。そしてあっという間に時間が過ぎ、母が帰る時、山門をくぐりだんだん遠くに小さくなる母の後ろ姿にいつまでもいつまでも手を振っていました。

その別れが私にとって、母との永遠の別れになりました。

そして昭和二〇年の早春のある日、級友のお母さんが一人、突然、ところどころ焦げた衣服で現れてびっくりしました。そこで初めて大空襲のことを知りました。

「三月九日の深夜、下町一帯が大空襲により一夜にして焼け野原になってしまった。私たちの鉄筋三階建ての校舎も何もかも焼きつくされ、道路には炭化した遺体が一面に転がっていて、プールにも水死体が溢れ、あの隅田川も川一面に遺体が浮いている」との話に、皆大声で「ワァワァ」といつまでも泣いていました。

その後、先生も学校の状態を見に、苦労して行ってきたら、校門を入る時はたくさんの遺体をまたいで、ようやく入ったとのことでした。

友達の父兄で生き残った人たちが、毎日何人かがお寺に来て、私も父や母、姉か兄でもきっと無事でいると信じ待っていましたが、とうとう誰も来ませんでした。

しばらくたったある日、お昼に雑炊を食べていたら、皆外を見て誰か来るというので、私も立ってみると、父方の祖父がひとり歩いてきました。私はびっくりして「あっ、おじいちゃん」と喜びました。当時祖父は板橋に住んでいて、空襲の後は毎日、本所へ通い、避難先であった学校やあっちこっち歩き、父たちを探し回ったそうです。そして、何日か後、祖父がまた二葉学校へ行くと、知り合いの人が「藤屋さん、一足遅かった。つい今さっきプールから息子さんの遺体が見つかり、トラックの荷台に上げてしまった」と言われたそうです。が、あの非常事態の中「もう一度探してくれ」とは言えず、祖父は父との対面はできず、後々後悔していました。私はまさか自分ひとりを残して家族全員が亡くなったとは思ってもみませんでした。

その後、房総半島も敵機の侵入路で危ないとのことで、今度は東北の岩手県東磐井郡千厩町の大光寺へ再疎開することになりました。その時近所に住んでいた友達の親が、私の姉の墓が隅田公園の中に見つかったと教えてくれました。そして上野駅での乗り換えのほんのわずかな時間に先生にお願いし、私をそこへ連れてってくださいました。

疎開する前、兄が私や弟妹といっしょに何回も遊びに連れていってくれた広い隅田公園に、見渡す限りぎっしりと、約一〇センチ角の高さで三〇センチほどの小さい墓標が並んでいました。その中に本当に私の姉の藤屋玲子の名前がありました。私は「お姉ちゃん」と言って泣き出し手を合わせました。

戦況はますます悪化し、岩手での生活も前以上に厳しくなり、寺子屋生活はもちろんのこと栄養状態も悪く、私はもともとやせていましたが、栄養失調になり、身体中オデキができる次第でした。また頭髪や身体にも「シラミ」がたかり、友達同士日当りでお互いに取り合いっこをして暮らしました。

そしてあの八月一五日の終戦を迎え、級友の父兄たちが、ボツボツそれぞれの子供を迎えにきて、だんだんと人数が減っていき寂しく思いました。あの厳寒の岩手で、着る物もなく暖房と言えば広い部屋に火鉢が一つあるだけの場所で、私の手足はしもやけではれて痛く大変な思いで、昭和二一年の三月末日まで岩手で暮らし、上野駅のホームで祖父の出迎え

を受け、先生と数人の級友とで悲惨な学童疎開の終わりを迎えました。

その後私は、祖父と父の故郷である能登へ移り住みました。しばらくして、東京都から家族の遺骨だと言って、小さな箱にほんのわずかな骨が届きました。祖父は誰の骨か分からないと言いながら、先祖の墓に納め供養しています。

今年は戦後六〇年、当時の級友たちは全国にバラバラに散り、名簿もなく、一切連絡も取れず寂しいことです。

地球上では常に戦火が絶えず心が痛みます。人間の英知で世界中の人々が平和に暮らせるように心から願っています。

昭和二〇年三月当時の家族構成
東京都本所区石原町一丁目二七番地

父　藤屋良吉　　長女　玲子　一六歳
母　　順子　　長男　良憲　一五歳
次男　貞生　病死
三男　毅三　七歳
三女　恵　五歳
四女　総子　三歳

いじめられ

二葉国民学校三年　平野義明

当時の住所は、東京都本所区石原町二丁目四番地で、父平野豊吉は、化粧品雑貨の現金問屋兼小売業を営んでいた。

疎開先は、千葉県海上郡飯岡町下永井西上町六一〇で、私は、現在は千葉県香取郡東庄町に住んでいる。

昭和一八年、私は父の命令で祖母の住んでいる実家、飯岡町（九十九里浜東端）に個人疎開した。

戦争が始まって三年にならないのに、もうB29の大編隊が東京上空を通過する。飛行高度が高いせいか高射砲の爆裂はB29には届かなかった。その様子を父母と靖国神社境内で見ていた。このまま東京にいては一家全滅になる。家族が別れて生活すれば、たとえ不幸があっても全滅にはならないであろうというのが父の考えだった。それに小学校一年生の時に患った肋膜炎（ろくまくえん）、肺炎、肺門リンパ腺炎により、同愛病院、中尾病院、注射専門の永山先生に往診を受け一年半寝たきり状態が続いた。先生からは死を宣告されたが、両親の真心こもった看病により一命をとり止めた。その後心配されたが単独で疎開し療養することとなった。

田舎での生活は東京と違っていた。二葉小学校の服装は、学生帽子、金ボタンの学生服に黒の革靴、夏は帽子に白カバー、制服も夏冬用があり、一枚皮のランドセルだった。田舎のげた履きでの通学に慣れるまでに少々時間がかかった。体育は休み、身体をいとうという生活だった。空気の良さと海は健康によく、好きな絵のモチーフにはことかかなかった。

でも、三年生で転校してきた私には楽しい生活ではなかった。祖母のきびしさと先生も知らない友人関係であった。言葉遣いや態度一つとっても都会っ子としていじめの対象とされた。

「東京っぺ青っぺ、糞しったっぺ」と言われ、名字が平野なので「ヒラメ」くらいなら許せるが「シラミ」のあだ名は許せなかった。当時はシラミがはやっていただけに大層侮辱された感じがしたからだった。

まず、初めてのいじめは原因のないけんかであった。一番弱そうなS君とけんかをやれというのだ。いわゆる番長と称するやつが三年にもいた。暴力団員の父をもつB君は学校でも幅をきかせ、多くの家来を引き連れのして歩いていた。掃除の時などつまづいてバケツを倒し、水びたしになった床を

「やつら、ふいとけ！」と命令する始末。四年生の時、先生にしかられると机のふたを先生に投げつけ窓から飛び降り「やつら、頼むぞ！」と言って肩掛けカバンを手下のチンピラに届けさせたり、中学生になると剣道五段の先生と取っ組み合いのけんかをし、やがて前科者になっていった。そういう学級なので想像もつくだろう。

理由のない相手とけんかをさせ、周りではやし立てる。まるでシャモのけんかのようだ。次の日も同じように続くのである。

私は小さい時から豆タンク（戦車）と言われ、行動が素早くいたずらだった。真冬でも裸足でサイドカーを戦車に見立て震災記念堂の方まで駆けずり回っていた。けんかだからといって負けてはいられない。いつしか顔はみみず腫れのひっかきキズだらけ。もう一つ困ったことに勝ったりすると、下校時には負けた相手の高等科の兄貴たちが待ち伏せして、仕返しをされてしまう。けんかに勝てば勝ったで仕返しが待っている。それならけんかは負けたほうが良いと思った。負ければそれで終わるからだ。その代わり相撲では堂々と勝てばよい。

雨の日の体育の時間、教室で紅白に別れて相手の陣営からねらわれた人をひっぱりこみ、なぐる、けるという行為をし降参させるゲームがあった。いけにえにされないために必死に頑張った。休み時間、空き教室にチンピラが私を呼びに来る。奥の真ん中の机上にあぐらをかいた番長がいる。その左右にチンピラどもが八の字に並んで立っている。まるで牢名主のあの光景だ。私に家来になれというのだ。私は仲間に入らなかった。だから、またいろいろ難癖を言われることになるのだが。

学校から帰る時は一目散に裏から走って帰る。ターゲットにされないために、帰り方まで工夫しなければならなかった。

家に帰れば帰ったで部落の中学生の番長に目をつけられる。自転車の乗り方を教えてやるからと言っては自転車を持ってこさせ、後ろを持ってくれるふりをして倒される。嫌がる私にまたやらせ、毎日同じようにさせられるので、内ももなど、一面青なじみになってしまった。自転車への恐怖心をもつようになり、高校へ通学するまで自転車は乗れなかった。

海でもそうだ。水泳を教えてやるといってはブクブクさせられた。やはり恐怖心から水泳は一歩後退した。

東京の両親の所へは、電話で「死にたい」と伝えた。東京へは月に一回は帰っていたが両親は心配していた。何も知らない田舎の叔父には心配ないと言われていたようだった。

浅草仲見世など焼夷弾（しょういだん）で焼かれた光景は近所のビルの屋上から夜中まで見ていた。翌日、隣の野上又衛君（大空襲で一家全滅）と朝食をとった後、一日歩いて浅草へ見にいったりした。父にはB29の落とした焼夷弾で焼かれた死体を見せられたり、叔母の葬式の時、白装束で髪をばさりと下げ、座棺に合掌している姿を見せられたりした。しかし、いくら死体を見せられても、私の死にたいという気持ちを変えることはなかった。毎日がつらくてつらくて困った。気丈な祖母や学校の先生にも、いじめられていることを話すことはできなかった。このような重苦しい憂うつな毎日だった。

私のそのころの人生を変えたのはある出来事からである。四年生の時、級長（学級委員長）を決める時だった。一瞬シーンとしたその時、また、番長が、私の初めてのけんか相手だった気の弱い彼に押しつけようと目くばせをした。私はすくっと立って言った。それは勇気のいることだった。「田舎のみんなはかわいそうな人を選ぶ。おかしい！」と。今考えると自分ながらよく言えたと思う。今までやられっぱなしのうっ憤を晴らすともとれる行動だった。すると番長は少し考え「おもしれーじゃねえか。やらせてみようじゃねえか」の一言で級長が私に決まった。

それからの私は一生懸命だった。好きな図画、習字の展覧会に入賞したり、勉強もよくやり、友達も増えていった。やつらも一目おくようになり中学三年までずっと学級委員長に推薦された。問題の彼らも協力するようになり、対等になるまでに中学三年までかかった。

父は立ち直った私の姿を知らず死んでしまった。そして私の妹昭子は父の顔を知らないで生まれた。東京大空襲の前日に身重の母を実家に送ってきたが、隣組の組合長として責任を感じて宿泊しないで東京へ帰ってしまった。運命の分かれ道である。

その夜、東京大空襲。三月一〇日未明、防空壕（ぼうくうごう）から出て用を足そうとした時、初めて人だまを見た。太平洋の方からふわふわと我が家の菩提寺花蔵院の森に吸い込まれるように降りていった。それが父であったのだと今でも思っている。

父は関東大震災の時に安田公園の池の中で生きのび、一か

月も消息がなく心配したが帰ってきた。その奇跡を思い、夢よもう一度と願ったが実現しなかった。

終戦後一〇年を経ても、母は、父と入れ替わっていれば一家は安泰だったと悔んでいた。妹の出品した森永キャラメル主催の「母をたたえる作文集」の入選作品の中に「あれから一〇年たっても母の枕は涙でぬれていた」と母の無念の気持ちをつづった作文を思い出す。

学童疎開の体験

二葉国民学校三年　牧瀬正子
（旧姓　五十嵐）

当時、小学校三年以上六年生までの学童は集団疎開に行くことになりました。私は両国の二葉国民学校の三年生でした。兄は五年生でした。兄は、両国駅から疎開先の千葉県長生郡大原村小原の如意輪寺に向かいました。私は、あまりに小さくかわいそうだということで縁故疎開をさせるつもりで家に残され、あの三月九日から一〇日にかけての大空襲に遭遇（そうぐう）するはめになるのです。

三月九日の真夜中、猛火と強風の中を一歳になったばかりの赤ちゃんを背負った母が、ネンネコの上から私と母とをひもでつないで逃げたのです。さもなければ、小さい子供たちはあのものすごい嵐のような風にみな吹き飛ばされ、ころころと風下に転がされていき焼け死んでいったのです。

みんなまだ燃えていない風下に逃げていく中を、母は燃えさかっている風上に向かって行くのです。私が「こっちへみんな行くから、みんなの行く方に行こうよ」と言うのに、「今燃えていなくても風下はこれから燃えるのだ。火事の時は風上に逃げなければ助からないのだ」と言い、風に向かってやっとの思いで両国公会堂までたどり着いたのです。上から火の粉が降ってくるので防空頭巾を用水おけの水でビショビショにぬらし、それでもあまりにも火の粉がすごく、手で払いのけきれなくなり「みんなで隅田川に入ろうよ」と周りの人たちが言いました。しかし、母は、「水で苦しんで死ぬよりは、ここで焼け死んだほうがまだましだ」と言い、両国公会堂の窓の下に避難していました。その時、そばにいた男の人が公会堂の窓をこじ開けてくれたのです。「女の人と子供が先に入りなさい」と言ってくれ、一人一人その窓から中に入り、かろうじて助かったのです。

現在の国技館や江戸東京博物館のあたりは、当時江東市場でした。そこから焼けこげた缶詰を拾ってきた人からいただき、どうやって開けたのかは分かりませんが、中身が苦くていぶりくさくてとても食べられませんでした。顔中火ぶくれの母親が、「うちの子知りませんか。うちの子知りませんか」と半狂乱になって尋ねて探し回っていました。数日して、お互いに死んでしまったに違いないと思っていた父が公会堂に来ました。水も食糧もないのに良く生きていられたものだと思います。何日くらいたったのでしょうか、金沢八景の六浦

から、母の妹の夫が私たちを案じ両国公会堂まで尋ねてきました。そしてその叔父と一緒に六浦の家に世話になることになりました。

千葉の兄の疎開先も危なくなってきたので岩手県に再疎開することになり、連れ戻したい人は迎えに来るようにということで六浦に兄を連れ戻し、六浦国民学校から、六年生になっていた兄と私、その家の四年生の姪が一緒に北秦野国民学校に疎開したのです。教室に畳を敷きつめてそこで暮らすことになりました。

煮炊きに使うマキを生徒が一束ずつかかえて学校まで運びます。みそ汁の実は、山や田んぼから三つ葉やセリやノビルなど何でも摘んできたものです。季節が良かったからこのように何とか食べていけたのだと思いますが、お茶わんにのぞくほどしか入っていないご飯、食べる物は何にもないのですから。当時、ワカモトという錠剤が薬局にあったのですが、みんなが求めるのでどこの薬局にもなくなってしまいました。毎日毎日おなかがすいて。一日一つずついただく肝油というのがありました。一人の女の子がそれを夜中にこっそり一缶全部食べてしまいました。翌日の朝、校庭で全部吐いてしまいました。あまりの空腹にたえかねて、畑のソラマメを数人で生のまま食べたこともありました。

ノミとシラミがまたたく間にわき、体中を刺しまくりました。大きな釜で下着を煮てくれましたが、なかなか退治することができませんでした。スキグシという目の細かいクシで、白い紙を敷いた上に、髪の毛をスーととかすのです。すると黒い毛ジラミがバラバラと紙の上に落ちます。それをみんなでブチブチとつぶすのです。そうしてお互いにシラミの取りっこをしました。百匹くらいすぐつぶせるほどでした。頭も体もボリボリとかくので、栄養不良で体に抵抗力がないので手や足や頭にもオデキができ、髪の毛がオデキにベッタリへばりついて始末が悪いので、無造作に髪の毛をハサミで切るのでひどい頭でした。

疎開先でも空襲になると竹やぶに避難したりしました。家に帰りたい一心で逃げ出して駅から連れ戻されたりした人もいました。

真夜中に突然ムクッと起き上がりみんなの周りをグルグルと歩き回ってまたフトンにもぐり込む人もいました。夢遊病（むゆうびょう）というのだそうです。

お風呂は、校舎の入り口に農家からでも借りてきたのでしょうか、二つの風呂おけにズラリと並んで、それこそ洗うこ

となんてできません。ちょっとつかる程度でした。今思い出してもゾッとすることばかりです。

戦争という、私たちにどうすることもできないこの出来事が、市民、弱者にこのような形で襲いかかってくるのです。恐ろしいことです。終戦後のあの食べ物の何もない時代を親たちはどんなに苦労したことでしょう。大空襲ですべてを失い、日々成長していく子供たちに着せる物がなく、やっとどこかで探して古着を買ってきたり、知り合いをたずね古着をゆずっていただいたりと並大抵の苦労ではなかったことと思います。良くぞここまで生きてこられたものだと思います。

燃えさかる　猛火のがれて　六十年

よくぞここ迄（まで）　生きてこれたり

昭和二〇年三月　学童疎開の思い出

二葉国民学校三年　山崎　格

私、山崎格は、昭和一一年三月二八日生まれで、平成一七年現在六九歳になる。当時の住所は、東京都本所区石原町一丁目一番地だった。

二葉国民学校から学童疎開で千葉のお寺に行った者は、三年生約五〇〇人中二八名、昭和二〇年三月九日の時点で千葉のお寺にいた者は一八名、そこから岩手に再疎開した者は一名（私）だった。

「東京の方の空が真っ赤だぞ！」

誰かが叫びながら部屋に駆け込んできた。「え、えー」私たちはそれぞれ布団をはねのけ起き上がった。就寝時間の九時の消灯が少し前にあったばっかしだったからまだ寝ている者はなかった。私たちは、ぞろぞろと真っ暗な寺の庭に出ていった。先生もすぐ後から起きてこられた。三月九日、春はまだまだで、外は冷たい風が木立を鳴らして強く吹いていた。私もみんなも寝巻き姿のまんまで飛び出したからひどく寒かった。

火が呼ぶか暗夜の風は狂い吹き
紅蓮（ぐれん）に燃える東京の空

寺の庭から東京の方「西」の空を見ると確かに真っ赤に映っていた。誰とはなく私たちはすぐに寺の裏道に走っていった。裏道を少し登ると裏山の中腹に見晴らしのよい場所があることを私たち十数人の仲間は知っていた。

私は見た！　東京の空は地平線から天まで、左の端から右の端まで真っ赤に映っていた。燃えていた。紅蓮の炎が天まで届くかと燃えていた。それはお寺の別室の屏風（びょうぶ）に描かれている何枚かの地獄絵の中で、蓮のような炎が亡者たちを追いかけている絵の数倍の恐ろしい光景だった。

思いでの西に浄土はなかりけり
彼方は地獄の焔（ほのお）と化して

風が強かった。私たちは寒いので団子のように固まりながら、その光景をじっと見ていた。声を出す者は誰一人いなかった、みんな声も出すことのできない恐ろしいことが、いま起きているのだと知ったのだ。「ガチ、ガチ、ガチ」自分の歯が激しくぶつかって鳴っていた。歯がガチガチと鳴っているのは、私だけではなく、まわりの仲間たちのほとんどから聞こえていた

狂風の暗闇（くらやみ）のなか立ち尽くし
ガチガチと鳴る互いの歯の音

風はますます強くなっていた。その真っ黒な風は私たちの背後から、東京の方に向かって悪魔のような恐ろしい勢いで飛んでいっていた。その風がまたたく間にかなたに届いたかと思うと、また一段と紅蓮の炎が空いっぱいに上がった。何か小さな叫び声が聞こえたような気がした。何か悲鳴のような気がした。その悲鳴は一人のものではなく、大勢の切れ切れの悲鳴のようだった。私はその悲鳴が私の幼い妹たち、直子、泰子の声のように聞こえた。

いま西に恐ろしいこと起きておる
父母妹弟の顔つぎつぎと浮かぶ

私の体はいっそう震えた。「もう、みんな部屋に帰りなさい」やがて先生が強く言った。私たちはガタガタ、ガチガチ震えながら寺の部屋に戻っていった。寝床に戻ってもだれひとり言葉を交わす者はいなかつた。みんな真っ青な顔で見交わしても笑えるものは一人もいなかった。みんな布団を頭までかぶって寝た。

翌朝、寺の前の田んぼに、幅数センチの銀紙の長いテープが一面に落ちていた。私たちはそれを拾い集めて寺に持って帰った。誰かが「それは米軍の電波妨害テープだぞ」と言ったので、私たちはあわててそれをごみ箱に捨てた。そのテープが昨夜の恐ろしいことに関係のあるものだと悟ったからだ。先生は朝食後、急ぎ東京の自宅に戻っていった。

次々と焦げた衣服の父母ら来て
頭下げ下げ友を連れ帰る

二日後、ところどころ焼け焦げたモンペ姿の仲間の母親が寺に一人来た。東京の学校の方から連絡があったのか、その母親は寺の住職夫婦にあいさつし、私たちにも幾度もお辞儀をしながら、自分の子を連れて帰っていった。その翌日、今度は三人の子供の親二人と兄さんらしき人が来て、それぞれわが子、弟を引き取っていった。次の日も二人引き取られていった。

焼け出され児を引き取りの父母たちは
一人残りしわれを見ぬふり

そのまた翌日に迎えに来た一人の母親は、親友のお母さんで家が私のところと非常に近く、東京にいるとき何度か遊びに行き来して、たいへんに顔見知りの人でした。そのお母さんは帰るとき、私のところに駆け寄り「山崎さん、あなたのお母さんは、きっと来るわよ…。がんばって…待って…ね」

終わりの方は声にならず、泣き声になり手ぬぐいで口を押さえ、もう私の方には顔を背けて、自分の子の手を引いて帰っていった。

さようならあなたの母はいまに来る

言いつつ友の母嗚咽（おえつ）する

私は悟った。親友のお母さんは、私の親たちが焼け死んだことを知っているんだと思った。私は恐ろしいことが現実になったのを知り、夜、寝床に入って頭からふとんをかぶって泣いた。一週間ぐらいのうちに、九日の時に一六人いた仲間たちはみるみる減っていき、残るものは私を含めてあと二人になっていた。広い本堂に寝ていた私たちは、仲間が次々と連れ帰られどんどん少なくなったので、寂しいよりお寺の本堂が気味悪くて仕方がなかった。毎晩、寝ながら考えると、昨日まで生きていたはずの親兄弟姉妹たちが、一瞬にすべて死んだとはどうしても信じることができなかった。ついに残りの仲間に迎えが来た。迎えはご両親ではなく、ご親戚（しんせき）の女の方だった。ただ一人残る私に、大人にするような丁寧なお辞儀をするだけで何もしゃべらず、最後の仲間を連れ帰っていった。

友たちがみな去りしあと裏山に

激しく登りじっと西を見る

毎日、昼間は裏山の見晴らし場に行き東京の空を眺めていた。また、なんの考えもなく裏山を歩いた。真っ青の空に向かって、「なぜ！なぜ！どうして、どうして」と、怒鳴ったことがよくあった。

父母は死に姉妹兄弟みな死んで

神仏無しと夕日に怒鳴る

夜は、真っ暗な本堂の隅に一人寝る私は、頭の上まで布団をかぶって毎晩泣き寝入っていた。その後、先生は寺に戻ってきたが、「山崎、泣くな」と一言言っただけで、また東京に行ってしまった。寺の住職夫婦からも、何ひとつ声を掛けられた覚えがない。

日本の敗色はますます濃くなり、本土決戦の言葉が新聞に毎日載るようになったとき、米軍の九十九里浜上陸の恐れありとの情報で、急ぎ千葉県の各お寺に残っていた生徒たちに岩手県の山奥に再疎開の命令が出て、四月の終わりのある夜、私は茂原の駅で他のお寺にいた上級生たちと合流、列車に乗って両国に向かった。

父母の来ぬ子供ら夜汽車に乗せられて

遥か東北山村の寺

私は空襲でまったくの焼け野原になったと聞かされた両国だが、きっと駅で乗り換えのとき、一目我が家の方を見ることができると思っていたが、なんと、列車は突然の空襲から逃れるためという名目で、すべて窓の覆いを下ろし、外は見ることができず、しかも列車は両国で乗り換えることなく、支線を伝わって東北本線に入り岩手に向かったのだった。

悲惨なる東京焼け跡見せぬため
列車の窓閉め深夜に走る

思えば、もし両国で乗り換えがあったら、きっと私は抜け出して、我が家の焼け跡に向かったことだろう。

弟と一片の芋を争いて
母の泣き顔八歳のとき

八月一五日。少年は終戦を岩手の山奥で聞いた。

その年の一一月末。私は他の寺のもの十数人と合流し、北多摩の府中町の府中刑務所の北側の栗林にある施設に入った。後にこの刑務所の裏門の前で、バイクによる三億円強奪事件が起きた。

この栗林の中にある施設は、戦前、赤坂にあつた赤松女学校の臨海学校寮だった。栗林の中に一〇坪くらいの図書庫が独立して建てられていたが、私は許可を取り、この図書庫に入り浸りになった。

私は本が大好きになった。本を読んでいれば本の世界に入りこみ、何もかも忘れることができた。本は手当たり次第に読んだ。

あるとき、ある西洋の事柄の本を読んだ。その本の題名はまったく覚えていないが、表紙の絵は晩秋の夕暮れ、河原でひとりの老人が、袋に小石を拾い集めている姿だった。私は石を拾って何をするのだろうと思い、ちょっと気になってその本の文章を読んだ。読むと、老人が拾い集めた小石は、第一次世界大戦の戦乱で、親、家を失った孤児たちを保護する孤児院のベッドに敷くためのものだった。それはまったく私たちの境遇と同じだった。私はいまから二、三〇年前の西洋にも、自分たちと同じような境遇になった子供がいっぱいいたことを知った。

しかし私がたいへんにびっくりしたことは、その本の表紙の老人が拾い集めた小石は、子供たちのベッドの下に敷くためのものだということだった。ずいぶんに西洋ではひどいことをするのだと思った。子供を冷たい硬い石の上に寝かせるとは。まるで地獄の賽（さい）の河原の何とやら。それに比べ自分たちは薄くとも畳の上で、ふとんを敷いて寝ることが

できる。どこの国でもひどい話はあるのだなぁ。昔から戦争で自分と同じような目にあった子供たちはたくさんいるのだな。またひどい仕打ちをされることもあるのか。そうか、人生、多少のことはがまんして生きていこうと思った。

それから一〇数年、私はある本でこの老人の行為の正しい意味を知った。それは日中、太陽の熱で温められた小石はベッドに敷くと、夜中になっても温度が下がらず、体がポカポカとして暖かかったのだ。また夏は逆に冷えてよく眠れるという。私は知らないため大変な勘違いしていたのだ。

また、老人の名前はペスタロッチ司祭という人であった。

―昭和十九年の夏

学童疎開地に出発の両国駅・最後の別れ―
遠足に行くがごときにはしゃぐ児を
鳴咽の声で送る母たち
しばらくは車中ではしゃぎし仲間たち
山里近づきみな黙り行く
駅よりは牛車に乗って山間の
寂しき寺に夕日落ち行く
幼きに疎開に行きし小三は
四〇〇有余中の二八名（小学校三年）
耐え兼ねて一人二人と帰りし友
その幾人はやがて死にけり

―昭和二十年四月　再疎開の岩手の山村の寺―

授業止め食糧補充の山菜取り
見分けのつかぬわれら罵られ
ノミしらみアカ切れしもやけ腹減って
東北の良き思いでは無し
下町は懐かしきかな焼け跡に
父母家なくも帰りたく思う

忘れることなんかできない

江東国民学校五年　石井泰代

その空の色を、ぼう然と眺めていたあの夜の女の子の姿を、まるで影絵の一場面を見るように、黒くはっきりと思い出すことができるのが、不思議な気がする。なぜなら、その女の子は私なのだから。

その空の色は、真っ赤でもなかった。オレンジ色でもなかった。人の体と、恐怖と悲しみの心が燃える炎の色、三月九日の夜空を染めた色は、この世に今まであった赤い色のどれでもなかった。

昭和一九年、当時の国民学校五年生の時、東京下町の両国に住んでいた私は学童疎開をさせられた。親、姉弟と別れる悲しみなど思う前に、子供心に今はこうしなければいけないのだと、自分自身に言い聞かせていたのだろうか、かえって父や母や姉たちが私をふびんがって、心を痛めながら見送ってくれた。

千葉県の小見川から一里半ほどはいった府馬町（今の山田町）の「修徳院」というお寺で、四五名ほどの幼い女の子ばかりが共同生活を始めた。慣れない薪運び、北風のなかの麦踏み、頭髪にたかるシラミ取りなどずいぶんつらいことが多かった。しかし、いままで多くの人の学童疎開体験記を読むうち、私たちはずいぶん恵まれていたように思う。疎開地府馬町の人たちの温かい人間性、思いやりの深い日常の心づかい、ご飯もお芋も食べられた、銚子のイワシも食べられた、いま思い出しても感謝の気持ちでいっぱいになる。

家族と別れて過ごしたこの一年間は、私の人生の尊い試練と経験の年月であり、私の性格に自立の筋金を入れてくれた。

昭和二〇年になると、空襲警報はますます頻繁になってきた。夜中に先生の声で起こされて、自分の身のまわりの物を持ち、寺の裏山の防空壕（ぼうくうごう）に退避した。あの三月九日の夜もそうであった。何時間か暗い防空壕のなかで過ごし、空襲警報が解除されて、やっと出てきた私たちの目の前に、夜空を焦がした炎の色があざやかに広がり、顔がほてるような思いがした。先生は「東京が燃えているんだぞ」と一言言ったきりだった。

その燃える夜空の下に、自分たちの肉親を含めて何万の人たちが、地獄をのたうちまわるような苦しみに遭っていたのだ。疎開児童の仲間の何人かは、その夜、家族を全部失って

しまった。

あれから六〇年、子供のころに巻き込まれた戦争のことは、月日の経過で風化していき忘れ去られていく。何万という人たちの恨みをのんだ隅田川は、のんのんと流れ悲しみを送り迎えしている。命あったればこそ私たちは毎年、疎開っ子同窓会「三九炎（みくほ）会」を集う。当時の生徒は七二歳、女先生もお元気で八二歳、笑顔と笑い声のずうっと底のほうで、誰もが忘れられないものを、しっかりと持っている。

疎開体験

江東国民学校五年　尾野房江

私は、国民学校五年生のとき、千葉の小見川から奥の府馬町にある修徳院というお寺へ、クラス四八名の中の一名として集団疎開しました。両国駅から家族に見送られ、これから先のことなどあまり考えもなく、ただ友達と一緒に行動して汽車に乗り一路千葉に向かいました。今、改札の向こうで手を振っていた人たちの様子を思い浮かべると、涙をこらえて見送ってくれたそれぞれの家族の顔が目に浮かびます。

目的のお寺に着き、これからお世話になる皆さんにあいさつをし、各班を決められいろいろの注意を受けて集団生活に入りました。学校は府馬町の人たちと同じで、一室が私たち全員の教室で、毎日寮のおばさんが作ってくれたお弁当を持って通学しました。そして、お風呂は町の各家に五～六人に分けられ、もらいに行きました。私の行ったお宅は、お米と油を売っている家で、私たちが行くといつも気持ちよく迎えてくださり、いろいろと食べ物をくださり、みんなそれが楽しみでした。大変お世話になり本当に感謝しております。

寮の食事は、決しておいしいものではありません。食べたことのない物がたくさんありました。でもおなかがすくので一生懸命食べました。今日は、お肉が出るというので、楽しみにして食べた肉料理はとてもやわらかでした。「何のお肉？」と後で聞いたらウサギだと言っていました。

お寺の鐘つき堂の所にはたくさんのドングリの実が落ちています。私たちは一つ一つ皮をむいて飢えをしのいでいました。わずかのおやつをもらうと大切に紙に包み裏山に行きます。そこは一番の憩いの場所です。汽笛を鳴らしてかすかに遠く汽車が見える所で、友達と紙包みを開けおやつを食べながら、家へ帰りたい思いでいっぱいでした。あの汽車に乗れば両国へ行けるのだと思うと涙が止めどなくなく流れます。「ただただ家に帰りたい」、夜、布団に入れば泣いてばかりいました。

畑仕事もしました。土を耕したり、麦踏みをしたり、リヤカーで農具や野菜類など、何度も運びました。友達の中には、つらくて泣いている人もいました。また、銚子が近いので、みんなリュックを背負って魚類の買出しに度々行きました。買い出しの魚は、主にイワシとアサリでした。あまり好きではない魚でも一生懸命食べました。

親が面会に来る日をみんな楽しみに指折り数えて待ってい

ました。一泊して帰る時は悲しくて、いつまでも姿が見えなくなるまで見送り、みんなでじっと我慢して堪えていました。

楽しかったのは運動会です。私は、駆けっこの選手になりました。町も大騒ぎで、お風呂をいただいている家の人たちもみんな応援してくださいました。今思い返してみると、両国の運動会よりも疎開した府馬の運動会のほうが記憶に残っています。

戦争もだんだん激しくなり、ある時、アメリカの飛行機が近くの林の中へ不時着し炎上したのには驚きました。兵隊さんの死体を見ました。子供ながら複雑な気持ちでした。手足が震えていました。

ある日、先生から大事な手紙だからなくさないようにと渡されました。封筒の表には「親展」と印が押してありました。空襲で防空壕（ぼうくうごう）に入る時は、必ず手提げに入れ持参していました。後で分かったことですが、私だけは生き残ると思いった父が、各銀行に預金してある名義人と番号、金額を記した物でした。

私の家は両親、姉、兄、弟との六人です。三月九日の夜、警報が鳴り、防空壕に入り一夜を過ごしました。しらじらと夜があけ、先生から東京の空が真っ赤になっているのを知らされました。目をこすりながら防空壕を出て見ると、みんなびっくり。大きな喚声をあげました。その時私の家は焼け、母は弟を連れて先に逃げ、現在の慰霊堂の中で助かりましたが、後から逃げた父と姉と兄は、逆の深川方面に逃げて亡くなりました。友達の中でもそれぞれでした。私のような人、一家全滅の人、三月一〇日を期に一人一人の人生が変わりました。

それから間もなく、各家の人たちが次々と訪れ、引き取られて行きました。ある日、母と弟が迎えに来ました。いろいろの思い出のお寺と先生に別れを告げ、東京の親戚（しんせき）にまず行きました。一応集団疎開は終りました。

その後、親戚や知人を頼り、行く先々で空襲に遭い、焼夷弾（しょういだん）があちらこちら落ちる中をくぐって逃げ、疎開していた時よりも恐ろしい毎日でした。「一晩ゆっくり寝られたら」と子供心に思いました。

先が分からない一日、一日を送っているある日、ラジオから天皇陛下のお言葉。敗戦。終戦。これからどうなるのか不安でした。

私だけではありません。この戦争で、家族を失い、怖い思

いをし、一生懸命私たちも戦ってきました。戦争犠牲者です。

耐えること、我慢すること、物を大切にすること、今でも、体にしみ付いています。残り少ない人生ですが、大切に過ごして参ります。

学童疎開体験記

江東国民学校三年　勝谷保

六〇年前の思い出といっても、お袋のおっぱいの味をとうとう思い出せない歳になり、なかなか難しいと思います。断片的ですが、時の政治に関心のないような、おろかな大人の世相に振り回された子供（自分）の、戦中戦後の生い立ちを徒然なるままに書いてみました。

東京が市から都になり「都という字が三年生になると出てくるから、覚えるように」と先生から教わりました。その三年の時、学校から集団疎開のことを言われたようです。家に帰りそのことを話しました。五歳の時母を亡くし、おじいさんおばあさんに育てられたので、その当時はそんな深刻さもなく、どこか旅行に行くような感じだったと思います。それでも弟と、近所の写真屋さん（今でもありますが）に二人の記念写真を撮りにいきました。疎開最年少の学年として、学校から竹の茶わんが配給され、一億玉砕ということで背丈に合った物干し竿を持って、いざ両国駅から出陣となりました。

目的地は、千葉の小見川に女子が行き、我々はその一つ手前の水郷でした。到着の時を写真で振り返ると、地元の有志の方々や児童に迎えられ、牛車に乗って宿泊先のお寺まで行ったみたいです。その宿泊所に「桜心塾」の看板を掲げ四、五〇名の子供たちが厳しい先生の下「泣きの合宿」が始まりました。

朝の訓練は、道に霜柱が立って凍てついた時でも、お構いなしのランニングが日課でした。お風呂は近所の農家にいただきに行きましたが、その先々のご都合があったのでしょう悲喜こもごもでしたね。竹の茶碗にご飯粒が乗っかった記憶はあまりなく、当地の名産のお芋がごちそうでした。

その夏の思い出は、先生があの広い利根川を向こう岸まで泳ぎ、姿が小さく見えた時の感動です。おばあさんが小川に立ち、ひょいと着物のすそをめくって見事に〇〇をした時はビックリしたり感心したりしました。香取神宮に行進した帰り、自分は足の裏のしもやけが崩れて歩けなくて、先生にずっとおんぶしてもらって帰ったのに黙って教室を出て、先生に呼び止められ「ありがとうございました」とあいさつするよう教えていただきました。

おねしょをした布団でお寺の欄干は満艦飾（まんかんしょく）になっていました。今もお付き合いをしている大橋君か

ら、「お前はおばあさんが心配して持たせたふかふかの布団を、いつも要領のよい誰かに取られるから、おばあさんが来るたんびに怒っていた」と聞くのですが、自分にその記憶はありません。

その大橋君のお父さん（付き添いでみえた当日の姿が記念写真に残っている）が、三月一〇日、両国で消防団員として働き、その後、お姿がいまだに分からないと聞きました。愚かな戦争のため、銃後の地で無残にもお亡くなりになったのです。

そしてその遺児や家族には、戦後何の援助もないなかで、商売に精励して幼い兄弟を育て上げ、町のためにと町会長も務め上げた大橋君に「ご苦労様でした」とこの紙面を借りて言ってあげたいと思います。

昭和二〇年三月一〇日、水郷から東京の方を見ると、夜空が赤く照らされていました。自分は、そのあくる日すぐ父が迎えにきたと思っていたのですが、何十年かたって先生の所に伺ったら日記で一週間後だと分かりました。父との帰り、駅のホームはくすぶっていて、焼け野原の町のあちこちに火がついていましたが「あれは人を焼いている火だ」と言われました。そして父の故郷青森に行く中継点の赤羽で出された缶詰が、小学校にあったものだと聞かされました。

上野から満員列車で青森の黒石に、そして、そり馬車で着いた家の中は、まるで雪の中にいるみたいでした。また、父は、現地で召集された時「これで日本も終わり」と思ったようでした。黒石での思い出は、近所の兄貴たちと、隣村の子供たちとの川を挟んでの石投げ合戦、うり取り、川イチゴ取り、カジカのもりつきなどいろいろあります。

八月一五日、共同の井戸端でおばちゃんたちが「これから平和になるね」と言っていました。平和（当時は意味が分からなかったが）という新鮮な言葉との出会いは、今もって貴重な体験だったと思っています。

四年生になって、今度はおじいさんの本家筋の天沼に行き、六年の二学期までいました。当時は畑だらけでした。ここは野球が盛んで、物が食えない時、親父が鹿皮のグローブを買ってくれたのにはびっくりしました。そして近所の教会に日曜礼拝に行った時、小遣いがないのに帽子が回ってきた時もビックリしました。給食は、学校ではありませんでしたが配給はあったみたいです。また、近所にマドンナがいて、何ともいえない感情をいだいたものでした。ここでは「りんごの歌」、古橋の「富士山の飛び魚」に感動しました。

六年の三学期、やっと両国にバラックを建てたので、桜心塾の先生が担任をしていたクラスに編入しました。このように小学校を五つ渡り歩くと、子供心に自然に相手の人相や言葉で、敵か味方か分かるようですね。これもいい人生経験をしたと思っています。

そんな食糧事情で、とうとう高校三年間は栄養不良の通信簿でした。ですからサバイバルになった時は、我慢することが自然に身に付いた習性になっているので、私は強いと思う次第です。

最後に、敗戦によって戦時国債が紙切れに、また新円切り上げの銀行封鎖で国は残りましたが、国民が困窮したことを親の体験を通じ子供心に感じていました。

子供や孫の時代が戦中、戦後の時代にタイムスリップしないことを祈り、終わりにします。



宿舎となった浄福寺（千葉県豊浦町）


疎開児童の出迎え（水郷駅）

学童集団疎開―再疎開―のこと

江東国民学校五年　北橋秀夫

昭和一九年の春、戦況が厳しくなって、両国駅周辺の建物が取り壊され、その廃材整理などがあった。

そのころ、今後のことを考えて学童を疎開させることになった。父母の田舎の身寄りに疎開させる「縁故疎開」が勧められたが、私の家は両親ともに東京生まれ東京育ちで田舎がなく、「集団疎開」をすることになった。

昭和一九年の八月、私たち「江東国民学校」五年生三八名は、引率の永井久雄先生と寮母さんとともに列車に乗り、両国駅を出発した。それからの生活については、友人が記事を寄せているので、私はその翌年、昭和二〇年五月に千葉県香取郡八都村から岩手県東磐井郡大原町に再疎開したことについて、記憶を呼び覚ましながらまとめてみた。

硫黄島の陥落とともに、東京への空襲が激しくなり、東京を爆撃して銚子に抜けるところに位置する疎開地も、空中戦の下になり、危険を避けて岩手県への再疎開になった。千葉から岩手へ移らない人もいたが、別に新しく加わった人も含めて、上野駅から東北本線の夜行列車で北へ。一ノ関駅から大船渡線で東へ行き、途中の摺沢駅で下車して宿舎へ向かった。行き先は大原町の「長泉寺」だった。

周辺は田んぼと山の田舎の村、砂鉄川が流れ、室根山が遠望できた。宿舎で生活する一方、以前と同様に、班の人ごとに農家に入浴などのお世話になった。

六年生になっていたのに、勉強した記憶はほとんどない。室根山に登ったり、近くの砂鉄川で水遊びをしたりしていた。また、山から木の枝を背負って宿舎まで、何回も運んだことを覚えている。

今と違って、当時の岩手では食料が十分ではなく、小さなジャガイモをよく食べさせられた。それに、秋になって栗が実ると、山栗を生のままで食べたりした。育ち盛りのときに、食べ物には本当に苦労した。後に先生から聞いた話では、「岩手県から千葉県までさつまいもを買いに行きましたが、途中の列車の混雑でほとんど一本足で立ったままだったので、小見川駅に着いたときは、自分の身体なのか自分の足なのか、感覚がない有り様でした。八都村の村長さんの計らいで、貨車一台分のさつまいもを疎開学童のために都合していただいたご好意は、今でも忘れられません」とのことだった。

八月一五日に、本堂脇の廊下でラジオを聞いた。雑音がひどく、内容も分からなかった。終ってから先生が一言「戦争に負けた」と言ったが、どういうことか理解できなかった。生活は変わりがなかった。

日だまりの廊下では、大勢が集まってパンツの縫い目にたくさんいるシラミをつぶした。

生活が嫌だし、家族が恋しくて、宿舎を抜け出す（脱走と言った）人もいた。駅までの距離があり、田舎道で人目にもつきやすく、途中で連れ戻されたりしていた。

九月に入ると、親が迎えに来るようになり、少しずつ減っていった。私も迎えに来た父と一〇月三〇日の朝に宿舎を出て、その夜は一ノ関駅の跨線（こせん）橋の隅で寒い一夜を過ごした。翌朝の上野行きの列車に二人で窓から乗り込んだ。夜に上野駅(日暮里駅?)に到着、また窓から降りた。戦災のために両国から吉祥寺に移った家に着いたのは、夜も遅い時間だった。

先生はある時、「下町の両国地区が大空襲で焼けて、子どもたちの両親や兄弟などに犠牲者が出たが、何も知らない子どもにどのように知らせたものかと、今考えても胸が張り裂ける思いでした」と語ったことがあった。実際、多くの家で何人かの犠牲者が出た。我が家では、両国で生活していた一一人の家族全員が奇跡的に、無事に吉祥寺の親戚（しんせき）を頼って避難できた。空襲で一家が全滅した学童が二人いた。二一年三月末の学校終了時まで、岩手の地で先生と生活していたとのことである。

府馬修徳院―学童疎開―

江東国民学校五年　佐久間　幸　子
（旧姓　井口）

昭和一九年八月末、私たち江東国民学校五年女子の四八名は、引率の丹野先生、西岡先生に連れられ両国駅を出発した。

前日の夜遅くまで出発の準備をしてくれていた両親、夜中にふと目覚めて二人の不安そうな声を耳にしたときのことを思い出す。東両国一丁目の家が建物強制疎開になり、タイル張りで造ったばかりの父自慢の風呂も壊して、回向院近くの仮住まいに移ったのも不本意であったろうに、今また、小五、小三の二人の娘を手放す思いはどんなものであったろう。しかし、あのころはそんなことを口にするなど思いもよらず、また私たちも軍国の子として強い心で出発したのだった。

列車を降りてから何に乗って府馬に着いたのか、その記憶は定かでないが、修徳院では村の方々がお芋など用意して迎えてくださったと思う。

初めのころは、村の方々も五〇名もの新入者を迎えて大変なことばかりであったろう。器として準備されていた竹を切って作った物はひび割れて、間から汁がもれたり、そのうち間にはかびが生えたりもした。お風呂も、四、五名ずつグループを作って、各家庭にもらい風呂に行った。トイレも別棟にある田舎のこと、都会育ちの私たちには面食らうことばかりだったが、受け入れてくださったご家庭もどれほど大変であったろう。

修徳院の本堂の廊下に各々の行李（こうり）を並べ、夜は部屋いっぱいに布団を敷いて寝る生活が徐々に落ち着いていった。村の国民学校に通って勉強をし、食事も比較的恵まれていたとは思うが、甘味不足は子供にとってつらいものがあり、栄養剤の糖衣錠、はては歯磨き粉までなめる者も出るありさまであった。

農村の生活を初めて体験した私にとって忘れられないのは、村祭り、イナゴ捕り、麦踏みだ。村祭りの日は、お小遣いをもらって屋台店を見てまわり、何か食べ物を買った。どこに神社があったのかそれはぼんやりしているのだが…。

イナゴ捕りは、袋を持ってたくさん集めた。でも、後でそれが食事のおかずになって出てきた時はびっくりした。まだ寒いころの麦踏みは、裸足（はだし）にわら草履（ぞうり）だったので、指に霜焼けができてつらかった。今も残る霜焼

けのあとを見るとあの時の冷たさを思い出す。農村を知らずに育った私には、良い体験ではあったのだが。

府馬の方々は、私たちのために村の桜の木を全部切り、火鉢を作り、炭を焼いてくださった。寒くなってからの私たちの生活は、この火鉢と炭でどれほど慰められたかしれない。少しずつではあったが、干し芋や干し魚を焼いて食べたり、火鉢に手をかざしながら演芸会をしたり、つらい毎日の中での楽しい思い出になっている。丹野先生、西岡先生の深い愛に包まれて、村の方々の思いやりの中で、学童疎開児としては私たちは幸せだったのだと思う。

一九年の秋ごろまでは、まだまだ穏やかな日も多く、近くの部隊の兵隊さんと遊んだこともあり、その方たちが前線に出られてからは、よく慰問袋を送ったりした。しかし、一九年の暮れごろから戦局も厳しくなり始め、私たちも林の中に防空壕（ぼうくうごう）を作り、空襲警報が出ると夜中でも起こされ、壕に飛び込んだ。竹を切って竹やりも作った。九十九里から米兵が上陸して来たら、それで戦うのだと本気で考えていたのだ。

二〇年になってからは、松根油（しょうこんゆ）を作る手伝いやアカザなどの雑草取りをした。少し離れた山の方に、アメリカの飛行機が落ちたことがあり、それを見に行ったりもした。このころには、鉄でできた物はすべて村中から消えており、子供心にも、「これで軍艦や飛行機をつくり、松の根っこで動かすのか」と何か奇妙な思いもし、落ちていたアメリカの飛行機のガラスの厚さが目に焼きついていた。

戦局はますます厳しくなり、私たちの生活も苦しくなっていた。食べ物を求めて、何人かの決死隊が先生に連れられ、銚子に魚の買い出しに行ったこともある。機銃掃射を恐れて必死の思いであったが、買って来た大きなイワシを頭から食べなさいと言われ、これまた必死の思いであった。

風呂に入る回数も少なくなり、洗剤の不足もあって、このころには、全員髪にシラミがわき、下着にもシラミの卵がいっぱいついた。冬であったが、温かい日には庭でみんなでシラミ取り、その間にシイの実を拾っては食べていた。

三月九日のあの夜、空襲警報で起こされた私たちが、山のシイの木に寄りかかって見た東京の空。真っ赤に見えたあの空を私は忘れることができない。まわりには椿の花が真っ赤に咲いていた。

翌日、丹野先生が両国まで様子を見に行かれた。乗り物も思うにまかせず、だいぶ歩いて行かれたとのことであった。

どこも焼け野原で、家族の消息もほとんど分からなかった。

不安な何日かの後、焼け出された家族が迎えに来はじめた。私も運良く家族は無事で、父が迎えに来てくれた。東京は危険ということであったが、当時は乗車券も三駅までしか売ってもらえず、あちこちで長いこと待たされ少しずつ乗り継いで、やっと家族が避難していた甲府に着いたのだった。あの時、家族を亡くされた友人たちは、岩手に再疎開したということは、後で知ったことだった。

約七か月の学童疎開。長い期間ではないのだが、一つ一つのできごとを鮮明に思い出す。それだけ異常な時代であったといえるのだろう。

学童疎開　家族との別れ

江東国民学校五年　田島靜子

三月一〇日の空襲で、父四二歳、母四〇歳、妹七歳、親戚の方二名が死亡しました。

私（当時は小学校五年生）は昭和一九年八月一七日、学童疎開で両国駅から母の涙に見送られて、千葉県小見川府馬町修徳院へ疎開しました。

家は両親、私、弟、妹の五人。幸せな生活でした。弟は三年生で私と同じく小見川に疎開し、妹は一年生で家におりました。

母と最後に面会できたのは二月中旬、私が風邪でお寺の本堂の隅に寝ていたときでした。一晩泊まって、夜は私の冷たい足を母の腹で暖めてくれたこと。忘れません。

お寺さんで、おなかのすいてる時出されたサツマイモのおいしかったこと。食べたい盛りで、御飯がいっぱい食べられず、家に帰りたいこともありました。

三月九～一〇日の下町大空襲の時、初めてお寺に防空壕（ぼうくうごう）ができて、防空壕から空を見た時、真っ赤に焼かれた色、印象的でした。

三月一〇日以後、友達の家族が迎えに来ても、私には両親が来なくて、お寺に積んだ布団の中に頭だけ入れて泣きました。

勉強より避難訓練で、先生からは、「飛行機が落としたチョコレート、ペンは決して拾ってはいけない。手に触れると破裂するから……」と言われていました。

六年生は三月の初め、女学校の試験で家に帰り、三月一〇日の空襲で大分亡くなっていると聞きました。私も一年早く生まれていたら、今はいなかったと思います。

その後、岩手県に再疎開し、長野の祖父母に引き取られました。

第二次大戦が終って六〇年、息子や孫に体験を話しても、現在の平和の時に育ったためか、理解は無理と思います。

三月一〇日、両国の慰霊堂には、お参りに行きます。

戦争はどんな時でも、絶対、やってはいけないのです。

学童疎開の思い出

江東国民学校五年　早川巖

昭和一九年八月、私の記憶では一九日ごろではないかと思います。両国駅、当時千葉、銚子方面行きの汽車は両国が始発で現在のビヤステーション両国が汽車の発着場所でした。両国小学校（当時は江東国民学校）四年生から六年生まで、私は五年男子の組で数百人の児童が両親・家族に見送られ遠足へでも行く気分で出発いたしました。各学年、男女別で、香取、水郷それぞれの駅で下車。五年男子は小見川駅で下車。するとこれから世話になる学校の上級生が何人かの先生に引率されて私たちを出迎えてくださったのです。何キロか歩いて八都村小学校（現在は香取郡山田町）に着き、ひと休みしてまた二キロか三キロ近く歩いて、やっと西雲寺というお寺に着いたころは日も西に傾き、ヒグラシでしょうか、かなかなと鳴く声が妙にもの悲しく、家を出たときの遠足気分はどこへやら、これから両親や姉と別れて暮らすのかとの思いと、いつになったら東京へ帰れるのかとの思いで、急に目に涙があふれ、それを友達に見られまいとして下を向いたり横を向いたり、苦労しました。

食事はモウソウ竹で作ったご飯茶わんで、竹の節の部分が茶わんの底になり高さは七センチくらい、直径は竹の太さにもよりますが一〇センチくらいでしょうか。外側と内側を削り食べやすい大きさになっていますが、材質が竹ですから使っていくうち外部がカビでしょうか黒ずんできます。もちろん寮母さんは三度三度洗って干しているのでしょうが、長く使っていれば竹材も腐って、それに暖かいご飯を入れれば湯気といっしょに竹の腐ったようなにおいもします。それと竹茶わんの底が節の部分ですから平らではなく、高く盛り上がった茶わんと逆にへこんだ茶わんもあり、同じ一膳飯（いちぜんめし）でも底が盛り上がった茶わんはその分入る飯の量が少なく、旅先で買ったお土産品の上げ底と同じです。お代りなしの一膳飯ですから、クラスで一番身体が大きく食べ盛りの小生にとっては底の凸凹（でこぼこ）も問題です。それと小さい竹で作ったみそ汁用のおわんでおかずは漬け物。汁も今日のようなカツオだしなどではなく、ただしょっぱいだけで、今いただいたら味も素っ気もない汁だと思います。

アルミの弁当箱に寮母さんがご飯を詰めてくれるのですが、配給ですからご飯も少ししか入っておらず、ランドセルに弁当箱を入れ二キロか三キロ近く歩いて八都村小学校へ着

くと、ご飯が弁当箱の片隅に寄って空白部分の方が多いくらいでした。食べる盛りの小学校五年男子です。空腹はいかんともし難く、それでも村の人たちが親切で、疎開の子供たちがかわいそうと各家が交代で学校と寮の西雲寺を結ぶ道端に立って、大きなざるにさつま芋をふかして一人一人の疎開児童に手渡してくれました。しかも全員いっしょに帰るのではなく、足の早い子もいれば遅い子もいます。なかには掃除当番で随分帰りが遅くなる子もいます。ふかし芋を入れたざるを持ったおばあさんは、最後の一人になるまで道端に立って一人一人子供にお芋を手渡し、最後の子供を確認してから自分の家に帰っていくのです。

これは後年、土地の人から聞いた話です。私たち児童が疎開する何日か前に村長さんが村人を集め「近く東京から学童疎開でこの村に子供たちが来るが、もし村人の中に疎開児童をいじめるような者がいたら、この村から出ていってもらう」と言ったそうです。本当にみんな親切でした。戦後もしばらくは、村の人たち特にお世話になった家とは交流もあったのですが、当時を知っている人たちもみんな亡くなってしまいました。今は当時の学童疎開児童五年男子だけで毎年一〇月ごろ、両国近辺で同窓会を開いております。

とにかく空腹でしたから口に入るものは何でも食べました。歯磨きの粉がおいしくて、お菓子替わりに食べたというか、なめたと言った方が良いかもわかりません。

疎開当初は空襲警報もありませんでしたが、昭和一九年の終りから二〇年に入りますと空襲も頻繁となりました。二月ごろだと思いますが、いつものようにお弁当をかばんに入れ、これから学校へ行こうとお寺の玄関に立ちますと、南東方向の空で数機の戦闘機らしき飛行機が舞っており、その周辺に音だけの花火のように光るものがあり、初めは訓練でもしているのかと思う間もなく突然空襲警報のサイレンです。あわてて全員学校へ行くのを中止して防空壕（ぼうくうごう）です。お寺の裏山に横穴を掘り、普段はさつま芋を貯蔵するための洞穴だそうですが疎開児童の防空壕になりました。たださつま芋を貯蔵する穴でしたのでむかつくようなにおいでしたが、何回も入っているうち慣れました。その日は艦載機の来襲で朝から防空壕に入りっぱなしで、出たのは薄暗くなった夕方でした。先生とお寺の住職さんが交代でお寺の本堂に置いてあるラジオを聞きに行き、敵機がどの辺にいるか東部軍情報を聞いて、防空壕の中にいる疎開児童に連絡しておりました。たしかその日だと思います。お寺の住職さんがラジ

オを聞いて防空壕に戻ろうとした時、敵の飛行機か日本の飛行機か不明ですが、機関銃の弾が本堂の屋根を突き抜き、住職さんの五メートルくらい先の地面に突きささったそうで、後でその場所を掘りましたら銅の弾が出てきました。また空中戦で撃墜された日本の戦闘機がお寺から数百メートル離れた畑に落ち、すり鉢状の大きな穴が開き、その少し先の田んぼの中にパラシュートが開かず、そのまま落ちた操縦士の人の形で田んぼの土がくぼんでいたのを次の日に見に行きました。飛行機の落ちた穴には残骸が散らばりガソリンのにおいが鼻を付きます。戦争は実に悲惨です。

しかし楽しいこともありました。疎開児童を慰め励まそうと皇后陛下が戦時中の何もない時代にビスケットを配給してくれたのです。そのビスケットのおいしかったこと。お世話になった村の子供たちにも分けました。そのとき皇后陛下が読まれた和歌、今でも覚えています。

つぎの世を　背負うべき身ぞ　たくましく
　　正しくのびよ　里にうつりて

三月九日夜寝てからまた空襲警報です。せっかく寝たのに着替えて防空壕へ。空襲警報が解除され、部屋へ戻ったのが明け方近くです。朝、いつものように朝食を食べようと本堂から庫裡へ行くために庭へ出ましたら、空から何か降ってくるのです。それもちょっとやそっとの数ではありません。空一面に紙の燃えたかすが、まるで雪でも降ってくるように、黒く燃えた紙が後から後から降ってくるのです。いったい何だろうと思っておりましたその日の夕方薄暗くなったころ、疎開児童の中の一人のお父さんが、自転車で両国から一日がかりで小見川(現在山田町)西雲寺まで、東京が空襲で焼けたこと、この中に両親や家族の亡くなった人がいることなどの報告に来てくれました。それからしばらくたって、私の両親は無事であることがわかりほっとしました。

後で聞いた話です。私の家は両国四丁目、裏が両国公園で勝海舟生誕の地ですが、自宅の防空壕に入っていて気が付かず、外へ出たら周りは火の海。母は竪川の方へ逃げようと言ったそうですが、父がいや両国駅の方だと決断して助かったそうです。そのとき父は両国駅のホームから下町一面の火災を見て母に言ったそうです。「こんな火災は二度と見られない。よく見ておけ」と。また母の方は満州にいた親戚(しんせき)から送られたあめを大事にしまっておき、その日そのあめを持って両国駅へ避難して、周りにいた何人かの人に分けてあげて喜ばれたそうで、恐怖と疲労から声も出ない人が

一粒のあめで落着きを取り戻したそうです。

戦争の悲惨にくらべれば学童疎開はまだ良い方かも知れません。しかし小学校五年生の子供が親元を離れ、慣れない土地で食べたい盛りに、ひもじい思いをして数か月暮らし、さらに岩手県へ再疎開した人もいました。子供なりの苦労もありました。今になれば良い思い出です。

当時引率の永井先生の「永」と友だちの「友」に江東小学校の「江東」をつけて「江東永友会」の名称で今も交流があり、年に一回は同窓会を開いております。既に七一歳か七二歳ですから亡くなった人もおります。なかには病気で出席できない人などさまざまですが、それでも声をかければ一〇人以上は集まります。集まれば疎開時代の思い出話で盛り上がります。お寺に三七人の児童全員入れるお風呂はありませんので近くの農家へ入りに行くこととなり、農家からお風呂を利用しても良いとの申し出が七軒あり、五人か六人を一グループとし一班から七班まで分けて、それぞれ決められた農家の家に夕方お風呂をもらいに行くのです。風呂から上がるとふかし芋の日もあり、とうもろこしの時もあり、何かしらごちそうになれるので、それが楽しみでお風呂だけは休まず毎日通いました。慣れてから自分たちで風呂おけに井戸水をバケツでくみ、枯れ枝や杉の枯れ葉を燃やしてお風呂を沸かし、農家の子どもたちを風呂へ入れてあげたり、縄や藁草履（わらぞうり）の作り方を習ったり、楽しい思い出もたくさんあります。学童疎開時代の思い出話で年に一回の同窓会が楽しみで、帰るときは、また来年も元気で会いましょうと再会を約して家路につきます。

思い出はまだたくさんありますが長くなりますので最後に八都村に疎開しておりました当時の先生、永井先生が作詞した替え歌の歌詞を記して終ります。

一　ひとつとせ　光り輝く日の本の
　僕らは八都村健児だよ
　そいつは剛毅（ごうき）だね　そいつは剛毅だね

二　ふたつとせ　二人の親に別れても
　僕らはちっとも淋しくない
　そいつは剛毅だね　そいつは剛毅だね

三　みつっとせ　み国の為に疎開して
　みんな仲良く学びゆく
　そいつは剛毅だね　そいつは剛毅だね

四　よっつとせ　他所へ来たのじゃ有りません
　此（こ）の八都村は僕の村

そいつは剛毅だね　そいつは剛毅だね

五

いつつとせ　今に見ていろ米英め
僕らの羽ばたくときがくる
そいつは剛毅だね　そいつは剛毅だね

六

むっつとせ　村の親切身にしみて
僕らはすくすく育ちゆく
そいつは剛毅だね　そいつは剛毅だね

七

ななつとせ　なれない疎開の生活も
今じゃすっかり慣れました
そいつは剛毅だね　そいつは剛毅だね

八

やっつとせ　八都の豊かな農村で
元気に明るく育ちゆく
そいつは剛毅だね　そいつは剛毅だね

九

ここのつとせ　此処（ここ）で鍛えた此の身体
何がなんでも頑張ろう
そいつは剛毅だね　そいつは剛毅だね

十

とうとせ　東亜の建設担うのは
この八都村の健児だよ
そいつは剛毅だね　そいつは剛毅だね

学童疎開　千葉―岩手

江東国民学校五年　渡辺貞子
（旧姓　小山）

昭和一九年八月末、五年生の私は「集団疎開」の聞き慣れない言葉ながら、遠足のような気分で、両国駅から出発。小見川駅からかなり入った千葉県香取郡府馬町の修徳院（天台宗）に到着。丹野富士男先生、西岡つね子先生、助手の田中美栄子さん、生徒四七名をお寺の大照はな様、みちゑ様、町の大勢の方々が温かく迎えてくださった。

本堂の両側の部屋は居住区、廊下は荷物置き場（六班に分けられて）となる。食堂は、お寺の石段を下りた所の会所（かいしょ）。洗面は少し離れた畑の脇の泉の所。お風呂は町の有志の方々の家に班ごとに指定され、それぞれの家で入れてもらった。その折おいもなどもちょうだいした。ここでの生活に少し慣れてきたころ、夕暮れ時などホームシックで一人がシクシクし始めると、あちこちからも泣き声がしてきた。時折は個性のぶつかり合いがあって、いじめ、仲間はずれのようなこともあったが、いつの間にか耐えることが身につき、大したことにはならなかった。こんな中での楽しみは家からの便りと小包。一人娘のことが気になる父は（母はすでに他界）二～三日ごとにはがきと小包もせっせと送ってくれ「先生様の言うことをきいて、体を丈夫に…」と書いてくれた。

丹野先生は教育熱心で厳しい方だった。戦争中であり、みんな真剣に学習していた。テストの時は、ザラ紙に自分たちで黒板の問題を書き写してから答えを書いた。裏ももちろん使用。町の小学校の一室が私たちの教室で学校でも寮（お寺）でも全員一緒なので一体感は強かったように思われた。

当時「毛ジラミ」が全員につき、寺の庭での検査が日常化した。先生方、親たちをあわてさせた。水銀軟膏が全員の頭に塗られ、熱湯消毒も行われた。

戦争のためか、列車にやたらに乗れなくなり、親たちの面会も困難となった。私は父と一回だけの面会で、それが今生の別れとなってしまった。

二〇年三月九日夜半からの空襲で、お寺の裏山の方から見た東京方面の空が赤っぽいのが、今でも目に残っている。すぐ安否を問うはがきを出したが、長いことかかって受取人不明で戻ってきた。今も手元にある。その後、丹野先生が調査のため東京に行かれた。家族不明の生徒は先生の部屋で説明を受けることになった。私は何となく、覚悟のようなものが

できていたのか、悲しみを通り越していたのか、妙に落ち着いて先生のお話を受け止めていた。家族全員が亡くなったらしい友人の泣き声を聞きながら、親のない私たちの今後のことがとても不安だった。

折にふれ、町の方々は、スイカやおいもなどを持ってきてくれたり、おもちをついてくださったりとお寺に来てくれた。寒くないようにとお寺の石段の脇の桜の木々も炭にしてくださった。後年、有志で、お礼として桜の苗木を植樹させていただき、現代版「鉢の木」（能）として新聞に掲載されたとか。

二〇年六月、岩手へ再疎開。丹野先生、丹野奈留代先生（奥様）引率。焼け野原を目にしないようにとの配慮で夜に東京を通過するよう手配されたそうだ。またその折、学校の用務員の方が大きなヤカンに水を入れて待機してくれていたことを覚えている。列車が「平」を通過するころ、海から上がり始めた朝日を感動して見つめていた。一ノ関から大船渡線の摺沢へ。そこからトラックで長いこと揺られて着いたのが興田村（岩手県東磐井郡）。今度の寮となる龍門寺（曹洞宗）は小高い山の半ばに山門がある。寮となるまでの準備期間、六年一七名、三年一名、二年三名（計二一名）は班別に村の有志宅に分宿。私は旅館に割り当てられ、近くの寺に入る四年生の男子数名も別の部屋だが一緒になった。部屋、廊下などの清掃を手伝った。

ほどなく龍門寺での生活が始まった。食糧事情が厳しくなって、御飯の中に、大根、大豆、フキなど混じるようになる。農産物の多くない土地での山菜は大事な食材。興田の学校の生徒たちに教えてもらいながら、ゼンマイ・ワラビ採りを初体験。田んぼの肥料をはだしで混ぜ合わせる「ふんませ」に挑戦中、ヒルに吸い付かれ「キャー」。畑の草取りで「フウフウ」。裏山を開墾しての畑への肥料（自分たちの出したもの）運びで「ヨイショ…」。二人で担いでの山道の登りは大変だった。せっかくの畑だが土が向いてなく、気候的にも無理で、植えたさつまいもは育たなかった。これらの作業はずべて、村の人たちに好印象をもってもらえるようにと、食料の入手がし易いようにとの先生のお考で行われたものだった。

二〇年八月一五日。朝からカンカン照りの中、お寺の近くの畑の草取り。強い日ざしで頭も首もやけるようで汗でぐっしょり。正午に重大ニュースがあるとのことで、本堂に全員正座してラジオを囲む。「ピー、ピー、シャー」と雑音の中、

聞こえにくい声が小さくなったり、大きくなったりして語られている。玉音放送だった。「天皇陛下がラジオに出て、しゃべっていらっしゃるの?ほんとに?」と思っているうちに、午前中の疲れからか、ぼうっとしたまま眠気が出てきた。しばらくして、ラジオが消され、先生方が下を向いたまま涙ぐんでいる姿を見た瞬間、一大事が起こったと思った。先生はつらそうなお顔で「今の放送で日本は完全に負けたのだ」と言われた。私たちは、一斉にしゅんとなり、「これからどうなるんだろう、日本の国は?」「私たちは?」と頭の中でぐるぐる渦まいて、気だるい感じのままの一日だった。今まで信じていた神国日本は何だったのか。正しいとは何だったのか。六年生なりに答えの出ないまま考えていた。

数日後から、次第に日常の集団生活に戻っていった。一番、戸惑われていたのは、先生だったのかも知れない。そして軍国主義的内容表現の教科書の墨塗りが始まった。つい先日まで、絶対正しく真実であると教えられたものが否定され、墨を塗り、切り取りはり合わされ、大事に大事に使ってきた教科書が姿を変えていく時、私の心の中はぐしゃぐしゃになって涙が出てきた。

秋は冬に備えての食糧、燃料の調達で村の方々も私たちも大忙しである。秋色の景色の中に、いっぱいの大根干し場となった山門の白い模様が面白く思われた。少し離れた山へキノコ採りに。山菜採りの時の同じ方々に教えてもらっていく。栗もだし、シメジ、紫シメジ、マツタケ、シイタケ、ヒラタケ…など夢中で採った。村の材木工場から出る端切れ（バタ木、幅二～三〇センチ、長さ一メートルくらい）を一人、七～八枚ずつ、ロープで背負いお寺まで運んだり、山奥の炭焼きの所で分けてもらった木炭を一俵ずつ、これもロープで背負って運んで冬支度を手伝った。交渉は先生が村の有志の方を通してあったのだろう。ロープが肩に食い込んで痛かったが、みんなよくがんばった。

いよいよ冬。零下一三度が一回、零下九度が三回、零下六～三度が毎日。固く絞った雑巾（ぞうきん）もすぐ凍ってしまって困った。そんな中での楽しみは、村の方や、先生方が作ってくれた竹べらスキー。竹に付いているひもを操って、寺の前庭、山への坂道がスキー場となる。雪の中で転がりながら寒さも忘れた。暖房は小さな火鉢だけだったが、勉強も写生も楽しく、奈留代先生が、下駄の鼻緒（はなお）、足袋の作り方、靴下の穴かがりなど丁寧に教えてくださり、自分たちの細々した始末ができるようになった。一面の銀世界の

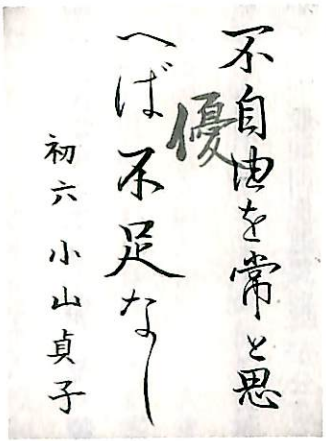
下から「土」が見え始めたときのうれしさも忘れられない。

そして三月はじめ東京へ。都合で早めに帰った人も数名あったが、みんな家族のような気持ちになっていた。母校は残念ながら廃校となっていて、中和小学校の音楽室で、先生のお手製の卒業証書で、私たちだけの略式卒業式が行われ別れていった。私は出迎えに来てくれていた叔父に引き取られ、まだ疎開のままの茅ヶ崎へ行った。

―追記―

興田にいた時に、肌着にシラミが付いたことがあり、先生方がドラム缶で、全員の肌着を煮沸してくださったことがあった。

また、疎開中から、時折体調を崩されていた丹野先生は、帰ってからほどなく他界された。





疎開当時筆者が書いた書および絵





学童疎開

明徳国民学校六年　加茂登千

〈序〉

昭和一九年、戦局は極度に逼迫、ますます不利に展開、同年三月三日の閣議において「一般疎開促進要綱」が公布され、本所区・向島区においては、五八八八名の児童が縁故疎開を開始、次いで、六月三〇日首都圏防空本部より、三年以上の学童につき保護者の申請を受けて集団疎開を行うべく発令される。これに伴ない百名単位につき、訓導二名、用務員三名、各地元医者の構成で千葉県下への分散疎開が七～八月にかけて実施された。（ちなみに・墨田区教育史によれば、本所区は千葉県へ八一八五名、向島区は茨城県に六六八三名、計一四八六八名が集団疎開している）

さて、私たちはその一員として、次のような構成で出発した。

疎開地＝千葉県香取郡昭栄村農村修練道場

六年生―南寮（一部）北寮・道場

恩師＝田口信太郎・尾島志ず　寮母＝神津・梅沢・高田

五年生―南寮（一部）　恩師＝中島武　寮母＝加藤

農村修練道場とは、日本青年館（明治神宮）の施設である。それゆえか、毎朝、明治天皇の御製を朗詠して一日が始まった。その節回しは今日でも忘れてはいない。また、荒木少将が来訪され、北大営の戦いの話をしていた。当時の南京政府の留学生が数人おり、時折、交歓を行ったこともあった。

〈体験〉

―風呂場―

五右衛門風呂であった。全員がシラミをわかし寮母さんが煮沸消毒?をしていた。道場から渡り廊下を、カタカタと走り抜け、よくしかられた。

―便所―

汲取り式であったため、大便が床上まで盛りあがり、嫌がった私たちは野ぐそをきめ込んだものだ。特に、雑木林に入った時、その上空で空中戦があり怖くなった思いをする。さて、そのあげく、子供たちで肥汲みをすることになる。嫌々やっているうちに周囲が汚れだし、とうとうビチャビチャ歩き回って、転倒する者まで出る始末だった。とんだ遊びになったものだ。

―戦場走路・畑作業―

開墾畑の周囲にあり、草におおわれて見え隠れする塹壕

（ざんごう）は、大変印象深かった。

ちょうど、神社下に位置するあたりの除草をしていた。私はカマを振り回すうちに、宮本武蔵の二刀流よろしく、足（右）もとのアカザの根元へ振り降ろしたカマが、人差指と中指の間へ入り、パックリ口があき、背負われて道場へ戻った。

草津節の替歌で「修練場節」を作り、その中へこの戦場走路を歌い込んだ。面会が終り、間道（旧道）を帰って行く親たちの姿が小さくなって、雑木林に隠れるまで、いや、隠れても歌って涙をこらえていた。

「修練場よいとこ一度はおいで…戦場走路……」

〈思い出〉

―空腹のとき（その一・うその歯痛）―

「先生、僕、歯が痛いんです…」「何だ…？ウン…お前もか、どら、こっちさ来てみれ」「……、よし、久住さ行って来い」「ハイ！」まずは難関突破、得たり賢しとばかりに、私は何人かの急患（もっとも、本当の患者もいたが）と、久住の指定歯科医へと出掛ける。二里の道程だが、さほど遠く感じない。なぜなれば歯痛はなく、ただ、目的地には、おいしいギンナンが待っているからだった。それこそが子供の浅知恵だったが、何人も発病していた。加えて、医師も心得ていて、待合室の炬燵（こたつ）より呼び出しては、大公孫樹（おおいちょう）へと促してくださった。思い起こすと白髪交じりで眼鏡越しに見るまなざしは、さしずめ映画俳優の小杉勇を思い浮かべる。

空腹―これぐらい、子供にとって苦しいことはない。子供のうそも時にはかえってかわいいものだが、それにしても、当時、時代の不運をかこっていた私たちを思われる師の心は、いかばかりであったろう。

待合室の炬燵と柱時計のセコンドの音までが暗く、ささやくようにカッチン、カッチンと脈打っていたこと。柱が黒っぽく、そして壁までも何となく暗い感じであったことを…。

久住駅は、今のＪＲ成田線にある。遠い昔から、私たちの祖先が住いしていたので、この地名が生まれたとされている。

―空腹のとき（その二・オブラート）―

オブラートはもち米からできていると知った私たちは、修練場から二里近くある滑川駅（今のＪＲ成田線）そばにあった薬局へ、わずかな小遣銭を持って買いに行く。大きなガラス戸をあけると、すぐガラスケースがありそれが大変大きく

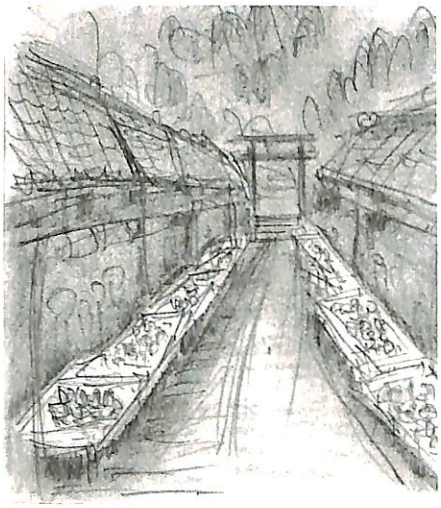
見え、オブラート（自由販売）を差し出す小母さんを見上げるようにして手を差し出したっけ…。外へ出るとそれを一気に口へ放り込んでいた。

―香取神宮―

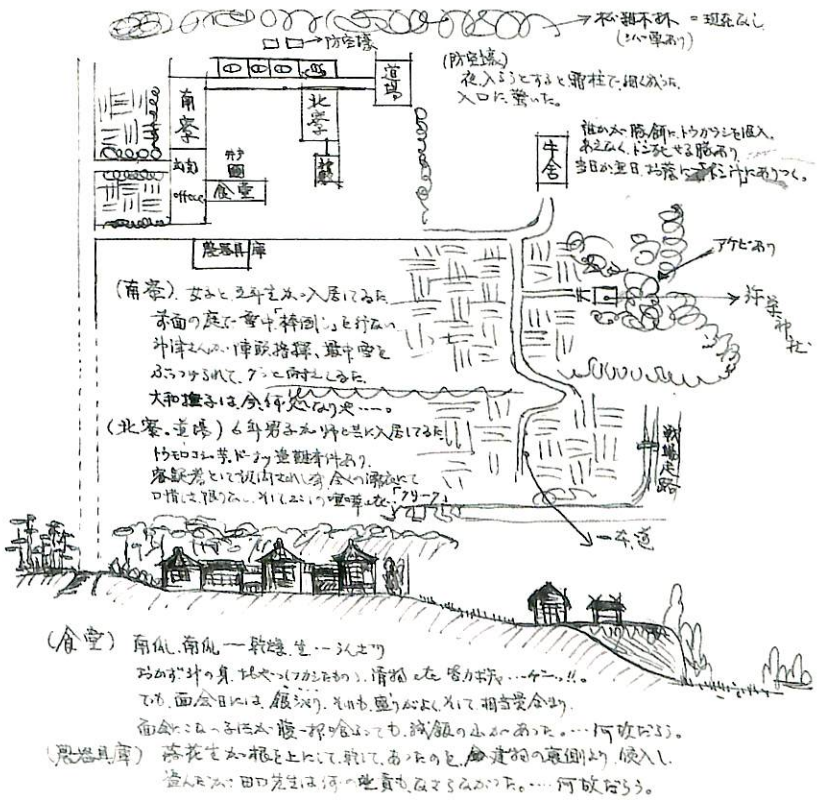
疎開中に、一度だけ遠足に行った。それが香取神宮で往きは徒歩、帰路が汽車であった。

いずれにしても、神宮は武勇の守護神であること、それと朱色の鮮やかさだけがはっきりと脳裏に焼付いている。また、参道のみやげ物店のどの店先にも、大変、おいしそうな柿（枝付もあり）がたくさん並べられて売っていた。何十年か後に訪ねてみたが柿を売っている店は一軒もなく、幻のようである。

当時を思うに、他に売る物がなかったのかも知れない。



香取神宮参道の風景



当時を思い出して（筆者）

六〇年前を振り返って

明徳国民学校六年　杉田利雄

私は一九三二年（昭和七年）生まれで今年七三歳になります。当時、本所区東駒形一丁目に住んでいました。小学校は近くの明徳小学校で勉強していました。（後に国民学校と改称されました）

昭和一六年一二月、太平洋戦争が始まり、戦況大勝利の報道に何も知らない大人も子どもも大喜びの毎日でした。しかし二～三年たつと戦況はおかしくなり、ラジオから流れるニュースは日本側の敗色を伝えるばかりでした。日本国内も米軍の空爆により被害が各地に広がりました。

そこで政府は子どもたちを地方の安全な所へ移動（このことを疎開といいます）させることになりました。地方に親戚（しんせき）や知り合いのある子どもは縁故疎開、そうでない子どもたちは集団疎開と、それぞれ各地に送られました。親元から離れ見ず知らずの所へ送られたことは大変な寂しさでした。私たち（二〇～三〇人）は千葉県の昭栄村（現在の大栄町か）という所で生活することになり、また、妹たちは千葉県佐原に行くことになりました。

昭栄村のそこは、村の「農村修練道場」と言って村の青少年が剣道や柔道など体育育成の場として使っていたのです。およそ三〇～四〇畳ほどあり、その場所に布団を敷いて眠り、朝、布団を畳んで長机を並べ（江戸時代の寺子屋のように）朝九時から午後三時ごろまで勉強をしていました。

食べ物は、初めは少しは良かったのですが、日にちの経過とともに悪くなり、成長期の子どもたちにとっては質も量も貧しく我慢ができなくなりました。近くの畑に行き、芋や野菜、生で食べられる物を探して歩きました。また少しばかりの小遣いのある者はポケットに小銭を忍ばせ、近くの農家にふかしたサツマイモを売ってもらいに行きました。しかし中には不審に思われ先生に知らされしかられた子もありました。

私たちにとって唯一の楽しみは二～三か月に一度の家族との面会でした。宿舎の窓から遠く、こちらに歩いてくる親の姿を見て「バンザイ」を叫んだものでした。

朝早く両国駅を出て、少量の衣類や食べ物を背負ってきてくれた母親を思い浮かべると、今でもじーんとくるものがあります。汽車の切符や食べ物もままならない時に子どものために苦労したことでしょう。子どもたちはみんなやせて着物

にはシラミが付いて大変でした。お天気の良い日には着物を脱いで宿舎の手すりにかけ日光浴とシラミ退治に過ごしたものです。情けない「少国民」の姿でした。

昭和二〇年三月、私たち六年生は中学校の受験のため東京に戻ることになりました。しかし日々に伝えられる本土空襲のニュースに大変心配していました。三月九日夜半、ついにアメリカ空軍B29三百機による焼夷弾（しょういだん）爆撃により、東京下町は一面の焼け野原になり、学校も焼け卒業式もありませんでした。同級生たちの多くは亡くなり、残された人たちにとっても苦しく過酷な道を歩まなければなりませんでした。

それから六〇年が過ぎ感じることは決して戦争はしてはならないということです。

多くの犠牲をはらい人々を悲惨な目に遭わせた戦争はいけないことです。

若い世代に伝えたい

明徳国民学校四年　武田英二

もし学童疎開という制度が当時なかったら、あの夜、父が空襲で逃げまどい二葉小学校に入っていたら。

両親兄弟の七人家族、私と妹は学童疎開で千葉へ。父は、母と兄と妹と三男を先に逃がして消火に当たり、後から逃げて被服廠（ひふくしょう）で助かりました。（三月九日に、母と兄弟三人は外手町の天理教の地下へ避難したらしいと言った人がいたと聞いていました。）

両国の駅から家族や皆に送られて私は千葉県の滑河の修練道場に妹は佐原のお寺へ行きました。道場は、朝六時に起床、朝礼、寮長と朝の勅語を合唱、皇居に向って最敬礼、朝食後農場の草むしり、少し勉強でした。

何よりも私にとって悲しかったのは、疎開先に家のものが面会に来なかったこと、子供心に寂しくつらかったことが思い出されます。

B29が千葉の上空に白い機体で飛んできたのをしばしば見ました。そして、その夜三月九日夜東京方面の空が赤く染まっているのを見ました。先生や寮母さんたちが心配そうに見ていました。

二、三日して父が黒い顔をして私を迎えにきました。先生や寮母さんが事務所で泣いているのを見ました。父は、母と兄弟は病院に入院していると言って、私と妹は母の実家に預けられました。その後、母と兄弟は死んでしまったことを聞き、私と妹は涙をぽろぽろとこぼして泣きました。

その後、終戦を田舎で聞き、父が東京へ連れてきてくれました。被服廠に山と積まれた遺骨を分骨して墓に入れました。

父はすでに他界しましたが、三月一〇日の話は誰にも一切しませんでした。当時を振り返って、今思うことは一体何だったのか。ただただ、私と家族と死んだ人々が、このような時代の中に置かれた人生が、人々の心に悲しくつらい経験が、今心の叫びが、嗚咽（おえつ）が、人間同士の争いのない平和の世界が来るのを祈ってやまない心境です。

六〇年前のあの悲惨なときを忘れ去り、またもや輪廻の道に歩むのか、若い世代にこのことを伝えてやみません。

学童疎開　東京大空襲そして長崎

明徳国民学校六年　徳永洋子
（旧姓　山口）

昭和一九年八月、暑い日でした。本所区明徳小学校の五、六年生は、千葉県香取郡昭栄村、大日本青年館農村修練場に学童疎開をしました。

父が病弱、母が妊娠中で、上野駅まで送って来ることができず、近くの道路で泣いていたら、消防団のおじさんが来てなぐさめてくれて「戦争のためだから仕方がない」と言ってくださったのを覚えています。

慣れない田舎での生活で、月に一回の面会日に両親が来られる方がうらやましく、人のいない場所でよく泣きました。でも楽しい時もありました。月のきれいな夜に、修練場の先生方とみんなで輪になって盆踊りなど踊りました。これも楽しい思い出の一つです。

栗拾いに行ったり、キノコを取りに行き菊の花を摘んだり、落花生を採ったり、見るもの聞くもの、珍しいものばかりでした。

七か月間の疎開生活で一度だけ、父が面会に来てくれて、その時は、あんこをはさんだサンドイッチを持ってきてくれました。胸がいっぱいで、父から「どうして食べないのか」と言われました。今でも、同じような物を見ると涙が出てきます。これも忘れられない思い出の一つです。

また、ある時は、寮母のおばさんから呼ばれ、「これはあなたのお父さんから渡して欲しいと言われた」と一通の封筒を渡されました。戦争がひどく、父からの遺言でした。親戚（しんせき）もなく、万一の場合、心残りだったのでしょう。

七か月間の学童疎開も終わり、二〇年三月三日、女学校に行くために東京に帰ってきました。今考えると、うれしいような悲しいような気持ちでした。

六日には荷物も着き、一〇日があの東京大空襲でした。父は近くの工場に勤めており、あの夜は私が一人で留守番でした。何時ごろだったか、真っ暗な夜、警戒警報と空襲警報、不気味な夜、怖くてしかたがなかったのですが、道路の真ん中にある防空壕（ぼうくうごう）へ布団を一枚運びました。ご飯が入ったおひつとフリカケを持って逃げ場を探しました。

真っ黒な外も周りが燃え、見る見るうちに火の粉が雪のように、空は昼間のように明るく、風が強く、吹き飛ばされそ

うになりながら、みんなが行く方に洋服を払いながら歩きました。持っている品物にはすぐ火がつき、用水おけの中に入ろうと思っていたら、どこかのおじさんが「そんなところに入ったら死んでしまうぞ」と叫んでいたので、知らない人の後について隅田公園の中に逃げました。それから何時間たったか覚えておりませんが、ものすごい人で驚きました。近所のおばさんが「疲れているからここで寝なさい」と草の上に何かを敷いてくださって、たしかキョチクトウの木の下で寝ました。

朝方になり、松屋デパートの窓からはまだ火が出ていました。人の声がしたので、公園の外に出たら隅田川に死体がどんどん流れていました。消防団の方たちが鳶口（とびぐち）で引っ張りあげて、草原には死体が山のように積まれていました。

その後、父親のことが気になり、一人で焼け跡に行くことにしました。昨日の面影は全然なく、見渡す限りの焼け野原。勇気を出して探すことにしました。道路には黒焦げの死体。やっと父ともめぐり合うことができました。父は横川小学校の裏の川に四時間もつかっていたそうです。水の中は熱いお湯のようだったそうで、みんな苦しそうにして、お母さんの背中の赤ちゃんも死んでいたそうで…。九死に一生を得てやっとの思いで上にあがり、誰かが薬を飲ませてくれたので元気が出たそうです。やはり父も私のことが心配になり、目は見えないし、長い時間をかけてやっと会うことができ、お互いに「よかったね」の一言。

学校の焼け跡に二晩泊まり、「東京は怖い。早く田舎に行こう」ということになりました。弟妹を連れて疎開している母の所へ、東京駅から雲仙号で。卒業式をすることもなく、大好きな東京と離れた時のことが悲しい思い出となりました。

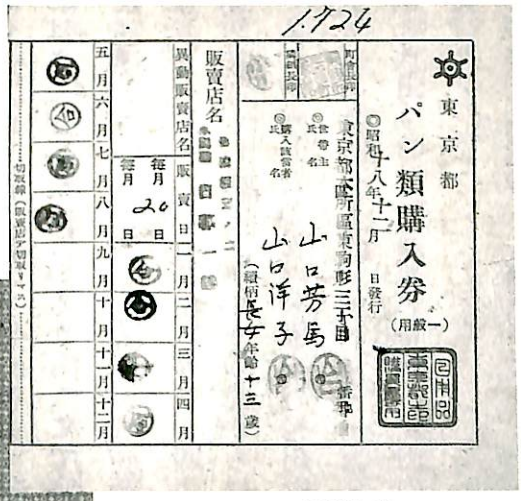
「同じ日本なのに、九州はこんなに平和なのかなあ」と思ったのもわずかの間で、長崎原爆投下。その後、縁あって長崎に住み五五年、病弱だった父も亡くなりました。

原爆で亡くなられた方、今でも苦しんでいる方もたくさんおられます。毎年八月九日午前一一時二分には、長崎市内は一斉に黙とうをします。でも、私は東京大空襲でなくなった方のことが浮かび、素直な気持ちになれなかったのが、やっと二、三年前から同じように冥福を祈る気持ちになれたようです。

こんな思いをするのも私たちの時代だけで、子供の時代、

孫の時代といつまでも平和であるように、世界が一つになって二度と戦争をしないことを願っています。

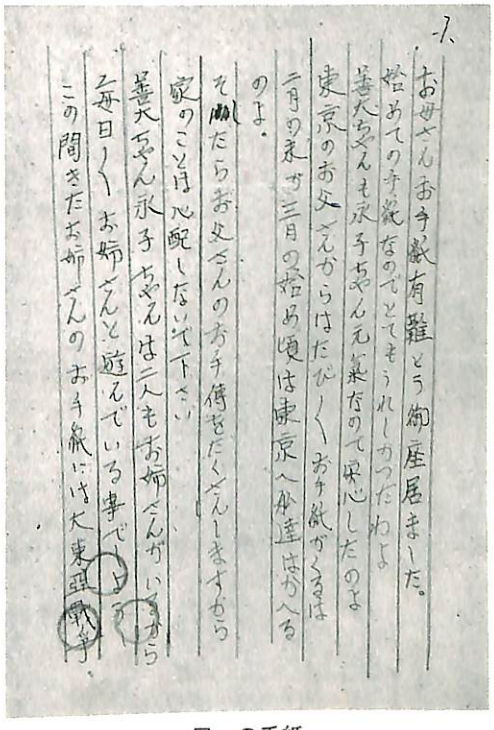
学童疎開をした場所には、記念樹を一〇年前に植えました。地主さんがかわいがってくださり、今年も写真を送ってくださいました。



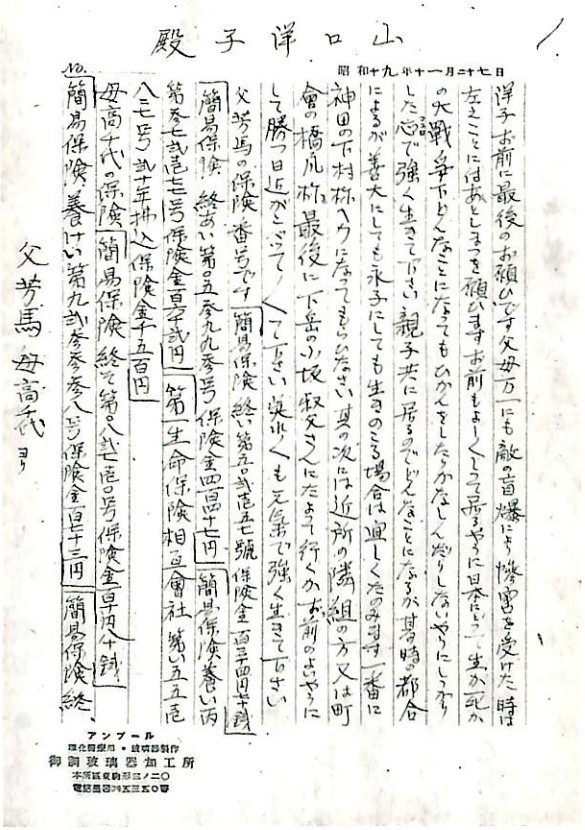
パン類購入券



衣料切符



母への手紙



父の遺言

ぼくの学童疎開日記
《昭和一九年八月～昭和二一年三月》

明徳国民学校五年　正井伸也

学童疎開生活を当時の日記の形で伝えたいと思う。

―昭和一九年八月〇日　学童疎開最初の日―

昭和一九年八月の夏真っ盛りのある日、ぼくたち疎開児童は学校の校庭に集合した。寝具その他大きな荷物は、事前に疎開先に送ってあり、当日はわずかな荷物をリュックに背負い、学校から総武線両国駅まで行進した。当時、千葉方面に行く列車はすべて両国駅が起点であったと記憶している。

駅のホームで見送りに来てくれた家族と別れ、遠足にでも行くような気分で両国駅をあとにした。列車の中で、はしゃぎながら何時間たっただろうか、やがて列車は成田から二つ目の滑河駅に到着した。駅には、これからぼくたちの面倒を見てくれると思われる人たちが牛車を何台か引いて迎えに出てくれていた。

ぼくたちはそれぞれ迎えの牛車に分乗し、二里半（約一〇キロ）の道程を進み、着いた所が千葉県香取郡昭栄村（現在の大栄町）大日本青年修練道場。まわりは林と畑ばかり、隣の家がはるか遠くに見えるという所に着いた。いよいよぼくたちの疎開生活の始まりとなった。

―昭和一九年九月〇日　待ちに待った面会日―

昭和一九年九月の終わりごろ、待ちに待ったその日がやってきた。親兄弟が食料の乏しいなか、離れて暮らしているわが子、兄弟に食べさせようと、できるだけのお菓子などを持って会いにきてくれた。なかには事情があってこられなかった家族もあり、これらの生徒たちは部屋の片隅でさびしそうに見ていたのを覚えている。

毎日満腹感を味わえないぼくたちは、親兄弟が持ってきてくれたお菓子などをこの時とばかりに口に運び、ほとんど全員がおなかをくだしてしまった。

―昭和一九年〇月〇日　おやつを長持ちさせる知恵―

手に入った食べ物は一日でも長く持たせる工夫をした。親が送ってくれた大豆の塩豆を、下着の入った柳行李（やなぎごうり）にばらまいておき、下着を着替えるたびに何粒かずつ食べては長持ちさせたのである。

こうして、食べ物の楽しみを後に残すことを考えだした。

―昭和一九年〇月〇日　炊事当番の悲劇―

炊事場から食堂まで約五〇メートル、雨の日も雪の日も毎日ご飯、みそ汁、総菜を炊事当番が手に手に運んでいた。

そんなある日、その日は雨あがりで足元がぬかるんでいた。炊事当番のひとりが足をすべらせ、胸に抱えていたご飯の入ったおけを道に落としてしまった。この結果、その班のご飯は道に落とした分だけ少なくなる。なんと悲劇なことか。

―昭和一九年〇月〇日　歯科医院のギンナン―

ぼくたちが下車した滑河駅のひとつ手前（成田より）の久住駅の近くに歯科医院があった。ある日友達のひとりが歯痛をおこしその歯医者に行った。そこで偶然見つけたのが、玄関の庭先にあるイチョウの木の下に散らばっているたくさんのギンナンであった。友達は、そのギンナンを持ち帰りみんなにわけてくれた。

これに味を占め、何日かおきにメンバーを変え二～三人のグループを組み、歯痛を名目にしたギンナン取りが続いた。

―昭和一九年〇月〇日　日なたぼっこしながらシラミとり―

疎開生活にも大分慣れてきたある日、友達の一人が体にかゆみを感じ、裸になってみると赤い小さな湿疹がたくさんできていた。そのうち、ぼくも、ぼくもと全員が同じ状態と知りその原因を探ると、それは何とシラミの仕業であった。そこで、ぼくたちが脱いだ下着を調べてみると、その縫い目に沿ってビッシリとシラミとその卵が列をなしているではないか。それを見て、みんな鳥肌を立てたがその日からぼくたちのシラミ取り作業が始まった。

まず、全員が鉛筆箱（当時はセルロイド製）のふたをもって日当たりの良い窓際に陣取り、取ったシラミをふたの中に貯め置き、まとめて焼き殺すのである。しかし、シラミの親は取れても卵はなかなか取れない。そのために、それから後にもシラミ取り作業は続いた。

―昭和一九年〇月〇日　農作業時間中の珍事―

ぼくたちの一日の行動といえば、勉強に農作業、運動のくりかえしであった。

農作業といえば雑草刈り、家畜のエサやり、肥料の運搬などいろいろあったが、なかでも一番いやなのが肥料の運搬だった。二人一組になって天秤（てんびん）棒の真ん中に肥料がいっぱいに入っている肥おけをつるし、自分たちの使っている便所から、遠く離れた農場近くの肥だめまで運ぶのである。厳冬のある日、道は霜柱が溶けてぬかるみ、足元の悪いなか、友達の一人で呉服屋の息子の〇〇君が、こともあろうに丹前姿で出てきた。たまたまその〇〇君たちの担いでいた

肥おけのナワが切れておけがひっくり返り、まわりは肥料だらけになり担いでいた二人にもかかった。特に丹前姿の○○君のそのときの姿、ウンが付いたとか、付かなかったとか。

―昭和一九年○月○日　小鳥捕獲作戦の失敗―

ある日、修練道場の従業員の○○さんが小鳥（名前は不明）を捕まえるために、家畜小屋の入り口近くに大きなかごを棒で支えてエサをまき、棒にひもをつけて離れたところで小鳥が来るのを待ったが、なかなか寄って来なかった。○○さんがそこを離れたあとたまたま○○君が通りかかると、かごの下に小鳥が入っていたのでチャンスとひもを引き、見事に小鳥を捕えた。かごから小鳥を取り、手に持ってわなをかけた○○さんに届けようとしたが、きつく持つと死んでしまうと思い、軽く持ったのが悪く途中で逃げられてしまった。

そんなことがあったある日、幸か不幸か再び○○君が同じ場面に出会った。今度こそは逃がすまいと、小鳥を手に持ってその人に届けようと急いだが、こんどはあまり強く持ちすぎたため、小鳥は途中で死んでしまった。この二度の失敗にわなを仕掛けた○○さんの怒るの、怒らないのって。ウソのようなホントの話。

―昭和一九年○月○日　戦場走路で流した涙―

ぼくたちが疎開した先は「大日本青年修練道場」。名前のとおり、まさに青年が修練をつむ場所である。その修練をつむ施設のひとつに戦場走路なるものがあった。

総面積約三万坪はあっただろうか。その広大な土地に畑があり、その周りには谷あり、川あり、壁ありと、これらの障害物を乗り越えてひと回りするのである。今でいうなら、学校の運動会の障害物競走だろうか。ときには、家族のことを思い出して、涙しながらひとり寂しく戦場走路を一周している友達の姿を見かけた。ぼくも何度か経験した一人である。

―昭和二〇年三月○日自　家製蒸しまんじゅう―

二月の終わりか三月の初めに、六年生が卒業のため東京に帰った。ぼくたちは、六年生の使っていた小部屋に移動した。部屋の真ん中には小さな囲炉裏（いろり）が掘られていた。

食糧の乏しい折、子供ながらにいろいろ考えるもので、自家製蒸しまんじゅうもそのひとつである。これも、部屋に囲炉裏があったからこそ考え出されたアイデアであって、大部屋のときには思いついてもできなかったことである。

まず、炊事場に行き缶詰の空き缶を三～四個もらってきて「せいろ」を作る。一番下にお湯を入れる缶を置き、そのうえに、底にいくつもの小さな穴を開けた空き缶を二～三段重

ねて蒸し器のできあがりだ。次は食材の準備だ。先ずは畑に行き、カラカラに乾いた「とうもろこし」を無断でいただいて来る。この「とうもろこし」は、のちに聞いた話では家畜用の飼料だったそうだ。この「とうもろこし」を部屋に持ち帰り、三〇粒ほど手ぬぐいにつつみ硬いもののうえにおき、金づちでたたき粉を作る。この作業を何回も繰り返し、ある程度粉がたまったところで次の段階に入る。

次に炊事場に行き、部屋の障子が破れたから張り替えるといって小麦粉をもらい、この小麦粉と先に用意をしたとうもろこしの粉を半々ぐらい混ぜ合わせ、先に用意した空き缶の「せいろ」に合わせ、囲炉裏端に置いた「せいろ」に入れ、蒸しあがればまんじゅうのできあがり。このまんじゅうに、しょう油をつけて食べたのが当時は何よりのおやつであった。

このまんじゅうの蒸しあがったときの色と、囲炉裏の中の灰の色が同じだったので、持ち主の離れた蒸し器（空き缶）の中のまんじゅうのうえに、その灰を少量まくという悪さをしたが、気づかずに戻ってきておいしそうに食べてしまった。

とうもろこしの粉を作るために使う手ぬぐいはすぐに破れ、家族に手ぬぐいを送ってくれるよう何度か手紙で頼んだ。家族は何でそんなに手ぬぐいがいるのか不思議に思ったそうだ。

―昭和二〇年三月〇日　体温計破裂事件―

真冬の作業はつらかったので、誰でもサボりたくなる気持ちは同じこと。そこで〇〇君が考え出したのが風邪引きという仮病作戦だった。先生から体温計を渡され検温するよう言われたが、熱がないので困った〇〇君は体温計を囲炉裏の火にあて、適当な温度に上げようと何度か暖めているうちに、暖めすぎたのか体温計が破裂してしまった。

その後、〇〇君以下その部屋にいたもの全員がサボりの手伝いと体温計の破損に対し、先生から大目玉をいただいた。

―昭和二〇年三月一〇日　東京大空襲の日―

あれは三月一〇日の真夜中。友達の一人が偶然目を覚まし、東京の方向の空が真っ赤に染まっている光景をみた。寝ていたみんなを起こし、窓に群がって真っ赤になった空をにらみ、東京が燃えていると叫んだ。その時、先生が来られてみんなの心の動揺を抑えて、再度眠るよう促した。

―昭和二〇年三月一二日　集団疎開最後の日―

この日の正午過ぎ、ぼくたちの何人かの家族が突然修練道場にやってきた。はじめのうちは面会に来てくれたのかと思

っていたが、子供たちを引き取りに来たとのことであった。

ぼくたちも、東京が空襲にあったことはそれとなくわかっていたが、迎えに来た家族のうちの一人が東京は丸焼けになったと話してしまった。それを聞いたぼくたちの心の動揺を静めようと、先生をはじめ他の家族は大いに慌てていた。迎えに来た家族の中にぼくの父と長姉もいた。早速荷物をまとめて帰る支度をすませ、残るみんなに別れを告げ、修練道場をあとにしてぼくの集団疎開生活は終わった。

学童疎開

第一吾嬬国民学校五年　佐野弘明

―出発―

僕たちが初めて疎開をしたのは昭一九年の夏だった。駅まで送りに来た母は「先生の言うことをよく聞くんだよ。からだに気をつけるんだよ」泣きそうな顔で声を掛けてくれたけど、僕はいつもの友達と一緒だし、遠足にでも行くような気分で汽車に乗り込んだ。ゴトン、ゴトンと動き出した窓の外で手を振っていた小さな母は、すぐに人の中に入ってしまい見えなくなってしまった。人たちが遠ざかり、ホームを離れると皆寂しくなって窓から首を出していた。東京の街としばらくお別れだなと思ったりした。

一吾嬬の行き先は、茨城県の奥久慈の町、大子町という所だった。（ただし僕たち五年生の男子だけ一つ先の宮川村）清流久慈川のほとり美しい所だった。そこに約一年間お世話になることになる。とうとうと流れるその川に沿った山並も、春の新緑から夏の深緑、秋の紅葉と衣裳を変え川面（かわも）に映して自慢しているようで、東京生まれの僕たちには新鮮な驚きを与えてくれホームシックも忘れてしまうほどだった。

川遊び、山でユリ根掘り、栗拾い、虫を追いかけ、東京とは違った遊びに夢中だった。

一年を通じ、遊びだけでなく、炭焼きや、山の畑でソバを作るなどの体験もした。そんな暮しのなかでも、日に日に戦局は不利になってきた。僕たちの遊んでる頭上を大きなB29の機影が通過して行くのを見て、東京へ空襲に行くのかと悔しい思いをしたっけ。

三月一〇日の大空襲は疎開先の僕たちへも、すぐ知らされた。東京の学校も、家も丸焼けになったそうだ。そしてたくさんの死者が出たということだった。戦争の恐ろしさを、じかに感じた初めての出来事だった。ただ無事を祈って東京の空に手を合わせていた。

三・四日過ぎたころから、生徒の元へ手紙が届くようになった。無事の知らせ、避難先の通知を見て歓声を上げて喜んでいる。

しかし僕のところだけ何の知らせも来ない。友達も僕の前では手放しで喜ぶのを遠慮しているようだった。僕は皆と一緒にいるのがつらかった。

知らせが来たのは四月に入ってからだった。先生に呼ばれ、

部屋に入ると封筒を見せながら「来たぞ、早く見なさい」と手渡してくださった。開封してみると家族みんな無事に葛飾のおばさんの家の近くに移ったと書いてあった。「皆無事でした」と大声で報告した。「良かったな」と先生は僕の肩に手を置いて言ってくれた。お辞儀をしてお顔を見ると眼がぬれていた。混乱した世の中で僕への便りは大分遠回りをしていたようだ。部屋を出ようと障子を開けると、外に五・六人の友達が折り重なるように聞き耳をたてていた。僕が出ると「わっ」と言って飛びついて来た。肩を叩いたり背中を押したりしながら、部屋までお祭りみたいだった。部屋にいた者も手を打って迎えてくれた。皆、心配してくれていたんだ。僕は一人で外へ出て東京の空に向かって手を合わせていた。そういえば何かがあると、皆東京の空に礼をしていたっけ。

その後も日本の戦局悪化は否めない。ある日、ズズーン、ズズーンと腹の底に響くような音が山の向こうから聞こえてきた。時を置いて一日中聞こえていた。誰かが鹿島灘が艦砲射撃を受けているらしいと聞き込んで来た。

そんなことがあって、なにかと騒々しくなってきたころ、秋田へ再疎開する話も聞かれるようになった。

―秋田へ―

秋田への出発は慌ただしく、地元へのあいさつもそこそこに、いったん品川に戻り奥羽本線で秋田に行くと知らされていた。

品川の駅には連絡を受けた家族が会いに来てくれていた。夕方の少しの時間だったが顔を見てなにか安心した。発車は夜に入ってからだった。

駅を離れると東京の町は真っ暗で、車内の明かりも薄暗かった。外をみても何も見えず、ただゴットン、ゴットンとわだちの音が聞こえるだけだった。皆も静かだった。「秋田ってどんな所だろう」と思っているうちに寝てしまった。

―五城目の町―

朝、起こされて外を見ると駅だった。一日市と駅名が見えた。五城目へ行くにはここで乗り換えるので皆ぞろぞろとホームに降り連絡待ちをしていた。そこへ朝市に行く途中なのか大きな荷物を背負ったお婆さんに声を掛けられた。在から出てきた人なのか、方言とズーズー弁のなまりに何を言ってるのか、さっぱり分からない。僕たちはただうなずいていた。おばあさんは首をかしげながら行ってしまった。「おい、何て言ってたか分かった?」と聞かれ「わかんない」「……け?……け?って言ってたから、なにか聞いていたらしいな」

「大変な所へ来たもんだ」と僕たちは互いに不安に思ったりした。そのうち、五城目行きの機関車が入って来た。玩具のような小さな汽車に皆歓声を上げていた。車窓から見えるのは、田んぼばかりだった。

五城目の駅前には、町の偉い人や婦人会のおばさんたちが出迎えてくれていた。駅長さんがいろいろ整理をしていた。町長さんのあいさつが終って、僕たちにも分かる言葉に顔を見合わせて安心した。町の人たちも僕らとの会話はゆっくりと分かりやすく話してくれた。でも地元の人同士だと、僕らには分からなかった。でも、人懐こく、好奇心旺盛な東京（下町）の子は、二・三か月もするともう一端の田舎の子になっていた。今度の宿舎はお寺だ。

五城目の町は信仰心の厚い人が多いのか、六山のお寺があると聞いた。そのうち三つのお寺に分かれてお世話になる。珠厳院は大きな寺院、高性寺は一見古い感じのお寺、僕がお世話になった常演寺は小さなお寺で、山門の傍らに芭蕉の句碑が建っていた。

寺の朝は和尚さんの読経から始まる。本堂の方から聞こえてくるお経を、皆静かに聞いていた。後で「皆が静かに暮らせるよう、仏様にお願いしているんだよ」と和尚さんが話してくれた。

秋田に来ても、気が休まることはなく、野良仕事のお百姓さんがグラマンの機銃掃射で亡くなったとか、無用な外出は控えるようにと、先生のお話があった。夜に入って外が騒々しい、見ると灯火管制で真っ暗な空の一角が赤く染まっていた。秋田の油田が空襲を受けたんだと大人の人たちの話だった。日本中、どこもかしこも焼き尽くされてしまうのかと思うと悲しかった。朝になって遠くに見える鳥海山に向かって手を合わせた。山の直線上に東京があるのだ。

―終戦の日―

昭和二〇年八月一五日、この日は朝から今日は玉音放送があると噂していた。町のおじさんが来て庭の木陰にリンゴ箱を台にしてラジオを置き、方向を変えたり、音量調整したりと苦心していた。町の人も少しずつ集まって来た。僕たちもその周りを囲んで時間のくるのを待った。まだ各家庭にラジオが普及してなかったのだ。雑音の入ったラジオを我慢して聞いたことを覚えている。「気を付け！」在郷軍人会のおじさんの号令があり放送が始まった。僕たちには陛下の御言葉が何を言ってるのか分からなかった。放送が終わったとき大人の人たちは皆泣いていた。誰かが「日本は負けたらしい」

と言った。先生に尋ねると「うむ。戦争は終わった。でもこれから皆しっかりしないといけないんだよ」一人ひとりの顔を見ながら言った。「空襲は、もうないの？」小さな後輩に聞かれ「もうないと思うよ」と言うとニッコリ笑って腕にぶら下がってきた。チビちゃんも空襲が怖かったんだと思った。

戦争に負けたことの不安と何かほっとした気持ちが交錯して、その夜はなかなか眠れなかった。僕ら子供の戦争も終った日だった。

―後記―

六〇年も過ぎたのかと、感慨深いものがある。子供に戻って、見たこと、感じたことを引き出して書いてみた。

数多くの疎開児童がいて、それぞれの生活があったと思うが、それを知らない現代の子供たちに、平和の有り難みを知ってもらいたいと心から思った。

ちなみに、私の妻も疎開児童で、長野県へ行っていたらしい。でも多くを語りたがらない。まだ小さかったし兄姉もいない、甘えもできず、寂しく、悲しいことばかりだったのだろう。幼いときの心の傷は六〇年たっても、この話が出ると、チクッと痛むのだろう。



秋田県南秋田郡五城目町　常演寺　本堂前

疎開の神様と呼ばれても

第一吾嬬国民学校五年　角尾禎昭

「疎開の神様」これは、疎開仲間が私につけたあだ名です。というのは、私が学童疎開の実験的なテストケース、第一次集団疎開、第二次集団疎開のすべてを、最初から最後まで経験したからです。

―テストケースとしての集団疎開―

おそらく東京都の実験的な学童疎開だったと思うのですが、昭和一九年四月に、学童集団疎開の募集がありました。第一吾嬬国民学校の五年生だった私は佐藤君とたった二名で応募しました。どうして、私が応募する気になったのか今でも分かりません。東京都全体（？）では、男子一〇〇名くらいが集まったようです。

学童対象の説明会が更正小学校でありました。説明会で自分の名前は「つのお」なのに「かどお」と間違えて呼ばれ、返事をしなかったら怒られた覚えがあります。費用はどうなっていたのか、親がいくらか負担したのか分かりません。

疎開先は、千葉県の興津と小湊の近くにある、「至大荘」という臨海学校のようなところでした。後に調べてもらったら、当時の九段中学校（現在の都立九段高校）の施設で、現在も同じ名前の臨海施設があるそうです。もちろん、当時の建物のままではありません。

当時の至大荘は木造一階建てで、食堂が別棟にありました。居室としては、一〇畳くらいの大きさの部屋が二〇くらいありました。その一部屋に五、六人が入り、押入れに布団を入れていました。

起床ラッパで起き、体操、朝食となるのですが、勉強のことはあまり記憶にありません。夕食後一、二時間予習復習の時間があったことは覚えていますから、授業はあったのだと思います。

食堂は座席が決まっていてイスに腰掛けて食べました。食事当番はありましたが、盛り付けてあるものを運ぶだけでした。ご飯は茶わんに盛りきり一杯で、豆やイモや麦が入っていました。あとはみそ汁にヒジキ、タクアンぐらいで、海が近いのに魚は出たことはありません。分量が足りなくて、いつも空腹で、ワカメを拾って食べて空腹を紛らわせたこともありました。畑で生のソラマメを食べた覚えもあります。

約四か月、至大荘にいたのですが、親の面会は一回もありません。一時帰宅もありませんでした。

疎開児童は地元の子にずいぶん嫌われていたようです。「兄ちゃん、ケンカするべえや」とけしかけられました。素手で殴りあうのですがたいていは負けました。地元の子の強さが印象に残っています。けんかもそうですが、変な替え歌を歌ったりして、しかられるときは部屋の連帯責任でした。

至大荘では大事件がありました。寮の目の前は静かな湾になっていたのですが、湾外は波が高く怖いくらいでした。私たちは釣りをすることはなかったのですが、ある時、土用波にさらわれておぼれた寮生がうつ伏せで浮いているのが発見されました。死亡事故でした。私たちには、原因や状況は知らされませんでしたが、ニュース映画の撮影がありました。今でいえば、テレビの取材のようなものでしょう。寮生が並んで写される場面がありましたが、なぜかその時、太って元気そうな子は前列に、やせた子は後ろの方に並べられたことを覚えています。

いろいろなことがありましたが、結局、至大荘にいる間に他校の児童と仲良くなることありませんでした。サイパン島が陥落し危なくなったからでしょうか、至大荘の近くに軍需工場があったからでしょうか、この実験的な疎開は終了となりました。

―第一次集団疎開（茨城）―

一度向島に戻り、今度は学校のみんなと茨城県へ疎開することになりました。行き先は、茨城県久慈郡宮川村下宮の鈴木屋旅館です。水郡線の大子の一つ先、福島県との県境に近い久慈川沿いの三階建ての旅館で、一階に風呂があり、私たち（二〇～三〇人）は二階に入りました。近くに旅館「沢の井」がありました。

学校には、一時間くらいでしょうか、勉強に行きました。アルマイトの弁当箱にご飯を詰めてくれるのですが、中身が少ないので食べるときには片方に寄ってしまっていました。ここでも学校や勉強のことはよく覚えていません。

いつも、空腹に耐えていました。山でゆり根を掘ってきて、風呂の灰の中に入れて焼いて食べました。ノビル、アケビそのほか食べられるものは何でも食べました。栗林では、棒を持った番人に追いかけられました。サンダラポッチに馬の尻尾の毛をつないでワナを作り小鳥を捕まえたり、久慈川の速い流れの岩陰に潜んでいる魚を捕まえたりしたこともありました。

行軍で山に行ったとき、疎開にきていたおばあちゃんが「アンチャン、甘いおしるこ食べたら、死んでもいいね」と

言っていたことが妙に心に残っています。

先生から「地元の子とけんかをするな」と言われていましたが、それでもけんかすると、裸で久慈川の川原に立たされました。

旅館に、田舎芝居の役者が泊まったことがありました。このときは、毎晩芝居を見に行きました。父に小遣いを五円もらったのですが、買うものは何もありませんでした。

当時人気のあった予科練（よかれん）の生徒が、松根油（しょうこんゆ）をとるために松の根を掘りにきたことがありました。予科練の生徒が、精神棒というのでしょうか、棒で尻をたたかれているところを見ていたら先生にひどく怒られました。でも、予科練は私たちにも村の娘たちにも人気がありました。娘たちは予科練の生徒に慰問袋をもってきていました。軍には食糧が豊富にあったのに…。

―第二次集団疎開（秋田）―

茨城も危なくなり、次は秋田に疎開することになりました。行き先は、八郎潟の近く秋田県南秋田郡五城目町下タ（しもた）村の通称「川寺（かわでら）」でした。このお寺の名前を覚えていなかったので調べてもらったら、朱厳院（珠厳院とも）というお寺だそうです。後に、別のお寺に移った記憶もあります。

秋田へは、茨城から汽車で上野駅を経由して行きましたが、東京の家には寄りませんでした。上野駅で親からにぎり飯をもらった覚えがあります。途中トンネルをいくつもくぐるのですが、窓を開けていると蒸気機関車の煙が入ってきて大変でした。

秋田での疎開生活は、それまでのつらい疎開生活に増して厳しいものでした。雪ばかり降って寒いところでした。水道がなく、飲み水も川までくみに行きました。階段は凍っていて滑るし、時には水くみおけを流してしまって取りに行く羽目になるし、とにかく寒いいやなところでした。

どちらのお寺か忘れてしまいましたが、本堂を区切った部屋に暖房は火鉢だけで、これまた寒いものでした。風呂は週に一回くらい風呂屋に行きました。火箸（ひばし）を焼いてえりくびにたくさんついたシラミに当てると、ブスブスと音をたてて殺せました。カイセンにかかり、どこの温泉か覚えていませんが、温泉に行ったこともありました。

毎朝、住職のお勤めを正座して聞いているうちにお経を覚えてしまいました。まさに「門前の小僧」でした。

食べ物では、冬になると野菜がなくなってしまうので、農

家が穴を掘って埋めてある野菜を、雪の中をソリをひいて足も手も冷たくしてもらいにいったこともありました。本堂の位牌の前に、農家の人がまんじゅうや赤飯を供えたのを食べるのがとても楽しみでした。

どこの疎開先よりいやな思い出ばかりの秋田ですが、いよいよ卒業の時期となり、五城目の駅前で別れのあいさつを巻紙に書いて読みあげ、私の学童疎開に別れを告げました。

秋田の疎開で決定的になりましたが、「疎開の神様」と呼ばれても「二度と学童疎開には行きたくない」と心からそう思います。家に帰って、親に「ご飯だよ」と呼ばれたい。学校に行きたい。学校に行って机で勉強したいと思いました。

（談）

学童疎開の思い出

第一吾嬬国民学校三年　角田悦子
（旧姓　小山）

昭和一九年八月、第一吾嬬国民学校三年生の私と姉は、双子の姉妹として学童疎開に行きました。母と一緒に布団や衣類の荷造り、疎開先の住所を書く墨をすりながら、真夏の暑さの中を姉と手伝ったのを覚えています。上野駅から汽車に乗り、遠足の気分だったと思います。

疎開先は茨城県久慈郡大子町、栄屋という木造の三階建てです。その日に夕食に出されたトマトで姉は腹痛になり、上級生が大きな布団包みをあけ、布団に寝かせてくれました。一週間過ぎたころ、夜になると誰かしら「おかあさん」と言う涙声になり泣きました。一人で来た小さな三年生が目を赤くしての母の恋しさはいまだに忘れられません。上級生がいつも涙をふいてくれたそのやさしさが思い出されて、忘れることができない心の思い出です。

そして、私たちは、疎開地に来て空襲警報を知りました。サイレンの音とともに上級生が「起きなさい」、「早く、早く」、「着替えたら廊下に並びなさい」。真夜中の真っ暗やみの中を手すりにつかまりリュックを背負って、三階から一階まで避難します。解除が出るまで待つのです。皆、恐ろしさと眠さで静かでした。

朝、上級生が「起床」、「起床です」と廊下を歩く音が聞こえます。皆、黙って、さっさと着替えて廊下に並びます。朝礼の時は、前に並んでいたせいか、沢田先生の洗顔のあとのクリームのにおいが、母を思い出すひとときでした。

食事の時は、先生方が先に箸（はし）を取り、上級生、そして私たち三年生が箸を取りいただきます。「あのお茶わんのほうがごはんがいっぱい入っている」と横目でいつも比べていました。漬物とみそ汁がいつもおかずです。「ああ、おいしいものが食べたい」ライスカレーのにおいがしてきました。「ライスカレーだって、うれしいねぇ」喜びあったものです。

勉強は、午前中は旅館で、午後から地元の小学校へ通いました。

防空壕（ぼうくうごう）掘りもやりました。石だらけのバケツを何度も運び手伝いました。行軍もしました。おにぎりを背負い、もんぺをはいて何里の道を歩いたでしょうか。もんぺで太腿が赤くはれ、足は豆だらけ、何回も経験した苦し

さは今も忘れません。家から小包が送られてきます。お茶缶に入った大豆をいった豆、煮干の入った缶、それが一番の楽しみなおやつです。姉と二人で部屋でこっそり食べていると、友達に見つかり、三人で音を立て、分けて食べたことが今でも頭にこびりついています。

よく皆でバクダンあられを、防空頭巾を持って買いに行きました。雪が降った時でも買いに行きました。何よりのおいしかったおやつでした。おなかいっぱい食べたかったです。風邪をひいて寝ていた時、寮母さんが紙に包んだお砂糖を「こっそり食べなさいとくれたことは、六〇年たった今でも思い出す」と姉の話です。地元のお姉さん、鈴木千恵子さんから、私たちによくふかしたさつまいもを「食べなしょね（食べなさい）」と、呼び出してはいただきました。

母が弟を連れて、面会に来ました。音楽の時間で、「虫の声」を歌っていると、弟がそばに来て、椅子をカタカタさせてゆすり、うれしさで胸がつまり弟ばかり見ていました。

茨城の日立に住んでいたおじさんも、食べ物を持参して面会にきました。久慈川の河原で、姉と二人でにぎり飯をほおばり、おじさんは、寝ころんで食べ終わるのを待っていてくれました。今でも、恥ずかしい気持ちで、あの時食べたんです。

上級生に手袋を編むのが流行しました。あみ棒は半分に折って、私たちも教わりました。毛糸の取替えっこをして結び目もこぶだらけで、ミット型や五本指にして東京の妹たちに送りました。

手紙もよく書きました「父上様、母上様」と書いて、「いつも元気でいます。ご安心ください」いつも文面は同じことばかり。

軍歌も自然と覚えて、皆と歌いました。

楽しいこともありました。土曜の夜、演芸会があり、各旅館から集まり、歌や踊りのお楽しみ会です。先生が「小山、お前たち二人で、歌でも踊りでもやってきなさい」と言われ、そろいの洋服で踊りました。

また、寮母さんが私たちに踊りを教えてくれて、広間で練習しました。姉は「めんこい子馬」を、馬の頭に飾りをつけて紅白の手綱を持ちレコードに合わせて踊り、拍手の嵐でした。

年が明けて、六年生は卒業のため東京に帰りました。何日もたたないうちに、東京大空襲になり、命を落としたと聞こえてきました。

昭和二〇年四月に、私たちを母が迎えにきました。茨城が危ないと、東北方面に移動することになり東京に帰りました。平井駅に降りると、一面焼け野原でした、我が家は無事で、皆そろって出迎えてくれました。終戦になるまで空襲警報におびえ、恐ろしい経験もしました。

わたしは、今年九月で七〇歳を迎えます。六〇年前の苦しかったことだけは覚えているんですね。戦時中という子供のときの経験と上級生の人たちの思いやりは、今でも「やさしさ」を私に植えつけてくれたんですね。

私には、七人の孫がいます。女の子二人は小学三年生です。二人の姿を見ていると、子供らしいあどけなさを、いつまでも続けられるよう平和な日本を願っています。

朝起きてご飯の炊けるにおいや便利な生活に、感謝の気持ちをいつまでも持ち続けたいと思います。

難民の子供たちの写真が新聞に載っています。おばあちゃんは、ロケットにでも乗って、すぐ助けに行きたい気持ちになります。

行軍で歩いたお陰か、腰も足も痛さを知りません。これからも、元気で精いっぱい、生きていきます。

学童疎開体験記

第一吾嬬国民学校四年　森田佳伸

―前記「当時の記憶」―

住んでいたのは、旧吾嬬町東四丁目八番地（現在の立花六丁目）だった。この辺は、大きな工場、吾嬬製鋼や花王石鹸会社、また中小零細工場が多くあり工業地区でした。

向島工業高校の玄関には戦闘機のエンジンとプロペラが飾ってあり、校庭では軍の教官が軍刀を腰に学徒教練をしているのを学校の帰り道に見ていました。時には、近所の男の方の出征式で「武運長久」と書かれた「タスキ」を掛け、「勝ってくるぞと勇ましく、誓って国を出たからは、手柄立てずにおかりょうか」の歌声のなかで、老人、女性、子供に見送られて行く様を何度も見ました。子供から大人までみんなが戦争へという気持ちにさせられていました。私たちは一年生の時から戦争教育を受け、子供ながら「日本は強く、悪いアメリカを倒すのだ」と植えつけられました。

―学童集団疎開記―

東京にも空襲警報のサイレンが度々鳴るようになり、長男の私は家族・妹たちとも別れ学童疎開に行くことになりました。一人で何でもやらなければならない、大変な生活になるとも知らず、親や先生の話をうのみにしていたと思います。

品川駅から茨城県大子町へ汽車で、初めは遠足気分で行きました。学童はそこで何名かの班に分かれ、駅に近い旅館二軒に着きました。私たち三年～六年生の一〇人位は、久慈川添いの麻屋旅館で、初めて会った寮母さん一人とお世話になることになりました。

朝、時間になるとみんなタタキ起こされ、フトンの片付け、歯ミガキ、洗顔、朝礼、そして食事は整列して、手を合わせいただきます。一杯のご飯を一粒残さず食べ「ごちそうさま」と言います。みんなと一緒に軍隊式の生活で、いままで母親に甘えていた自分は、夜は、寝小便した冷たいフトンで寝ました。（寮母さんにハズカシイのでナイショです。）後日見つかり大変怒られました。

ハガキを何度か家に送り、「家に帰りたい、父に会いたい」と親を困らせていました。父親は忙しいなか、会いに来てくれましたが、父子一緒に、「他の子らへの示しがつかない」と先生に怒られ、大子駅で父親を泣きながら見送りました。それからなのか、「自分のため、戦争のため、我慢しなければ」と思うようになりました。

山登り、野草摘み、サツマイモ掘りなどをしました。一つ先の駅にある袋田の滝まで学童集団で一日がかりで徒歩遠足。みんな良く歩きました。勉強はいつしたのかあまり記憶にありませんが、山の上の大子町の国民学校へ行って、一緒に勉強した良い思い出もあります。

時々、別の仲間のいる旅館へ風呂に入りに行きましたが、湯船の中にシラミが浮かんでいたのに入っていました。みんなが衣類に虫を飼っていたような不衛生な時代を我慢していました。

冬の風呂の帰りは、ぬれタオルが凍りつき、手足が冷たく、アカギレが痛くて泣きそうになりながら、四～五人の仲間で帰ったりもしました。

大子町のご飯は、お米に青豆やサツマイモなどの交ざりでした。一食一杯でおなかがすいても、お菓子などありませんので、悪いと知っていても、仲間と人様の青柿、栗、芋など盗って大人に追いかけられたり、生で食べてバチが当たりおなかをこわしたり、ひもじい思いの連続でした。

アメリカ空軍機B29ばかりが飛び、後から日本の戦闘機一～二機が追跡するという日々があった後、私たちの所も危ないので再疎開となりました。やっと慣れてきはじめ、家族と別れている私たちを温かく見守ってくれた土地の方々に「秋田は米どころ、おいしいご飯が食べられるよ」と。旅館のおかあさんに見送られて品川駅へ。家にも帰れず、そのまま何時間もかかって、遠い秋田県八郎潟の近くの五城目町へ向かいました。

乗換駅で大きな蒸気機関車の列車を降り、汽車を待っている間にコッペパンを食べようとした時、パンには青カビが生え、ちぎると糸を引いていました。食べられないパンでも、何も食べる物がないので目をつぶってでも食べなければならなかったこと。その時に来た五城目行きの汽車が小型で何ともわびしかったことが忘れられません。

お世話になるお寺は町はずれにありました。（お世話になったのに申し訳ありませんが、お寺の名前は忘れました）

お寺は見慣れなかったので、仏壇前の薄暗い大広間での生活（寝室兼勉強場）は、慣れるまで薄気味悪い思いでした。お寺の境内で土地の人たちに白いお米の配給をしていました。私たちのご飯は赤飯のような「コーリン米」のご飯が多く、ボソボソでまずくてたまりませんでしたが、仕方なく食べたのでよく下痢をした思い出があります。

当時のラジオ放送では、軍の大本営発表のニュースを聞き

ました。アメリカの船や飛行機を何機撃沈・撃墜などが多く、日本の損害は少なく放送されていました。日本が、こんなに空襲に遭っているのにと思っていました。

近くの裏山に登ると、山形と秋田の県境に富士山のように大きな美しい山がよく見えました。ところが空襲で山形市に、次ぎに秋田市と夜空に町が真っ赤に燃え上がる様は恐ろしい限りでした。鳥海山まで燃えるような光景でした。

また、釜石市などへのアメリカ軍の艦砲射撃は、反対側（日本海側）の秋田県の私たちのいた寺でもボンボン・ズシンと感じ、日本は狭い島国だと思い知らされました。

山に行った時、アメリカの戦闘機が町を襲い、先生に、「私たちも襲われる。みんな身をかがめろ」と命じられ青くなりました。

天皇陛下の玉音放送は、ラジオの音がガーガーして何を放送しているのか分かりませんでしたが、先生をはじめ大人から友達までみんながラジオの前で泣いていました。私も何やら泣けてきました。そのうちに戦争に負けたとさとり、悔し涙になっていました。「アメリカ人は赤鬼で、子供たちをさらって行く。竹やりで戦うのだ」と、友達と話し合ったりして心配りしていました。

終戦による帰省は、来春帰る人とこの秋帰る人に分けられました。私は真っ先に秋にすぐにでも帰ることを選びました。「お世話様になりました五城目町の皆さん」　帰る時、五城目町にもアメリカ進駐軍人がいました。初めて見る外人をこわがりながら駅に向かいました。第二の故郷から先生、友達とも分かれ、待ちに待った帰省でした。うわさで聞いていましたが、元の家の近くは、家も学校も工場もすべて焼け、焼けただれた鉄骨の町、「無」になっていました。子どもながらぼうぜんとしていました。この大都会で多くの犠牲者が出ました。見渡す限り建物が建っていた町が、遠くまで見渡せる焼け野原になっていました。戦争の恐ろしさは忘れられません。

先生にも友達にも、また後日、第二の故郷へ行きましたがそこの皆さんにも会えずに今日まできました。当時の家の近くの平井橋、白髭神社、東漸寺、また、数軒の家などが少しでも焼け残り、思い出が残ったのが良かったと思いました。

―後記「思い」―

三月一〇日の大空襲時、父は、花王石鹸工場の防火で奮闘していて、火は我が家の隣の家まで燃え広がってきました。母は小柄な人でしたが幼子（妹）二人と赤子を連れて、江戸川区小岩町まで命からがら逃げて行ったそうです。そこへ、

栄養失調の私が帰りました。どこの家でも大変な食料不足で米はなく、少量の麦粉と鳥の餌のフスマ粉、トウモロコシの粉、米ヌカなどを混ぜた今で言うお好み焼きのようにして、食べられる物は何でも食べていました。水っぽいサツマイモが朝・昼・夜と三食続く時は、さずがにいやになって食事抜きの時もありました。帰ってから半年以上、こちらの学校にも入れず、ろくな教科書もなく遊んでばかりいました。

集団疎開生活のなかで受けた教育は、私の今までの人生で、スポーツ、就職、生活など生きていくのに多く役立ち、助けられました。現在は、隣の江戸川区に移りましたが、故郷への思いはいつまでも消えません。近代的なビル、学校、各種施設の変化していく様は、焼ける前の町からは大変化で、そこでの皆様の活躍を見守っています。

歴史は繰り返されていきますが、どうかこの土地、国、先輩が大きな犠牲を払った時代を忘れず、二度とこのようなことにならないように戦争をしないで、平和な日本をいつまでも大事に守っていきませんか。

お世話になった皆様と故郷に感謝しております。ありがとうございました。

皆様のますますのご発展を……。

私の学童集団疎開体験

第二吾嬬国民学校三年　大川慶一

私は昭和一九年八月に、第二吾嬬国民学校三年在学中、茨城県結城郡石下町の石下館に学童集団疎開をしました。

石下町は、東に筑波山を眺め、付近一帯に桑畑が広がり、西には鬼怒川が流れている環境豊かな町でした。一方、石下館の庭には「いちょうの大木」があり、秋には「ギンナン」がたくさん落ちてきました。私たちは、引率の先生、寮母さん、学童の集団生活で、住居は旅館の大広間でした。

勉強は、石下の学校の教室を借り二部授業でした。時には、鬼怒川の近くにある住吉館に行き、担任の先生から補習授業をしてもらいました。

食生活は、はじめ御飯でしたが、後に「さつま芋」など代用食となり厳しいものでした。したがって、町の薬局で「肝油」「わかもと」、駅の売店では「いり豆」を買って食べたものでした。

「空襲警報発令中」、B29爆撃機が飛行機雲を吐きながら、一万メートル上空を通過して東京方面へと向かって行くのを何度も見ました。夜間の空襲で爆弾が投下され炸裂（さくれつ）音を近くで聞くたび不安な思いでいっぱいでした。

一度、石下町に米軍の艦載機が来襲し、日本の戦闘機と遭遇して空中戦となる前に爆弾を投下し、駅の近くの民家に落ちました。その爆風で、石下館の障子などが倒され、庭には破片が散乱して憲兵が回収していたことを思い出します。

昭和二〇年三月九日の東京大空襲の時には、石下から見た東京の空が赤く染まっていたのを覚えています。その時、第二吾嬬国民学校も我家も焼失していたことを後で知りました。

やがて石下館に軍隊が入って来て、私たち学童疎開児は追い出されることとなり、第二次疎開先である秋田県大館町に移動します。

昭和二〇年五月一日の夕刻、秋田県北秋田郡大館町に到着し、第二次学童集団疎開先である「一心院」という寺院に入りました。翌朝、近所を見渡すと桜の花が満開で、非常にきれいに咲いていました。第二次の学童集団疎開の人数は二三人と縮小し、住居は寺院の本堂でした。朝、住職さんのお勤め（読経）が始まる時には、私たちは寺の境内の清掃が務めでした。

越年のため、私たちは大館の山に入り、冬に備えて薪を取

りに行きましたが、途中「サル」や「リス」の姿や「カッコー鳥」の鳴き声を自然の中で見聞きしたことは大変楽しいことでした。また、皮膚病「カイセン」などの治療のため温泉に行ったのも思い出のひとつです。しばらくは静かな毎日の生活でした。

ある日突然、大地を揺るがす艦砲射撃が岩手県の釜石に起きましたが、遠く離れている大館で感じるとは思いませんでした。

八月に入り、田舎の「お盆」が近づいたのでお墓の草むしりを手伝いました。やがて昭和二〇年八月一五日の正午を迎えて、寺の境内に集まり、玉音放送を聞いて終戦を知りました。

昭和二〇年の一〇月に東京に戻りましたが、第二吾嬬国民学校の焼失のため、第四吾嬬国民学校の校庭で解散いたしました。

その後、曳舟国民学校の校庭で「青空教室」を体験しました。

私の空襲体験

第二吾嬬国民学校一年　海老沼　賢　次

昭和一二年八月、東京都向島区吾嬬町西二丁目百六番地に生まれた私は、昭和一九年三月国民学校に入学した。まもなく空襲が激しくなり始め、次の年いよいよ学校が閉鎖されるころだったか、音楽室に先生がいつもより強い調子でオルガンを弾いている姿があった。これが最後と思ったのか、心ゆくまで思い切り弾いていたのを思い出す。我が家は曳舟から次の十間橋駅の線路のすぐそばであった。

三月九日夜、電灯に黒い布をかけて明かりが外にもれないようにして、兄は足にゲートルを巻いて玄関の入り口に寝ていた。ガラス戸は破片が飛ばないように縦横にテープを貼り、家の前には防火用水がそなえつけられていた。夜になり空襲警報発令のラジオ放送、警防団の避難命令などが次々に出され、爆撃機B29の襲来で一面空が明るくなり、次にビリ、ビリ、ビリという爆弾の羽根が風を切る音がし始めた。

学校近くに焼夷弾（しょういだん）が落ち、警防団が「あっちに逃げろ、こっちに逃げろ」と大変な騒ぎになって、母は私を背負い兄と姉の手を引き、長姉は母の着物につかまって一面火の海の中を逃げまどい、どこをどう歩いたのか土手に出た。川には「いかだ」か船かわからないが大勢の人たちが乗っていた。私は草の中で一晩過ごし、次の朝、川を見ると、昨夜の船か「いかだ」はなくどこかに流されていた。やっと明け方になり空襲も止んで、家に帰る途中、曳舟駅は丸焼けで、ただ石炭の山が真っ赤に燃えていた。家があった所までたどり着くと家は跡形もなく一面焼け野原で、縁の下に入れておいた練炭だけが良く燃えていて、どうするすべもなくただぼう然とするだけであった。しかたなく焼死体のごろごろしている中を歩いて上野駅まで行くことになった。しかしおなかがすいて歩けない。やっとのことで駅にたどり着いて、初めて炊き出しのおにぎりをもらい、食べた時のおいしかったこと、今でも忘れることができない。

駅には東北地方へ帰る人でごったがえしていて、いつ発車するか分からない汽車に乗った。夜になってやっと発車し、九死に一生とはこのことだろうか、何とか母の実家にたどり着いた。

疎開先で母は栄養失調で死んでしまい、私の居場所もなく、よその家の田畑の仕事を手伝って、何とか中学校を卒業することができた。再び東京へ出て就職し、現在まで六〇年の歳

月が過ぎ、今また戦争の足音が聞こえてくる。

戦争がいかに悲惨なことか。あの時一〇万人の都民が死んでいる。その人たちの人生を狂わしてしまった。二度と戦争はしてはいけない。戦争に勝っても負けても犠牲者が出るのだ。戦争は絶対に悪だ。戦争は反対である。

これが私の体験した東京都向島区に住んでいた時のことである。

忘れ得ぬ日々

第三吾嬬国民学校三年　北村芳子

私は当時、向島区立第三吾嬬国民学校の三年生、疎開の対象は小学三年生から上の在学生でしたから、三年生の私は疎開児童では最年少でした。年端のいかないことと、六〇年あまり前のことですので、一緒に疎開した学童の人数や付き添った先生と寮母さんが何人かなどは、はっきりいたしません。戦時下に、健気に過ごした半年あまりの第三吾嬬国民学校児童たちの疎開生活を記して、小さな子供たちにも大きな負担をかけた戦時下の生活を書き残し、平和の大切さをわかっていただければと存じます。

昭和一九年八月二四日。夏物では一番気に入った服を着てリュックサックを背負い、遠足に行くようなルンルン気分で学校を立ち、十間橋から市電に乗り上野へ。上野駅に水越さんのお兄さんが勤めていらっしゃって、私たちが見えなくなるまでホームに立って見送ってくださいました。

疎開先は茨城県結城郡結城町の弘経寺。寺の本堂をお借りしての生活でした。本堂の須弥壇（しゅみだん）を囲むコの字になった床に就寝し勉強もしました。食堂は別棟、お手洗いと井戸は本堂から少し離れてありました。

日課は、起床するとまず布団を畳んで所定の場所に積むことから始まりました。三年生の私は背丈が低いので、遅れると布団が積み上がって高くなり、その高さまで布団を持ち上げられないから、起きたら布団の高さが低いうちに所定のところへ持って行くように心掛けました。この布団は、母が扱いやすいようにと小さめに作ってくれたものでした。

布団を片づけると井戸水で顔を洗い、本堂に正座し「ホウジョウサン」の先導で読経、「カンジーダイボサツ　ハンニャハラミタ・・・」お経の意味は全く理解しないまま、いつのころからか大きな声で般若心経を暗唱していました。おつとめの後は掃除です。本堂の床と濡れ縁のからぶき、「シュウカンタンレン・ドウホウソウアイ」このように掛け声を唱えながらリズムよくぞうきんをかけました。軍隊の気風が国中を覆っていたころのことですから、動作はきびきびと、何ごとも精一杯つとめることが求められ、小学三年生だからと甘やかされず上級生と同じ行動が基本でした。

朝食をとり集団で地元の国民学校に登校、授業が終わって帰ると、寺の裏山に入って薪にする杉の落ち葉拾いなどしたこともあります。週に何度かの入浴は町の銭湯へ行きました。

銭湯では、私たち疎開児童のために特別に時間を取ってくれた様子で、土地の人と一緒に入浴をした記憶がありません。

夕食後に自習時間があって、それぞれに勉強をしました。付き添った先生方が勉強を見てくださったので、とても充実した自習ができました。後に、縁故疎開で福島の学校に移りましたが間もなく級長を命じられたのは、あの自習時間にご指導くださった先生方のお陰と存じます。また、中学進学をめざす六年生の指導は、先生方も特別に力を注がれた様子、消灯の時間でも進学クラスだけは特別でしたから、低学年の私にも先生と生徒達の熱心さが感じられました。

ときには、クラスごとに唱歌を割り当てられ、振り付けを自分たちで考え、本堂にみんな集まって発表する会がありました。三年生の私のクラスは、「お馬の親子」が割り当てになって、一週間か一〇日かかって振り付けをし、歌って踊って、何か大きな仕事を成し遂げた気分に浸ったものでした。

付き添った寮母さんがいても全部の子供たちには目が届かなくて、本堂のぬれ縁の欄干にはっている虫がシラミと教えられ、かゆいのはそのせいとはじめて知りました。私はかき壊して腰のあたりが湿疹となり手当をしてもらいましたが、なかなか治りませんでした。Kさんは、霜焼けにかかった足を下校途中に電柱に当ててしまい、大泣きをしました。全部の指を鼻緒に通すと痛いらしく、親指だけを鼻緒に掛け赤紫に腫れ上がった足の映像が、今でも鮮烈によみがえります。

就寝前に東京の方角を向き正座して「オヤスミナサイ」とあいさつ、消灯時間に灯りが落ちるとたまらなく父母が恋しくなって、涙があふれ、しゃくりあげそうなるのを懸命に押さえたことがよくありました。寝付かれないでこらえていると、疎開当初はあちこちで、ぐっとこらえた嗚咽（おえつ）が漏れ聞こえてまいりました。なかには、孫のために寮母となった方もあり、就寝時間になると添い寝されているのをうらやましく思ったりしました。

食べ盛りのときに盛りきりの給食ですから、気持ちからして食べ物が欲しくなります。弘経寺に疎開している間に（親と）二度面会しました。出がけに作ったつけ焼きのもちも少し固くなりかかり、話もなかばでほおばりました。心づくしの食べ物も、面会場所にいる間に食べきれない物は寮母さんに渡すようなっているので、帰るときにこっそり渡され、寝るときにでも食べるように言われたいりゴマと砂糖を混ぜた小さな缶を大切にしまっておき、大事に大事に食べました。

たぶん、おやつのときと思いますが、ふかし芋がめいめい

に盛りつけてあって、列を作り歩調をとって飯台の間を進んでいると、行列が途中で途切れて進みません。盛りのよいように見える芋のところで足踏みをしている子がいるのです。また、あるとき、農家の庭先に干してある甘藷（かんしょ）の短冊切りや柿の皮を、男子が取ってくるから見張りをと言われ、渡されたいくばくかの柿の皮を口に入れるとその甘かったこと。

地元の子供たちの中にも心をつかってくださる友人ができて、折々に、干し芋や干し柿、また前述の柿の皮などを量は多くはありませんがそっと渡してくれました。特に双子の姉妹のお姉さんによくしていただきました。

明けて昭和二〇年。東京が焼けていると聞かされ、南の方角の夜空が赤く染まっているのを、父母たちが大変だとする思いもなく、しばらくの間みんなで見つめていました。向島区も被害に遭った三月一〇日の大空襲は、疎開していたればこそ免れることができました。

三月、終業式のころに、疎開地を山形県方面に移すような話が伝わり、被災した父母たちも福島に疎開することになったのを機会に、家族と合流し福島に疎開することになって、三月下旬に東京に帰りました。

四月、新学期が始まって間もないころに、家族全員で、福島市郊外の母の実家へ疎開しました。学校への道のり一里（約4キロ）をいとこたちと通学。サクラの木からヤニを取って綿を作ったり、桑の実を食べて歯を紫にしたり、雪の日のわら靴はぬれて冷たく、手袋を紛失して悲しかったりと、約一年を福島で過ごしました。

そのころは、田舎にも食糧難が浸透し、セリやスカンポなど食べられる野草を摘むのが私の役目となり、おかずと言うより増量のためですから、できるだけ多く摘むことでした。父が子ウサギを買ってくれたのを可愛がって育てていると、ある日食べることになって、悲しくて泣いてしまいました。食べ物では、東京のころに隣家に住み、私を可愛がってくれた人が、学校の帰りを待っていて、もち米と青大豆を私に背負わせて「カアチャンニ、モチツイテモラッテ、クエ」と言った言葉が今も耳に残っています。

昭和二一年四月。生涯心に残る二年の疎開生活が終りました。

昭和三〇年ごろに、弘経寺に学童疎開した人たちが集まって疎開地の結城市を訪問し、お世話になった和尚さんご夫妻にお会いしてお礼を申し述べ、学校も訪れて先生方とお話を

しました。さらにその二〇年ほど後、茨城の言葉と気風が無性に懐かしくなって、一人弘経寺を訪れました。あの和尚さんは亡くなられておりましたが奥様にお会いできて、昔話をいたしました。その日は、一日で帰るに忍びず宿をとって茨城に包まれる気分を満喫いたしました。幼い日、親元を離れて過ごした今となればわずか数か月でありましたが、泣き笑いの中で健気に過ごした日々は終生の忘れられない思い出でございます。

人は、生まれる時期も国も、そして家族さえ選べません。戦争はそうした子供たちをいやおうなく苦境の中に巻き込んでしまいます。あれから六〇年あまり、お陰をもちまして平和の時を過ごしてまいりました。いつの世も平和でありたいし、平和は自分たちの心構えで作るものとする気概を常に持ち続けて欲しいと願っております。



終戦直後、校庭で元気に遊ぶ子どもたち（転入した第四吾嬬小学校で）昭和21年〈1946〉ごろ
左から3番目が筆者

疎開体験「日本の罪」

第三吾嬬国民学校三年　中村洋子
（旧姓　山形）

私は墨田区の第三吾嬬小学校に通っていました。お転婆娘で体育、音楽が大好きでした。小学校二、三年生のとき、放課後、学芸会の練習をしていました。両手に旗を持って踊る「日本・ドイツ・イタリア」という曲でした。

「強く正しい国と国　日本、ドイツ、イタリアが…」と一所懸命歌いながら振り付けを考え踊っていると、先生が息を切らして走って来られ、「山形さん、急いで旗を替えて！日本、ドイツ、満州ってするのよ」「え！どうしたんですか？満州の旗ってどうやって描くんですか？」とやつぎばやに聞きました。「待ってね　先生も調べてくるわね」小学校低学年の私には、そのころ、中国で何が起こっているのか、イタリアという国がどうしたのか知る由もありませんでした。ただ、この経験がなぜか私の心に不安を与えたのは事実でした。

私の通っていた学校の校長先生はとても厳しい方でいつも自慢されていたのは、「我が校は東京でも清潔なことで有名である。あの東条英機さんが、スリッパを差し出したのに、あまりのきれいさにスリッパをおはきにならなかったのだ」と。私はこの話を何度も聞かされました。それほど校長先生の軍国教育は徹底していました。昼休みは全校生徒が分列行進、それは見事で一糸乱れずでした。

級長、副級長は学級内の責任を取らされ、整頓、清掃、成績も。級長、副級長の役割は大変でした。毎日二列に並んで廊下をそろばんすべり粉で「イチ、ニ、イチ、ニ」とみがきました。廊下は人の姿を写す鏡のように光っていました。

軍国教育はどんどんエスカレートしました。早朝に起きて神社に参拝し必勝祈願をしました。日本は天皇を神とする神国だから必ずこの戦争は勝つと徹底的に教え込まれました。

一方当時は隣組も活発になりました。バケツリレーで火を消す訓練をしたり、出征する人たちに千人針（赤糸で玉を作る）を作ったり、回覧板の歌まで作って歌ったり、忙しく動いていたのを子供心に思い出します。私の父は、昔の火消しのようなことをするバケツリレー訓練にはまったく参加しませんでした。そればかりか、当時禁じられていた洋楽器は弾く、クラシックのレコードをどんどん流すので「非国民」と言われてしまいました。救急病院のない時代、当時の町医者

で晩酌をやらない父は、夜半も急患で起こされ往診するので、今でいうストレス解消が音楽鑑賞だったのでしょう。往診の帰りにはいつもレコードを買ってきました。とにかく音楽の好きな人でした。

戦争は日に日に激しくなり、三年生以上六年生までの生徒は講堂に集められ、なにやら右に左にと分けられました。疎開のための分別だったということは、当時三年生の私にはよく理解できていなかったように思います。ラジオでは日本の飛行機が敵機を撃ち落したと放送。喜んで皆で手をたたいているのですが、現実は空襲が日に日に多くなり、夜も何度も起こされ、着の身着のまま枕元にリュックなどを置き、時々は靴のまま横になった記憶もあります。

ある日のこと、私たちは大きなリュックを背負わされ、お弁当やお菓子を持って疎開に行くことになりました。橘銀座から柳島の都電の所まで歩きました。何やら大げさな見送りでした。私たち小さい学年は疎開の意味も分からず、体験もないのでまるで遠足気分だったのです。私たちはお弁当やお菓子をどこで食べるのか、誰と食べようかと、わくわくした思いでした。電車が走り出した時、一所懸命手を振っているお母さんたちの中に泣いている人を見つけました。私の心にはふと不安がよぎりました。遠足にしては大げさすぎること…、そして泣きながらいつまでもいつまでも手を振っていたこと…。上野駅で汽笛がなり汽車に乗った時、私はこれは遠足ではないということを悟りました。時々鳴る汽車の汽笛が悲しさを増しました。

長い旅を終えて結城市に着きました。駅前では町中の方々が出迎えてくださいました。市長さんでしょう、難しいごあいさつがあり、こちら側の生徒を代表して学校で分団長だった山形鎮雄があいさつをしました。それから三つの大きなお寺に案内されました。沿道には日の丸の小旗が揺れていました。私たちは何が何だか分からぬままにお寺の本堂に荷をおろし集まりました。そして、もう家に帰れないこと、ここで皆で暮らすことを知りました。あちこちから泣き声が聞こえてきました。抱きあって泣きました。私は級長という責任の重みを感じて泣くに泣けず、「がんばろう」「がんばろう」と励ましました。

夜は、お寺の外にトイレがあるので、私は何度も起こされ暗いお墓のそばのトイレに連れて行かされました。

結城の小学校では歓迎会をしてくださいました。私は黒のビロードの洋服を着て、広い講堂の舞台で「うさぎの郵便や

さん」を歌いながら踊りました。地方の方には東京の子というのは珍しかったのかも知れません。それから私はあちらこちらの家に呼ばれ、縁側で「山からピョンピョン、ピョンピョン」と歌って踊って、干しいもやきいも、おにぎりなどをいただいては六年生の男の子たちにあげました。皆ご飯が足りないのです。甘い物が食べたくてもお菓子がありません。

でも人間は、いざとなれば生活の知恵が浮かぶのです。そのころはピンク色のスモカ歯磨きという粉末が缶に入っていました。それは私たちにとって唯一のお菓子となりました。歯磨きは塩で十分なのです。でもそれもだんだん品不足で薬屋さんにもなくなりました。次に考え出したのが、エーデーというチョコレート色をした丸い錠剤です。何の薬か分かりませんがとにかく甘い物が食べたいのです。口に入れて甘い部分をなめては吐き出しました。それでも一つ二つを分け合って小さな幸せを感じたのです。暖房がなくて寒い時は天突き体操（※）、空に向かって両手を突き上げ百回続けると体はポカポカと暖かくなるのです。

毎朝、東京の方向に向かって「天皇陛下、皇后陛下おはようございます。お父さん、お母さんおはようございます」とあいさつをしました。「天皇陛下、皇后陛下ってどういう人だろう」「神様なんだって、だから誰も見たことないんだって」「見てみたいね」「見たら目がつぶれちゃうってさ」「でもこの戦争いつまで続くのかな」「本当に勝つの？」「家に帰りたい」こんな話になると涙が止まらなくなります。私は小さい時から歌が大好きでしたから、皆に振り付けして遊戯を教えました。「七つの子」とか「うさぎのダンス」とか…。泣いていても家に帰れないのです。皆で楽しく過ごすことをいろいろ考えました。

ある日のこと、先生が「皆を集めて」と言われたので、どこか楽しい所へでもと思っていました。ところが、夜尿の子供が多いというのでお灸をされたのです。私は生まれて初めてでした。皆泣き出しました。それはそれはつらいことでした。夜トイレに何回も起きて、寝不足になるのも事実でした。でも、お灸の日は逃げ回る子が多く集めるのも大変で、何回かで止めになり私もホッとしました。そのうちお寺さんも渡り廊下を作ってトイレを新しく建ててくださいました。皆大喜びでした。

結城の町の方々は疎開の私たちにとてもよくしてくださいました。お風呂屋さんは、開店する前に早目に私たちを先に

入れてくださったのです。私は子供心にそのことをとても感謝しました。見ず知らずの私たちにそのような親切はとてもできないことだと思いました。

私たちが疎開先で一番悲しかったのは、両親が友達を迎えに来ることでした。皆で駅へ送りに行くのです。汽車が豆粒のように小さくなっても、私たちは駅の垣根によじ登って、いつまでも手を振りました。別れのつらさと自分たちも帰りたいという思いです。いつ迎えに来てくれるのだろうという思いは皆同じだったと思います。

やがて安全だと思っていた茨城も空襲がひんぱんになり、青い空にそれは美しく輝いて飛んでいるB29を私たちは見上げていました。そしてあの恐ろしい三月九日の夜、いつものように東京の方向に向かって「天皇陛下」と言った時、バタバタと足音。「東京の空が真っ赤です…」という女の先生の高い叫び声…。私たちはいっせいにお寺の欄干に出ました。東京の空は真っ赤、真っ赤でした。

何が起こっているのかラジオ放送は雑音ばかりで聞こえず、報道も負けているのに勝っているとうそばかり。子供の私でも、警戒警報が少なくなり、空襲警報が多くなったことで日本は負けているということを感じていました。日本は神の国ではなかったのです。戦争を始めた罪の国だったのでした。教育の恐ろしさ、真実を伝えない報道の恐ろしさを知りました。

そして戦後は、誰の言うことも信じられなくなり、生きる目的を見失い、さまよう人であふれました。世界に迷惑をかけた日本、多くの人を死なせた日本。これからの日本は世界の人々に仕えていく日本でありたいと思います。戦争時に生かされた私たちは、もっとおくせず戦争体験を伝えていかなければと思います。

※天突き体操（てんつきたいそう）ひざを曲げこぶしを方にした姿勢から全身を大きく伸ばし、天を突き上げる体操。掛け声とともに数十回繰り返し身体を温めた。

三枚の写真

―非国民と呼ばれたくなくて送り出した親もつらかった―

第四吾嬬国民学校六年　上村道子（旧姓　山崎）

左の写真は、私が昭和一九年に学童集団疎開に行った時のもので、右後ろの看板に「よしの」と書いてあるのが分かると思います。茨城県新治郡石岡町にあった料亭「よしの」が疎開先でした。

私たち第四吾嬬国民学校の三年生から六年生までの六〇人以上はここで生活しました。私と妹は同じ疎開場所でした。

一番後ろの帽子をかぶった背の高い男の人は、「よしの」の息子さんです。この当時軍隊に入っていて、たまたま帰ってきていて一緒に記念写真に入りました。この疎開生活は今でも思い出すのがつらくて嫌なのですが、この当時の様子を今語り伝えなくては、永久に埋もれてしまうと思い、記憶が鮮明でないところもありますがお話しすることにしました。



「よしの」の前で

料亭「よしの」と断ったのは、部屋の造りが普通の家とも旅館とも違うところがあり、私たちの生活に微妙に影響したからです。私たちの部屋は四〇畳の大広間でした。大広間には、立派な床の間はありますが押入れがありません。毎朝、布団をきちんと畳んで床の間に積み上げました。「きちんと」というのは、本当にきちんとなのです。途中の誰かがいい加減に積むとぐらぐらして、みんなの布団が積みきれず倒れてしまうのです。

トイレは、階段の上下に三つずつあるだけでした。もちろん水洗ではなく汲み取り式です。個室が並んでいるので、隣の人は見えませんが、下に落ちた音は全部の個室に響いて大きく聞こえます。女の子が入っているときに音がすると、男の子が大きな声ではやし立てます。女の子にとってこれほど恥ずかしくて嫌なことはありませんでした。できるだけみんなのいない時をねらおうとしても、男女兼用で六つしかない

のですから、まず無理でした。それではと、行く回数を減らすことになります。口から逆流するくらい我慢して、女の子はほとんど便秘になりました。

私は、身体の具合が悪くて学校に行かれないことがありました。当時は何の病気か分かりませんでしたが、後に先天性の心臓病であることが分かりました。そのため「東京に帰しては」という話もあったそうですが、「よしの」のおじさんが先生に頼んでくれて一人で料亭に置いてもらえたのです。おじさんには本当によくしてもらいました。

学校に行かれないときには、「よしの」で洗濯の手伝いなどをしました。寮母さんは、風呂の残り湯で毎日みんなの洗濯をしていましたが、シラミがはやり、なかなかなくなりませんでした。シラミが多いときは、湯舟で沸かした湯をかけて消毒していましたが、そんなことでは、退治できなかったのです。衣類につくのは銀色に光るシラミでした。下着の縫目にびっしりと並んだシラミの卵は、湯をかけたくらいでは死なないのです。手でつぶすしかないのでした。本当にかゆい思いをしました。

シラミには黒いシラミもいました。髪の毛につくアタマジラミです。最初三人くらいにアタマジラミがつきました。妹もその三人の中に入っていました。アタマジラミを取り合う姿は、猿がお互いにノミ取りをしている絵そのものでした。そのうちに、水銀軟膏（すいぎんなんこう）が配給になり頭に塗りました。そして、新聞紙の上ですくとバラバラと落ちます。こうして取るしかなかったのです。今では考えられないことですが、終戦後にシラミ退治のため、現在は毒性が強いので禁止になっているＤＤＴの粉末を強制的に掛けられたこともありました。

毎日の生活は、総務班（六年男子四人、五年男子一人）の吹くラッパの音が節目でした。朝五時半に起床ラッパ、夜九時消灯ラッパでしたが、その音色は兵隊さんと同じでした。

班編成は兄弟関係を中心にできていました。一班から三班までは男の兄弟、四・五班は女姉妹、六班は男女の兄弟だったと思います。私は女姉妹でしたから妹と一緒の班でした。

夜八時、点呼の時間に三年生の子がいないことが分かりました。この子は、疎開先の寮の生活がつらくて、夜の道をたった一人で石岡から東京まで歩いて帰ったそうです。ところが自宅に着いてつらいことが待っていました。隣組から、親も子も「非国民」と呼ばれたのです。「みんながつらいときに、自分だけ逃げ出してくるなんて！」と非難されたのです。

「非国民」このレッテルは村八分と同じぐらい恐ろしいものでした。面会に来た私の親は「何が何でも、帰ってくるな」「逃げて帰ってきても、決して楽なことはない」「逃げてきたお前もつらくなるし、親もつらくなるのだ」と言いました。学童疎開でつらかったのは、行っていた子どもだけではありません。強制的に子を離された親にとっては、子と引き離されたつらさと、寂しくて我が子が逃げてきても受け入れてやれないという二重のつらさがあったのです。

警戒警報で「鹿島灘上空に敵機…」といっているときにはすでに敵機は上空に来ています。艦載機は屋根すれすれに飛んできました。艦載機の操縦席のパイロットの顔が見えるのです。鉛色の機体を眺めていると、殴られ、部屋の真中で布団をかぶって震えていました。



10月ごろ　遠足　くり拾いに行った時

この写真は、一〇月ころだったでしょうか。遠足で栗拾いに行ったときのものです。私はなぜか真ん中にいます。その前にいるのが妹です。男の子がしている鉢巻は、眉毛を剃ってしまったのを隠しているのです。苦しい疎開生活の中で、わずかな楽しみの一コマです。

遠足といえば、大変なこともありました。石岡にいた第四吾嬬国民学校の六年生だけで、水戸の偕楽園へ卒業遠足に行ったときのことです。雪の上を穴の開いた靴で歩きました。偕楽園は、梅やそのほかの花の名所ですが、一つも咲いていませんでした。帰ってきたら、石岡の亀下館が火事で焼けていたのです。亀下館に疎開していた人たちの荷物はみんな焼けてしまいました。駅で泣いていた姿を覚えています。

毎日の生活については、他の疎開の人たちとほとんど同じだと思いますが、ひととおりお話します。食糧事情が悪く、食べ物は不足していました。当時の日記帳は、朝も昼も夜も食事のことばかり書いてありました。おやつがないので「わかもと」を買って代わりにしたので、隣町まで、二時間歩いて買いに行きました。「わかもと」は整腸剤なので、食べるとかえっておなかがすくのですが、ほかにおやつがないので

みんなよく食べました。荷物検査のときに、「わかもと」の空きビンがたくさん出てきた子がいて、先生に大笑いされました。

親の面会のときにもらった食べ物は、全部先生に出す決まりになっていました。でも、そっと隠しておいて後でこっそり食べていました。母がビンに砂糖を詰めたものをくれて、「やすこちゃん（妹）と仲良く食べなさい」と書いてあったときは、飛び上がるほどうれしい気持ちでした。甘いものがなく、砂糖は当時の私たちにとっては、あこがれの的で今の宝石より価値のあるものだったでしょう。また、サツマイモをもらい、綿入れの半てんの中に隠しておいて、夜中に食べていました。サツマイモは食べているときに、音がしないのでこっそり食べるのに最適でした。ある時、サツマイモをくるんでおいた半てんがネズミにかじられ、背中に大きな穴が開いてしまいました。穴をあけられたことも、サツマイモをかじられたことも悔しいのに、みんなには言えなくて一人で泣きしました。

三月一〇日の夜は、卒業のため東京に帰っていたので、あの東京大空襲に遭いました。強い風の吹いた晩でした。親と離れ、かい巻きをかぶって逃げ回りましたが、屋根のかわらが飛んでくるくらいの強い風です。かい巻きはすぐに吹き飛ばされました。家は焼け残りましたが、家の中は水びたしの泥だらけでした。大空襲のことは本当に記憶から消してしまいたいと思っています。

鳥居の前の写真は、終戦後「よしの」のおじさん夫婦が京島へ来てくれたときのものです。疎開していた子供たちが集まったのですが、半分ぐらいが空襲で死んでしまっていました。

一九九五年七月に「疎開した仲間の会」の準備会を立ち上げました。母校、第四吾嬬小学校の同窓会に何名かで参加したのがきっかけでした。「石岡に疎開し、子供なりに苦労をともにした仲間同士、再会できないものだろうか」という話に



終戦後「よしの」のおじさん、おばさんが来てくれた時
京島　ビスケット工場前で

なったからです。私には、疎開の時のお礼の手紙も出していなかった情けない思いもありました。これは、戦後五〇年の時のことです。

いま戦後六〇年となり振り返ってみると、あの時代は世の中全体がマインドコントロールされていたと思います。「欲しがりません、勝つまでは」この標語にみんな洗脳されていたように思います。切なくて悲しくて二度とああいう目にはあいたくありません。

「日本は、絶対に勝つ」このことを信じて、悲惨な生活に耐えて生きていたのでした。もし、あの戦争に負けていなかったら、日本はどうなっていたでしょう。どんな軍国主義の国になっていたのでしょうか。負けたから、今の幸せな日本があるのかもしれません。

戦争って何だったのでしょうか。

二度と戦争をしてはいけないと強く思っています。

（談）

疎開体験を語る

第四吾嬬国民学校六年　千葉脩司

みなさん、こんにちは。私は千葉脩司と申します。今日は、地域の老人会の人たちが、六〇年前にあった第二次世界大戦という戦争について、学校中で学年別にお話をしています。私は三年生と四年生のみなさんに、学童集団疎開の体験をお話します。

学童集団疎開というのは、戦争がだんだん激しくなり、東京にも爆弾が落とされるようになってきたので、子供たちを都会から安全な地方に避難させることです。

私は当時、第四吾嬬国民学校の六年生でした。国民学校というのは、今の小学校のことです。小学校三年生から六年生までの子供たちが、親や家族から離れて地方に行ったのです。地方の親戚（しんせき）などに個人で疎開する場合もありました。これを縁故疎開といいます。でも、多くの人は、学校ごとに指定された場所にクラスの仲間と疎開したのです。これを集団疎開と言います。

私は、昭和一九年九月から集団疎開に行き、昭和二〇年三月に卒業のために東京に帰ってくるまでの約半年間、茨城県玉造町の稲荷屋という旅館で過ごしました。同じ旅館にいた人数は、児童が八一人、先生が二人、寮母さんが三人の八六人でした。寮母さんというのは、子供たちのお世話をしてくれた女性の方です。玉造町のほかの旅館にも、第四吾嬬の児童たち二六人がいました。私たちの旅館と合わせると、玉造町に第四吾嬬国民学校の一一二名がいたのです。

第四吾嬬国民学校は玉造町だけでなく、近くの石岡町、鉾田町にも集団疎開しました。第四吾嬬だけで、五〇〇名ちかくの児童たちが茨城県に疎開しました。

このような学童集団疎開が、東京都全部で行われたのですから、今考えると大変なことでした。東京中の子供たちが田舎に引っ越してしまった、と言えるくらいです。

「半年も旅館で過ごすなんて、いいな」と思った人はいませんか。家族旅行で泊まりに行くのではありません。中学生の修学旅行の長いのでもありません。みなさんは、お父さんやお母さんと離れて、何日一人でいられますか。

これから、疎開中の生活をいくつかお話しします。

まず、食べ物です。食べるものがとても足りなかったのです。今の皆さんの家庭での食事や、学校での給食とは比べ物になりません。ご飯は麦の入った麦ご飯や、お芋の入った芋

ご飯、粟（あわ）の入った粟ご飯でした。お米だけのご飯ではありません。粟というのは、今は小鳥のエサにしているあの粟です。みんなで食べるにはお米が足りないので、いろいろなものを混ぜて量を増やして食べていたのです。おかずも豊かではありませんでした。ご飯にみそ汁、ほかに一品か二品のおかずでした。霞ヶ浦でとれた魚（ワカサギ、シラウオ）のつくだ煮、ナスの塩漬けのお新香などでした。おかずではありませんが、カボチャのスイトンがよく出ました。スイトンというのは、汁の中に小麦粉のだんごを入れたものです。私は食卓に出たものは何でも食べました。

「何でも」の中には、イナゴのつくだ煮もありました。稲刈りのころ、学校からみんなで田んぼにイナゴ捕りに行きました。地元の子は、イナゴをわしづかみにすると、すごい速さで手に持った袋にいれるのです。その速さにびっくりしました。私は、親指と人差指でそっとイナゴの足をつかもうとするのですが、そのときにはイナゴは飛んでいました。私の袋の中は、言うまでもなく空っぽです。みんなで取ったイナゴはつくだ煮になって、食卓に出てきました。

自分たちの食べる野菜を作る畑を耕しました。肥料をやるのですが、今のような化学肥料ではありません。便所から自分たちの出した人糞（じんぷん）を肥やしにしました。便所は水洗便所ではなくて汲み取り式の便所です。便所からタルに汲み取り、長い棒の間にぶら下げて、二人で担いで畑まで運びます。私は背が小さいので先棒です。途中の坂道でタルが揺れ、揺れるたびに中の肥やしがこぼれます。こぼれた肥やしが坂道をぬらします…。便の汲み取りは臭いのですが、慣れてくると臭いのが気にならなくなります。担ぐのにも慣れました。この経験が、終戦後に役に立つとは思いませんでした。焼け跡に、野菜やサツマイモを作り、肥やしをまくのですが、慣れたものでした。

お風呂を沸かすために、山から燃えるものを集めてきました。枯れた杉の葉や枝、落ち葉などをかごいっぱいにして背負って運びます。自分たちのことは自分たちでやらなければなりませんでした。落ち葉たきで焼き芋を作って食べたこともありました。腹がすいてたまらず、生のままで芋をかじったこともありました。友達の家で、サツマイモを薄く切って網の上で焼いてくれたのがうまかったことを思い出します。また、地元の友達に連れられて山に行き、栗拾いをしたのは初めての体験でした。

どうしても、食べることの話が多くなってしまいましたが、

もう少し別の話をしましょう。肝試し（きもだめし）の話です。

先生が怖い話をしてから、肝試しが始まります。山道はじめじめしています。お墓に行く途中の林はザワザワと風にゆれ、お墓の近くでリンが燃えて、破れ提灯（ちょうちん）が風にゆれ、木の葉が歩くたびにシタシタと音をたてます．誰かが後からついてくるような……。駆け出して山を降りました。怖い肝試しでした。

この年の冬は大雪が降りました。雪の降る中を校庭前の山で、裸足（はだし）で競走しました。足は冷たいというより痛いという感じでした。走った後、足を水貯め場に入れたら、ポカポカと温かさを感じました。地元の子との雪合戦も裸足でした。長靴などはありません。手はしもやけ、足はあかぎれになり、泣きたい気持ちで雪合戦をしました。

股（また）の下に赤いはれ物ができました。恥ずかしくて誰にも言えなかったのですが、先生が気づいてくれました。先生は酒で消毒をしておできの膿（うみ）を出してくれました。終わってから、私のヒザをぽんとたたいて「これでよし」と残った酒を口にしました。とてもうれしかったことを覚えています。

親と離れて半年の疎開生活は三月三日に終わり、卒業式のために懐かしい東京に帰りました。その六日後に、東京大空襲があり、火の中を必死で逃げ回って助かりました。

戦後六〇年が過ぎても、その当時の苦労や悲惨さはいまだに忘れられませんが、いろいろな体験をしたこと、苦労に耐える自信を身につけました。でも、あの悲惨な戦争はもうこりごりです。誰にも味わわせたくないと思っています。

今は、六〇年前を振り返って、もう一度、思い出の疎開先、玉造町を訪ねてみたいと思っています。

《墨田区立曳舟小学校「平和のかたりべ集会」（平成一七年三月一〇日開催）での話とメモを元に文章化》

学童疎開の記憶

第五吾嬬国民学校六年　市川　五五太郎

私は昭和七年五月五日生まれ、当時の第五吾嬬国民学校に在校し、六年生のときに茨城県笠間にあった橘旅館に学童疎開しました。橘旅館には六年生だけで、五年生以下は近くの井筒旅館に疎開しました。

新聞の「学童疎開体験記」募集の記事を見て、当時のいくつかの想い出が断片的によみがえり、かすかに残る記憶をたどってみました。

一　疎開当初、しばらくの間、夜、消灯された暗く広い部屋で親元から離れての寂しさに堪えきれず、子供たちが声を殺してシクシクと泣くおえつが、あちらこちらから聞こえるのです。

二　とにかく食べるものが乏しく空腹がつらいことでした。当時、私は「わかもと」（栄養剤？）という錠剤を薬局で買ってお菓子代わりによく食べた記憶があります。その購入代金をどのように入手したか定かではありませんが、多分、面会に来た親からもらったのでしょう。また「イナゴ」を生徒一同で捕りに行き、宿舎での食事の際によく食べました。

三　また「シラミ」にずいぶん悩まされました。着ている衣服の裏とか縫目の部分に「シラミ」がびっしりと付着しているのです。この「シラミ」軍団の状況はまさに「圧巻」。女の子は頭髪について、みんなこの「シラミ」に大変苦しめられました。

親との面会で、後日母から聞いたのですが、親たちがグループで面会に来て、私どもの宿舎と道路をはさんで真向いにあった笠間旅館の二階の窓をほんの少し開けて、子供たちに気付かれないように顔を寄せ合うようにして、向い側の橘旅館一階の広間で細長いテーブルに並んで座って食事をしている子供、特に自分の子供を息を殺して凝視していたそうです。

四　体育でマラソンをやった日、途中で激しい雨降りになって全身びしょぬれになり、その夜一人の生徒の容態が急変し、近くの病院に搬送されましたが、そのわずか二～三日後、急死したことを後で知らされました。発熱した当夜、先生方の慌ただしい動きに異常を感じていたのですが、子供たちが動揺するのを避けるため、当初はこの事実を隠していたのでしょう。現在であれば、良い薬

も、緊急に対応できる病院もあり、このような不幸な事態にはならなかったでしょう。

五

五年生以下が宿泊していた井筒旅館では、朝、大きな太鼓を打つ音「ドーン、ドーン」と私どもの橘旅館まで聞こえてくるのです。井筒旅館の裏手にある佐白山に、よく体育目的で競争で駆け上がり山頂から友部方面を見たものです。この中腹にある御在所という広場で体育に励み、騎馬戦をし、ギンナンをとりました。

疎開先の学校がある茨城県か何かの大きな展覧会があり、私は六年生の絵の部門での出品を先生から勧められました。全く気が進まなかったのですが、みんなが寝てから先生の部屋に行って絵を画くことで、アメ玉やお菓子をもらえるので、それが欲しくて何回か先生の部屋に行って絵を画きました。なぜかこの絵をいまだによく覚えているのです。その絵は、マレー沖で日本軍の攻撃で戦艦プリンス・オブ・ウェールズが艦首を海上に出して船体の三分の一くらいを艦尾から海中に沈没している状況なのです。ただ、この絵は見事に入選しませんでした。私にとってはアメ玉やお菓子が目的でしたので特に落胆もしませんでした。

六

小学校を卒業するために三月三日に自宅に帰りましたが、荷ほどきもしないうちに三月九日の大空襲で逃げまどい、九死に一生を得て、翌日、まだあちらこちらから依然として燃えて煙が立ち昇っている、変わり果てた焼け跡に戻りました。両親がぼう然自失の状態でたたずんでいた姿が、まだ記憶に強く残っています。

最後に橘旅館の御主人・奥さんは優しくよくしてくださいました。また、多くの子供たちを引率して強い使命感をもって、献身的に、ときにはきびしく、そして愛情をもって子供たちを守ってくださった先生方に、今思っても胸が熱くなり、感謝の気持ちで頭が下がります。

今、私は五月初めのゴールデン・ウィークにこの体験記を書き始めました。テレビ・新聞などで、各地の観光地の多くの人出によるにぎわい、高速道路や鉄道、空港での渋滞混雑を見るにつけ、学童疎開していたころと現在の平和な豊かな日本を対比して、それはあまりにも大きい大きい「隔世の感」を痛切に感じます。

戦争は「ダメ」、絶対に「ダメ」、なんとしても「ダメ」。戦争はあまりにも多くの人々を悲惨に、そして不幸のどん底に落としてしまうからです。

飢えとシラミとボス　でも、精一杯生きた

第五吾嬬国民学校三年　並木孝信

今から六〇数年前に日本はアメリカと大きな戦争をしました。私が国民学校に入った年から四年間の出来事です。戦争が次第に激しくなり、東京にもアメリカの重爆機B25が飛来、焼夷弾（しょういだん）を落とすようになりました。焼夷弾は円筒六角形の油脂爆弾で地上に落下して破裂し、油脂状のものを四方にまき散らして火を放ち、辺り一面を焼きつくします。焼夷弾の「夷」には皆殺しという意味があり、それが人々の頭上に雨あられと降ってくるのです。そうした空襲から子供たちの命を守ろうと、国は「学童集団疎開」を実施しました。子供たちを親兄弟から離して、学校ごとに地方に移住させるのです。

昭和一九年(一九四四年)初秋、私たち第五吾嬬国民学校（平成一五年度に八広小学校に統合）の三年から六年までの児童三五六人は、茨城県西茨城郡笠間町（現在の笠間市）に集団疎開するため、それぞれリュックサックを背負い、手荷物を提げて校庭に集合しました。父母らに見送られ上野駅から常磐線に乗り、その日の午後、笠間駅に到着。先にどんな生活が待っているのかも知らず、家族と離れる寂しさより、遠足にでも行くような浮いた気分でした。

その日から、町で一番大きな木造三階建ての井筒屋という旅館で私たちの疎開生活が始まりました。朝は六時に太鼓の音で起床し、朝食のあと細長い机を並べ正座して勉強。風呂は順番に週一回、外出は日曜日の午後と決まっていました。

そこでの生活の最初の事件はシラミの大発生でした。寝小便がバレるのを恐れて、ぬれたサルマタ（パンツ）を履いたまま乾かしてしまうという不潔な児童も何人かいました。体長二～三ミリのシラミがシャツやサルマタにウジャウジャと住みつき、その縫い目に卵をびっしりと産みつけます。私たちは縁側に一列に並んで上半身裸になり、シラミ退治するのが日課になりました。一日に二〇匹、三〇匹捕るのもめずらしくなく「敵艦撃沈！」などと小さく叫びながら、口の中に放り込んでかみつぶすのですから、今から思えばずいぶん不衛生なことをしたものです。

間もなく私たちを襲ったのは「家恋しさ」でした。家に帰りたいと毎夜ふとんの中ですすり泣く子、脱走して東京に行った子、途中で捕まって連れ戻される子、さまざまでした。

そんな日々のなかでの楽しみは、一学期に一回と決められ

ていた家族との面会日。面会しても子に飲食物を与えてはいけないという上からのお達しがありましたから、近くの笠間稲荷の境内まで足を運んで母との二人、隠れるように水入らずの時を過ごすのです。手づくりのぼたもち（おはぎ）をいくつもいくつも食べさせてくれた母の節くれだった手を、今でも鮮明に記憶しています。

次に私たちを襲ったのは飢餓感でした。食事は食べ盛りの児童にとって決して満足のいく量ではありませんでしたが、それでも三度きちんと食べられました。何よりつらかったのはボスとその取り巻きによって、食事の度にどんぶりのご飯を四分の一ほど強引に徴発されることでした。ボスたちはみんなからかすめ取ったご飯をひそかに部屋に持ち帰り、私たちに売りつけるのです。なんとも悪らつな行為ですが、仕返しを恐れて先生に告げることができません。私たちは飢えをしのぐため台所に忍び込み、盗んだ米を缶に入れ雪を詰めたき火で炊き、しんのある生煮えのご飯をむさぼるのです。一度、トカゲを焼いて食べましたが、猛烈に悪臭のするゲップが絶え間なく出て二日間苦しみました。以来、どんなに空腹でもトカゲには手が出ませんでした。あれは人間の食べ物ではありません。

冬、ボスたちのコタツのふとんに火がつきました。各班から徴発した炭をコタツに山と盛ったため過熱したのです。あわてて雪でもみ消し何食わぬ顔でふとん部屋に放り込んだのですが、そのうち綿がくすぶり出し煙が廊下に流れ出しました。幸いボヤで済んだのですが、私たちは広間に緊急集合させられ、ボスら三人は、顔をひきつらせた先生から激しい往復ビンタを食らいました。それ以後、ご飯の徴発も炭の徴発もピタリとやみ、私たちにとっては複雑な思いのボヤ騒動でした。

しかし、そうした生活の中にも楽しみはありました。親の面会もそうですが、毎月支給されるお小遣いで焼き芋やふりかけや「わかもと」という錠剤の胃腸薬を買うのが大きな楽しみです。錠剤はお菓子代わりにポツポツとかじるのです。話は前後しますが、秋のイナゴ取りも楽しみの一つ。三日間ほど袋に閉じ込めてフンを全て出させてから油でいって食べました。

また、毎日、就寝の際に寮母の先生が読んでくれる世界の名作にも心を躍らせました。なかでもジャン・バルジャン（ビクトル・ユーゴ作「ああ無情」）の波乱万丈の物語はのちに私を小説好きの少年に仕立てあげたほどです。

そのうち戦況が一段と激しくなり、昭和二〇年（一九四五年）三月一〇日には、東京にアメリカの超重爆機B29が大編隊で襲来し、二〇万発近い爆弾や焼夷弾を投下、首都を火の海にしました。一夜で一〇万人が死んだのです。私たち児童のなかにも親に死なれ兄弟姉妹にも死なれたものが多く出ました。幸い私の家族九人は奇跡的に全員無事でしたが、母の面会はぷつりと途絶えたままです。

その年の春、私たちは秋田県由利郡金浦町の浄蓮寺に再疎開しました。金浦は日本海に面した小さな漁師町。浄蓮寺は南極探検で有名な白瀬矗（しらせ　のぶ）中尉の生家で、仏様のまつってある本堂が私たちの新しい住居になりました。

夏になると勉強は午前中で終わり、午後は浜に出て塩作りです。砂を敷き詰めた塩田に海水を均等にまき、天日で乾燥。砂をこして高濃度の塩水を集め、それを釜で煮つめて塩を取るのです。これら炎天下の作業は、体力を失っていた児童には耐え難い労働でしたが、平泳ぎやクロール（自由形）を覚えたのもこの海です。みんなフルチン（素裸）でした。

ここではそれほどひどいボスはいませんでしたが、疎開児童に対する二度の米減配政策で、食事はいよいよ量が少なくなり、ほとんど毎食、竹筒の容器にご飯が軽く一杯、野菜が一品、小指ほどの細い竹の子が一、二本入ったみそ汁、たまに魚の煮つけといった献立です。海で巻貝に似た貝を採っては飢えをしのぎ、台所から出るカボチャの種を奪い合いするのもしばしばでした。

吹雪にたける冬の日も
灼（や）けつくような夏の日も
返り見はせじ国のため
第二の日本の国民と
頑張り抜こうこの疎開
吾ら五吾嬬健児らは

先生が作詞したこんな替え歌をうたいながら、大八車を引いて二～三里（八～一二キロ）ほど先の農家まで野菜を買い出しに行くのも日常の仕事でした。

お寺での生活でしたから、お彼岸の日や命日に町の人たちが墓前に供えたぼたもちや芋などを、夜中に忍んで行って盗んだりもしましたが、雨の降る夏の夜などはお墓から青い火がぼうと燃え上がることもしばしば。そんな夜はさすがにだれも墓地に近寄りません。

隣町の象潟へ浜伝いに歩いて遠足に行った日のこと。あるお寺で天井いっぱいに描かれた血の池や針の山で、もがき苦

しむ人間の姿を見て、恐怖と衝撃を受けました。悪いことをすると地獄に落ちるという教えは、その後の私の生活の規範となりました。

八月一五日、終戦。日本がアメリカに負けた日です。その年の暮れ、私たちは一年三か月の疎開生活を終えて東京に帰りました。東京は何もないのっぺらぼうの焼け野原。焼け落ちた第五吾嬬国民学校の校庭から、青い空に浮かんだ小さな富士山がよく見えました。



木造三階建ての井筒屋旅館（茨城県笠間町）



浄連寺（秋田県金浦町）

学童疎開

第一寺島国民学校三年　桜沢京子

ちまたに飛散する花粉の季節に、顔をくしゃくしゃにしながら、はるか遠い昔をなつかしむのは私ばかりでしょうか。

「お山の杉の子」は、疎開学童にとって夢いっぱい元気のでる唱歌でした。声を大にして我を忘れて歌ったものです。「はげ山の杉の子は、大きくなって国のため、お役に立ってみせまする、みせまする…」が、その何十年後に花粉症の源泉になるなんて考えられないことでした。

当時、田舎（いなか）のない家の子は国民学校三年生から集団疎開に参加させられました。戦時下の東京から親元を離れて、右も左もわからずに列車に乗ったとき、楽しい遠足に行くかのようでした。

早生まれの一番小さな三年生の私は、多くの兄さん姉さんと、田舎町の宿屋に分かれて寄宿しました。決して立派とはいえない所でした。ぜいたくはいけないという父兄たちの意見で、私はここにきまったようです。部屋は満員で夜などぶつかりあって寝るしまつでした。

宿の近くには香取神社があって、境内は広くて樹木も多く、私たちの格好の遊び場になりました。鬼ごっこ、かくれんぼなど、いつも楽しく走り回っていたので、寂しさも感じずに元気いっぱいでした。

そのころ冬の茨城は雪も多くて、通学時など下駄（げた）の歯に雪がぎっしりつまって何度もころびそうになったものです。部屋の真ん中にぽつんと置かれた小さな火鉢、みんなの手が重なりあうようにして暖をとっていたころ、手足の指はしもやけでその痛かゆいことったらありません。

その後、食糧難の波がおしよせてきて、おやつに乾パンが五個であったり、ご飯代わりにふかしいもが、丸ごとドカンと食卓に並ぶようになりました。口にするのもいや、けれど空腹なのでしぶしぶ抱きかかえて部屋に戻ります。だれもがお尻からガスを噴出させる毎日。「ごめんなさい」を連発します。みんな負けずにがんばっていました。

ある日、やさしい六年生の兄さんが、こっそりビタミン剤を手にのせてくれました。それはそれはお菓子をいただいたような感激でした。

一番の救いは母の面会で、こっそり宿を抜け出して川辺の土手で、母の手づくり弁当を食べたり、町で学用品を求めたりが、とてもうれしかったことです。

一日の始まりは朝の体操、部屋のはき出し、お便所の掃除、床ふきなど。勉強のほうは他の宿屋の大部屋に集合したり、地元の学校の教室を借りたりで、読み書き、計算のたぐいばかりだったような気がします。

宿では学芸会もどきの劇の練習やトランプに興じる日々。少々おなかのすくことはあっても、子供の世界は戦争のことなどわからずのどかなものでした。

不衛生からノミやシラミにもたかられて、閉口しました。夜中にむずかゆくて目が覚めると、布団のむこうで友達がシャツを手にして、ノミをプチンプチンとつぶしています。さっそく私も仲間入りでした。

戦局の悪化で三月一〇日の大空襲で、東京の下町一帯は全部焼失したと聞いたとき、さすがにショックを受けました。いやな情報が氾濫して正確なことがわからずぼう然としました。

幸い私たちの地域は難を逃れましたが、その後、当地あたりの危険性を思ってか、さらなる秋田県への疎開を強いられました。東京からは余りにも遠くなるということで、私は伯父一家の疎開先、山梨県への旅立ちの準備を始めました。

農作業の盛んな山あいの村では、地元の学校へ転入です。東京っ子は特に好奇の目でみられましたが、現代のようなイジメには出会いませんでした。疎開児は肌が白くて、ノミや蚊によるかきむしり傷がいたるところにあったので、ハダカでの体操の時間は少しばかり恥ずかしかったものです。

預かりっ子は、近くの農家のおばさんからときどきおやつをいただいたり、親切にされて、山に川に友達と遊びたくましく過ごしていました。

終戦の日、暑い日差しの校庭に整列して玉音放送を聴きました。意味もわからず緊張のひとときでした。先生方の動きで戦争が終ったことを悟り、第一に喜んだことは家に帰れるうれしさでした。一寺の学校に戻れるんだ。友達にも会えるんだ。隅田公園にも行けるんだ。胸がどんどん高鳴りました。

東京では、強制疎開にあった我が家の跡地を少し歩いた。先々に焼け野原が広がり、金庫や蔵のあったところだけが形を残していました。何のへだたりも境界線もなくなったその変りようには、ただただ目を見張るばかりでした。どれだけの人々が犠牲になられたのか心が痛みます。

私にとって国の戦争は憎いです。その政策によって、その方針によって、数多くの人々がふりまわされ動揺をうけま

す。

ただ、周りの人間のぬくもりを感じて育った貴重な時代は、いつも私の心の中に刻みこまれています。

学童疎開体験記

第一寺島国民学校四年　柴山ヒデ子
（旧姓　川名）

東京大空襲で家は焼かれ、定住するまで三か所仮住まいをした。一寺小学校も授業ができなくなり、最後の疎開に私は四年で行った。何人いたのか良く覚えていない。コッペパン一つがみんなに渡され、両国駅まで歩き、ガタゴト、ガタゴト秋田に向かった。

ホームに「ふなこし」と書かれていて、改札を出た所で婦人会の人が出迎えてくれ、出迎え一人に子供たち二人が割り当てられた。「みんなを迎える所を、今お寺さんに頼んでいるので、今日はおばさんの家ね」とのこと。

パタパタという音で目が覚めた。家は、新聞専売所だった。昼間は隣の小学校の庭をぼんやり見ていた。何日かして、寺に集まり、夜は本堂にごろ寝した。

「川名さん一人は、この寺でなく、隣村です」先生が言った。八郎潟を渡り、秋田県南秋田郡天王村天王寺というところが、疎開先だった。本堂に荷物が一つ。私のだった。布団、その他の中に、茶筒に入ったお米と五円札、姉の手紙があった。寺には子供たちは二〇人ぐらい。本堂脇は畳になっていて、左右は引き戸のついた棚になっていた。上に布団、下の引き戸に小物を入れた。

朝六時、住職が、母屋と本堂の入り口の前に木槌と板がぶら下がっているのをたたく。

本堂には、子供たちが座禅して待ち、般若心経が終わって食事。それから学校。五、六年は寺で、一、二、三、四年は村の分校へ七、八人で行く。私は、四年男二人と女二人で畑の道を一〇分くらい歩いて学校に行った。分校は、先生夫婦と三歳くらいの子供のいる母屋、広間といったおどり場、一、二年の部屋と三、四年の部屋の長方形の建物だった。

一日、一五日は、婦人会の「慰問」があり、食べるものには不自由してなかった。寺には西村先生と雑用をしてくれる女の人が東京から来ていた。

夜の食後、たまに先生が本を読んでくれたり、本堂前から寺の入り口まで、男女別で走ってリレー競走したりすることもあった。一寺国民学校では、三か所に子供たちが疎開しており、一丁目は「ふただ」、二丁目は「天王村」、そのほかは「ふなこし」という所だった。

ある時、婦人会の人が「一日里親になる」といって、一人

ずつ迎えにきてくれた。私は農家の家で、家の前に大きなひまわりがある。ビックリして見ていると、「あれは油をとって兵隊さんの飛行機の油にするんだよ」と言われた。

「オカイコさん見たことあるかね?」私はない。白い玉子型のものを手の上にし、おばさんはポンと口の中に。口をもぐもぐさせて手を口に入れ指を引くと、白い糸がドンドン、ドンドン出てきた。「農家って、イロイロあるんだぁ」

ジャランポン、ジャランポン鳴らしながら「ミコシ」が寺に入ってきた。祭でなく葬儀だ。桶（おけ）にひもがかけられ、前もって掘ってあった穴の中に。私も手で土を入れた。二、三、足もとにあった骨らしき物も手で入れた。

八月一五日、学校へ行くと「今日は昼にラジオで特別な大ニュースがあるので早く帰りなさい」と言われた。トウモロコシ畑を通り寺へ。一五日なので婦人会の人たちが来ていて泣いている。「どうしたの、おばさん?」「日本が負けたよ。遠くまで来てゴクロウさんね」みんなを見ると下を見ていた。泣いているのか。私は心の中で「バンザイ。これで帰れる」

何日かして、東京に帰ることが決まり、東京から何人かが来た。みやげを買いに走った。私は缶の中から五円出し「ヤツメウナギ」を買った。

五年生の松岡君がポンと私の背をたたき、「おばさんから」と、手に渡してくれた。開けてみるとササもちみたいにササに包んだおむすびがあり、白い紙に、一日里親になってくれた村山末吉と書いてあった。松岡君は、それを見て「東京に帰ったら手紙を書きな。それから、おばさん、今日畑にいるって。汽車の窓から手を振ってやれば」と言った。畑に人が見える。私は「おばさん、アリガトウ」と手を振った。松岡君も手を振った。

一寺の校庭に、子供たちを迎えにきている人たちは、一人ずついなくなり、また、私一人残った。西村先生は「川名さんの家族に連絡がとれなくて、移転したのかも知れない」「そんなことはありません。私一人で帰ります」先生は「五時まで学校にいるから、いなかったら学校に来るんだよ」と言ってくれた。

玄関を開けると、赤い鼻緒（はなお）のゲタが一組あった。学区外なもので、連絡が思うようにならなかったらしい。

一一月ごろ、天王村から学校あてに、子供たちに綿入れのチャンチャンコが送られてきた。寺で着てもらおうと婦人会の人たちが作ったとのこと。私は手紙を書いた。

「村山末吉様天王村の皆様、ありがとうございました」

私の縁故疎開

第一寺島国民学校三年　鈴木裕子
（旧姓　野谷）

太平洋戦争が激しくなった昭和一九年から、田舎の親戚（しんせき）を頼り、親に伴われた子供の疎開が始まった。それが強制的な集団疎開になっていった。最年少三年生で末っ子であった私を、母はかわいそうでとても手放すことができなかったようだ。母の田舎の群馬県高崎市は、東京や横浜の疎開者でいっぱいであった。

それが、たまたま母の義理の息子のお嫁さんの実家が山形の方で、お話をしたらその家で預かってくださるとのことで、母はお願いをした。全然知らない他人の家であった。

昭和一九年八月、母に連れられてこの山形県東置賜郡高畠村に行った。私より三つ年上の美枝ちゃんと、裏の伯父さん家の二つ下の秀子ちゃんがいた。お婆ちゃん、オッツァマ（お父さん）には大変かわいがられ、差別なく良く面倒を見てくれた。初め東北弁がわからず困ったが、しばらくして近くに東京から家族で疎開して来た中に、私と同級生の女の子がいて、やっと東京弁で話ができたのはとてもうれしかった。

学校では「東京っ子」と言われてからかわれたりした。みんなで週三回、慣れない山に薪取りに何回も往復させられたのが大変な仕事だった。

でも、こんな楽しいこともあった。家の裏から五分くらい離れたところに河原があり、夏は水の中に足を入れたり泳いだりしてよく遊び、今思うと東京では経験のできないことだったと思う。冬は水かさが増し流れも速く非常に危険な状態になるので、少しでも近づくと大人の人たちによく怒られた。

私が持っていった洋服の中に小学校入学の時の服があり、それを年下の女の子の入学に着せたのはちょっといやだなと思った。衣類は古い物を縫い直したり、足袋（たび）の底布は酒屋の前掛けを利用した手作りを母が持ってきた。「裕ちゃんの足袋は株式会社と書いてある」と言われたりした。

そのころは汽車の切符がなかなか買えず、母は人に頼んだり、いろいろと工面をしては、毎月私の所に来てくれた。その度に「何か買いな」とお金を置いていく。私はあてがわれた引き出しに入れて、そのお金をよく数えていた。

母は近くの山形の親戚の方と一緒に赤湯温泉に行ったこと

がある。皆さんは遊んでいたが、近くに学童疎開の子供さんがいて自分の子に置き換えて泣いていたそうだ。

姉敏子が昭和一九年一二月に私の所に来てくれた。雪の降る道端のヨシズ張りの小さな小屋で、生きている兎（ウサギ）をぶら下げて、どこに刃物を入れるのか、くるっと皮がはげる。肉は持ち帰り、皮は供出するという。

外は雪で洗濯物は家の中に干す。滴はつららになっている。そんな寒い毎日であった。お風呂もたまにしか入らないから、頭がかゆい。そんな頭にはシラミがいる。かゆい頭を爪でかき、その爪をキュウーっと引くと黒いシラミが爪の中に入る。髪の毛にピカピカ光っているのは卵である。

姉が来た時に、雪がいっぱい積もった河原の近くで、今東京ではやっている「お山の杉の子」という歌を歌ってくれた。明るくてテンポも良くてなんて楽しい歌なんだろう。「ああこれが東京なんだな…」と子供心に思った。私は何とかこの歌を覚えたくて、姉が帰らないうちにと夜遅くまで秀子ちゃんと二人で何回も声を張り上げて一生懸命歌った。今でもこの歌を聞くと当時のことを懐かしく鮮明に思い出す。

いつだったか忘れたが、私は一度東京に帰ったことがある。激しい空襲に「おらあー怖くてようーがらがら逃げた」とびっくりしてすぐに山形に帰った。

翌二〇年三月一〇日の東京大空襲の火が山形からも赤く見えて、後に下町は焼け野原だと聞いた。私は「家がなくなって自分一人になり、田舎の子になるのかなぁ」とすごく心配でその夜は眠れなかった。

七月に入ってから、切符をやっと手に入れて山形に来た母に、家の者から「こちらも空襲があるようになったので裕ちゃんを引き取ってくれ」と言われたので驚いた。五月二五日の空襲で父がけがをして、家も焼けて、お隣の家にお世話になっていたのでどうしたものかと帰って行ったという。（このことは、私は後になってから聞いた話だ）

八月一五日、終戦になってから間もなく、母は私を迎えに来てくれた。汽車の中は復員の兵隊さんばかりだった。

あまり早く帰ったので、しばらく友達が誰もいない、ポツンとした日が続いた。

私の集団疎開体験記

利根川のほとりの境町の福島屋、岡田屋、瓢亭

～八郎潟を見下ろす丘の天王村の自性院～

第一寺島国民学校四年　羽根田　尚　三

集団疎開の体験者は、終戦時六歳の小学一年生から一三歳の中学一年生までの、今から見れば幼いと思われる子供たちと、それに同行した先生方と用務員の人たちということになります。その体験については、この六〇年の間に自分の子供たち、孫たちに語り続けたことと思います。私は、昭和八年生まれの兄邦夫と昭和一四年三月生まれの弟博司の三人で、秋田県南秋田郡天王村自性院で終戦を迎えました。同じ所で一緒に暮らしていてもその思い出を話す時、それぞれの記憶は異なっていました。ただ、空襲のことなど、強烈な出来事は共通していました。他の共同生活のことはそれぞれの年代の違いが出ています。年齢によって違った思い出をもっているようです。

最初の疎開は昭和一九年九月に茨城県猿島郡境町で始まりました。五軒の旅館に三年生から六年生の約一八〇名が疎開しました。学年別にそれぞれ旅館に分かれて勉強しました。皆が初めての共同生活であったのでいろいろな事件がありました。親たちも心配だったのでしょう、そろって面会に来てくれました。お土産に持ってきてくれたお菓子は皆で分けて食べましたが、そっと渡してくれたお菓子は面会が来なかった子供たちから隠れて、夜、寝床の中で食べました。茶筒に入ったしょう油味のあられ、落花生でした。あられは、かむと音がするので口の中でしょう油味がなくなって柔らかくなるのを待って食べました。落花生は、においがするので一粒ずつ、息を殺して食べました。数年前、土曜ワイドラジオ東京というラジオ番組の中で、永六輔氏が集団疎開先で全く同じ経験をしたことを話しているのを聞いて「まったく同じ経験をするなんて」と驚いたものです。当時、保存できるお菓子として、家庭で用意できるのはこれしかなかったのかもしれません。家が恋しくて逃げ出して、東京に帰ろうとして途中で見つかり連れ戻された上級生がいました。二度目は家に帰り着き、家の者からはその後「かわいそうだから家におく」と連絡があったそうです。他の子供たちとて、同じ思いだったに違いありません。

そのころの私たちは、日本の国中が戦争に向かって動き出していた時代であり、紀元二六〇〇年の行事、昭和一六年の

一二月八日の米英に宣戦布告、真珠湾攻撃など、戦争の理由もわからないままラジオ放送を聞いて興奮していたものです。昭和一七年四月、入学したその月にB29が飛来し、王子、小石川が空爆されました。これが東京空襲の始まりでした。知り合いの人たちの出征に旗を振って見送る毎日でした。そして「君たち子供はこれからの日本を守る大切な宝だ」と言われ、戦火の及ばない地域にと疎開させられることになりました。そんな状況下でしたから、つらい、寂しい、嫌なことでも我慢し、すべて自分でしなければなりませんでした。空爆が激しくなり、東京に向かうB29の大編隊が日夜を問わず頭上を通過するようになりました。迎え撃つ友軍機は二、三機。そばに近づくとすぐ撃ち落とされ、そんな悲しい光景をどうすることもなく眺めたことでした。一度B29が撃ち落とされ、近くに落ちていきました。皆でその方向に駆けて行ったこともありました。

三月一〇日の大空襲で真っ赤に焼けた東京の空を利根川の土手の上から寒さと恐ろしさで震えながら眺めました。

親から渡されたおこづかいでアンコ玉やアメを買って食べました。疎開の仲間は、家の近くの遊び仲間が一緒であったので昼間は東京の普段と変わりません。それが唯一の救いだったかもしれません。

二軒目の宿泊所岡田屋で、夜中に火災にあい、焼け出されて恐ろしい思いもしました。昭和二〇年四月、茨城も危険になり、秋田へ再疎開することになりました。

秋田のお寺での生活は、毎朝、般若心経をあげることから始まりました。鐘をたたく係、木魚をたたく係が回ってきました。座禅も組みました。勉強は、五年生、六年生はお寺で、東京から一緒の先生に教わりました。私たち四年生以下は村の分教場に通いました。東京の家が二五〇機のB29の焼夷弾（しょういだん）による東京大空襲で直撃をくらい焼けてしまった後、昭和一四年三月早生まれの一年生になったばかりで入学式もしていない弟が、父に連れられてきて仲間に加わりました。分教場での勉強は村の子供たちと一緒でした。校庭を開墾して畑にしました。また方言の強い国語の朗読を笑って先生に怒られたこともありましたが、皆でキノコを採りに行ったりしてすぐ仲良くなりました。村の分教場の級長だった児玉君、ガキ大将だった金太郎、不思議と二人の名前は今でも記憶しています。学校から帰っても一緒に遊びました。秋田の天王村は近くに船川港という軍港があったので、船からの砲撃をうけたことも、また艦載機が飛来し機銃掃射を受

けたこともありました。秋田市が空襲で燃えて真っ赤になった夜など裸足（はだし）で防空壕（ぼうくうごう）に駆け込んだこともありました。

秋田でも空襲が増えてきました。食料の配給はさらに減り、当然のことに食事は雑炊が中心となったように記憶しています。それを、天井雑炊と呼びました。米粒が見えず、汁の上に天井が映るからです。もう一つ不思議なことは食事の合図とともにコショウの瓶（びん）を持って食卓に集まったことです。どうしてコショウなのか、後になって考えたら食品店で最後まで売れ残っていた口に入るものだったのかもしれません。でも、秋田での食べ物は意外と豊富だったのかおなかのすいた記憶はありません。近くの八郎潟では、全員でのしじみ取り、フナもとりました。また、分教場での友達の家に遊びに行き、いろいろおやつをごちそうになったこともありました。ガキ大将の金太郎がスルメ、身欠きニシンを持って遊びに来て、そして火であぶって食べたその味は今でも覚えています。そして疎開っ子が行くとブドウが一〇銭で二房、地元の子は一房買えました。ガキ大将の金太郎が、よく五銭をもって私を誘いにきました。一緒に行けば半値で一房手に入れることができたからです。また村の婦人会の人たちが毎月一日と一五日にはお寺に来て純綿のご飯をごちそうしてくれました。純綿とはスフが混ざっていない布のことで、混ざりけのない真っ白なご飯のことでした。

当然八月一五日の玉音放送は、本堂の中の食卓に並んだ純綿のご飯とみそ汁を前にして聞きました。戦争に負けたことを知り、皆で声を上げて泣きました。数日を経ずして船川港から上陸した進駐軍の戦車やジープがお寺の前を通り抜けて、秋田市に向かっていきました。見つかると全員殺されるというわさの中、塀のすき間からこわごわのぞきました。まだ、戦争の余韻が残り、緊張した毎日でした。それでも戦争から開放されたのです。

しかし東京に戻ることはできず、疎開生活は続きました。お寺での生活ではお風呂はそろって村の銭湯に通いました。脱衣場の床には血を吸った大きなシラミ、湯船にも浮くほどのシラミたかりでした。お寺の本堂の前の階段に並んで、パンツのゴムひものひだに潜むシラミをつぶす光景は今でも思い出します。そんな生活は東京に帰るまで続きました。お盆、お祭りの日には村の婦人会の家に一人ずつ、一日里親とでもいうのでしょうか、呼ばれて大ごちそうしてくれたうえにおこづかいまでいただき、祭りを楽しんだこともありました。

村の人たちの親切は忘れることはできません。一〇月の半ば児童六三名無事帰京。後に、天王村の婦人会の人たちを東京見物に招待してその当時のお礼をいたしました。

集団疎開中、まだまだいろいろな出来事がありましたが、それは今の人たちには想像もできないようなことです。書いているうちに次々と思い出されてきます。つらいことや悲しいことはほとんど忘れていたようです。またおなかをすかしたという記憶もありません。疎開した場所が良かったのかもしれません。今、思い出して書いたことは楽しかったことの一部です。この時の経験が私の人生の中に大きな影響を与えてきたことに気が付きました。人との協調性、嫌なことでもつらいことでも我慢して、それが生きるための糧になったことでした。戦争は、あってはならないことですが、私が集団疎開での多くの人から得た事柄はその後の私の人生の役に立った得がたい宝物と思っています。書くことで伝えるよりも、機会があったら今の子どもたちに話して聞かせた方がより良く伝わると思っています。書き残したいことは多くあり、語り伝えたい思いも残りますが、これで終わりとします。



利根川の土手にて（茨城県境町）



自性院学寮（秋田県南秋田郡天王村）帰京を前に

空腹に耐えかねて

第一寺島国民学校六年　羽根田　整

戦後六〇年を経過した現在だが、学童集団疎開は思い出しただけでも悲惨だった。

私は当時、向島の第一寺島国民学校の六年生。学校の三～六年生たちと東武鉄道の曳舟駅から出発したときは、暗雲に覆われた厳しい戦局とは裏腹に、楽しい「遠足」のルンルン気分でいた。しかし二七人と疎開先の茨城県猿島郡境町の福島屋旅館に入ると、否応なしに現実に引き戻されることになる。

空腹続きで、飢えを感じる日々が日常的となった。腹いっぱいに食べた記憶はない。午後、土地の境国民学校から帰ると徒党を組んで畑の広がる町に足を伸ばすのが日課。農家で日干しにする乾燥芋が目に留まれば反射的に手を出し、芋畑に入っては、さつまいもを素手で掘ってドロを落とすと口に運んだ。立派な「盗っ人」には違いないが、何よりも飢えを満たす気持ちの方が強かった。回虫がわくのも当然の成り行きだろう。

向島の両親に書く手紙は全部、先生や寮母の検閲を必要とした。だから、いつも「僕は元気です」式の文面。ある日、一計を案じた私はルールを破り、ハガキに「お腹が空いてたまりません」と本音をつづり、誰にも相談せず勝手に町の郵便局のポストにそっと投函（とうかん）した。不思議と罪悪感は覚えなかった。

届いた一通のハガキに向島では大騒ぎとなったらしい。型通りの文面ではなく「お腹が空いて…」である。またたく間に情報は父兄の間に広がり「それはかわいそうだ」と貴重な菓子や食糧が集められたそうだ。特定郵便局長をつとめていた父は、その荷物を背負い、ひとりで疎開先に向かった。

曳舟駅から杉戸駅（現在の東武動物公園駅）まで東武鉄道。事情を説明して近くの同業の郵便局から借りた赤い自転車にまたがり一〇数キロも離れた境町をめざした。

たまたま私たちは町を流れる利根川で水遊びしていた。そこで偶然にも父の姿を見つけた。「ああ、気の毒なことをしたな」と私には一瞬後悔に似た思いが走ったが、さっそく堤防に座り食べ物をほおばった。だが、空腹の身体にはショックを与え、全員たちまち猛烈な下痢を起こす。先生と寮母は怒り狂い、ヒステリックに「あなたたち、勝手にしなさい！もう知らない！」

翌年の三月二日、私たち六年生は卒業式を控え、夢にまで見た向島の我が家に帰った。米爆撃機B29による下町一帯を見舞う未曾有（みぞう）の大空襲は、ちょうどその一週間後のことだった。

同日、境町に残る後輩の少国民（児童とは呼ばない）は、戦火で真っ赤に染まるはるか西の空を眺めながら、堤防で号泣したと聞かされた。「お父さん、お母さん。家が焼けちゃった！」



学童疎開先の宿舎、茨城県境町の福島屋旅館での勉強ぶり。中央は寮母。
1人おいて左が6年生の私（昭和20年1月19日撮影）

学童集団疎開の思い出

第一寺島国民学校三年　渡辺桂子
（旧姓　栗原）

東京に空襲警報のサイレンが鳴り響くようになり、学童を東京から避難させるために縁故疎開が促進されることになったのは、昭和一九年のことだった。また、頼る縁故のない学童のために、都は東京近県に施設を設け、なかば強制的に集団疎開をさせた。

昭和一九年九月、一寺の生徒は茨城県猿島郡にある岩井町と境町とに分散して疎開した。私の行先は、岩井町の枡藤楼という旅館施設だった。出発当日、バスの窓から見送りの母に手を振ったが、緊迫した状況がまだ幼い私にはよく理解できず、旅行にでも行くようなちょっとウキウキした気分もあったように記憶している。夕方になって枡藤楼に落ち着いた。生まれて初めて離れた親元だったが、町の人たちからの歓迎を受けて妙に興奮した第一夜だった。

二、三日を過ぎると、親元から離れた寂しさから、夜になるとそこここから忍び泣きがもれるようになった。月に一、二回の面会日には、子供の好きなお菓子や下着を持って親たちが訪ねてきた。その夜は親と一緒の布団に寝て子供は思いっきり甘えた。けれども、親が面会に来なかった子は、親に抱かれて寝る友達がうらやましくて、布団の端を口にくわえて声を殺して泣いたものだった。

冬になって、シラミが大量に発生した時のこと、メリヤスシャツの縫い目に血を吸ってマルマルとしたシラミがびっしりと並び、かまれて赤くなった皮膚は猛烈なかゆみを伴った。シラミは親指の爪と爪でプチンとつぶすと生臭いにおいがした。寮母のたちばな先生は皆の下着を大きな釜で毎日煮沸した。頭髪にもケジラミがわき、一ミリ足らずの白い豆をつぶしたような形の卵がびっしりと付いた。ちょっとネズミ色をしたケジラミは素早く髪の毛の間を走り回りなかなか捕まえられなかった。私たちはお互いに目の細かいすきぐしで髪の毛をすき合った。

地蔵坂通りの入り口にあった私の家の斜め前に、朝鮮料理屋があり、そこの息子の崔さんは六年生だったが、とても体格がよく大きい男の子だった。家が恋しかったのか、空腹だったのか理由は分からなかったが、よく寮を脱走して家に一人帰ろうとした。

その都度、先生に捕まりお仕置きを受けていた。私には何

となく恐ろしい存在に見えたが、あるとき「オイ、お前のおじいさんが面会に来ているぞ」とニッコリと声をかけてくれた。崔さんは六年生を卒業して、三月に東京に帰り空襲で亡くなったと聞いた。その優しい笑顔が今でも思い出される。

東京への米英軍による空襲が激しくなった。敵機が霞ヶ浦をめがけて岩井町の上空を頻繁に通過するようになり、私たちは庭に防空壕（ぼうくうごう）を掘った。警戒警報が鳴ったと思うと直ぐに空襲警報のサイレンが鳴り渡り、皆で防空壕を出たり入ったりした。B29爆撃機は大編隊を組んで来襲、そのウーンという低い音はおなかに響いて非常に不安感を覚えた。

強制されてかどうか記憶にないが押入れのふすまに、憎き敵と教えられたチャーチルやルーズベルトの新聞写真をはり、それをめがけて「鬼畜、米英！」と叫びながら物を投げつけたりした。

寮での全員の入浴が困難になって、私たちは、町の有志宅に分散風呂といって週に一度、二名ずつお風呂をもらいに行くことになった。私と仲良しの弘子ちゃんは、町の校長先生のお宅に割り当てられた。大島先生のお宅には、女学生の娘さんがいて、私たちを妹のように可愛がってくださった。寮での年忘れ会に踊るようにと、「あの町この町（日が暮れる…）」と「しかられて」を先生のお宅で一生懸命に習った。

寮の生活は、規則正しく鈴木先生（女）が毎朝「起床！」と笛を吹くと皆一斉に着替えて布団を床の間にたたみ、近くの八坂神社まで走る。早くそろって整列した班が誉められたが、三年生の私は走るのが遅くて六年生の班長にいつも怒られていた。私は先生が「起床」の笛の前に洗顔をするのを知っているので、部屋を出られるとすぐに人に気づかれぬようにモゾモゾと布団の中で着替えをし、洗顔を済ませた先生が笛を吹くと直ちに布団をたたみだしたりした。

全員がそろうと点呼をとり体操をする。男の先生は「イチ、ニイ、サン・・」と掛け声をかけ「シチ、ハチ」の時にいつも「シャチ！、ハチ！」と言い、私たちは密かに「シャチハチ先生」とあだ名で呼んでいた。

三月九日の夜中、東京に大空襲があったようだと伝わり、真っ赤な炎の燃え上がる東京の空を、二階の廊下の柱にしがみついて、とても不安な気持ちで眺めていた。

その後、面会にきた人たちに、私は自分の家や親の安否を尋ねたが、どの人も「ああ、あの辺りは七中が焼夷（しょうい）爆弾の集中攻撃を受けたのですっかり焼けてしまい、消

息は分からない」と言う。家の人たちは皆焼け死んでしまったのかと泣いた。

茨城にも敵機来襲が激しくなり、東京都は学童の再疎開を命じた。私たちは、秋田県に行くことになった。熱海で病気療養中の祖母と弟妹を連れて、母は父の田舎である四国へ行くという。父は早くに病死していた。その実家に病身の祖母と子供四人を連れて世話になることは困難だったのだろう。「兄ちゃんと一緒だから…」と母は、私たちに秋田へ行って欲しいようだった。秋田はとても遠いので、しばらくは会えないが…と母は帰っていった。

その日、母の乗ったバスが八坂神社の森に消えるのを、兄と私は走って追いかけた。

随分と長い間、列車に揺られやっと着いた秋田県の船越町は八郎潟と日本海に挟まれた小さな海辺の町だった。海は逆巻く波も荒荒しく、私は遠いところに来てしまったんだなあと感じた。私たちは、善行寺というお寺の本堂に寝泊りすることになった。寺には給食の施設がなく、近くのえんのう寺(円能寺?)まで、毎食時にお箸袋を持って並んで通った。

食糧事情が急激に悪化し、疎開児童への配給量が極端に減少した。赤茶色をしたベークライトのすり鉢型をした小どんぶりに、刻んだ大根葉と茎がたくさん入った薄いお粥とか、水っぽいサツマイモやゆでたジャガイモだけの食事しか思い出せない。食事前には、正座をして両手を合わせ人差し指と親指の間に箸をはさみ「箸(はし)とらば、天地神の恩恵み、父母や至上の恩を味わえ」と唱和してから「いただきます」と言った。四年生になったばかりのやせた小さな女の子にでさえ、足りない食事量だったから、食べ盛りの五、六年生の男の子たちには足りるはずがない。空腹に耐え兼ねて夜、男の子たちは近所の畑や鶏小屋に野菜や卵を盗りに行った。

朝になって怒った農家の人が寺へどなり込んできた。布団の間に隠し置いた卵は割れてぐちゃぐちゃになっていた。高学年の男の子たちは先生に往復ビンタを食わされた。

先生方もお腹がすいていたのだろう、夜中に職員の部屋に電灯がついて、何やら食べているらしいと皆でそっと部屋の前に行き、さっと障子戸を開けた。缶詰などを前にしていて気まずい先生方は、そうした子供の行為に、またビンタを食わせた。

親への手紙は、先生方の検閲を経なければならなく、生活上の不満などは書き直しをさせられた。女の子たちは、お手玉を送って欲しいと書き、中の大豆をいって食べたりした。

海に行く途中に岩塩の精製工場があり、そこの前の土にはたくさんの塩が含まれていた。布袋にその土を詰めて持ちかえり、水に溶かして上澄み液を煮詰めて塩をとり、食事時に何の味もないお粥に振りかけたりした。

宿泊所がお寺の本堂だったため、法要などのある日は皆外に出され、雨の中、傘を差して法要の終わるのを待ったこともある。墓地の中は子供たちにとっては、カクレンボや戦争ごっこの格好の遊び場所だったが、お墓によじ登ってはしかられた。

さすがに東京から遠い秋田では、空襲のサイレンが鳴り響いたことはなかったが、ただただ、おなかのすいた毎日だった。

八月に入ると、秋田では冬の生活に備え、山に薪を取りに行ったり、冬の間のたんぱく源とするために八郎潟でしじみを取ったりすることが日課のようになった。低学年の子たちは二、三本の、高学年の子は四、五本の丸太を二宮金次郎のように背中に負い、遠い山に日に何度となく取りに行った。

八月一五日、先生から今日は正午に大事な話があるので、皆、薪を取りに行った者も昼には寺に戻るようにと言われた。その日、寺の境内で、直立不動の姿勢で聞いたラジオの玉音放送は、鼻にかかった高音の声で、何を言っているのかさっぱり分からなかったが、どうやら戦争が終わった…ということのようだった。先生方は泣いておられた。

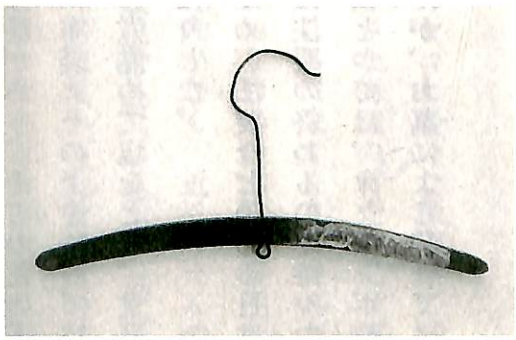
戦争が終わって空襲もないのなら、早く東京に帰って家族に会いたいと思ったが、先生から今帰っても、家も無いし帰京は年を越した春になると聞かされた。

秋田の冬は厳しいので、冬支度をしなければならなかった。九月に入ると肌寒かったが、私たちは毎日、八郎潟で腰まで水に漬かりながらバケツに何杯ものしじみ取りをした。

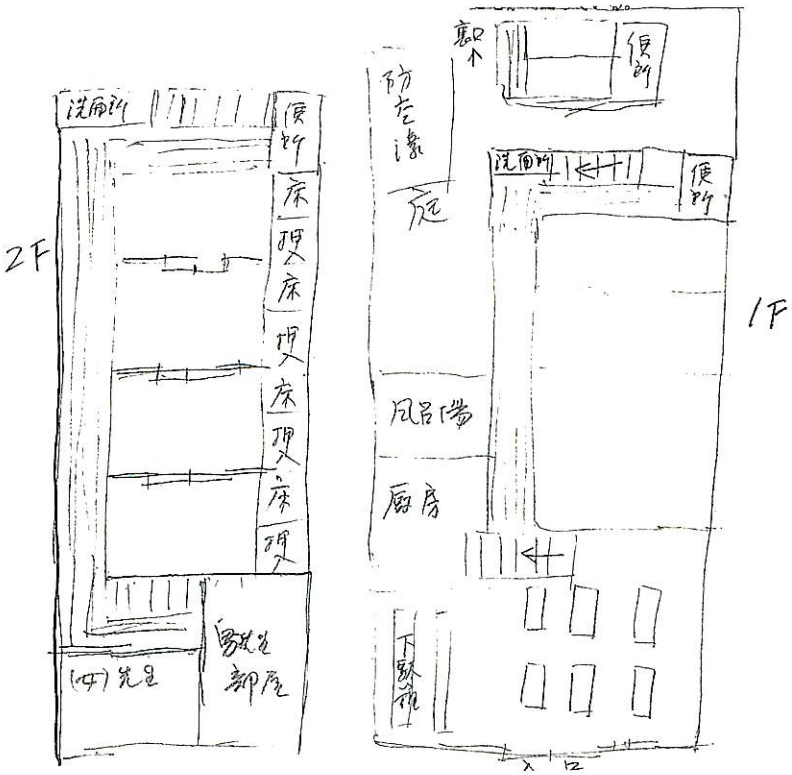
一〇月に入って、急に東京に引き揚げることになり、お別れの前日に学校で、船越町の方たちから赤飯が振る舞われた。その時の、大根葉などの混ぜもののないご飯のなんとおいしかったことか。六〇年を経た今も覚えている。窓に板を打ち付けた列車に乗り、配られた食事用の乾パンを持って、青森の方を回り疎開児童を拾いつつ一〇月末ごろに東京に戻った。校庭で「大きくなったね」と母に迎えられ、戦災で焼けなかった我が家に私は走って戻った。

今年古希を迎える私が、六〇年も前のたった一年間の出来事なのに、かなり、鮮明に覚えているのは、特殊な体験だったからなのだろう。私の手元には、古ぼけたハンガーがある。

良く見ると、薄くなってはいるが、母の字で「一寺　第四分団　枡藤楼」「三学年　栗原桂子」と旧仮名遣いで書かれた紙が巻いてある。次から次へと走馬灯のようにめぐる記憶のどれほどが正確なのかは分からないが、太平洋戦争中に行われた学童の集団疎開を体験した者として、平和であることの大切さを伝えたいと心から願っている。



疎開先へもっていったハンガー



宿舎の見取図

学童疎開の記

第二寺島国民学校三年　岡本直司

―縁故疎開組と集団疎開組―

学童は少国民と称し、未来の戦力に備えるためか、足手まといになるためか、どちらか分からなかったが、いずれにしても帝都より離すことになった。その対象者が小学三・四・五・六年生であった。

保護者は学校に召集され、親類縁者を頼って地方に行くか（これを縁故疎開という）、都が決めた方法で地方に行くか（これを集団疎開という）選択を迫られたようである。

我が家は、父が警察官のため勤務先を離れられず、地方に親類縁者もなく、集団疎開ということになった。

生活班が出発前に形成された。地図上で区分けされ、わたくしはいつも遊んでいた近所の連中から離れ、家と背中合わせになっている地区と一緒にさせられた。

―いよいよ出発―

意気揚々と校歌を歌いながら、親たちに見送られ都電向島停留所に向かった。ここから臨時電車で上野駅に向かった。親たちは泣いていた。「何でなのかなあ」とぼんやり考えていた。それに引き替え電車の中は遠足気分で大はしゃぎであった。上野駅には他からの学校の児童で込み合っていた。

車窓の景色は北千住を過ぎるあたりから畑が増え、江戸川を渡ると田んぼが多くなった。

柏、我孫子、取手、藤代と過ぎ佐貫駅に到着。そこから小さな汽車が引っ張る龍ヶ崎線に乗り換え、終点の龍ヶ崎駅までコトコト田園の中を三〇分ほど走った。ぼんやり筑波山が見え、遠くまで来たなあと感じていた。

―私の住まい―

私の疎開先の宿舎は茨城県稲敷郡龍ヶ崎町「和久屋旅館」である。駅から歩いて一五分くらいで街の中心と言っていいところにあった。ガラスに「和久屋旅館」と書いてある引き戸を開けて入ると中庭を囲むようにロの字型に建物ができている。

右手に行き左に曲がると、ここの主人一家の居室、その奥に先生方の居室が並ぶ。左手に行き右に曲がると、廊下に沿って一二畳ほどの部屋が四つ並び、部屋を仕切るふすまを取り外すと、大広間になる。ここがみんなの食堂になり、集会所になり、教室にもなる生活の場所である。その奥をもう一度右に曲がると、先生たちの居室のところに出会う。そこに

ふたつ階段があり、上がるとそれぞれ二部屋ずつ居室があった。小さな旅館である。

ここに一〇〇名以上の児童が来たのだからそのにぎやかなこと。到着した日の昼ご飯は、調理のおじさんが精一杯のごちそうとして「らっきょの煮物」を作って待っていてくれた。ところが都会育ちの子どもたちには、味が合わず全然食べられなかった。おじさんは怒ってその日のうちに辞めてしまった。

夜は布団をびっしり並べて敷き、くっつきあって寝た。二、三日がたつと、だれもが家が恋しくなり、布団にもぐりすすり泣いた。

三年生から六年生一緒の班生活、お兄さんのいる人は良いとしても、単独でしかも普段一緒に遊んだことのない子どもばかりの班に入ったわたくしは、格好のいじめの対象になった。いじめはこのころにもあったのである。

―日常生活―

やったことのない部屋の掃除や下着の洗濯を中庭でした。夏のうちはまだ良かったが、冬になると石けんも手に入らなくなり、干した洗濯物が凍って乾かなくなりだんだん洗濯がおっくうになった。

風呂は旅館の隣の風呂屋に行った。蛇口が無く、上がり湯は、男女境となっている壁の下に四角く掘られたところにたまったお湯をくみ出して使うのである。三年生の子どもにしては深すぎるし、おけが重たかった。

そのうちにノミやシラミが発生しだした。経験のないかゆさ、そして夜、床に就くと、耳元でかさこそとシラミがはい回る音がするようになった。昼間、縁側に出てシラミつぶしに時間を費やし、布団の中には防虫剤のナフタリンを入れて寝た。

食事は、四部屋ぶち抜きの居室に机を並べ一斉に食事をした。配膳当番は班別で行うため上級生は盛りつけ、下級生が配膳役として手早くやらないと怒られたものである。一斉に

「箸（はし）取らば　天土御代の　恩恵み　君と親との　ご恩味わえ　いただきまあす」

上級生はどんぶりを使ってご飯を盛り、下級生はそのどんぶりのふたを使ってご飯を盛った。それもお粥になるとどんぶりのふたではいくらも入らず、さすがにおなかがすいた。

電話の普及してなかったこのころ、家族への連絡手段は手紙であった。あて先は先生に書いてもらったが、次に出す手紙のためにもう一枚の封筒にそれをまねして書き残しておい

た。手紙は「お菓子送ってください」「おにぎり送ってください」「お金送ってください」ばかりだったそうである。親が読んだときどんなに切なかったかと、今思うと気の毒になる。小遣いで何を買ったかというと近くの薬局で整腸剤「わかもと」「ソキン」である。これを食べていると、なんとなく口寂しくならなかった。

食糧事情が悪くなり、三度の食事に芋粥やおじやが多くなった。食べ盛りの子どもには空腹はつらいものであった。旅館の裏は一面のサツマイモ畑で、その収穫後に取り残された生芋をかじったものである。そのためか下痢を起こし体力は消耗していった。

また、旅館の前を、米俵を牛車に積み、駅まで運んでいるのを見ると、そっと後を付け、俵をかき分け米を抜き取ったものである。これをいり米にしたらにおいが立ちこめ先生に見つかり大目玉を食らった。

イナゴは、夜露にぬれて元気のない早朝に行かないと、私たちには捕まらない。たくさん捕ってつくだ煮にするという。頑張って捕った。このイナゴを地元業者に持って行き、そこでイナゴのつくだ煮と交換してもらった。食事のとき出されたのが、一人たった三匹であった。

そんな時、皇后陛下から「次の世を　背負うべき身ぞ　たくましく　正しく伸びよ　里に移りて」のお歌と共にお菓子（ビスケット）を賜った。

―学校生活―

引率していった先生方が寮長であり、寮母さんであった。板垣先生（寮長）、津田先生（寮母）、あと二人くらいの先生であったと記憶している。

授業は、近くの旅館に行った児童と合同で学年別に編成され、それぞれの旅館の居室を使って勉強した。私たち低学年は和久屋での授業が多かった。

秋に近くの国民学校で、地元の生徒と合同運動会をやったことがある。久しぶりに広い運動場に立った。徒競走は、地元の生徒三人と「疎開の子」三人で走った。どの組も「疎開の子」は四位、五位、六位であり、地元の子には歯が立たなかった。栄養の差が結果に出た感じである。でも、運動会が終ったとき、その学校の先生が「君たちが持ってきたおやつのサツマイモを全部出しなさい」といい、取り上げ、それを私たち疎開の子に持ってきてくれた。その時、腹一杯食べたサツマイモの味は今でも忘れない。

―移転のうわさ―

昭和二〇年に入り、戦局ますます厳しくなり、東京も空襲にたびたび見舞われるようになった。B29の爆撃機が都内を空襲した後、鹿島灘上空を抜けるコースを取った。ここ稲敷郡はそのコース下にあたるので安全な疎開地とは言えなくなってきた。また、近くに霞ヶ浦の海軍航空隊もあり敵機の標的にもされ始めた。

和久屋旅館では、六年生は卒業ということで二月に東京に戻って行った。後で聞いたことだが、その人たちは東京大空襲にあい多くの命を落としたとのことである。

三月九・一〇日の東京大空襲では焼夷弾（しょういだん）の雨に遭い、本所・向島は火の海となった。直線距離約四〇キロの和久屋旅館からも東京方面の空が赤々と見えた。そして、十一日になると、父さん母さんたちが歩いて子どもたちに会いに来た。疲れきった顔はすすで真っ黒だった。

そのころ、私の寺島の家は、防火帯を作るというので強制立ち退きさせられ跡形もなくなっていた。そして、家は葛飾区に転居していた。

そんな時、疎開先を秋田県に移すという話が保護者に伝えられていた。親たちは焼け出され、そのうえ東京の空襲ますます激しく本土決戦が叫ばれるようになった。母親と小さな子どもはどこか地方に行かなくてはならず、疎開している子どもたちが秋田県に行ったのでは一家ばらばらになると考え、親類縁者を頼って縁故疎開に切り替える人が多くなった。毎日のように、仲間が一人、二人と和久屋旅館を去っていった。

五月に入って、わたしも父の同僚が移り住むという人のお世話になり、栃木県日光の中禅寺湖に近い中宮祠に祖母と母、妹の四人で住むことになった。迎えに来た父と母はやせ細ったわたしの身体を抱いておいおい泣いた。

こうして約一〇か月の集団疎開に別れを告げ、第二寺島国民学校を転出することになった。

そして、その年の八月一五日敗戦を迎えることになる。

ワカモト・カボチャとウワバミ草

第二寺島国民学校三年　鎌倉徳之

昭和一六年一二月真珠湾攻撃で第二次世界大戦が勃発し、翌年四月に小生は第二寺島国民学校（現第二寺島小学校）に入学しました。当時はまだ戦争とは何かを良く理解していませんでした。学校に行けば、おかずこそなかったが給食でご飯だけは食べられた記憶があったからです。

そして昭和一九年初夏、第二寺島国民学校の三年生（満八歳）となり、父より「学校の先生や友達と疎開をしな」と言われ、私は「父ちゃんや母ちゃんと一緒？」と聞き返したのを覚えています。

ある夏の暑い日、学童集団疎開の子どもたち三年生から六年生まで（縁故疎開者を除く）約五〇〇人が学校の講堂に集まり、疎開先の寮の割り振りが決められました。

第二寺島国民学校の疎開先は茨城県稲敷郡龍ケ崎町（現在の龍ケ崎市）。水戸屋旅館、和久屋旅館、森田屋旅館、下平屋旅館、佐貫町の金龍寺（梅の寮）、根本村中村屋旅館、他瑞穂村等の数か所に分かれて疎開しました。私の疎開先は、龍ケ崎町の水戸屋旅館。ここは第二寺島国民学校の疎開先の本部となり、安積克己先生（後に第二寺島小学校第九代校長就任）、二渡光子先生、他に寮母さんとして三人ほどの人が私たち五〇数名の世話をしてくれました。

龍ケ崎は、東京近郊といっても田舎。サツマイモやカボチャの畑ばかりで主食といっても畑で収穫されたサツマイモやカボチャばかり。ご飯はサツマイモの周りについている程度。そのサツマイモやカボチャも安積先生が現地の行政の方と話し合いをし、子供たちのためにお願いして分けていただいたものだと一〇数年たってから聞きました。それでも食糧難には違いなく、いつでも空腹が続いておりました。

夜、上級生に誘われて近くのサツマイモ畑に行き道端に立っていると、数本のサツマイモを持たされ真っ暗な夜道を駆け出して帰って来たことが何度かありました。そして、そのサツマイモは洗って生で食べたり、ナイフで輪切りにして塀の上に並べ天日で干し、せんべいのようにして食べたりと空腹をしのいでいました。掘られた畑を見た農家のおじさんは、子供たちを不びんに思ったのか何も言いはしませんでした。今はとても感謝しています。

遊び道具は現在と違って何もなく、先生が用意をしてくれた竹で竹馬を作って遊んだり、寮に一台しかない自転車を上

級生に押さえてもらいながら横乗りの練習をして乗ることができるようになりました。

月一回の親との面会日には、誰が言う訳でもなく、当時統制外だった「ワカモト」（消化剤）を持って来てもらい、皆が菓子代わりに食べていました。親は消化剤を子供たちにせがまれるので、初めのころは食べるものがたくさんあり毎日が満腹なので、消化促進のために「ワカモト」の服用をしていると思っていたようでした。

学業は、近くの龍ケ崎国民学校へ通いました。各寮から集まった人たちでクラスができるので現地の子供たちと一緒に授業を受けることはありませんでした。通学の服装は、冬の寒い中でもコートなどを着ている子供はほとんどおらず、履物も運動靴より下駄（げた）、草履（ぞうり）を履く子供がほとんどでした。

秋から初冬にかけて天気の良い日には、行軍といって各自が手拭を二つ折りにし両側面を縫い合わせた袋を持って、副食となるイナゴ取りに田んぼのある所まで歩きました。今思うと、子供の足でイナゴを取って帰ってくるには丸一日かかったのではないかと思います。他に、旧跡女化稲荷（おなばけいなり）などに行ったり、苦しい中にも楽しいことを見つけ、上級生は我々下級生の面倒を良く見てくれた記憶がたくさんあります。

昭和二〇年二月ごろ、六年生が卒業で東京へ帰る前に、龍ケ崎国民学校前で水戸屋旅館に宿泊していた当時の先生、子供たち全員で写真を写しました。（今も残る一枚です）

三月の初めになって、六年生が東京へ帰るので龍ケ崎駅まで見送りに行った時、自分たちも東京へ帰りたい一心で、汽笛を鳴らして遠ざかる汽車を皆で泣きながら走って線路の上を追いかけたことを、今でも思い出します。そして残念なことに、その時見送った六年生の中で、三月一〇日の東京大空襲でなくなった人もいたと聞いております。

寒い冬が過ぎ五月、龍ケ崎町から秋田県仙北郡角館町へ再疎開となり、東北本線に乗り換えるために上野駅へ向かいました。上野駅改札口前の広場で親との再会をしましたが、数時間しかなく、楽しくもありまた、とても寂しい時間でもありました。その後、夜行列車に乗って角館へ着いたのが次の日の昼ごろと記憶しています。駅前の大きな旅館（旅館やまや）で食べた昼食は、白いご飯と黄色い硬いタクアンでしたがとてもおいしかったです。

二寺小の子供たちは、角館町と羽後長野町へ分散し、私の

宿泊場所は角館町の小林旅館でした。宿泊場所といっても旅館の蔵の中で、厚い土壁と小さな窓しかなかったが割合涼しかったように記憶しています。

龍ケ崎から角館へ再疎開で来た人数は、一時疎開の約半数でした。私たちが宿泊場所の小林旅館に着いた時には、蔵の中に疎開が初めての五～六人の子供がすでにおり、その中の二人ほどがまだ二年生になったばかりの小さい子でした。

角館での生活は、龍ケ崎とはまるで違っていました。午前中は宿泊場所のお蔵の中で先生に教わりながらの自習をし、午後は山菜取りに行ったり、冬に向けて薪になる小枝を集め、一本のロープで束ねて背負い、宿泊場所まで戻って来ました。でも、遊ぶことも忘れてはいません。遊び場はもっぱら近くの城山で、山道の途中に落ちている赤い小さな石をたくさん拾い集め、この石が不思議なことに水でぬらすと皮膚にくっつくことを発見し、腕につけてみたりと、小さな発見を自然の中から見つけては夢中になって遊びました。今は観光の名勝として美しい武家屋敷も、当時は塀も壊れお化け屋敷のように見え、遊びといえども近づかないようにしていました。

食事は米の産地秋田。腹がいっぱいとはいかなくても白いご飯に山菜のミズ（ウワバミ草の茎の部分）をたたいてどろどろ状になった物をかけて食べました。そして月に一回、その月に生まれた子のお誕生祝いとして、まぜご飯を炊いてくれました。

疎開生活を通して一番困ったことは「ノミ」と「シラミ」の攻撃です。かゆくて、かゆくて今の時代ではとても考えられないことです。

そして昭和二〇年八月一五日の朝、先生から「今日のお昼に大事なラジオ放送があるから旅館の帳場へ集まりなさい」と言われ、昼少し前に皆で正座をして帳場へ集まりました。正午、放送が始まりましたが雑音が入っていて聞きづらく、話の内容は理解できませんでした。放送が終わり、旅館の人が「もう戦争は終わったよ」と言った時には、「東京へ帰れるの？」と日本が戦争に負けたことよりも皆が口々に言いました。

数日後、皆で散歩している時に、前方から銃を持った四人の進駐兵がジープに乗って来たのに気づき、私たちは道端の建物の壁にぴったりとくっついて見ていました。すると皆の前で手を振り、笑い、何かを言いながら通り過ぎていきました。戦中教育では、米英軍の人たちは鬼のように恐ろしい人と教えられていたので皆が拍子抜けした気持ちでした。

そんなことがあってから一か月余りたったころに「一〇月になったら東京へ帰れる」と話がありました。待ち遠しかったです。そして、一〇月二〇日ごろに学童疎開専用列車で夜通し走り、翌日の昼ころに上野駅に到着しました。

学童集団疎開で寺島町を離れてから一年二か月がたっていました。戦火により荒れ果てた故郷に疎開先から帰った時は、あまりの変わりように驚きましたが、戻れたことの安堵感（あんどかん）が一番でした。



水戸屋旅館に宿泊していた先生と児童、龍ケ崎国民学校前で（昭和20年２月）

学童疎開の思い出

第二寺島国民学校五年　児島圭子

私は昭和八年生まれ、昭和一九年に疎開した時は、第二寺島国民学校の五年生でした。妹は私より二つ下の三年生でした。何月かはちょっと忘れましたが暑かったのを覚えています。母が私たちの布団を一生懸命に縫ってくれたのを覚えています。妹は扁桃腺（へんとうせん）の手術をして間がないので、遅れていくことになっていたのですが、どうしても一緒に行くといって聞きませんでした。きっと遠足にでも行く気持ちだったのでしょう。

行く先は、茨城県稲敷郡根本村本村の阿彌陀寺というお寺でした。電車を降りたのは覚えていませんが、町から牛車に七、八人ずつ分かれて乗りました。後でその町は龍ヶ崎だと知りました。私たちは五、六台の牛が引っ張る荷車に乗って、みんな喜んでムチを持っているおじさんに「牛が早く歩くようにして」と言い、競走をしながら五里先のお寺に着きました。先日、二寺の同窓会でこの話をしましたら、五人の方たちはみんな覚えていませんでした。私は今でも牛の茶色いおしりが目に浮かびます。

着いた寺は、鐘つき堂がある広い庭の立派なお寺でした。私たちは三〇～三五人ぐらいだったと思いますが、本堂を真ん中にして、右と左、男女別々に部屋が決まりました。私たちの世話をしてくれる寮母さんも二人いました。二寺から行った男の先生と女の先生と一緒に、土地の小学校へも通いました。そして毎日毎日、画用紙を切って作ったハガキを自宅へ出しました。

夏はイナゴを捕りにいき、冬は、そばの小山に朝早くシイの実を拾いに行きました。農家の麦踏みもしました。寒かったです。

お風呂は、五、六人で分かれて近所の農家へもらいに行きました。風呂から上がると、とうもろこしとか、さつまいもをふかしてごちそうしてくれました。

近所の方が出征するので、お祝いのお酒を飲んでいる時、私たちは四、五人で、そこの家の前を気がついてくれるまで行ったり来たりして、呼んでくれるのを待ちました。「あの時のお赤飯、おいしかった」。春は、そばの坂道の両側に桜の花が満開でした。私はそこで友達と自転車の練習をして、転んだり笑ったりしました。

昭和二〇年に入って、東京も空襲が激しくなりました。私

「次の世を　背負ふべき身ぞ　逞しく（たくま）正しくのびよ　里に移りて」

たちも、夜、裏山へ避難をしたのを覚えています。避難じゃなくて、東京が心配で見に行ったのかも知れません。山の上から東京の方向を見ると空が真っ赤でした。空から真っ黒なものがいくつも落ちていくのが見えました。「家は大丈夫かしら」と妹と一緒に手を握り合いました。

私たちの仲間は、玉の井いろは通りの方たちです。お兄さんが三月に卒業で帰り、空襲で一家お亡くなりになり、妹さんが一人残りました。先生が、その人にとても気を使っていたことを今も覚えています。いろいろと書ききれないくらい思い出があり、今でもそのころの友達に会うと思い出話が出ます。

書き忘れましたが、私たち姉妹は終戦の少し前に、父が自転車にリヤカーをつけて迎えに来ました。行李（こうり）二つと、私と妹を乗せて利根川を渡りました。家も焼けてしまったので、会社の物置きに住んでいた家族の元に帰りました。昔の人は強いですね。今では信じられません。

書きたいことはまだまだありますが筆を置きます。

皇后様からビスケットと御歌もいただきました。幸い男の先生が音楽の先生でしたので、オルガンで教えていただきました。



東京の空襲を心配して（昭和20年）

学童疎開体験記

第二寺島国民学校六年　五月女　健一

昭和一九年戦争が激しくなり、第二寺島国民学校も学童疎開、縁故疎開が始まりました。

私たち六人兄弟も、私次男健一（六年生）と弟三男達男（三年生）は茨城県の佐貫金竜寺へ学童疎開、四男勝（一年生）は母の実家埼玉へ、長女靖子（六歳）は父の実家埼玉へ縁故疎開、長男博（一四歳）と次女祐子（一歳）は両親と向島区寺島町一―一九六番地に留まり、家族ばらばらの暮しとなりました。

疎開先の寺では、先生の家族四人と生徒の生活係二人か三人、学童約四〇人の集団生活が始まりました。龍ケ崎の旅館にも別のグループが疎開していましたので、五人か六人で佐貫から軽便鉄道の線路を歩き、鉄橋を怖々渡り、友に会いに行ったこともあります。

駅から寺までの間に小川が流れていて、魚が多くいるのを見つけてみんなで川に入り捕まえようとしましたが、道具がないので捕まえられませんでした。しばらくしてから地元の学校へ通いましたが、勉強した覚えはありません。雪の降った道を学校まで、ぐしょぬれになった運動靴で通ったこともありました。

学童は本堂に集まり、住職から寺の境内の新田家累代の墓所、牛小僧縁起にまつわる牛のしっぽで作った払子（ほっす）など、いろいろ寺の宝を見せてもらったり、お話を聞く機会もありました。人は寝てばかりいるとしっぽが生えてくると言われたのを覚えています。子供らは本堂に寝るので怖く、朝には、世界地図が並んで干されていることもありました。



食料不足で大八車を先生と六年生の男子が引き、農家を回ってカボチャ、甘藷（かんしょ）、ジャガイモ、野菜などを分けてもらって歩く日々でした。行く度に「ご苦労さん」とふかし芋や、暮れには小さな焼きもちを一個ずつもらい空腹を満たしました。寺に残っている下級生は空腹に耐えていたと弟に言われました。

三度の食事は、カボチャ、芋、大豆が主で、お米は少し混

じっていますがおなかいっぱいにはなりません。農家の人たちが収穫した後、子供らは畑を掘り返し、落花生や芋などを拾って生で食べたり、砂糖黍（さとうきび）をかじりしゃぶりました。



度胸試しをやろうとみんなで墓地に入り遊んでいるとき、アケビを見つけ食べてみると甘くてうまかったことを覚えています。

物資不足のために竹を割って削り、みんなの分まで箸（はし）を作ったこともあります。

冬には、手足に霜焼けができ、洗面器に湯を入れてクレゾールを混ぜ、みんなでかわるがわる手を入れ、治るかと手当てをしましたが治りません。親恋しさのあまり、寺を抜け出し佐貫駅まで逃げたが捕まり、連れ戻された同級生もいました。二月末ごろ、だんだんと戦争が激しくなり、東京方面が真っ赤に染まる夜空を見て、親兄弟無事でいるか心配になりました。

卒業式のため、六年生は佐貫から寺島町の家族の元に帰ってきましたが、三月一〇日の東京大空襲に遭い卒業式をしたか否か思い出せません。しかし卒業証書はありました。

六〇年が経過し、今、家族ばらばらとなり空腹と物不足の生活を思い出すと胸が痛みます。

「絶対に戦争はしてはいけません。永久に平和でありますように」



疎開出発前第二寺島国民学校で（前列右端が筆者）

学童疎開体験記

第二寺島国民学校五年　五月女　達　男

昭和一九年戦時中、当時私は小学校三年生でした。健一・兄と一緒に茨城県佐貫町、近くに牛久沼のある小高い山にある金龍寺に集団疎開していました。

当時は食糧難でしたので、上級生が大八車で農家に食糧をもらいに行っていました。下級生は腹がすいて、芋畑に行ってサツマイモの生をかじったり、山のシイの実を食べたり、グミの実を食べたりしていました。お寺の本堂の前の廊下に四つぐらい山のようにカボチャが積まれていました。食事時は、御飯はカボチャの中に米が入っているように感じました。みそ汁はカボチャの味、おかずはカボチャの煮つけでした。

たまに、上空をB29が飛んでいた時もありました。

冬の雪の日に、田んぼの中にある学校に登校する時、長靴がなく素足で登校した覚えがあります。

田舎の生徒と仲良くできず、放課後、地元の子供たちの何人かが学校の正門・裏門に待ちかまえていました。そのため、田んぼのあぜ道を駆けながらお寺に帰ってきたことを思い出します。

夏のある夜、寺の裏山で三、四時間ぐらい、男だけだったか、全員反省の意味で立たされたことがあります。それはお寺の山の木を切ったりクマザサを刈ったりして、ブランコを作ったり遊び場を無断で作ったためです。そのときはお寺の和尚さん、先生に大変ご迷惑をかけたと思います。

三月九日夜中、飛行機の爆音で目がさめました。「東京が爆撃されているんでは」と思い、皆で山から東京方面が見える所に行きました。東京方面の夜が真っ赤に燃えているようです。父母、兄、妹は無事だろうか、心配でたまりませんでした。

佐貫は霞ヶ浦が近く、米軍が上陸して来るということで、金龍寺から上野駅に戻り奥羽本線に乗り換え、両親が私一人では寂しいのではと、弟の勝と一緒に秋田の角館に行くことになりました。秋田に行けばリンゴがいっぱい食べられるということを楽しみに、トンネルを幾つもくぐり、煙で充満した車内で角館に着きましたが、着いたその日にリンゴを一個食べただけでした。駅の東に山があり、宿泊先は、たしか鈴木旅館だと思います。ここも食糧難だったようです。皆で山菜のノビル、秋田フキ、その他を取りに行きました。川があり、今地図を見ると檜木内川だと思います。川遊びをした時

パンツ一枚で飛び込み、パンツに空気が入りふくらんだことを思い出します。

八月一五日、町の四つ角に電気屋があり、みんなで天皇陛下の玉音放送を聞き戦争が終ったことを知りました。みんなこれからどうなるか不安におののいていました。茨城から秋田に疎開して約五か月、短い月日でした。

戦争の恐ろしさは、疎開していたためあまり体験しなかったので、食糧が足りなかったぐらいで幸せだったと思います。

兄・建一が描いた思い出の絵手紙





学童疎開

第二寺島国民学校六年　林　澄子
（旧姓　高野）

昭和一九年夏。いよいよ学童疎開が始まった。縁故疎開で教室も日増しに寂しくなる。仲の良かった友達も福島へ。そして仲良しの幼なじみも一人、二人とそれぞれ疎開して行った。

集団疎開児童は三年生から六年生が対象で、私は当時六年生だった。疎開先は茨城県龍ケ崎。宿舎は旅館二、お寺一と三か所に分けられた。私の宿舎は和久屋旅館で随分立派な旅館だった。大広間があり離れの部屋、そして中庭付き。先生は母親がわりの板垣先生。お姉さんがわりの内山文子先生。

さて、先生と児童だけの生活が始まった。私も親元を離れての生活はもちろん初めての体験だが、下級生は本当にかわいそうだった。部屋割りは近所の子供同士に分けられたので、いつも遊んだ仲間が同室になったのがうれしかった。特に隣の房江ちゃんは三年生。妹のように面倒を見たしかわいがった。皆仲良しでけんかをして先生を困らせることなど一度もなかったと思う。子供心にも戦争に勝つまでは皆力を合わせて頑張るんだと自覚していた。

好き嫌いのあった私は、ジャガイモに米粒がまばらについている朝食が食べられず、いつもおなかをすかしていた。

勉強は大広間に大きな黒板が置いてあって、二人の先生から教わったり、田んぼの間を歩いて龍ケ崎小学校へ通ったり。あまり勉強をした記憶がない。板垣先生はナギナタの師範でもあり、ときどき校庭で教えを受けた。地元の小学生と疎開児童が一緒になって受ける授業で「私たちの先生はすごいでしょう」と疎開児童はこの時ばかりは得意満面だった。

内山先生は児童が寂しがらないようにいつも気を配ってくれていた。就寝時にはレコードをかけてくれたり歌を歌って聞かせてくれたり本当に優しい先生だった。暇さえあれば近くの八坂神社、お寺が宿舎の仲間のところ、あるいは足を延ばして小高い山へと私たちを連れて行ってくれた。途中ドングリを拾ったりシイの実を拾ったり。シイの実が食べられることを知ったのはその時で、結構おいしいと思って夢中で拾った。頂上に着くと必ず歌ってくれたのが「お山の杉の子」。「丸々坊主の禿（はげ）山はいつでも皆（みんな）の笑い者　これこれ杉の子起きなさい　お日様にこにこ声かけた　声かけた」　最後は大合唱。日ごろの寂しさなんか忘れてしまう

一時だった。

龍ケ崎は栗の実の産地であちこちに栗林があった。ある日、好意で栗拾いをさせていただいたこともあった。東京育ちの私たちは初めての体験で皆大喜び。イガで指が痛くても我を忘れて夢中で拾った。本当に楽しかった。そしておいしかった。山で食べたシイの実とは比べ物にならないのはもちろんだった。神社とかお寺、そして山へと連れ出してくれたのは外で思い切り跳び回って遊ばせたいという優しい先生の心遣いだったのだ。

和久屋旅館のちょっと先に小さい銭湯があり、私たちはたまにその銭湯を使わせてもらっていた。しかし、私たちが銭湯に行くと地元の方は全員出て行ってしまう。初めは不思議だったが、後にその訳が分かった。今考えれば一番申し訳ないことだったと思う。

大広間の横は長い廊下になっていて晴れた日は暖かくひなたぼっこに最高の場所だった。誰からともなく洋服を脱いでシラミ取りが始まる。縫い目を広げると縫目に沿ってシラミがびっしり。そのうちモゾモゾと動き出す。初めのころは驚きと気持ち悪さで大声をあげたが、そのうち平気になりシラミ取りが日課になる。衣服だけでなく髪の毛にも。銭湯で地元の方が一人もいなくなったのはこれが原因だったのだ。

竜ケ崎の上空を敵機が毎日のように飛んで行く。「東京を空襲に行くらしい」と子供心にも感じていた。東京の家族のことが心配でたまらない。そんな日が幾日も続く。

昭和二〇年正月の朝、内山先生が私たちの部屋に一枚の新聞を持って駆け込んで来た。興奮した声で「この写真を見てみなさい」一面に大きく鶴の舞う姿が写っている。それも宮城（皇居）の上を悠々と飛んでいる写真である。「先生、この戦争は必ず日本が勝つね」と私。「絶対勝つよ」と先生。この写真を見た人は皆そう信じたに違いない、そう思った。

食糧も少なくこんな惨めな生活をしていても「日本は勝つ」という事を信じて疑わない毎日だった。

一月に入って、風邪をこじらせて腎臓を患い部屋で伏せる日が多くなった。内山先生に背負われて近くの病院へ通うようになる。親には心配かけたくないと知らせずにいたが、板垣先生が途中空襲警報に遭いながら東京の我家に知らせてくれたそうだ。

すぐ迎えに来た母と共に私は竜ケ崎を後にした。元気になったら戻ることを約束して皆と別れた。妹のように面倒を見た房江ちゃんとも、また半年近く生活を共にして来た仲間と

も、これが最後になってしまうとは夢にも思わなかった。

三月九日夜半から一〇日の朝にかけて、東京下町は大空襲を受け一晩で一〇万の人が犠牲になった。一〇日朝、焼け跡に戻って家族と再会、無事を喜んだが、房江ちゃんの家族はとうとう焼け跡に姿を見せなかった。学童疎開で一緒だった仲間たちの親は?先生のご家族は?もしや戦災孤児になった子もいるのでは?心配しながら私たちは信州へ疎開した。

疎開先で皆で生活した約四か月間、悲しい日、寂しい日、辛い日、いろいろありましたが、これを乗り越えることができたのは、どの子も分け隔てなく我が子のように優しく接してくださったお二人の先生のお陰だと感謝しています。お元気でいらしたら是非お逢いして「ありがとうございました」とお礼を申し上げたい気持ちです。そして学童疎開の子供たちをいろいろ助けてくださり、またご迷惑をおかけしました竜ヶ崎の皆様、本当にありがとうございました。

長い間心配していた渕戸房江ちゃんは、あの後、家族で北海道夕張へ疎開したと風の便りで知りました。

潮来の思い出

第三寺島国民学校六年　土屋百合子
（旧姓　桑子）

「元気デェー」「お母ーチャン」、都電向島終点は見送る親たちでごった返していました。昭和一九年八月の暑い日でした。私の母は、混雑する人ごみの中で顔だけを出して、必死の目で私を見つめていました。電車は泣き出す児童を乗せ、ひたすら茨城県潮来へと向かいました。

私たち四〇名は、臨済宗長勝寺というお寺にお世話になることになりました。学童疎開です。長勝寺の谷御住職は、面長で、風格がある方でした。奥様は、すらりとした長身の方でした。お二人が私たちを迎えてくださいました。

私たち三組の担任は藤田なか先生でしたが、疎開の時の親代わりは、ノッポで秀才型の沢田先生と、笑うと目が糸のように細くなるかわいい金田先生の二人でした。一九歳の金田先生は、食事の席に二人並ぶのを恥ずかしがり、沢田先生より長い距離を置いて座っていました。食事係は、元料亭の料理人だったという五〇代の方で、坊主頭のオジサンでした。そして、お手伝いのおばさんがいました。料理人のオジサンの手際のよさは、子供ながらに感心しました。その姿は、寡黙（かもく）でしたが、職人気質（しょくにんかたぎ）のある方でした。食糧難の時代、彼は児童のため大変だったと思います。

食事の量は、育ち盛りの時代でしたのでもっとほしかったです。内容は、どんぶりに軽く一杯の麦、または、サツマイモご飯、野菜の煮付けと、みそ汁だけでした。良くかむと、満腹感があると言われ、皆黙々と何度もかんで食べました。

秋になると、裏山で「ドングリ」、「シイの実」を拾いにいきました。おなかが空いていたので、それらの皮をむき、生のまま食べました。少しでもおなかに入れたかったのです。空襲のない所でしたので、昼間はほとんど自習をしていました。

金田先生は、長谷川一夫の女形美人画を描くのが得意でした。私も、それをまねているうちに好きになり、高校のころは「鏑木清方」に傾倒し、将来は美人画家になりたいと真剣に考えたこともありました。

また、ある時、地元の児童と交流し、イナゴ捕りをすることになりました。私は大の虫嫌いです。牛乳瓶（びん）を渡されそれにイナゴを入れるのですが、虫に触れず、友達に分

けてもらいどうにか提出したのでした。夜、縁側に出ると、こうこうと光る十五夜を見ては、「今、東京で親もこの月をみているかも…」と思い急に悲しくなったこともありました。

うれしかったのは、親の面会日でした。どこで工面して手に入れたのか甘いあんみつを母は持ってきてくれて、裏山で食べさせてくれました。四〇名の皆に分けてあげられなかった母は、とてもつらかっただろうと思います。

沢田先生の婚約者、睦子さんはとてもきれいで、優しいお姉さんのような方でうれしかったです。寝具は、金田先生が私のを選んで先生の部屋に運びました。いたずらっ子の松屋さんは、夜、トイレの途中、先生の部屋をそっとのぞき、「今、先生が柿をむいていた！」と皆に報告し、一人でハシャイデいました。知らぬはお二人の先生ばかりなりけりでした。

裏の便所の脇に、大きなゆずの木がたわわに実を付けていました。男子が先頭に登り、ゆずの実を取り、わたしたちが受け取り、たちまち木から黄色の実が消えてなくなりました。ゆずの実の酸っぱさも何のその、皆夢中で食べました。あのおいしかったこと。良い思い出です。翌朝、井戸端にお寺のばあ様が立っていました。皆ちぢこまりました。しかし、ばあ様は、ゆずの実のことには触れず、皆の洗面の後始末が悪いとさんざんしかられました。

また、うれしかったこともありました。先生が、おやつにと、配給の大きなバターを持ってきてくれました。私たちは、マッチ箱くらいのバターを大事に、大事になめました。

また、ある時、鹿島神宮に行くことになりました。武運長久祈願です。冬の寒い時でした。手袋もせず、鹿島灘の長い橋を下駄履きで渡りきった時、私は、生まれて初めて手が霜焼けになり、赤くプックリふくらんでしまいました。

それから、ある朝のことですが、便所に真っ赤な血があったと騒ぎになったことがありました。初潮の始まった女子がいたのです。当時、性教育はありませんでした。翌日、彼女は、沢田先生に連れられて船で佐原の医者に行きました。若い先生は、町の医者に連れて行き事を託したのだと、大人になって理解したのですが、その時は、彼女が先生と船に乗って外出できたことをうらやましく思ったものでした。

また、こんなこともありました。ある日、食事係のおばさんが、六年生の私たちに「今夜、家にいらっしゃい」と招いてくれました。お伺いすると、ごちそうはふかし芋でした。皆、コチコチに固くなりながらも、大皿のお芋は残らずたいらげました。あのお芋のおいしかったことは忘れられません。

おばさんの暖かい心は終生忘れません。

いよいよお別れが近くなり、谷御住職が、竹を削ってお菓子用のお取り箸（とりばし）を贈ってくださいました。達筆な字で、和歌が彫られていました。うれしくて、後々まで大事に、大事に持っていましたが、六〇年たった今、転居、引越しの中で、いつの間にか消えていました。

昭和二〇年、その年は二月になって大雪が降りました。そのため、帰京が少し遅れ、二月二八日に帰りました。そして卒業式が行われ、蛍の光を涙で歌った後、国防服を着て長靴を履いた教頭先生や、もんぺ姿の女の先生方と記念写真を撮りました。

帰京後、三月一〇日未明、B29の編隊による東京大空襲がありました。下町の向島は火の海となり、人々は泣き叫び逃げまどいました。子供を背負った母親が、ワアワア泣きながら火から逃げ回っていました。たくさんの焼夷弾（しょういだん）で、周りは昼のような明るさ、空は真っ赤でした。潮来から数日前に帰ったばかりの鶴巻さんは焼死しました。卒業写真に笑顔を残したまま永遠に帰らぬ人となりました。長勝寺のとき同期だった松屋葉子さん、辻村久子さん、渡辺のり子さんなどが焼け出され、その後の消息は不明です。彼女たちの幸せを心から祈っております。

最後に、私たちは長勝寺に学童疎開し、いろいろな体験をさせていただきました。谷御住職の講話、夕方の静かな境内に響く鐘の音や、潮来の水の流れ、金波銀波の稲のさざ波、セピア色の走馬灯のように浮かんでまいります。二年生の染谷さん始め四〇名と過ごした八か月間は、お寺の静かな環境に守られていたせいか、皆けんかもせずに過ごすことができました。大勢の学童を引き受けていただいたお寺の皆様、若い二人の先生方、当時は、子供で分からなかったのですが、大変なことだっただろうと今痛感しております。戦時下にありながら、平和に過ごした静かな潮来の思い出は、今でも私たちの貴重な財産となっております。

皆様、本当に有難うございました。

遠き日の　潮来の月は　冴え渡り
　ひたすら親を　しのび眺めぬ
空襲は　はるけき彼方　ここ潮来
　川のせせらぎ　あやめ群れいて
十五夜に　託す想いや　長勝寺

（百合子）

学童疎開体験記

第三寺島国民学校六年　増田三枝

昭和七年生まれの私は、第三寺島小学校周辺の小さな商店が軒を連ねる下町の中で、平和な暮らしを営んでいました。

昭和一六年一二月になるとアメリカを相手とする戦争が始まり、国も大人たちも戦意高揚を叫ぶのが、子供心にどうなるのかと思いました。

一七年、一八年と戦域は拡大して、日本中の若い人は学生まで徴兵を待たず志願させられていきました。その見返りに軍神と祭り上げられて帰還する白木の箱も増えてきて、戦死者を出した家は町の誇りであるように宣伝され、遺族は人前で泣くことも許されませんでした。

一九年になると、いよいよ、まさかと思われた敵機の本土爆撃が始まりました。お母さんたちが防空演習でバケツリレーでの消火訓練や竹槍（たけやり）訓練をやらされるのを間近に見て、ますます不吉感がわいてきました。東京の街角に爆弾が投下され始めました。国は子どもたちを敵機の来ぬ地域への疎開を決め、田舎に縁故のある家を優先に、友達、親兄弟とも別れて、子どもたちは都会から去っていきました。縁故のない子どもたちもたくさんいます。八月に入ると三年生以上の子供たち三四九人が生まれ育った寺島の街と親から離れ、水郷の地、茨城県行方郡潮来町へ集団疎開しました。縁故疎開の子たちは一人一人悲しい別れでしたが、集団ですので始めは遠足へ行くような気分でもあり、また、親と別れる不安とつらさがこもごもだったことを覚えています。上野駅から土浦へ。そこから霞ヶ浦を「あやめ丸」という船に乗り、夕方近くに潮来に着きました。ここで二度目の別離を味わいます。仲の良いお友達とも別れ、地域ごとにそれぞれの宿に向かいました。だんだんと小さなグループ分けられていくので、一層の寂しさを感じました。

六年生は最上級生なので率先して下級生の世話をやらされました。引率された先生は、お父さん役が千羽先生、お母さん役が大久保先生、それに寮母さん数名で共同生活が始まりました。始めの遠足気分が失せて、父母のいる東京へ帰りたい、また、空腹というつらさが孤独感を後押しします。「欲しがりません、勝つまでは」の標語を押し付けられても子どもにはどうしようもないつらさでした。

芋掘りに行き早速おやつに。それから田んぼにイナゴ捕りに行き、それをつくだ煮にしてご飯のおかずに出された時に

は、こわくて食べられませんでした。カボチャの種や、芋を干そう芋用として干しておくと、男子たちはいつの間にかこっそり食べてしまいよくしかられました。女子はお手玉の中味（このころは、中味が小豆ではなく大豆だったので）を集め先生に内緒で近所のおばさんにいってもらって食べて、そのおいしかったこと。今度は家からいった大豆を入れて送ってくれるように手紙に書いたら、先生に見つかってしまいました。それから薬屋さんへ行ってエビオス、ワカモト、オブラートなどを買ってきて、おやつ代わりに先生に内緒で食べ合ったこと。中には多めにお小遣いを持っていたのでしょうか、こっそり抜け出してうどんを食べに行った人の話を後で聞きました。ある時、バターの配給があり、あたたかいご飯の上に三センチ四方くらいのバターを乗せて食べた時、生まれて初めての味で、急に元気が出た思い出があります。

親の面会も制限され、親は近くのホテルへ泊まり、その子どもたちはそこへ会いに行き、苦労して作ってきた食べ物を貪るように食べ、でも寮で待っている友達にも必ずお土産を分け合いました。

困ったのはシラミに悩まされたことでした。お風呂も充分に入れなかったのでしょう、町の銭湯へ時々全員で行きましたが、髪の毛、衣類の縫い目などにたかって、子どもたちの血を吸うのです。お互いにシラミ取りに大変でした。

昭和一九年も終わるころ、空襲はますます激しくなり、この静かな潮来も、警報サイレンが鳴るたびに近くの山へ避難するようになりました。山の中の細長く掘った壕（ごう）のような所へ入り解除を待つのです。たまたま面会に来ていて一緒に壕に入ったお母さんお姉さんが、私たちを慰め励ますため、当時東京ではやっていた「お山の杉の子」の歌を教えてくれ、みんなで合唱して一時つらさを忘れさせてくれたことを思い出します。解除になって宿に戻り、夜、布団に入ると下級生たちの泣き声が聞こえてきます。次の朝、船着き場でお父さんお母さんが迎えに来てくれないかと待っている子どもたちがいます。戦争なんか早く終わって空襲のない明るい空の下で勉強したい。そして運動会をやりたい。第一にお父さん、お母さん、兄弟と一緒に暮らしたいと泣いたものです。

私たち六年生は進学のため、昭和二〇年二月二八日に八一人が帰京しました。そして卒業式が行われ、わら半紙の卒業証書をいただき、校門前で先生方と全員で記念写真を一枚撮りました。

三月九日から一〇日にかけて、東京の下町のほとんどを焦土に化したB29のじゅうたん爆撃が待っていたのです。生死の境は、ここでも悪魔の手が老若男女を問わず、襲いかかってくるのでした。私は、家族とご近所の人三〇人近くで、六畳くらいの自宅地下壕の中に入っていたのですが、入り口にぬれ畳を立てかけていたのに火がつき、兄たちがその度に持ち込んだ飲み水をかけて消し助かりました。朝を迎え、外へ出てみると、他の防空壕に入った人たちはほとんど灰と化していました。すぐ前の曳舟川に飛び込み、橋げたにつかまって助かった人もいました。

この空襲で一〇万人余りの都民が焼死しました。戦争は兵隊さんが外地へ行ってやるものと思っていましたが、この時から、近く内地で市街戦が始まるのかと考えるようになり、一億玉砕という軍の叫びが子どもながら怖く、でも親兄弟と一緒に死ねるならしかたない、幸せだと思うだけでした。沖縄の人たちは直接米軍に上陸されて、軍民巻き添えでさぞつらかったことと思います。

心ならずも戦争で亡くなっていった人々の尊い犠牲のもとに今の平和があるのです。生き残った私たちは、今の子どもたちに、私たちの苦しみを二度と味あわせてはいけません。



疎開先でのそうじ風景1



疎開先でのそうじ風景2



茨城県潮来町で

学童疎開あれこれ

請地国民学校四年　三国智司

私は学童疎開で、茨城県と秋田県に行きました。いろいろなことが思い出されます。

昭和一九年八月末、暑い日だったと思います。両親が学校に呼ばれて学童集団疎開について、参加するかどうか意思確認をされました。私は三人兄弟の真ん中で、三歳上の兄と二歳下の妹がいました。集団疎開は三年生から六年生が対象でしたから、兄弟の中では私だけが当てはまったのです。父は、背が低かったためか徴兵検査に不合格で軍需工場に勤めていました。その父が考えたことは「家の血筋を残すにはどうしたらよいか」でした。「一家全員が一緒に東京にいて空襲を受けたら、三国の家は絶えてしまう」と考えて、私を東京から離すことを決断したのだそうです。

疎開先は、茨城県那珂郡大宮町の坂井屋でした。大宮は水戸から水郡線で一時間くらいのところで、坂井屋には四年生から六年生まで三〇人が入りました。先生も、ご家族四人で坂井屋に疎開されていました。

学校は地元の大宮国民学校でした。学校には兵隊さんが五～六教室に、校庭には二〇～三〇頭の馬がいました。軍が常駐していたのです。将校は私たちの坂井屋にいましたので、守衛が二人ついていました。

一〇畳ぐらいの部屋の間のふすまを取り払い、一五人くらいで生活しました。食事は寮母さんが作ってくれ、みんなで一緒に食べました。演芸会を二階でやったことを覚えています。

疎開してすぐに、警戒警報が鳴り、ガラス戸がガタガタと揺れ、学校裏の杉林に避難しました。日立方面から初めに一機、次に三〇機、さらに一〇〇機くらいの編隊が上空を通過していきました。グラマンもロッキードもあったと思います。

勉強は、大宮国民学校で三時間程度だったと思います。学校の入り口には奉安殿（※1）があり、前を通るときには頭を下げて通りました。大事な式の時だけ奉安殿の扉が開きます。扉が開いても、私たちは頭を下げているだけで見てはいけないのでした。

地元では、十五夜だんごを飾ります。そのだんごが消えてなくなる（盗まれる）と、縁起が良いと喜ぶのだそうです。私たちは笹竹の先を削ってヤリを作り、三～四人でだんごを

取りに行きました。だんごは縁側の三方（※2）の上に供えてあります。農家の人は子供が取りにくることを知ってのうえでしょうが、私たちにはスリルがありました。見つからないようにそっとヤリで刺して取り、旅館に帰って分けて食べました。ふかしまんじゅうの中は、砂糖抜きのサツマイモのあんこでした。大変おいしくいただきました。

皇后陛下から疎開児童にビスケットをいただいたことがありました。ハトロン紙の包みの中に、菊の御紋の焼き印が押されたビスケットが一〇枚ぐらい入っていたと思います。「地元の子にも分けてあげなさい」ということで、上級生が取り分けました。手もとに配られたのは三枚でしたが、小さく割って少しずつ大事に食べました。

面会は月に一～二回ありました。母の実家は大宮の二つ先の那珂郡山方宿というところでしたので、母が荷物を疎開する途中に寄ってくれたのですが、先生からは、あまり来ないでくれと言われていたようです。持ってきてくれるのは、キャラメルなどの菓子や芋まんじゅうなどで、甘いものに飢えていたので本当に楽しみでした。

六年生が卒業のために東京に引き上げた翌日、東京大空襲がありました。夜中に雨戸を開けると、東京方面の空が真っ赤になっていました。幸い、私の家は焼け残り家族も無事でしたが、空襲後に浅草向柳原に引っ越しました。もし、私も東京に残っていたら、家族全員無事でいられただろうか、と考えると父の判断は確かなものだったと思います。

大空襲のすぐ後に、茨城から秋田に再疎開することになりました。秋田県雄勝郡三輪村の清水国民学校の中に三輪学寮が設けられ、私たちの再疎開先となりました。体育館に続いた教室を改装して畳敷きにした大部屋で、三〇人くらいで一緒に生活しました。勉強は地元の先生に教わったことを覚えています。

秋田は「米どころ」と言われますが、私たちの食事に米はなく、食糧事情は大宮の方が良かったと思います。学校の裏山に畑を作り、芋、ニンジン、ハクサイ、キャベツ、ゴボウなどを作りました。大宮と違い、地元の人はあまり面倒をみてくれませんでした。

足袋（たび）がなくて素足にわら草履で雪の上を歩いたり、寒さに震えたり、秋田に良い思い出はなく、お話しすることもありません。

八月一五日の終戦は、翌日になって先生から、天皇陛下の

写真の前で「日本は負けた」と伝えられました。先生方は、悔しそうに軍関係の本を燃やしていましたが、私たちは野球ができるようになったことがうれしかったです。

三輪学寮が閉鎖される三日前に、父が迎えに来てくれました。秋田から福島で一泊し、込み合った列車で浅草の家に帰りつきました。

学童疎開を振り返ると、恐ろしく、つらいことが多かったのですが、「血筋を残す」という父の決断は偉かったと思います。

（談）

※1　奉安殿（ほうあんでん）第二次世界大戦中まで、各学校で御真影や教育勅語などを収めていた建物。

※2　三方（さんぼう）前と左右の三方にくり型の穴をあけた台を四角形の折敷（おしき）につけたもの。神式の儀式などで供え物をのせた。

学童集団疎開の思い出

隅田国民学校四年　石谷栄次郎

子供のころの思い出には楽しいこと、つらい悲しいことがある。私にとって一番つらい思い出となり、頭の隅に残っているのは疎開したころの思い出だが、六〇年前のことでその記憶も薄れてきているので、断片的に記述してみた。

隅田国民学校四年生の八月下旬ごろ、三～五年生一〇人くらいで校庭の左隅にあった「二宮尊徳」像の前でなぜか写真撮影した。担任の先生から「皆は、これから先、離れ離れになるのだ」と言い、一人ひとりの肩に手を置いて何か言った。家に帰って母に話したところ、それは縁故疎開組と集団疎開組とに別れて田舎の学校に転出するからとのことだった。学校でどのように区分けをしたのか知る由もなく茨城県江戸崎と龍ケ崎組とに別れた。

私たちは、上野駅から汽車で、茨城県稲敷郡龍ケ崎町へ向かった。学童たちは、遠足気分とこれから先の集団生活への不安を胸に抱きながら、車窓から田んぼが後ろに過ぎていく景色に見とれていた。殺風景な龍ケ崎駅舎前広場に整列し、まだ夏の日ざしが照りつける中、地元関係者の方々の出迎えを受け「般若院」組と「大統寺」「伊藤寮」組に別れ引率されていった。

私の宿舎となる「般若院」の境内は古い藁葺き（わらぶき）屋根の山門を入ると、すぐ左に古い鐘つき堂と本堂があり、斜め右手に、渡り廊下を挟んで観音堂と庫裏（くり）があった。

学童たちは本堂に女子児童、観音堂に男子児童三、四、五、六年生が宿泊した。荷物は行李（こうり）一つで、自分の衣類、持ち物にはすべて名前が書いてあり、衣類には布に名前と学年が書いて縫い付けてあった。

龍ケ崎国民学校は、お寺から歩いて五～七分のところにあり、毎朝、学校に行く時は、軍隊式で最上級生が点呼を取り、学年ごとに二列縦隊になって境内から、山門を出るまで「歩調とれ…前に進め…」の号令で学校に行った。

秋口の晴れた日、学校からイナゴ捕り出かけた。初めての経験で、刈り取った稲が干してある所にイナゴがたくさんいた。地元の児童に捕り方を教わりながらイナゴを捕り、集めたイナゴはあとで食べるのだと聞かされ驚いた。何日か後に、寮母さんがイナゴを煮付けて「栄養があるので食べなさい」と言って夕食に出してくれた。カサカサしたこげ茶色になっ

たイナゴを食べた。

また、お寺から一五～一六分のところに愛宕山という小高い丘があり石段を上がると愛宕神社の境内に出た。そこには太いイチョウ、シイの木が何本かあり、木登り、かくれんぼなどして良く遊んだ。ギンナン、シイの実、ドングリなどは拾い集めて持ち帰ったが、ドングリだけは皮が厚くて渋く食べられなかった。夕方、田んぼのあぜ道を通りながら軍歌とか童謡を皆で歌いながら帰った。

龍ケ崎は東京の向島隅田からあまり遠くないので、毎日曜日には誰かの父母が面会に来ていた。学童たちが寂しがらないようにと順番を決めて二～三人が面会かたがた、日ごろ子供たちが大変お世話になっているので、学童たちの洗濯物や食事の手伝いをして夕方帰った。また、月二～三回ぐらいは家に葉書を出していたが、「何か食べる物を送れ」と内容は同じだった。

何年何月ごろか定かでないが、龍ケ崎方面にも警戒警報や空襲警報等が発令される日もあり、なぜか警戒警報が発令されると急いでお寺に帰り、布団の中に潜り込み空襲警報解除の知らせが来るまで身を潜めていた。

二〇年五月上旬、戦禍を避けるため再疎開が開始された。男子学童は、秋田県陸中花輪の「恩徳寺」、女子学童は「長年寺」と毛馬内学寮と決まった。

秋田に行く前の日、各学童は一晩だけ家に帰り、次の日上野駅に集合して秋田に行く予定だった。学童たちが乗った車内では、皆「久しぶりに家で腹いっぱい食べてくる」などと両親との再会を子供なりに思いをはせていた。夕方汽車は上野駅に到着、ホームに整列し家族が出迎えている待合所へ。そこは薄暗い地下道のような所だった。両親と兄、皆がいたのには驚いた。自分たちが遠い秋田に疎開したら面会にも行かれず、もう二度と会えない、母はそんな思いで、食料不足の中「おにぎり、煮物」を作り弁当箱二個に、いっぱい詰めて持ってきてくれた。それを夢中で食べた。兄は私に会えなくなるかも知れないからと、大切にしていた筆入れ（皮製）をくれた。

母は私の肩に手をのせ「本当は隅田の家で一泊する予定だったが、今、東京は毎日のように空襲警報が発令され、いつ爆弾や焼夷弾が投下されるかわからず危険なので、ここで家族と話をして夜汽車に乗り秋田に行くのだ」と言った。つらく悲しかったが、皆がいたので、おにぎりを口いっぱいに押し込んで、涙がこみ上げてくるのをじっと耐えていたことを

思いだす。集合の時は「家族のホームでの見送りなし」で、学童たちは、家族とひとときの思い出を胸に秘め、「欲シガリマセン勝ツマデハ」と子供ながらにも涙をこらえて地下道を抜け汽車に乗った。

夜汽車の中では、皆「俺は何々を食べてきた」など食べ物の話ばかりだった。明るくなり目が覚めて車窓から見える景色は、山また山で、そのためトンネルに入る度に窓を閉めていた。窓を閉め忘れると汽車の煙が車内に入り大変だった。

何十時間も汽車に乗り、着いた駅は陸中花輪駅（現在の鹿角花輪駅）だった。ここは近くに尾去沢鉱山があり、単線だが駅構内は貨車が交換できる複線になっていた。

宿舎のお寺は少し高台にあり、何段か石段を登り、正面に本堂、右手が庫裏だった。お寺の裏の日陰にはまだ雪が残っており、冬は雪がたくさん積もり大変な所だと、お寺の住職さんが言っていた。

秋田に来てからの寮生活は、毎日、花輪国民学校に行くのだが、勉強はせず校庭（広い土のグランド）に出て、ジャガイモ（秋田地方の芋は赤い色）畑を作るため晴れた日は畑を耕した。また、二人一組でモッコの上に堆肥を乗せ、丸太を通して肩でかついで運ぶのだが、慣れないため足もとがふらつき肩が痛くなった。地元の児童は慣れたものですいすいと運んでいた。雨の日は教室で勉強または自習だった。当時は、教科書の配給がなくなり、地元の児童の教科書を二人で一緒に見ていた。学校に行かない日は寮生全員が、寮母さんか土地の人に連れられ、フキ、ワラビ、ゼンマイ採りに出かけた。秋田地方のフキは、子供の背丈くらいのものもあり、葉っぱが大きく茎も太く「こんなもの採ってどうするのか」と思ったら、食べるのだと聞かされてびっくりした。フキは採ってきてからが大変だった。葉を取り茎についている筋を取るのがやっかいで、手の指先がアクで黒くなり、これがなかなか落ちなかった。

とにかく秋田に来てからは、個人の小遣はすべて管理されてしまい、町に出て何か買って食べられなくなった。空腹を満たすため、先生からもらう銭湯の代金を一人だけでは額が少ないので十人くらい集めて風呂屋に行かず、町の八百屋、駄菓子屋で食べ物なら何でもよいから買ってきて河原に行って食べた。銭湯に行かないのを風呂に入ったようにするため、川の水に手ぬぐいをぬらし子供なりに知恵（悪知恵）を出して、丸坊主の頭と顔も川の水で洗ってお寺に帰った。二、三回は先生方にバレなかったが、地元の人が「夕方になると学

童疎開の子供らが河原で水遊びをしているので危ないから注意してくださいよ」とお寺に通報があったようで、八月初めの夕方、全員本堂に集まれと言われ板の間に正座させられた。先生に「今夜の夕食は抜きだ。お前ら、どうして正座させられているのか、目を閉じてよく思い出してみろ」と言われた。まさか、銭湯の件がバレているとは知らず皆黙っていた。しばらくして、寮母さんが来て「皆が銭湯に行かず、河原で遊んで帰ってきていることは、先生は知ってるから、早く先生の所に謝りに行きなさい」と言われ、上級生四～五名が寮長室に行って謝り、やっと夕食を食べることができた。当時は小学生といえども誰か一人でも悪いことをすると連帯責任で全員がしかられた。

また、学校帰りにリンゴ畑に入り込み、リンゴの木に登り、袋がかぶせてあるリンゴを盗った。紙袋の中は青いリンゴばかりだったが何でも食べたい盛り、腹の足しにと少し酸っぱく渋味があったが一人二～三個食べてお寺に帰った。翌日から腹痛とふんづまり（便秘）になり、大変な騒ぎとなった。三～四日後、腹痛が治ってから、リンゴを食べた五～六人は先生に連れられリンゴ畑の農家に謝りに行った。「秋になれば赤く甘いリンゴになるので、その時また食べにきいや（秋田なまり）」とあまりしかられなかった。

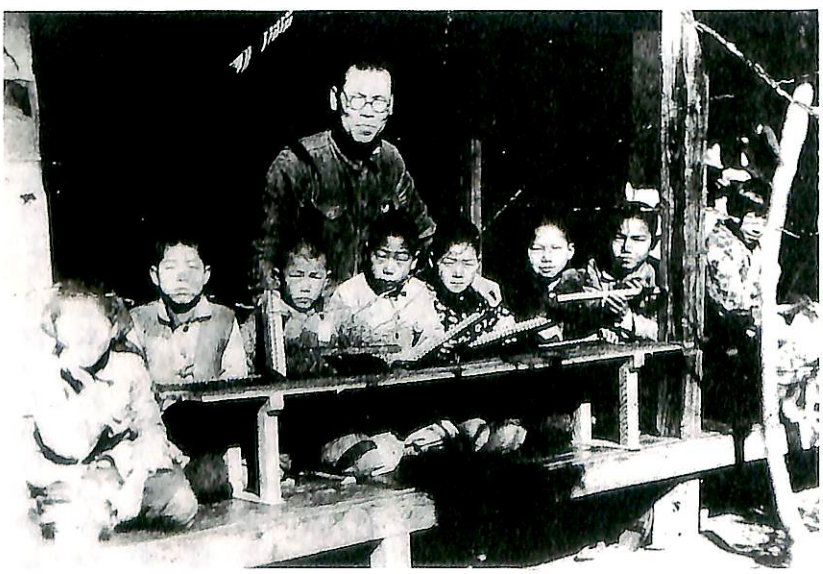
学童のおよそ八割近くがノミやシラミに身体中喰われ、赤くボツボツができて、付ける薬もなく赤くふくれて痛がる児童もいた。そのボツボツを治療するためだったのか定かではないが、学童全員で近場の渓谷沿いにあった湯瀬温泉場に傷痍軍人の慰問を兼ねてかなりの山道を歩いていった。温泉に入るとボツボツが治るといわれ、男子児童たちは露天風呂ではしゃぎ回った。温泉場には戦地で負傷した傷痍軍人（しょういぐんじん）さんたちがたくさんいた。

秋田に来てからは食糧の配給が悪くなったのか、朝、晩の食事がおじやおかゆばかりとなり、皆で茶わんを箸（はし）でたたいて「かたいご飯を食べさせろ」と言って寮母さんを困らせた。

八月一五日、先生に本堂に皆集められ、「日本は連合軍に敗れ、戦争が終わり、日本が敗戦国となった」と聞かされた。自分たちはまだ子供だったので、すぐにでも隅田に帰れると思い皆喜んでいたが、この時点で東京は廃墟と化していたため、学童たちを迎えに来るどころではなく、学校も役所も混乱していたためかなかなか迎えは来なかった。先生に「いつごろ帰れるのか」と何回も聞いたが「まだ連絡がこないので

知らせられない。ただ、必ず君たちは帰れるから心配するな」と言って元気づけてくれた。

最後に、体験記を書き進むにつけ思ったことは、「戦時中食料難の時代、疎開学童たちは集まれば食べ物のことばかり。悪さもしたが、そこは子供で夜ともなればはるか隅田の両親を思い、せんべい布団にもぐり涙していた。平和で豊かな飽食の時代には考えられない、つらい学童疎開の思い出だ」ということである。



疎開先での学習風景

集団疎開の思い出

隅田国民学校四年　大黒小の實
（旧姓　八木）

そう、あれからもう六〇年余りが過ぎてしまいました。

私が通学していた隅田国民学校では、戦争が激しさを増した昭和一九年の夏に、三年から六年生までの学童は集団かまたは縁故で疎開をすることになり、田舎のない私は集団疎開をすることになりました。

私たち女子は、茨城県の龍ケ崎町の大統寺というお寺さんだったと思います。その後一年足らずで龍ケ崎も危なくなり、秋田県の花輪町という所に再疎開になりました。最初のころは遠足気分で楽しかったのですが、一か月も過ぎると家に帰りたくなり布団の中で何度も泣いたのを覚えています。

親の面会もあるにはあったのですが、一年あまりの間に一、二回ほどだったと思います。ホームシックに追い討ちをかけるように食料不足がやってきました。おやつどころか主食の御飯もお茶わんに軽く一膳（いちぜん）という状態でおなかはいつもぺこぺこでした。

そんな私たちに先生は「兵隊さんたちはもっと大変なんだ。お国のために命を捨てて戦っている。食べ物がなくてつらいのはお前たちだけではない。日本全部の人がひもじい思いをしている。戦争に勝つためにはこのくらいのつらさは我慢しなくてはいけない」と口癖のように言っておられました。言葉では理解できても飢えの厳しさは本当につらいものです。

それでもたまには楽しいこともありました。家族からの手紙や小包が届いた時のうれしさは忘れられません。母はよくお手玉を作って送ってくれました。遊ぶためのお手玉でなく、食べられるお手玉です。中身がお米や豆をいったものでした。本当は皆で分けあって食べなければいけない約束があったのですが、分けるほどの量がないので悪いと思いながらも、隠れてそっと食べました。

また、忘れられない思い出に怖いことがありました。お寺さんなので本堂の裏の廊下にお位牌（いはい）と骨壷（こつつぼ）がずらっと並んでいる棚があり、毎日ではないのですが一週間に一度くらいその骨壷が落ちるような大きな音が夜中に響くのです。それで次の朝あわてて見てみると何も落ちていないのです。慣れてきてからはその音がするのを寝ずに待ち、ガチャンとしてすぐ障子を開けて見たのですが、やはり何も落ちていませんでした。とても不思議というおうか、怖

いというか今でも時々思い出します。

もう一つ嫌な思い出があります。「シラミ」です。下着の縫い目などに血をたっぷり吸ったヤツがびっしりと並んでいるのです。

ノミのようにピョンピョンと逃げるのならまだ少しかわい気がありますが、シラミはじっとしている図々しさなのです。また、髪の毛につくシラミにもほとほと困りました。髪の毛一本を指でしごくとタマゴが五、六個も取れるのです。そのかゆさときたらとても我慢できるものでなく、頭皮が傷になるほどかいてしまい、そこから菌が入っておできになるなど……。このシラミには戦後一年近く悩まされました。

疎開してから一年余が過ぎた八月一五日、先生から敗戦を知らされました。

先生方はとても残念がっていらっしゃいましたが、私たちは負けた悔しさより東京に帰れる喜びの方がずっとずっと大きかったのです。その年の一〇月半ば過ぎに上野駅に着きました。焼け跡だらけでしたがとてもうれしかったのを覚えています。

両親や家族に会えた時の感激は、七〇年以上の人生の中で最高でした。

今にして思えば、東京の空襲の恐ろしさは知らずにすみましたが、親元を離れて暮らすことが子供にとってはとても不幸なことだと改めて感じています。

混迷の中で学童集団再疎開始まる

隅田国民学校六年　佐藤五郎

霞ヶ浦西岸の江戸崎近郊は、海軍、陸軍の航空基地が点在する地域でした。空襲警報は、首都圏と同程度の発令かと思います。

私たちの疎開地、沼里村常晃寺の裏山にP51戦闘機が撃墜され、その衝撃で村中は大騒ぎの戦場になりました。艦載機からの機銃掃射が農家の屋根に撃ち込まれたり、授業中警報が出ると山路を集団下校したりするなど、とても学童疎開には適していないと思われてきました。

東京大空襲の夜は、疎開地からも真っ赤に焦がされた夜空が見えました。先生と生徒たちは、お寺の広場で寒さを忘れて見詰めました。学童の知識では、火炎が舞い狂う地獄絵を想像できません。私の生涯の記憶として脳裏に焼き残っています。

東京大空襲をすませたB29爆撃機の爆音は疎開地の上空に響き、鹿島灘方向に飛び去って行くのを悔しく聞くばかりでした。

再疎開先が秋田県に決まったころの四月四日未明、隅田二丁目は爆弾攻撃を受け、たくさんの家屋が破壊され、親しい人々が犠牲になりました。当時、鉄道員で自宅にいた兄は即死しています。そんな事情を知らされたのは、茨城県を離れるころでした。

昭和二〇年四月中旬、隅田国民学校の男女学童は、秋田県鹿角郡花輪町に移動するために、土浦駅より常磐線に乗って、上野駅に向かいました。列車は荒川鉄橋を渡り、三河島付近の高架をゆっくり通過して行きます。

夕日を受けて焼け野原になった光景を見せつけられます。黒焦げの煙突と、質屋さんの蔵が目立ち、西は王子方面から、南は浅草方面にかけてかなり見通せる、こんなありさまを見てしまった学友は驚きで声も出ず、車窓に吸い寄せられていました。もし時間があっても、我が家の跡を探すのは大変むずかしいことになると思いました。

ようやく上野駅に到着しても、自由行動はできません。灯火管制の薄暗い広場には、他校の学童たちが次々に集結してきます。

生き残っていた家族の人々は、我が子を探し求めて、各集団の間を懸命に歩き回り、上野駅広場は父兄たちが呼び掛ける声で騒然としていました。私の家族が被災したことは聞か

されていました。母や姉が行方不明であることは知る由もありません。どんなに首を長くして待っていても、身内の者が駆けつけて来ることはなかったのです。

近所の母親たちは、我が子を抱きしめたままで、他の子供には目もくれません。空襲の事情を尋ねてみようにも、戦禍に疲れた人たちからは、つれない返事が戻るだけでした。

私は一時期にせよ、戦災孤児になりました。こんな状態に置かれた学童が、すいぶんいたと思います。親たちは最後の別れになるかと思えば、我が子を抱き、泣きくずれています。同じありさまはどこにでも見られました。わずかな食べ物を、残らず子供に手渡すお母さんたちを、私は眺めているしかない悔しさ、悲しさを一人でかみしめていました。

戦火の中で、生き残る選択をしている人々にとっては、上野駅広場は生死の分岐点でありました。私自身、集団疎開列車に乗って生き延びるしか道はなかったのです。夜行列車はB29の夜襲を避けて、上野駅を出発する時刻になりました。私は隅田の自宅の方に向かって「さようなら」と心の中で叫び、母や姉の安否を思うことで胸がいっぱいになりながら、東北線の列車に乗り込みました。

終戦になって、家族と再会できなかった学童の多くが、行く当てもなく、上野公園や地下通路をねぐらに戻ってきたのです。

私の学童疎開体験

隅田国民学校六年　瀧澤良仁

―集団疎開―

記録によれば昭和一九年一月には対物的には建築物の強制疎開など新防空法が施行されたとある。

子供のころの記憶として何度も家の取り壊しを見たことがある。区内に疎開道路と言われた道路が何か所かあった。当時、今の四ツ木橋もできていなかったし、道路整備により延焼遮断帯を設ける対物政策であった。それに対して疎開は対人政策として昭和一九年六月に学童疎開促進要綱を閣議決定し、縁故疎開が困難な東京の三～六年生の集団疎開が実施された。

私は当時六年生だった。

―旅立ち―

私も田舎がないので、集団疎開で茨城県江戸崎町に疎開した。松戸から列車に乗り、土浦からバスで江戸崎町に着いた。隅田小学校は、寮ごとに三年生から六年生までの約六〇名の子供たちが、江戸崎町に四か所、龍ケ崎町に二か所と分散して疎開した。私のいた常晃寺は、江戸崎町から歩いて三〇分ほど離れた沼田という隣村にあった。

最初の数日は、みんな遠足にでも来たように騒いでいたが、日増しに夜中になるとすすり泣く声が聞こえてきた。先生や寮母さんの慰める声が良く聞かれた。

寮内では数班に組織され、六年生がその班の全責任者で下級生の面倒を一切見なければならなかった。

子供たちの食糧は欠乏していたが、それでも私たちの寮は隣村の利点で他の寮よりは豊富だったようだ。他の寮から遊びに来るとふかし芋を一本ずつ分け与えたが、それ以上はやらなかったような気がする。先生にしてみれば、同じ学校の子供でも今預かっている子供が心配だったのであろうと思う。結構縁の下にしまい込んでいた。しかし、子供の腹は待ちきれない。半生の乾燥芋を「かっぱらって」食べては農家の人に怒られたり、学校に抗議がきて良く廊下に立たされたりしたものであった。

それでも私たちは隣村であったので、往きは集団で本道で学校に行ったが、帰りは同級生同士で帰ることになる。小さな山だが、山道が寺の裏山の墓地に続いていたので、天気の良い日などは山道から帰ってきた。私たちが過ごした時期は夏から冬に向かっての短い期間だったが、秋に向かっての山

は自然の果実類の宝庫でもあり、山栗、野いちご、野ぶどう、また、畑ではさつま芋が収穫に向かって確実に成長していて食べごろの時期であった。

何を見ても食べたい時期、手当たり次第、生で食べたものだった。食べて遊んで山が赤く染まるころ、声を出す者もなく、ただ、寂しさだけが込み上げてくる。誰歌うでもなく夕日に向かって「カラスなぜ鳴くの　カラスは山に　かわいい七つの子があるからよ」と。誰もが当時は兄弟が多く、家のことを思い出していたのだろう。そのうち、「早くしないと日が暮れてしまうぞ」と声がし、元気な歌に変わる。

今は好戦的な部分は改作されたそうだが「お山の杉の子」を良く子供たちは歌っていた。「これこれ　杉の子　起きなさい」「お日様ニコニコ声かけた」「こんなチビ助何になる」「何の負けるか　今にみろ」「大きくなって　国のため　お役に立ってみせまする」自分たちに重ね、思っていたのかもしれない。また、地元の歌「江戸崎青少年」の「常盤の江戸崎米でる町よ　霞ヶ浦の流れに　鉄腕きたえ　皇国まもれ　江戸崎青少年」このような歌を歌いながら、お互い自分自身を慰め合って寺へと帰ってきた。

また、当時は何もないころ。ある時、私の班の七～八人が、村の中を徒歩訓練していた時、一軒の農家へ立ち寄り、土間に置いてあった農機具を珍しがって触ったり使い方を聞いたりしていて、何か食べるものがないかおねだりした。農家も若い者は兵隊に行き農機具を使う油もなく収穫も少ないと話をしていたが、それでも、ふかし芋を少し分けてくれた。それ以来、時々その農家へ立ち寄ることがあった。そんな時「少しでも油があれば農機具が動かすことができるのに、今やらなければならない農作業があって困った」と話をしていた。私の家も機械を使っていて機械油があることを知り、家に頼んでサイダー瓶ぐらいだったと思うが取り寄せ農家へ届けた。農家では驚いていたが、大変喜んでもらった。そのせいか、私たちは三回ほど、ふかし芋を全員でごちそうになったことがあった。

私たちは物資のない時期の割には疎開した先に恵まれていたのかもしれない。

―脱走―

いろいろなことに耐えられず、他の寮にいた同級生が一人、家に帰りたくなり脱走することになった。土浦まではバスに乗らなければならず、私たちは街中のバス停まで送りに行った。なかなかバスが来なくて、その間子供のことであり騒い

でいたので街の人の目に留まり、不思議がられ学校に通報された。その日のうちに送りにいった者が分かり、あくる日全員呼び出しを受け廊下に長時間立たされた。

後で聞いた話だが、当時は汽車に乗るにも証明書が必要であり、脱走者はそのようなものもなく、いかにして東京に帰ることができたのか。

―喧嘩（けんか）―

街に一軒駄菓子屋があり、そこで「もんじゃ焼き」を売っていた。子供心にそれが食べたくてしょうがなかった。しかし、それを買いに行くには天敵がいた。地元の四年生の悪餓鬼（わるがき）どもである。何かと顔を合わせればけんかしていた。それも半端なけんかでなくけが人が出るほどのけんかで、けんかが始まると店の人も買物客もいつの間にかいなくなってしまう。買い物は各寮から六年生が集まり各寮を代表して買いに行った。私も一度けんかで左ひじを脱臼し、手を吊るして仲間と一緒に半生の乾燥芋を「かっぱらって」見つかり、廊下に立たされ、隅田に強制送還されたことがあった。

―隅田の街中―

隅田に帰ってびっくりした。あの広い学校に二～三人の先生と五～六人の子供しかいなかった。

このころは、中学生以上の人は男も女も軍需工場に動員されていたようで、街の中は静かで、時折偉そうなおじさんが家にいるおばさんたちを指揮して、隣組組織によるバケツリレーの防火訓練をしていた。

また、今思うと大変だったと思うが、当時の校長先生と保護者会長は、何回か東京から自転車に乗り龍ケ崎町と江戸崎町の各寮を訪問してくれた。

―あこがれの予科練生―

当時の日本人の距離感や時速感など、今考えると恐ろしいくらいだ。当時の飛行機でも時速二〇〇～三〇〇キロぐらいは出ていたはずである。今でも語り草、当時のあこがれの予科練生がいた土浦航空隊の側に疎開するなんて考えられないことである。

年が明けて昭和二〇年になると茨城の上空にも度々敵機の姿を見るようになった。ある時、空襲でB29が飛んできた。豆粒ほどの日本の戦闘機が立ち向かっていたが、急に見えなくなってしまった。翌日の新聞に「B29に馬乗りになり撃墜したと報じられている」と先生から聞いて、さすが日本の航空隊と大喜びしたものであった。

また、土曜・日曜日には、よく予科練生が慰問かたがた遊びに来てくれた。子供心に格好の良い「あこがれのお兄さん」であった。当時の子供たちは軍隊に入ることは、当たり前のことで格好が良いことだと思っていたから、子供たちは一六歳になったら予科練生になるんだと夢を抱いていた。

―シラミ―

私は一級下の親戚（しんせき）の者と寮母さんと三人で、一つ蚊帳の中で寝ていた。私が夜中にむずがゆがったので、朝、先生に報告したところ、全寮総点検ということになった。ところが出るわ出るわ、全員から気持ちが悪くなるほどシラミが出てきた。ノミは聞いたことがあったがシラミはその時初めて見た。

しかし、お風呂に入らなかった訳ではない。外に便所と井戸と洗い場があり、その側に小さいが風呂があった。当然、何組かに分けて週一回ぐらいだったと思うが順番で風呂に入った。風呂は五右衛門風呂で、みんな初めて入った時は「キャーキャー」と大騒ぎであった。

その後私たちは水薬の瓶にシラミを入れて、誰のが一番大きいか競って遊んだもので、当時は何でも子供たちにとっては遊び道具になった。

―洗濯整理―

時々時間の余裕が取れる家の親や姉妹が、交代で私たちの洗濯物の整理や身の回りの整理のため、寮に来てくれた。しかし、シラミ騒動の時は急きょ総動員し、いつもより多くの人たちが来てくれて、シラミの付いた衣服を熱湯で処理した。（ＤＤＴなどなかったころの話である）

―日曜日―

日曜日は寮の掃除と自分の物の整理日であった。終わった後は班ごとに散歩するなりして過ごすことが多かったと思う。

日曜日に葬儀がある時は、上級生は参列させられ下級生は外に出された。お経が終わり埋葬するが、当時は土葬で子供たちも列の後に続きお墓まで行かされた。埋葬した後は、こんもりした小さな山ができる。墓地で遊んでいるうち、よく落ちたものである。

葬儀も戦死した兵隊さんの場合は村あげての葬儀で、町からも役人など多くの人が参列していて盛大な葬儀となった。

―帰京―

三月の初め、卒業のため六年生は帰京することとなった。荷物を取りまとめ家へ送る準備をしている者もいたが、私は

弟が三年生になるので、入れ違いに集団疎開に来ることになっていて、送り返す準備はしていなかった。その後、秋田県毛馬内に隅田小学校は再疎開することとなり、荷物はそちらに送られた。

疎開先から元気に帰ってきて、あの三月一〇日の悲惨なことが起ころうなど、誰もが考えていなかったことだと思う。一体何のための集団疎開だったのだろうか。

八月に終戦になり、弟が集団疎開から帰ってきて黙って玄関に立っていた。私たちが気が付き、母が弟の名を呼ぶとせきをきったように泣き出した。ガリガリにやせ細っていた。

その後、がむしゃらに食べたので、腹が狸の腹のようにふくらんでしまった。病院に担ぎ込まれたが、お医者さんの診断は栄養失調とのことであった。





隅田中央町会の慰問を受けた学童たち（常晃寺）

疎開地「船橋・尾道」での生活

向島中川国民学校四年　宍戸弘明

長く続いた過酷な戦争だったが、それにもかかわらず私の親しい身内の中に命を失った者がいなかったことは幸運だったといえよう。だから、あの戦争で一番の思い出といえば二度に及んだ疎開生活だった。

昭和一九年に入ると、戦局は日に日に悪化し、政府・軍部は、東京をはじめ大都会地での惨禍を少しでも防ぐために、学童の疎開が決められた。私の父は当時向島区吾嬬町東五丁目九六番地（現在の墨田区立花五丁目四四番？）で小さな町工場を経営していたが、こうした動向にいち早く反応した。総武線下総中山駅と船橋駅の中間に家を求め、日本橋浜町に住む母方の祖父母と二人の娘（私の叔母に当たる）と私、妹、弟の三人をそこに住まわせることにしたのだった。船橋の家に移ったのは昭和一九年の三月だったから、一番早かった縁故疎開組といえよう。

その時私は、向島中川国民学校の五年生になるところであったが、当時の少年の常として神国日本の不滅を信じている軍国少年だったから、なぜ船橋のような所へ、両親や兄と別れてまで移り住まなければならないのか、理解できなかった。両親とどんなやりとりがあったのか全然記憶にないが。

年長の私でさえ不満、不安だったが、もっとも惨めで、かわいそうだったのは国民学校一年生になったばかりの弟だった。見知らぬ土地で、両親特に母親と離れての生活は、たとえ祖父母とはいえ一緒に暮らすのは初めてであるから、そのストレスはどれほどだったか。学校へ行く時刻になると、よく「おなかが痛い」と訴える。それをなだめすかして登校させるのが私や妹の役目だったが、連れて行くこちらだって、なじみのない学校へは構えて行かなければならないのだ。不思議なことに学校を休むことにすると、弟の腹痛は間もなく治まるのだった。

船橋でも疎開した周辺には農家が多かったが、見知らぬ所とあれば、そう簡単には食べ物は手に入らない。孫にひもじい思いをさせないよう特に祖母は方々手を尽くしてくれた。そのお陰で、牛乳を買い出しにいって飲むこともできた。

ここの生活で最大の楽しみは、土曜日の放課後、妹、弟と三人で向島の家へ帰ることであった。妹が先頭に立ち、私が弟の手を引いて下総中山駅まで二キロ歩き、平井駅で電車を降り、さらに旧中川沿いを〇・八キロ歩くと我が家である。

子供の足で二時間弱かかったが、心が弾み本当に楽しかった。それに反して、翌日の日曜日の夕方、早い夕食をすませて船橋に戻る時は気が重くて、みんな言葉も少なく、文字通りトボトボと歩くのだった。

私たちが通ったのは船橋市葛飾国民学校、後年移転して、跡地に西船橋駅ができた。

船橋で始まった疎開生活はこれで終わりではなかった。戦局は日を追って日本にとって不利になっていき、東京への大規模な空襲も現実味を帯びてくる。学童の集団疎開（強制疎開）が九月から始まるという。こうした状況に、父は身重の母と未就学児の末弟をこのまま東京に残せないと思ったのであろう。船橋の家は手狭でこれ以上の人数の収容はできなかった。そこで、府立三中に通う中学生の兄以外の家族を、父の故郷の広島県の尾道（正確には対岸の向島へむかいしま）に疎開させることにし、廃業した風呂屋を購入した。八月初めには打ち合わせに行く父に連れられ、そのまま一人本家の家に残った。まあ、先発隊みたいなものだった。

九月にはまた別な学校（尾道の向島西国民学校）での五年生の二学期が始まる。転校生にとって、誰しもが経験することだが、言葉（方言、なまり）の違いは、いじめ、交友阻害などの原因となり、その克服は最大の難問である。船橋は南関東だったから何とか対応できたが、広島弁は手ごわすぎた。でも本家の家に居候しているうちに、子供なりに一つの原則に気がついた。「…のう」と語尾を変えればいいのだ。このことに気付いた時は、これで安心とうれしかった。早速食事時に実行した。本家の叔母に「これはおいしいのう。」とお世辞を言ったら、途端に「何をいうてんじゃ。そぎゃあな時は、うみゃあのう、というんじゃ。」と一喝された。壁は厚く、物事は簡単ではない。広島弁には悩まされながらも、一年生の弟は母と一緒になれたせいだろう、登校時の腹痛はなくなっていた。

昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲で、我が家は工場もろとも全焼し、父と兄がこちらに来た。前年、尾道に来て間もなく新しい弟が生まれたが、家族八人が全員やっと集まることができ、すごくうれしかった。でも、問題はその後も続く食糧難だった。

疎開先の向島は農村といっても、島の平地は少なく、稲作はほんのわずかで、主作物は麦と甘藷（かんしょ）であった。むしろ造船所や塩田が代表的な産業であったといえた。

親戚（しんせき）に何軒かの農家があったのだが、必ずし

も東京からの出戻り家族に優しくはなかった。そうした中で父の妹の家族だけはそこも家族が多かったにもかかわらず、食べ物を我が家に回してくれた。私たち八人家族が栄養失調にもならず、何とか生活できたのはあの叔母一家のお陰であった。

食糧が豊かでもない所なのに、たくさんの都会の人が買い出しに来ていた。農家の同情を引くためなのか、子供を連れた母親が多かった。日が暮れたころ、やっと手に入れた食べ物を持ち帰る人たちをヤミ物資摘発と警官が追いかける。ドタドタバタバタと追いかける警官たちと、逃げまどう買い出し人の足音に子供の泣き叫ぶ声が入り混じる。そうした音を布団の中で身を固くして聞いたものだった。絶対的な食糧不足は本当に怖い。

昭和二〇年八月、日本は敗れ、私は国民学校六年生になっていた。翌二一年、尾道の中学校に入学したが、今の学制での中学ではなく旧制の中学校である。尾道中学は市の北側の奥まった所にあり、ゆるやかな坂道をたどって徒歩で一時間以上かかった。極端に物資のない時代だから靴はなく、松材の重い下駄を履いて通った。時折帰りに回り道して、海岸近くにそびえる千光寺山の山頂を通って帰った。

この頂上からは、瀬戸内海を一望に見下ろす素晴らしい眺望が広がっている。特に春、桜の咲く時期の夕暮れは少年でも息をのむほどの美しい風景であった。眼下の町での生活は、貧しく殺伐としていても、ここには悠久の美しい自然が対照的に存在する。飽きずに、じっと眺めていたものだった。

もし、疎開していなかったら、東京の下町だけの生活に終始し、このような素晴らしい心情的な体験はできなかったに違いない。後年、職務の関係で五〇年近く東京以外の地に家族とともに生活したが、苦にもならず、むしろ楽しく住めたのは、このような経験というか下地があったせいかもしれない。数少ない疎開の功徳（くどく）の一つか。

ところで、私の父は、特に学歴もないまま東京に出て小さな町工場を興した。長い戦争を追い風にして、ある程度の資産を得ることができたものの、結局は戦火で焼き払われ、敗戦後の経済政策などでそのほとんどを失った。そうした中で父は東京に帰ることを決断した。昭和二三年の暮れのことで、日本橋蛎殻町に移り住んだ。私は兄の通った都立三中（現在の両国高等高校）に編入し、江東橋のほとり、焼け跡残る校舎に通うようになった。

「集団疎開の級友と別れて」の記

向島更正国民学校四年　大塚　繁

僕が、向島区更正国民学校へ入学したのは、昭和一六年四月。その年の一二月に、第二次世界大戦に突入した。つまり一年生の三学期の終わりだ。

その戦争に勝つのだと「鬼畜米英」と呼ばされて、たちまち四年生。当時の住所は向島区寺島町六ノ一七六だ。

その四年生になるころ、戦況は悪化の一途をたどり、東京は非常事態となって「学童疎開」の募集が始まった。同級生の多くが、それに応募し、関東・東北の各地へと肉親、友人たちと別れ、散り散りになってしまった。

しかし僕は、戦争の恐怖でか夜尿症になっていて学童疎開を辞退した。他にも、それぞれの理由があって疎開しなかった子供たちは、一教室にまとめられ、三〇名くらいの残留となっていた。先生の多くが生徒と一緒に疎開となり、もう勉強どころではなく、敵の飛行機が東京に接近すると街中のサイレンが鳴るのだ。その第一報が「警戒警報」だ。サイレンの音がするや否や、授業時間に係わりなく、給食のコッペパンを一個ずつカバンに入れ帰宅を急ぐのである。

食糧事情は極度に悪化し、商店も扱う物品もなく、食料を求めて埼玉や千葉の農家へと買出しである。金銭の価値はなく、原始時代のような物々交換の時代になっていた。主たる物といえば衣料対食糧である。「子供が哀願すれば、農家の人も芋の一本も分けてくれるだろう」という親の知恵で、姉と僕は、リュックサックを背負って買い出しに行ったりした。それでも、家族が満腹することなど一度もなかった。

そうした生活のさなか、兄（三男一七歳）が樺太（からふと）沖で、敵潜水艦により戦死という通知と遺骨だという空箱が届けられたが、母は「水泳が得意だった」と言って、海軍からの報告とその空箱を手にしながら「きっとどこかで生きている」と、口癖のように言うのだった。

そしてついに、三月一〇日未明の大空襲によって東京下町と呼ばれる一帯は、B29（アメリカの爆撃機）が投下した焼夷弾（しょういだん）によって焼かれ、その火災から逃げ遅れた多くの人々が戦争の犠牲となり、僕の家も、あの炎の中で灰となってしまった。

両親、姉と僕が、炎から逃げのびたのは、よく遊んだ荒川の土手である。夜が明けて、土手に漂うにおいは、人間や犬の焼け焦げた異臭とくすぶっている煙だ。それでも、僕の家

族は、家の方向へと歩いていた。

この辺が台所、するとここが部屋と、灰となった辺りを掘ってはみたものの、皿の一枚も出てはこなかった。

逃げのびた人々の多くが、高熱や煙による目やのどの痛みに耐えていた。

「更正国民学校で炊き出しがある」という伝言は、たちまち人波となり、学校へ押し寄せた。そこでは、目やのどの消毒と、一人一個の白米のおにぎりが配られていた。焼け跡から、拾い出す物もなく、着の身着のままでその食事を終えると、両親の後について歩き始めていた。千住大橋を渡り、日光街道を北へと向かう人々の列は、一本の棒のように続いて、皆、黙りこくっていた。

行き先に何があるのか、地獄か極楽か、それは誰も知ることはない。焼けただれた街から、逃れようとしているだけだった。その放心状態の避難民の列に、浅春の寒風が、これでもか！と吹きつけてくる。草加の松並木、越谷を過ぎ、空腹と疲労、足の運びは重く遅々となり、やっとのことで東武線一ノ割駅までやって来た。そして踏切を渡り一軒の農家へたどり着いた。その家は、食糧買い出しのときに知り合っただけだったが、僕たち家族のために納屋をあてがってくれた。

稲わらの束がたくさんあって、寝具などないけれど、わらの中に寝る日々は快く、空襲も警報のサイレンも鳴らない農村は、まさに極楽だった。時折、アメリカの戦闘機が飛来して、牛や馬をまるで遊びのように撃ち殺したりすることがあったが、その農村は別の国のように思えたものだ。

春休みが終って、武里村国民学校へ転入したが、地元の子供たちの方言が聞き取れずなかなか友達になれず、疎開して行った同級生たちは、どこでどんなにしているだろうかと思ったりしたものである。

その年の夏休みに戦争が終ったが、無一物になった僕たち家族は東京へ戻ることなく、埼玉に落ち着くことになった。

しかし、多くの友達がいた向島寺島町のこと、更正国民学校を卒業できなかったことによって同窓会の知らせもなく、あのカマボコ屋の○○ちゃん、氷屋の○○ちゃんの消息も知らない僕は、知りたいと思いながらも、なんとなく知ることが恐ろしくてならない。

集団疎開に行った友が、僕と同じように元気でいるだろうと思うのみである。

集団疎開の思い出

向島更正国民学校六年　中村　靖

第二次世界大戦の末期に都市部の小学三年生以上の学童を地方へ集団疎開させることとなり、当時、向島更正国民学校の六年生だった私は、四年生の妹と約四〇〇名の学童と共に、昭和一九年八月二二日に茨城県下館市に疎開をしました。他に縁故疎開をする人、疎開せずに残留する人たち、学友が別れ別れになり、この別れで、その後の消息が分からないままの人が多数おります。ちなみに昭和一四年四月の更正国民学校入学者（私の同期生）は、六クラス、約三三〇名ほどだったと思いますが、平成一七年三月現在の一一期生名簿は約五五名で、この内の約一〇名は物故者であります。

さて、昭和一九年八月に下館に着いた私たちは、一寮から五寮に分けられ、旅館やお寺に分散して寄宿することになり、私は五寮の男子部で、駅から一番遠いお寺に四五名ほどがお世話になることとなりました。高台に建つお寺で眺望がよく、日当たりの良い本堂での共同生活が始まりました。和尚さんご夫婦は温和で、いつも笑顔の優しいご夫婦でした。そんな恵まれた環境でも、親元を離れて不安もあり、また寂しくもあり、下級生の中には夜など泣く子もありました。そして一人が泣くと、もらい泣きの合唱となり…。私自身は六年生で班長の自覚もあったので泣いた記憶はないのですが？それでも夜とか早朝などに、布団の中で聞く汽笛の音に、ほろりとしたことは鮮明に覚えています。また、昼間、休みの時には数人で、よく駅へ行き汽車を眺めていたことを思い出します。多分、東京の両親に一番近い場所だと思っていたからでしょう。

しかし、今改めて疎開の思い出を文章にしようと、記憶を整理してみると、楽しいことばかりが思い出されます。

―演芸会―

私の配属された五寮は男女合わせて九〇名ほどでしたので、女子は旅館、男子はお寺に分宿したのですが、毎週土曜日の夕食後には、女子のいる旅館に男子も集まって、歌ったり、ハーモニカを吹いたり、即席の寸劇をしたりしてにぎやかに楽しみました。当時乗車切符が簡単には購入できない時代でしたが、ときには運良く手に入れることができた親が面会に訪れて参観している夜など、皆、元気な姿を見せようと張り切って演技したものでした。

―入浴―

私たち五寮のお寺には大勢が入浴できる設備がなかったので、近くの銭湯に男子児童全員が行列をして入浴しに行きました。冬は東京よりも気温が低かったのでしょう、ぬれた手ぬぐいを手にさげての帰り道、お寺につくころには棒のように凍ってしまい、この棒でチャンバラごっこをしたりしたのも思い出されます。

―地元との交流―

地元の農家から、さつま芋掘りを頼まれ、児童たちが畑で芋掘りを大いに楽しみました。畑仕事など経験のない都会の子供が、でたらめに掘り出した芋など売り物にはならないで、ただ、畑を荒されただけのことだったと今思いますが、それらは農家の人たちが承知のうえで、親元を離れて健気に寂しさや空腹と戦っている疎開児童を慰めるためのご厚意であったのだと、うれしく思い出されます。そして芋掘りの後に、鶏肉や野菜のたくさん入ったけんちん汁や、ふかし芋など、腹一杯ごちそうしてくれたことは、生涯忘れられないと思います。

―相撲大会―

地元の下館国民学校と更正国民学校で、それぞれ七人の選手による相撲対抗戦がありました。更正六年生の中ではやせているが比較的身長もあり相撲もそこそこ強かった?私も、七人の中に選ばれて出場することになりましたが、土俵の向こう側に並んだ相手チームの選手を見てびっくりしました。七人とも、中学二、三年生かと思われるほど身長・体重ともに大きく、筋骨たくましい体格差に圧倒されてしまいました。そして、私は一五センチほど大きな対戦相手に三、四発で突き倒されて負けました。それでも更正の七人の選手の中で身長の一番低い二人が、ともに長身の相手の中にもぐり込み、粘り勝ちして二つの勝ち星を取り、五対二で負けましたが、十分に満足できた結果だと思っています。

―疎開地から見た空襲―

ある夜、まだ就寝前に境内から、かなり遠方の空がオレンジ色に明るく染まっているのが見えました。そして、その後、白く見える探照灯の筋が何本も動き始め、花火のようにとてもきれいでした。音は何も聞こえてきません。しかし、これは空襲だなっと思った瞬間、まさか東京では?と考えた時、花火のようにきれいだなどと思った自分を責めました。その夜はあまり眠れず、翌朝、日課にしている境内の掃除をしていると、いつもは落葉程度の境内に、焼け焦げた新聞紙片や布片などが散らばっており、さらに驚いたのは一五センチ×

一〇センチ、厚さが二センチほどの大きさの周辺が焦げた辞書が落ちていたのです。拾い上げてページを開いてみると、裏表紙の内側は焦げて変色していましたが、住所、氏名がペン書きされていて、横浜市と記されているのが読めたのでした。多分、空襲による大火災で起きた竜巻状の風に吹き上げられて一〇〇キロも飛ばされてきたのだとしか考えられません。今、改めて地図を調べてみると、下館町（現下館市）から東京、横浜はほぼ南（南南西）の方向で、境内から見た方向でした。

―帰京―

私たち六年生は卒業のため、昭和二〇年三月五日に、下館から帰京しました。そして、上野駅の正面玄関を出てびっくりしたのは、駅前の一区画が焼け野原になっていたからです。

上野から不安をもちながらの帰路、浅草を経由して向島の更正国民学校に到着するまで、町並みも学校も、そして自宅も七か月前と全く変わりなく、安堵（あんど）したことを覚えています。

しかし、安堵も束（つか）の間、わずか四日目の三月九日の夜中から一〇日の朝にかけて、東京が大空襲を受け、学校周辺も大火災となり大きな被害が出ました。更正国民学校は、この空襲では被害を免れましたが、四月一四日の空襲で校舎の半分近くを焼失してしまいました。

私にとって、集団疎開とは何だったのか？

当時は、「東京が安全だった期間を疎開し、空襲される時機に帰京して恐怖を味わった。結局、無意味だった……」と単純に考えたように思う。

しかし、七二歳になって、あの体験は、戦後の苦しい時代を含めて、私の人生に大きな意味をもつ経験であり、頑張り、忍耐、感謝、思い遣り等々、人にとって大切なことを、身につけ、学ぶことができた貴重な経験であったと思うのです。

学童疎開体験記

向島梅若国民学校三年　川原田　叶
（旧姓　近藤）

私は六八歳です。墨田区寺島町に住んでいました。梅若小学校三年生になって秋田県へ学童疎開に行きました。私の三歳上の姉が六年生で、茨城県の真壁郡真壁町の橋本旅館に行っていましたが、戦争が激しくなったせいか知らないが姉たちも秋田へ移ることになりました。

梅若小学校では学童疎開は二か所に別れました。私の記憶では先ず初めに、秋田県仙北郡飯詰村駅前湯川旅館に一時宿泊しました。毎日、出征兵士を「勝ってくるぞと勇ましく」と歌いながら、日の丸の小旗を振り振り、ゲートルを巻いた男性やかっぽう着姿の女性たちが兵士を真ん中に輪になっているところを、旅館の窓から眺めていました。

それから仙北郡六郷町東高方町三五長明寺へ、男女二九人が先生と移りました。お寺が三軒並んでいて、真ん中の大きなお寺だと思います。隣のお寺には若い男性たちがいました。毎朝起床ラッパが聞こえてきました。お寺の本堂が広いのでビックリしました。畳四八畳だと思います。本堂で勉強し、夜はフトンを並べて寝ました。廊下に荷物を置く整理棚が一人ひとりありました。朝、先生（小林先生）が来て、整理整頓ができていると「賞」と書いた木の盾を置いてくださり、一日中飾っていました。

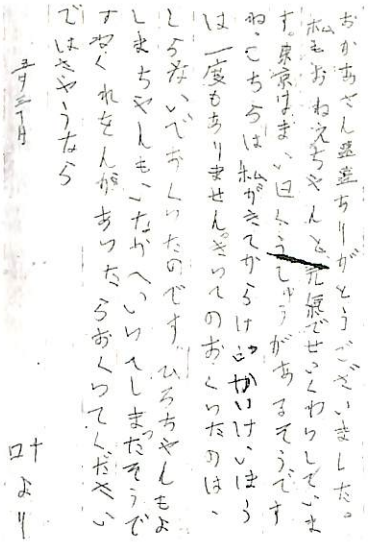
先生は三人、小林先生、鳥海先生、桃井先生に寮母さんでした。農家の人から畑を借りてサツマイモの苗を植えました。農道を先生に連れられ一列に並んで唱歌を歌いながら歩いたのを思い出します。六郷町には冷たい水がわき出ている所が多くあり、みんなで洗たくをしに行きました。夜はお寺の墓で肝だめしをして遊びました。お盆には檀家（だんか）の人たちがボタモチを疎開っ子にと言って持って来てくれました。三度の食事はどんぶり一杯のご飯でした。私はおなかいっぱいになりましたが、男子たちは足らないようでした。食事の時に栄養剤（カイユー）をくれました。

終戦の日（八月一五日）に、ラジオで天皇陛下のお言葉を放送するのでお寺の住居で正座をして聞きました。でも私はそれが何の事だか分かりませんでした。本堂へ来てから、廊下の「疎開生活について」とか「訓示」などと先生が書いた紙を、一枚一枚悲しい顔をしてはがしているのを見て、戦争に負けたのが分かりました。

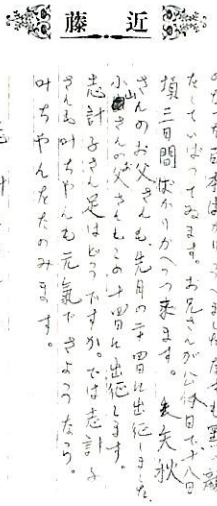
その後どのくらい月日が過ぎたか覚えていませんが、父の手紙には一〇月中には東京へ帰れると書いてありました。東京へ帰れる日が決まって、六郷の学校で送別会を先生方や地元の人たちが開いてくれました。三日月形に切ったカボチャのふかしたのがとてもおいしかったです。それからお土産に綿入のチャンチャンコをいただきました。中学生になっても冬になると押入れから出して着たことをいまだに思い出します。

秋田県の六郷町の人たち、お寺の長沢様の皆様方、そして先生方のお陰で、両親と離れ離れでもみんなと仲良く生活できました。

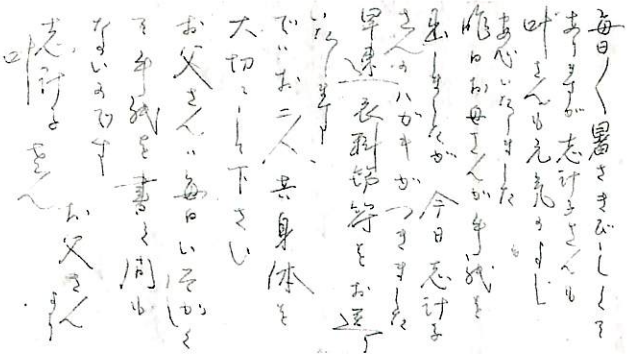
二度と戦争はしてはいけません。子供や孫たちに恐しい思いはさせたくありません。



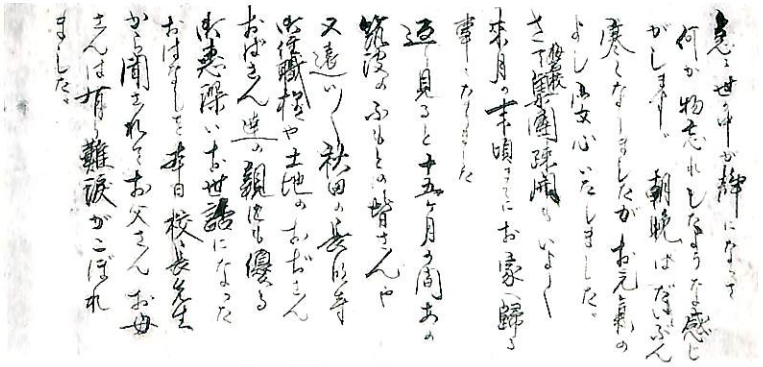
筆者から母へのはがき



母からの手紙



父からの手紙



学童疎開終了時の父母からの手紙

飢えた日々

向島梅若国民学校四年　城戸房嗣

「今までに食べたものの中で、何が一番おいしかったですか」と、よく聞かれます。

「生のさつま芋ですね」と、ぼくは答えます。

一九四四年（昭和一九年）八月一五日、当時梅若国民学校四年生だったぼくは、友人たちといっしょに集団疎開をすることになり、茨城県真壁郡雨引村（現在の大和村）に向かい、省線南千住駅から列車に乗りました。

敗戦一年前のことです。食糧事情、衛生事情は悪くなるばかり。

腹ペコでやせ細り、おできだらけの体でもその血はおいしいらしく、のみ、シラミはいっぱいたかりました。でも、のみ、シラミは「きょうは、おれは、一三匹つぶしたぞ」なんて競い合って、楽しんだりもしていました。

腹ペコは競いようがありません。ついに、畑のさつま芋を盗みにいくことにしました。何人かが、素手で掘った芋を、傍らの小川の中で待ち構えている者たちに放り投げます。受け取って、素早く、流れの水で土を落とします。「オーイ！もう、いいぞ」適当な量になると声をかけます。全速力で、その場から走り出します。そして、草むらの中に横たわって息を切らせながら、なまのさつま芋にガリガリかじりつきます。少しぐらい土がついていても気になりません。二本か、三本でおしまいです。おたがい、顔を見合わせ「うめぇなあ。うめぇなあ」「うん。うめぇ。うめぇ」

「この時の味は、いや、味とはいえないかもしれませんけど、忘れられないですね」

「もうひとつ、忘れられない味があります。味の質からいうと、こちらのほうが、うまいといえるでしょうか」

盗みの次は、食べ物ごいをしました。ねらいは、おばあちゃんのいる農家です。若い人だと追い払われてしまいます。縁側に日なたぼっこなどをしているおばあちゃんを見つけると、そっと、庭先から入っていって、小さな声で「おばあちゃん、ぼくおなかすいてるんだ。なにかたべるもの、ない？」あわれな声で頼むのです。「おうおう。こんなちっちぇ子が、親元はなれてきてなあ。かうぇえそうに。待ってろ」銀シャ

リのお米だけのおにぎりを作ってくれるのです。ちょっぴり塩がぬってあります。かぶりつきました。米粒だけのご飯なんて、いつ食べたでしょう。

盗みは一回だけでしたが、食べ物ごいは、正に味をしめて、何回もつづきました。おばあちゃんとは顔なじみになりました。

でも、そうしょっちゅう行くと、イヤがられてしまうかもと思い、別に何軒かのお得意さんを作りました。

「四年生の子どもに、よくそんな配慮ができたものです。今でもおにぎりは大好きです。新幹線に乗る時、きれいなお弁当よりも、おにぎりを買いますね。」

「食べ物の話を、ほかに、いくつかしましょうか」

ある朝、今までのポロポロの麦飯にかわって、さつま芋をきざんだのが混じったご飯が出ました。お芋の甘みと水っ気が麦飯よりはるかにおいしく食べられたのです。ひとりの男の子が、宿舎のおばさんに言いました。「おばさん。きょうのお芋ごはん、おいしかったよ。また作ってね」。お芋ごはんは、その朝だけではなかったのです。毎食、来る日も、来る日も。しだいにお芋の量が増えていきました。お芋ごはんがおいしいなんて、だれも思わなくなりました。もう、イイ。やめて。

そして、こんなことになったのは「おいしかった。また作って」と言ったあいつのせいだということになり、その子は仲間はずれになりました。二四時間、いっしょに暮らしている中でだれも口をきいてくれません。学校に行く時は、みんなから離れて行きます。下校して宿舎に戻ってきても、だれも遊んでくれません。

「おとなでも、こんな仕打ちは耐えられませんよね。それを四年生の子ども社会で、当たり前のように行われていたのです。」

村の学校で秋の運動会がありました。終わって先生たちは、学校で飼っている豚を豚汁にして食べるのが、いつものことのようです。今年は、疎開の子にも分けてあげようということになり、ふたりの男の子がバケツをさげてもらいに行きました。

みんな首を長くして待っていました。豚汁なんて初めて食

べるという子もいました。なかなか帰ってきません。「どうしたんだ」みんなイライラし始めました。ひとりの子が偵察に出ました。すぐに帰ってきて、怒りの声で報告しました。

バケツいっぱいの豚汁は、ふたりには重く宿舎裏の下りの坂道で、ついに足元がふらつきころんで、すべての豚汁を土に吸い込ませてしまったのです。帰るに帰れずバケツをかかえて泣いていました。このふたりも即、仲間はずれです。

当時は鉄道の切符を手に入れるのがとてもむずかしく、東京から、親が面会には、なかなか来られません。

親に会いたい。東京に帰りたい。その思いがつのり、ついに脱走をした子たちがいました。夕食時の点呼で、彼らの脱走が分かりました。筑波鉄道（現在は廃線）に乗り、土浦へ向かったものと先生は判断し、雨引駅長さんに頼みました。

客車が一～二両、貨車が五～六両いっしょに連結した列車が、筑波駅に着いた時、駅員が車内に向かって呼びかけました。「梅若国民学校の生徒さん！　駅長が、焼き芋あげるって待ってるぞ。降りてこいや」彼らは、のこのこと降りていき保護され、雨引へ連れ戻されました。

農家の庭に干してあった梅をひとつ盗んで食べた女の子がいました。その家のおばさんが、宿舎にどなりこんできました。

戦争に負けた後も、飢えの日々はつづきました。でも、親といっしょに暮らせるようになったので、日々の食べ物の工面は自分でしなくてもよくなりました。

六〇年、たちました。

「今の小学校四年生の子たちに、当時のぼくたちのような暮らしは、とても、とても、できないでしょう。今のぼくにも、できません。生のさつま芋を、今、食えといわれても、とても、とても」



向島梅若国民学校疎開学童（茨城県雨引村）

私の学童疎開の思い出

向島梅若国民学校三年　山本善弘

昭和一九年の八月、私は向島梅若国民学校三年生になっていました。小学校三年以上六年生までの学童疎開が始まり、私たちは茨城県真壁郡真壁町に行くことになりました。

出発の前の夜は、枕元にリュックサックを置き、うれしくてなかなか寝ることができませんでした。朝、南千住駅から客車に乗り、途中で乗り換えました。乗り換えた列車は、マッチ箱のような小さな客車で、座席は木のままでした。降りた駅も小さな駅で、真壁町に着きました。

駅から少し歩いた所に、私たちの生活する家がありました。板壁に囲まれた木造二階建の旅館で、橋本旅館でした。この旅館のご主人は、背の高い、若く温和な感じの人で、和服姿でした。着いた日、私たちは二階に布団を並べて敷き、寝ました。夜中、シクシクとすすり泣く声が聞かれましたが、私はすぐにぐっすりと寝てしまいました。この日から、東京の家に帰る昭和二〇年三月までの約七か月間、楽しかったことつらかったことなど、いろいろのことを経験することになりました。

この真壁町に来たのが夏でしたので、近くの桜川という小川で流れに乗って泳いだり、メダカを捕ったりして楽しく過ごすことができました。この楽しかったことに対して一番いやなことと言えば、「シラミ」が多く発生したことでした。今まで見たこともない「白い大きなシラミ」は、身体中をゴソゴソとはい回ります。休みの日には、全員下着を広げて「シラミ」を捕りました。下着の縫い目にそって、小さな「卵」が産みつけられているので、全部を捕ることはできません。お湯を沸かして、下着を煮ることがたびたびありました。夏の終わりごろ、全員作文を書かせられました。私も、夏の日々の楽しかったことを作文としましたが、私の作文がNHKラジオで朗読されることになりました。その日は、全員ラジオの前に座り聞いた思い出もあります。作文の内容がどうだったのかは覚えていません。

秋になると田んぼに入り、イナゴ捕りをして、大切なお米が食べられないようにお手伝いもしました。この捕ったイナゴは料理され食卓にのぼりましたが、私には初めての料理で、食べることができませんでした。けれども、多くの子供たちはおいしそうに食べていました。また、三時の「おやつ」で今でもおいしかったものと記憶に残っているものは、カボチ

ヤを蒸かしたものです。秋のある日、近くの山に行き、キノコを採ったり栗拾いをしたり楽しい一日を過ごすこともありました。また、私より一〇歳年上の姉がいろいろなお菓子を持ってきてくれ、小川の土手に座って食べた思い出もあります。

遊び道具のない疎開地のことで、自分たちで細い竹を細工して竹鉄砲を作り、杉の実を弾にしてパチパチと撃ち合って遊びました。また、「どんぐり」を拾って来て、敷居の溝の右と左から力を入れて転がし、ぶつけ合い、弾けて溝から転がり出た方が負けという遊びがはやりました。皆、より大きな「どんぐり」を探すのに夢中になっていました。

このようなときにも、筑波山の方角に多くの米軍機が飛んでいるのが見られました。ある日、空からキラキラ光りながら落ちてくるものがありましたので、拾ってみると何か書かれていましたが、直ぐに取り上げられてしまいました。

橋本旅館の右隣だったと思いますが、古風な郵便局がありましたので、切手を買って東京の両親へ手紙を出しました。また、旅館から少し歩くと田畑が広がっています。その田畑に沿って続いている細い道の途中に、ぽつんと一軒の農家があって、開け放たれた窓から、中で一人のおばあさんが繭を湯につけて糸を引き出し、糸巻きに巻いているのが見られました。私は、しばらくの間その作業を見ていましたが、糸を引き出す鮮やかな手の動きを、今でも思い出すことができます。

ある日、近くの農家に数人ずつ呼ばれ昼食をいただきました。何をごちそうになったのか、今は、思い出すことができません。旅館では食べられない、おいしい食事であったことはよく覚えています。

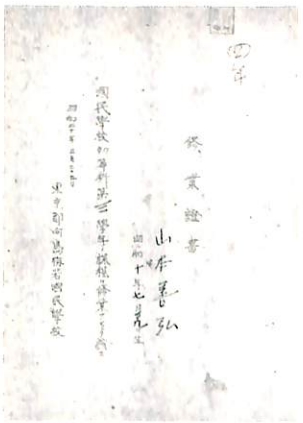
冬になりました。麦踏みの経験もしました。雪も降り、大分積もりました。真壁町の小学校は町外れにありますので、少し歩くことになります。戦争中のことで「ゴム長靴」を持っている子どもは一人もいません。高下駄か運動靴を履いていますが、雪道を歩くとすぐに足がぬれてしまい、冷たくて「半べそ」をかきながら学校に行きました。私は運動靴でしたが、ぬれて痛かったのを覚えています。学校にはストーブがあって、教室は暖かでした。その日、体操の時間に雪の積もった運動場に出され、裸足（はだし）で雪の運動場を数周走らされました。その冷たかったこと。冷たさを通り越して痛くなり、足裏の感覚がなくなるほどでした。戦時中のことで、スパルタ式教育の一環として行われたのでしょう。

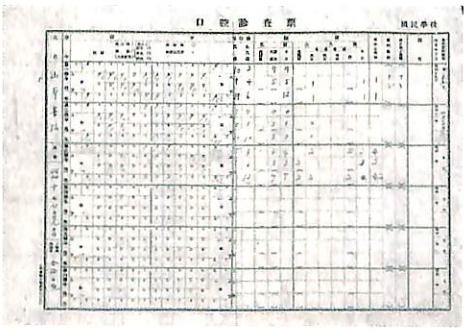
皆食べ盛りの年齢ですのでおなかがすき、何か食べたいと思っても何も売っていません。女の子の持っている「お手玉」の中の豆を食べている子もいました。誰が見つけて来たのか、薬局に「わかもと」があるということで、私も大ビンの「わかもと」を買って食べましたが、おいしいものではありません。降り積もった雪の上に「ふりかけ」をかけて食べたこともありました。しかし、私は、おなかがすいてどうしようもないということはありませんでした。この時の粗食の体験が、現在でも、食事に対して淡白な私となっているのではないかと思います。

昭和二〇年二月末、私は、仲間たちより早く東京に帰って来ました。私と一緒に行っていた三歳上の兄が、中学受験で帰るのに合わせてのことでした。数日いた向島の家で、米軍機による爆撃の体験もしました。爆弾の破裂した振動が「どどど～ん」と伝わってきます。家の門から玄関への通路にある防空壕（ぼうくうごう）は、大きな木のおけを土の中に埋め、上に屋根を付けて土をかぶせたものです。この防空壕に入って、空襲警報の解除をじっとして待っています。このような体験をした後、母たちが疎開している静岡県熱海市に行きました。

昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲には遭わないですみましたが、父と姉一人と兄三人は焼け出され、着の身着のままで熱海にたどりつきました。私は熱海の小学校に入学し、八月一五日、天皇陛下のラジオ放送を聞きました。戦争が終った瞬間です。私は小学校四年生、一〇歳の夏でした。この短い学童疎開の体験は、少年期でただ一度の集団生活の体験でしたが、最も実り多い期間であったと思われます。


身體檢查票


修業證書


口腔診查票

太平洋戦争　集団疎開体験記

向島大畑国民学校三年　野田　とき子

昭和一九年、東京も空襲が激しくなり子供たちは疎開をすることになった。私は田舎がないので、集団疎開をすることになった。その時は、何の違和感もなかった。母は私の荷物まとめるのに忙しくなった。茶碗は、割れないようにと三越デパートまで行ってプラスチックでできたスープ皿を買って来てくれた。いよいよ行く日が決まった。母は「体に気をつけて」としか言わなかった。「とうちゃん、かあちゃん行ってきます」と明るい声で家を出た。行く先は茨城県潮来というところだ。あやめの咲くいいところだ。そして学校を出た。沿道では人がみんな日の丸の旗を振っていた。私たちの先頭は鼓笛隊だ。私たちはまるで英雄気取りだった。電車を乗り継ぎ、土浦から船に乗り潮来に着いた。行く時と同じように出迎えの人がたくさん来ていた。そしてそれぞれの宿に向かった。

一日、二日とたつとみんなホームシックになってきた。手紙を書くのが楽しみだった。さらに楽しみなこともあった。月に一回面会日があった。その日は朝からうきうきして母を待った。待ちきれず船着場まで迎えに行った。船が見えてきた。来たら何から話そうか。涙が出て何も言えないかも。いよいよ船が着いた。そして降りて来る人を見つめていた。母の姿があった。やはり何もいえなかった。「元気かい、とうちゃんも、姉ちゃんも元気だよ」と言われて、「会いたかった」と言いながら母の手を握った。離れて初めて知る母のありがたさだ。楽しい時間は早い。母が帰る時間だ。母と帰りたかった。でもそれは許されることではない。船が出る時は涙が出てきた。出て行く船を追いながら泣いていた。

食べ物は家からは送ることはできない。そんな時、母からの手紙に「お手玉の中に豆が入れてあるから少しずつ食べなさい」と書いてあった。うれしかった。友達も喜んでくれた。月に一回の面会なのに三回も来てくれた母だった。空襲が激しくなり船が思うように出ないのに良く来てくれたと思う。

とにかくおなかがすくので母が来ると「わかもと」という栄養剤を買ってもらっていた。ある時その「わかもと」がなくなった。これは大変なことだ。みんなを集めて、「盗んだ子は前に出なさい、出ないと寝かさない」それはとても恐かった。足が震えた。誰が出るのか胸がどきどきした。誰も出なければいいなあと思った。その時二人の子が前に出た。私

は悲しくて涙が出た。「分かった。明日一〇時に広場に集まること」と言われた。そして気になる朝が来た。それからのことはあまり書く気にならないが、あえて本当にあったことだから書くことにした。まず二人を前に出してほおがはれ上がるほど殴りまた殴る。とうとう立てなくなってしまった。顔ははれ上がりさぞ痛かっただろう。人の物を盗むことは許されることではない。しかしみんなが食べていたので魔が差したのだと思う。当時はなにかと人を殴るのがあたり前だったのだ。教育とはとても恐いものだ。

そんなとき皇后様からお菓子をいただいた。菊の御紋が袋についていた。確か一〇枚のビスケットだ。その一〇枚を一〇日で食べた。今思うとよく我慢したと思う。でもうれしかった。

そんなおり、昼夜かまわず空襲警報のサイレンが鳴り、その度に逃げ回らなければならない。寝られない。でもみんな元気だったのがふしぎだ。そのうち潮来も危なくなり秋田に行くことになった。ほとんど親が迎えに来た。「死ぬなら共に」と言って。男女合わせて二〇人ぐらい残ったと記憶にある。わたしもその中の一人だ。田舎のない子は一年生から来ることになった。一〇人増えた。帰りたかった。迎えに来ない親を恨んだ。

秋田に行く日が来た。途中上野駅に夜八時に着いた。焼け野原の中に駅だけが薄暗い電気がついていた。駅には新しい子が、親に連れられて泣いている子もいた。その中に母がいた。私は思わず「かあちゃん」と窓から身を乗り出した。母も気が付いてそばへ来た。「ここから帰る」と母を困らせた。「私は死んでもあんたたちは生きるんだよ」と言いながら涙を流していた。わたしも泣いた。汽笛が鳴りいよいよ汽車が出た。「がんばるんだよ、元気でね」と言いながらいつまでも手を振っていた。その姿は今でも頭に焼きついている。私も窓から身を乗り出して手を振った。

あくる日秋田へ着いた。土地の人たちが出迎えてくれた。町は屋敷町だ。黒い塀の家が並んでいた。二日間、五人ずつその屋敷に泊ることになった。家の人たちからいろいろもてなしを受けた。夢のようだった。二日は早いもので「夢」も終わり私たちの住む学校に向かった。そのころは裁縫室といって畳の部屋があった。そこが私たちの部屋になった。

二、三日してから田舎の学校へ行った。一年から五年生がそれぞれのクラスに入った。言葉が分からないのには困った。「これから『べこさ』の草を取りに行くから」と言った。

「『べこさ』って何のことかね」と話した。それを聞いていた隣の子が牛のことだと教えてくれた。それからその子と仲良くなった。名前は光子と言った。田舎ではみんな名前をちゃんとは言わない。

秋田はそれほど空襲はなかった。それでよく「たどん」を作りに山へ行った。「たどん」とは炭の粉を丸めて作ったものだ。山へ行くのに往復六里ある。みんな元気に歩いた。山へ着くと楽しいお弁当だ。友達みんなで食べた。長い道を歩いてくるのでお弁当の中が半分になっていた。田舎の子は白いご飯が詰まっていた。私の弁当を見た友達が「腹すかないか」と聞いた。「すかないよ」と答えた。なぜかすくとは言えなかった。見えがあったのだ。二、三日して、「ときこ、遊びに来ないか」と言われた。そして遊びに行った。田舎がない私はあまりの広さに驚いた。庭には、にわとりがたくさん放し飼いにされていた。「ときこ、今おにぎりを作ってやるからな」今思うと惨めな思いをしたんだなと思う。そしてまりのようなおにぎりをくれた。ためらいはあったが、「ん、ありがとう」と言い食べた。おいしかった。その子のやさしさはうれしかった。田舎の子はみんな優しい。今みたいにいじめなんかなかったよ。私たちみんな助け合って暮らしていた。

戦争も激しくなり、いつも靴を枕元において寝た。昼間なんか暑いのに頭巾をかぶり防空壕（ぼうくうごう）に入っていた。真夏の暑さだ。三〇度はある。とにかく暑い。でも誰一人暑いとは言わなかった。訓練次第で人は強くなるのかな。今なんか我慢できない。戦争もかなり激しくなり家からも手紙も来なくなった。空襲も激しくなり毎晩のように山へ逃げた。解除になると山は明るくなっていた。山の朝は何とも言えないすがすがしさだ。子供ながら山はいいなあと思った。今思えば疎開したから味わえた思い出だ。

そんなある日、お昼に天皇陛下から話があるから集まるように言われた。みんな何の話か胸がどきどきした。とにかく暑い日だった。お昼になった。ラジオから初めて聞く天皇陛下の声が聞こえてきた。しかし雑音がひどくて何も分からなかった。聞いても難しくて子供には分かるわけがない。後で戦争が終わったと聞いた。「負けたんだよ」と先生が言った。その時は負けたと聞いても、悔しいとか悲しいとは思わなかった。みんなも同じ気持ちだった。これで家に帰れると頭にあったからだ。何気なく裏へ行くと先生が泣いていた。傍に私がいると分かると涙をふきもせず「よく頑張ったな。家に

帰れる日も近いよ」といって肩を叩いてくれた。名前は津久井先生だ。優しくて私たちの輪に入りいろいろ励ましてくれた。手を上げたことなんか一度もない。今でも忘れたことはない。会いたい。

戦争が終ってから、二か月たった一〇月に家に帰る日が決まった。うれしかった。ただ仲良くしてくれた友達との別れはつらかった。おにぎりを作ってくれた優しさは忘れられない思い出だ。若くして亡くなった人たちのことを思うと胸が痛くなる。

戦争のないことを心から願いながら終わりにします。

［関係者寄稿］弟・若林一旦の学童疎開

姉　工藤愛子

昭和一九年に、旧京成押上駅前から省線（現在のＪＲ）錦糸町駅に通じる大通りの駅に向かって右側は、家屋疎開と称して強制的に立ち退きを命ぜられた。この場所は、現在の業平三丁目、横川三丁目、太平三丁目、錦糸三丁目にあたる大変広い地域だった。

大通りの左側は、柳元国民学校（現在の深川工業高校）、柳島国民学校（現在の本所消防署）、精工舎、錦糸公園などがあり、右側は木造の民家が多かったので、取り壊しやすかったのかもしれない。家屋強制疎開で住民が移動するので、柳元国民学校は廃校になり、在校生は転校を余儀なくされた。

当時、私たちは、東京都本所区平川橋三丁目四番地に住んでいた。私の家の地域は、業平国民学校の学区に決められ、弟の一旦（かずあき）は、昭和八年一月一日生まれで柳元国民学校から業平国民学校の六年生に、妹は四年生に転校した。

昭和一九年六月には、借家が見つかり東駒形四丁目に引っ越したが、学校まで近くやっと友達もできたので、そのまま業平国民学校に通学した。

弟は、ひょうきん者で元気がよく、明るい性格で友達も多く皆に好かれていた。父は、長男の精一郎はお茶屋の跡継ぎに、次男の一旦は医者にしたいと考えていたようである。

そのため、家屋強制疎開の折には「お店のお客様が大切だから遠くへ行きたくない」、「次男は六年生だから、どうしても都立の中学校に進学させたいので、三月の受験が済むまではどこの軒下を借りても東京にいたい」との思いで東駒形の知人の家を借りたのだった。

昭和一九年八月、学童疎開が始まり、業平国民学校六年は千葉県市原郡の「養老村」か「鶴舞町」のお寺にお世話になった。

夏の太陽が照りつける暑い日にまるで旅行にでも行くようにはしゃいで校庭に並んで校長先生のお話を聞いていた姿がまだまぶたに焼き付いている。荷物を持って、錦糸町駅まで見送った親の気持ちはどんなだっただろうか。父が、御飯茶わんにと、お店の飾り戸棚から抹茶茶わんを持たせたこと、あずき色の茶わんに白い刷毛目（はけめ）のあったことなどいまだに忘れることができない。また、父は漢字にカタカナ

（戦前は、小学一年生でカタカナ、小学二年生でひらがなを学習）、母は漢字にひらがなで手紙を出していたことを思いだす。

昭和二〇年三月三日、弟は義務教育を終了し中学校受験のため七か月ぶりに疎開から元気に帰ってきた。久しぶりに家族がそろいにぎやかになった。三月九日には、神田小川町の叔父の家に遊びに行って夕方帰ってきた。叔父は「あの日、うちに泊めればよかった。帰さなければよかった」と、自分が亡くなるまで残念がっていた。

家屋疎開で引っ越した跡地には、空襲のときは敵機から身を守るために入るたくさんの防空壕（ぼうくうごう）が造られた。

三月一〇日、父と弟は、以前住んでいた家のおばあちゃんを気遣って見回りに行き、自宅跡の防空壕に避難したが、二人はその中で抱き合って亡くなってしまった。

「関東大震災でも助かった父だから…」と親戚（しんせき）の叔父に励まされ、焼け跡を三日間捜し歩いた。業平国民学校の校庭にも、業平公園にもたくさんの人が倒れていた。「せっかく疎開させていただいたのに、帰ってまだ一週間でこんな目にあって残念だったろう、無念だったろう。」

あれから六〇年が過ぎた。あの日のことは忘れることはないが、思い出せることを書いて、弟の代弁をしたいと思った。

［関係者寄稿］疎開児童を引率

「父・大塚竹四郎をしのぶ」

大塚　美枝子

私は、現在七三歳である。

父・大塚竹四郎は、昭和二〇年三月一〇日現在、二葉国民学校の教諭だったが、当日は学童疎開の児童を引率して千葉県茂原にいた。私の家族は大森にいたので、当夜の大空襲では直接炎をかぶったわけではないが、四月一五日に家を焼失し、まだ火の残る焼け野原をさまよったことを思うと、二葉国民学校の付近は想像以上だったことだろう。

父は、三月一一日の朝、本所を歩いていろいろ探し回ったようだった。最近、二葉国民学校の炎に包まれた絵画を見て運命的なものを感じる。

その後、茂原にいた父や学童は、岩手県千厩町大光寺へ再疎開した。もちろん、その中には家族を失った学童もいたことだろう。

昭和二〇年八月一五日終戦になったが、疎開先から東京へはすぐに帰れなかった。その間、昭和二一年一月の初め、母が危篤になり父に連絡したが、学童から離れてなかなか帰れず、やっと帰ったときには母はそれを待っていたように亡くなった。私ども家族も縁故疎開などでばらばらになり、その後はついに家族で一緒に暮らすことはなく、その後、昭和三五年に父も亡くなった。

以来、脳裏から離れなかった千厩へ数年前に行ってみたが、大光寺も二つあることが分かった。今でも山の中で、雪に埋まった千厩はどんなに寒かっただろうかと思った。土地の方々ともう少し当時の話をしたかったが、私も資料不足で十分に話ができず少し残念だった。また行きたいと思っている。

終戦から六〇年。一度、廃校になった二葉小学校も復活し、いろいろ変わったが、私どもの心に入った痛みは消えることがない。

「いつまでも戦争のない平和な世界を」と願ってやまない。

資料編

本所区　第一次学童集団疎開先一覧表

墨田区教育史から

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
業平	千葉県市原郡	養老村	大光院	30
			西福寺	54
			甘露寺	40
		牛久町	満蔵寺	37
			光福寺	48
		内田村	大正寺	52
			本伝寺	30
		鶴舞町	光明寺	35
			林祥寺	55
		里見村	真高寺	59
		白鳥村	金蔵院	49
			永昌寺	60
	業平　計			549
錦糸	千葉県千葉郡	椎名村	上行寺	45
			長徳寺	39
		生浜町	本行寺	54
			本満寺	29
		睦村	安養院	33
			貞福寺	36
		豊富村	青蓮院	50
			東光寺	45
	錦糸　計			331
日進	千葉県千葉市	登戸	本所健康学園	184
	千葉県君津郡	馬来田村	妙泉寺	96
	日進　計			280
緑	千葉県東葛飾郡	小金町	大孝塾	65
		富勢村	宝蔵寺	53
	千葉県匝瑳郡	南条村	広済寺	36
		匝瑳村	東福寺	33
			蓮花寺	47
	千葉県海上郡	嚶鳴村	海宝寺	51

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
緑		椎柴村	正等院	27
		船木村	円養院	26
	千葉県香取郡	東城村	蔵福寺	30
		橘村	林福寺	35
		神代村	東徳寺	33
		万才村	柴田勇雄方	25
	緑　計			461
本横	千葉県印旛郡	公津町	佐倉屋	31
			鷺田屋	27
	千葉県夷隅郡	総野村	長勝寺	48
			盛隆寺	43
			妙満寺	38
			真福寺	40
	千葉県安房郡	西条村	金乗院	60
			公会堂	64
		吉尾村	長安寺	118
	本横　計			469
茅場	千葉県山武郡	芝山町	蓮福寺	44
		睦岡村	妙宣寺	51
			長光寺	60
		源村	薬王寺	87
		豊岡村	観音寺	48
		大総村	霊通寺	38
		二川村	観音寺	90
			真福寺	44
	茅場　計			462
柳島	千葉県市原郡	湿津村	光福寺	35
			寿福寺	69
			満光院	99
			竜性院	46
		菊間村	長妙寺	57
			千光院	30
		菊間村	延命寺	28

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
柳島	千葉県市原郡	市原村	釈蔵院	110
			宝積寺	61
			養福寺	50
			光徳寺	55
		市東村	天羽別荘	25
			公会堂	30
			妙照寺	40
	柳島　計			735
牛島	千葉県市原郡	五井町	天理教会堂	48
		千種村	能蔵院	62
			持宝院	44
		東海村	森巌寺	37
			遍照寺	60
		市西村	法光寺	51
		海上村	正光院	56
			満蔵院	39
	牛島　計			397
外手	千葉県夷隅郡	西畑村	光善寺	46
			東福寺	44
			鈴木屋	49
		大多喜町	川田屋旅館	44
			大屋旅館	44
			藤本屋	23
			清水館	23
			中村屋	23
			川戸屋	22
		上瀑村	宝聚院	48
		中川村	妙泉寺	74
		千町村	行元寺	67
		国吉町	松屋	41
		布施村	長福寺	94
	外手　計			642
言問	千葉県君津郡	鎌足村	徳蔵寺	62

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
言問			栖安寺	54
		中川村	藤本旅館	38
			善福寺	29
		馬来田村	善雄寺	75
		平岡村	光福寺	47
			延命寺	50
	言問　計			355
中和	千葉県君津郡	秋元村	東田寺	42
			自性院	51
		小糸村	長谷寺	41
			天南寺	70
			万福寺	43
			高照院	40
			東光寺	40
		周南村	華厳院	36
			遍照寺	35
		環村	環国民学校	30
			興源寺	50
			千手院	20
	中和　計			498
本所	千葉県安房郡	国府村	延命寺	38
			宝珠院	22
		稲都村	智蔵寺	39
			天徳寺	39
		豊田村	東光院	30
			迎接寺	39
		丸村	高雲寺	33
			安楽寺	36
			茲雲寺	40
	本所　計			316
横川	千葉県君津郡	富岡村	油屋旅館	21
			広部別宅	39
	千葉県君津郡	小櫃村	萬福寺	42

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
横川			薬王院	40
		久留里町	正源寺	30
			真勝寺	27
			円覚寺	35
			円如寺	32
			大島屋	27
	横川　計			293
小梅	千葉県君津郡	松丘村	岩田寺	91
			幸田寺	40
			吉祥寺	40
			宝蔵寺	27
			川越旅館	27
			松本旅館	32
		亀山村	織本旅館	40
			折木沢公会堂	28
			円盛院	28
			泉滝寺	28
			明覚院	30
			蔵福寺	45
			亀屋	32
			亀山館	37
	小梅　計			525
菊川	千葉県山武郡	土気町	本寿寺	65
			善勝寺	60
		大網町	蓮照寺	59
			新増旅館	87
		東金町	本漸寺	80
			高女寄宿舎	108
	菊川　計			459
二葉	千葉県長生郡	茂原町	藻原寺	77
		二宮本郷村	如意輪寺	45
			本源寺	28
	千葉県長生郡	日吉村	円覚寺	34

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
二葉			円寿寺	25
		豊栄村	称念寺	34
		水上村	大正旅館	34
		長南町	長福寿寺	95
		鶴枝村	安楽寺	32
		土睦村	浄徳寺	33
		東村	分教場	28
	二葉　計			465
江東	千葉県香取郡	府馬町	修徳院	48
		八都町	西雲寺	37
		小見川町	松林寺	47
			本願寺	37
		豊浦町	浄福寺	45
		神崎町	国民学校	42
		香取町	香雲閣	51
			新福寺	51
	江東　計			358
明徳	千葉県香取郡	佐原町	金田旅館	36
			木内旅館	39
			法界寺	30
		大須賀村	宮本旅館	39
		香西村	大竜寺	44
		東大戸村	浄土寺	44
		瑞穂村	光福寺	46
		米沢村	妙楽寺	40
		神崎町	永興寺	49
		滑川町	竜正院	43
		小御門村	校長住宅	10
			成瀬宅	30
		照栄村	大日本青年館	140
	明徳　計			590
本所区　合計				8,185

本所区　第二次学童集団疎開先一覧表

墨田区教育史から（空白欄は不明）

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
本所	岩手県西磐井郡	金沢村		
	本所　計			
明徳	岩手県西磐井郡	一ノ関町	瀧門寺	
		赤荻村	要津寺	
			円満寺	
	明徳　計			
中和	岩手県西磐井郡	平泉村	毛越寺	65
		山ノ目村	川辺学寮	47
			前堀学寮	49
	中和　計			161(判明分)
江東	岩手県東磐井郡	大原村ほか2か村		
	江東　計			
柳島	岩手県和賀郡	笹間村	笹間学寮	
	柳島　計			
横川	岩手県稗貫郡	湯口村志戸平湯泉	久保田旅館	
	横川　計			
二葉	岩手県東磐井郡	藤沢町	円融寺寮	46
			禅弓院寮	29
		千厩町	中沢大光寺寮	22
			大光寺寮	49
	二葉　計			146
茅場	岩手県東磐井郡	磐清水村		
	茅場　計			
緑	岩手県東磐井郡	松川村	松川学寮	
		長坂村	長坂学寮	
		猿沢村	猿沢学寮	
	緑　計			
菊川	岩手県東磐井郡	室根村	岩手屋旅館	60
	菊川　計			60
本横	岩手県稗貫郡	花巻町太田	清水寺	50
			昌観寺	

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
本横	本横　計			50(判明分)
外手	岩手県稗貫郡	湯口村志戸平湯泉	志戸平学寮	
	外手　計			
業平	岩手県和賀郡	湯田村		
	岩手県下閉伊郡	山田町(再々疎開)	恵風園	
	業平　計			
錦糸	岩手県稗貫郡	湯本村花巻	花巻青年学校寮	68
	錦糸　計			
小梅	岩手県和賀郡	二子村	遍照寺	40
		更木村	永昌寺	40
		立花村	正洞寺	47
	小梅　計			127
言問	岩手県江刺郡	黒石村	正法寺	
	言問　計			
牛島	岩手県和賀郡	岩崎村	泉徳寺	
			慶昌寺	
		黒沢尻	正覚寺	
	牛島　計			
日進				
	日進　計			
本所区		合　計		2,178

本所区はまとまった資料がないので、学校沿革史・記念誌などにより判明しているところだけを掲載した。
(墨田区教育史から)

向島区　第一次学童集団疎開先一覧表

墨田区教育史から

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
第一吾嬬	茨城県久慈郡	大子町	菊屋	66
			寺田屋	44
			寿屋	19
			麻屋	22
			北条屋	25
			栄屋	86
			宝亭	29
		宮川村	丸屋	29
			鈴木屋	23
			沢の井	15
	第一吾嬬　計			358
第二吾嬬	茨城県結城郡	石下町	石下館	101
			住吉館	99
			釜仙館	97
	茨城県真壁郡	下妻町	会津屋	42
			なかや	48
			光明寺	82
	第二吾嬬　計			469
第三吾嬬	茨城県結城郡	結城町	称名寺	90
			弘経寺	71
			乗国寺	110
	第三吾嬬　計			271
第四吾嬬	茨城県新治郡	石岡町	橋本屋	56
			稲吉屋	59
			香取屋	61
			亀下屋	46
			よしの	63
	茨城県行方郡	玉造町	稲荷屋	82
			福増別館	23
	茨城県鹿島郡	鉾田町	沢屋	104
	第四吾嬬　計			494

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
第五吾嬬	茨城県西茨城郡	笠間町	えびすや	125
			井筒屋	171
			橘屋	60
	第五吾嬬　計			356
第一寺島	茨城県猿島郡	境町	瓢亭	62
			福島屋	27
			岡田屋	33
			橘屋	23
			小林屋	33
		岩井町	桝藤館	63
			八千代館	35
	茨城県西茨城郡	宍戸町	唯信寺	77
			養福寺	46
	第一寺島　計			399
第二寺島	茨城県稲敷郡	馴柴村	金竜寺	80
		龍ケ崎町	水戸屋	57
			森田屋	37
			和久屋	110
		根本村	中村屋	45
			阿弥陀寺	54
		瑞穂村	勝福寺	39
			海禅寺	44
	第二寺島　計			466
第三寺島	茨城県行方郡	潮来町	角菱館	95
			潮来ホテル	134
			長勝寺	40
		香澄村	天理教分教会	86
	第三寺島　計			355
請地	茨城県那珂郡	神崎村	上宮寺	105
		額田村	阿弥陀寺	79
		大宮町	坂井屋	74
			小林屋	36
		鹿郷村	境屋	25

国民学校名	学　寮　所　在　地		学寮・宿舎名	児童数(人)
請　地			金杉屋	45
	請地　計			364
橘	茨城県筑波郡	北条町	伊セ屋	79
			慶竜寺	73
		筑波町	江戸屋	162
			青木屋	45
			筑波屋	71
	茨城県真壁郡	真壁町	橋本旅館	68
	橘　計			498
隅　田	茨城県稲敷郡	龍ケ崎町	大統寺	79
			万象園	20
			般若院	86
		江戸崎町	飯野屋	60
			瑞祥院	71
			大念寺	74
		沼里村	常晃寺	69
	隅田　計			459
隅田第二	茨城県久慈郡	太田町	江幡屋	94
			誉田屋	32
			梅屋	32
			みよし屋	66
			銚子屋	76
		河内村	国華	38
			元禄	40
			福田屋	31
			福寿	31
		賀美村	中屋	62
			辰巳屋	32
			元湯	23
	隅田第二　計			557
向島中川	茨城県久慈郡	大子町	願誓寺	46
		袋田村	長生閣	249
	向島中川　計			295

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
向島更正	茨城県真壁郡	下館町	堺屋旅館	64
			妙正寺	79
			三桝屋旅館	91
			極楽寺	68
	茨木県真壁郡	下館町	新小島旅館	54
			星宮寺	55
	向島更正　計			411
向島梅若	茨城県真壁郡	真壁町	高久旅館	34
		雨引村	島田屋本店	54
			島田屋支店	28
		樺穂村	桜井旅館	68
	向島梅若　計			184
向島木下川	茨城県西茨城郡	笠間町	大阪屋穂銷	93
		西山内村	稲田屋	41
			稲田楼	71
		岩瀬町	富田屋	30
			大和屋	68
	向島木下川　計			303
向島大畑	茨城県行方郡	潮来町	福弥旅館	77
			中村屋	74
			吉見屋	42
			亀屋	29
	向島大畑　計			222
向島曳舟	茨城県東茨城郡	沢山村	常盤館	39
			泉屋	31
	茨城県新治郡	石岡町	東燿寺	44
			国分寺	48
	茨城県東茨城郡	竹原村	鳳林寺	33
			永福寺	27
	向島曳舟　計			222
向島区合計				6,683

向島区　第二次学童集団疎開先一覧表

墨田区教育史から

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
第一吾嬬	秋田県南秋田郡	五城ノ目町	珠厳院	71
			高性寺	51
			常演寺	31
	第一吾嬬　計			153
第二吾嬬	秋田県北秋田郡	大館町	一心院	23
			宋福寺	32
			玉林寺	30
		扇田町	正覚寺	30
			寿仙寺	30
			徳栄寺	29
	第二吾嬬　計			174
第三吾嬬	秋田県由利郡	本荘町	公徳館	62
		本荘町谷山小路	天理教教会堂	33
	第三吾嬬　計			95
第四吾嬬	秋田県平鹿郡	横手町	光明寺	29
			龍泉院	34
			正平寺	27
		十文字町	恵日寺	31
			栄昌寺	26
		栄村	正伝寺	22
			光徳寺	23
	第四吾嬬　計			192
第五吾嬬	秋田県由利郡	象潟町	蚶満寺	72
		金浦町	浄蓮寺	41
	第五吾嬬　計			113
第一寺島	秋田県南秋田郡	船越町	円応寺	38
			善行寺	38
		天王村	自性院	63
		脇本村	宝光院	65
	第一寺島　計			204
第二寺島	秋田県仙北郡	角館町	小林旅館	20

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
第二寺島			石川旅館	19
			粕谷旅館	20
			高橋旅館	14
			鈴木旅館	31
		長野町	伊藤旅館	20
			中仙倶楽部	41
	第二寺島　計			165
第三寺島	秋田県平鹿郡	浅舞町	浅舞学寮	69
		沼館町	沼館学寮	42
		大森町	大森学寮	31
	第三寺島　計			142
隅田	秋田県鹿角郡	花輪町	長年寺	45
			恩徳寺	38
		毛馬内町	毛馬内学寮	42
	隅田　計			125
隅田第二	秋田県由利郡	下浜村	珠林寺	31
			本敬寺	31
		上浜村	小砂川学寮	34
			川袋学寮	42
		本荘町	神明斉館	33
			天理教教会堂	31
	隅田第二　計			202
向島曳舟	秋田県北秋田郡	鷹ノ巣町	八幡学寮	47
			松野学寮	38
			若松学寮	40
		綴子村	綴子学寮	31
	向島曳舟　計			156
向島更正	秋田県仙北郡	大曲町	鞠水館	197
	向島更正　計			197
向島中川	秋田県河辺郡	和田町	和田学寮	44
			和田分寮	29
	向島中川　計			73
請地	秋田県雄勝郡	西馬音内町	西馬音内学寮	60

国民学校名	学寮所在地		学寮・宿舎名	児童数(人)
請地		三輪村	三輪学寮	48
	請地　計			108
向島梅若	秋田県仙北郡	六郷町	六郷学寮	30
		金沢町	金沢学寮	37
	向島梅若　計			67
向島木下川	秋田県由利郡	矢島町	錦字楼	47
			龍源寺	37
	向島木下川　計			84
向島大畑	秋田県平鹿郡	角間川町	角間川学寮	39
	向島大畑　計			39
橘	秋田県山本郡	二ツ井町	二ツ井学寮	78
		鵜川村	鵜川学寮	73
		森岳村	森岳学寮	60
		鹿渡町	鹿渡学寮	59
	橘　計			270
向島区　合計				**2,559**

向島区18校の学童は61箇所の学寮に疎開した。この表は、昭和20年8月、東京都秋田出張所が作成したものである。(墨田区教育史から)

学童集団疎開児童持参品

第四吾嬬国民学校

一、寝　具　掛布団一枚、敷布団一枚、敷布（ドンナ布ニテモヨシ）一枚、枕一個、毛布（アッタラ）

二、衣　類　寝巻、下着、上衣、ズボン、シャツ（最低三枚）、サルマタ・ズロース（最低二枚）、帽子、靴下又ハ足袋（一、二足）、モンペ、防空頭巾、腹巻

三、日用品

イ　食　器　茶ワン、汁ワン又ハソノ代用二箇、皿一枚、箸、フキン（手拭半分程度ノモノ）、水筒、（アレバ持ッテイク）

ロ　身廻品　洗面用又ハ代用（アッタラナルベク持参）、歯刷子、歯磨粉、手拭（二本アレバナホヨシ）、石鹸（半箇以上洗濯又ハ浴用イヅレデモ可）、クシ、小鏡（女子）、糸、ハサミ（アッタラ）、ホック、ボタン等ノ小物少々、ツギ布（白及色物各一尺以上）、ヒモ二・三本、ハガキ、封筒、チリ紙又ハ代用百枚程度、古新聞五枚以上、雑巾一枚、マスク

三、角布又ハソノ代用一枚

ハ　履　物　下駄、運動靴又ハ草履何ニテモヨシ二足程度

四、教科書、学用品（カバン又ハフロシキ、ランドセルニ一括）

五、身廻品ヲ整理スル入物、リックサック又ハ代用ニナル袋、フロシキ、行李（小）又ハトランク、洋服箱又ハソレニ類スルモノ右ノ中ドレニテモヨシ一ツ

六、其の他　米二升、味噌五十匁、マッチ二十本程度、小遣銭二円、異動証明書（前日マデニ用意シ学校デ集メテ一括持参）

七、右全部の品物の中、米・味噌・マッチ・小遣銭其ノ他コワレヤスキモノ等一括当日持参、残リノモノハ荷造リシ輸送デキル如クス、ソノ場合重さ三十瓩（約八貫）ヲ超ヘテハナラナイ

荷造リシタルモノハ九、十両日中ニ学校ヘ持参スル

以上

（平成元年三月第四吾嬬小学校発行「ふるさとあづま」から）

学童集団疎開学寮の一日「生活行事」

第四吾嬬国民学校

五・三〇～六・〇〇　起床、床上げ、用便、清掃、朝礼、点呼訓示、乾布マサツ、軽イ体操等

七・〇〇　朝礼（休憩）

八・〇〇～一一・〇〇　午前中の課業、予習復習、洗濯その他

一一・三〇　昼食

一二・〇〇～　一・〇〇　休憩

一・〇〇～　三・〇〇　午後の課業、農耕、自然観察、戸外運動、スケッチ等

三・〇〇～　四・三〇　自由時間

四・三〇　入浴

五・三〇　夕食

六・〇〇～　七・三〇　自由時間、娯楽的方面、読書、ホコロビ、家庭通信、日記等、ラジオ

七・三〇　室内整頓、清掃

八・三〇　就寝、点呼　オ父サンオ母サンオヤスミナサイ先生オヤスミナサイ

九・〇〇　消燈

（平成元年三月第四吾嬬小学校発行「ふるさとあづま」から）

学童集団疎開先学寮の献立例「中和国民学校・千手院の献立」

（墨田区教育史から）

月日	朝食	昼食	夕食	おやつ
八月二七日（月）	ご飯 ナスとトウナスのおみおつけ　ナスのおこうこ	ご飯 ジャガイモの煮物　ナスのおこうこ　にしんの煮物	ご飯 ショウガ トウナスの煮物	
九月二一日（水）	カボチャのまぜご飯 ナスのおみおつけ	白米 カボチャの煮物	白米のにぎりめし 玉ネギ ナスのすいとん	
一〇月七日（土）	大根の葉のぞうすい 牛乳	ジャガイモと玉ネギのライスカレー　キュウリのおこうこサケのかんづめ	ご飯 大根の葉のおみおつけ ナスのおこうこ	
一一月二一日（火）	ご飯＝小麦 大根と葉のみそ汁 白菜のお新香	ご飯＝小麦 カボチャの煮物	ご飯＝小麦 サツマイモの煮物 白菜のお新香	牛乳 カンパン十個
〃一二月一〇日（木） 牛乳〃	ご飯＝小麦 サツマイモ　カブ サトイモ　おみおつけ	ご飯＝小麦 ニンジン　ゴボウ　サケのかんづめ　ハヤトウリ	ご飯＝小麦 ニンジン　ゴボウ　サケのかんづめ　サツマイモの煮物	サトウ豆さじ四はい
〃一月一日（月） 牛乳〃	おもち五つ 焼のり一枚　サトイモと大根のおぞうに	ご飯＝白米のおにぎり二つ 大根	ご飯＝白米 サケ、イワシのかんづめ ヤマイモ、ゴボウの煮物	柿一つ
一月三〇日（火）	ご飯＝白米 菜　牛肉 油のおみおつけ	ご飯＝白米 ジャガイモ　牛肉のライスカレー　タクアン	ご飯＝白米 大根、牛肉の煮物	ニッキ一袋五十銭
二月四日（日）	ご飯＝小麦 サツマイモのおみおつけ フリカケ	ご飯＝小麦 サツマイモと大根とサケ、イワシの煮物	ご飯＝小麦 コノシロの焼いたもの、二匹の魚	柿一個
〃二月一五日（木） 牛乳〃	ご飯＝白米 大根、煮干のおみおつけ フリカケ	ご飯＝白米 サツマイモ交る	ご飯＝白米 大根、煮干の煮物 大根のおこうこ	アドベ三個

ことばの解説

（　）内は読みがな

赤紙（あかがみ）　「召集令状」を参照。

アルミ箔（アルミはく）　アルミニウムを薄い紙状にのばしたもの。米軍が日本軍のレーダーを乱すため空中に電波妨害テープとしてまかれた。アルミ箔はレーダーに反応するため爆撃機の機数や進行方向が分かりにくくなる。

慰問文・慰問袋（いもんぶん・いもんぶくろ）　慰問文は戦地の兵士を見舞うために書いた手紙などで疎開児童も書いて送っている。それらの手紙や慰問文、日用品、娯楽品などを入れたものが慰問袋という。

衣料切符（いりょうきっぷ）　衣料を割り当てて配るために政府が発行した点数制の切符。昭和一七年（一九四二）から二五年まで続いた。

疥癬（かいせん）　疥癬虫の寄生によって起こる伝染性の皮膚病。わきの下や内またなどに赤い丘疹（きゅうしん）ができたり、指の間に小さな水ぶくれができたりするのが特徴で、非常にかゆい。

かい巻き（かいまき）　小型で、綿を薄く入れた袖付きの夜具。掛け布団の下に掛ける。

学徒出陣（がくとしゅつじん）　第二次大戦末期の昭和一八年（一九四三）以降、兵力不足を補うために旧制の高等学校、専門学校、大学予科、大学の修業年限を引き下げ、また徴兵を伸ばしていた制度を廃止して、学生・生徒を入隊・出征させたこと。

叺（かます）　わらで編んだむしろを二つ折りにし、縁をとじて作った袋。穀類・塩・石炭・肥料などの貯蔵・運搬に使った。疎開児童が縄をない、かます作りを手伝うこともあった。

艦載機（かんさいき）　軍艦に積載される航空機。ふつう航空母艦に搭載するものを艦上機というのに対して、他の軍艦に積む航空機をいう。疎開先で、艦載機の機銃掃射で死亡した例もある。米軍はたびたび艦載機による機銃掃射攻撃を行った。

甘藷（かんしょ）　さつまいものこと。

乾布摩擦（かんぷまさつ）　皮膚を強くする方法の一つで、乾いた手ぬぐいなどで体をこする。集団疎開先で日課として行った例が多い。

機銃掃射（きじゅうそうしゃ）　機関銃の銃口を動かし、敵

をなぎ払うように射撃すること。艦載機からの機銃掃射を受けた例が多く伝えられている。

鬼畜米英（きちくべいえい）　敵国としていたアメリカ（米）とイギリス（英）は鬼や畜生（ちくしょう）で残酷、無慈悲な行いをする国という意味で使った。

宮城遥拝（きゅうじょうようはい）　遥拝とは遠くに離れた所から拝むことで、皇居の方へ向かって頭を下げること。集団疎開地では、毎朝、東京の皇居の方向にお辞儀をした。（文中では宮城礼拝とも）

教育勅語（きょういくちょくご）　明治天皇の名のもとに、明治二三年（一八九〇）一〇月三〇日に発せられた「教育ニ関スル勅語」のこと。教育の根本を皇祖皇宗（こうそこうそう）の遺訓に求め、忠孝の徳を国民教育の中心にした。国民の守るべき道徳、忠君愛国の精神を中心に、終戦まで、学校教育の支柱として子供たちに教えられた。昭和二三年（一九四八）国会でその失効および排除を決議した。

玉音放送（ぎょくおんほうそう）　玉音とは天皇の声のこと。昭和二〇年八月一五日正午から重大ニュースとして、天皇自らのことばで終戦の詔勅が放送された。

金属類回収令（きんぞくるいかいしゅうれい）　昭和一六年九月施行。戦争の長期化に伴い、政府は軍需物資としての鉄、銅を確保するために金属類回収令を発動した。これにより、神社、寺院、教会等の鉄、銅製品の回収が実施され、一部では鉄道の線路まで供出された。戦局の推移とともに鍋や釜までがその対象となった。昭和一七年六月には、江東楽天地の鉄柵や屋上広告塔などのあらゆる金具が取り除かれた。

勤労奉仕（きんろうほうし）　公共的な目的のために無報酬で勤労に従事すること。戦争中、集団疎開の児童も、まき運びや稲刈りなど農家の手伝いに無償で行くこともあった。

軽便鉄道（けいべんてつどう）　線路の幅が狭く、機関車・車両とも小型の小規模の鉄道。

空襲警報（くうしゅうけいほう）　敵機の空襲が確実になったときに鳴らす警報のサイレン。戦争末期には、空襲と警報が同時のことも多かった。

庫裏（くり）　寺院で、食事を調える建物。住職やその家族の住む場所。

軍事教練（ぐんじきょうれん）　大正一四年（一九二五）から、学校で学生・生徒を対象に行われた陸軍将校による軍

事に関する訓練。昭和二〇年（一九四五）廃止。教練。

軍需工場（ぐんじゅこうじょう）　戦争に必要な武器、弾薬、航空機、車両などを製造・加工する工場。墨田区など下町には多くの軍需工場があったので、三月一〇日の東京大空襲の無差別爆撃の名目となった。

訓導（くんどう）　国民学校の正規教員。現在の教諭。

警戒警報（けいかいけいほう）　敵機の来襲は確実であるが、目的地が分からない場合、その進行方向の地域でサイレンを鳴らし警戒を呼びかけた。危険度が高くなった地域には空襲警報が出された。

警防団（けいぼうだん）　戦時中、地域の消防や防空などのために組織された団体。従来の防護団と消防団が警察署単位に統合された。本所区には両国、厩橋、太平、言問の四つ。向島区には寺島、吾嬬の二つが組織された。昭和一四年（一九三九）設立、同二二年廃止。

ゲートル　ズボンの裾（すそ）　がじゃまにならないように脛（すね）に巻く、革・ズック・ラシャなどで作った帯状の布。主に陸軍の軍人が着用したが、戦時中は一般男子・学童も着用した。洋風の脚絆（きゃはん）。

行軍（こうぐん）　軍隊用語。軍隊が隊列を組んで遠距離を移動、行進すること。疎開児童も、中長距離を行軍練習として歩くことがあった。

高射砲（こうしゃほう）　地上から敵機を撃ち落すための中小口径の火砲。空中で砲丸が破裂する。高高度を飛行するB29に対しては効果を発揮できなかった。

高等科（こうとうか）　旧制の尋常高等小学校で、高等小学校に相当する教育を行った課程。国民学校初等科一～六年生の上にあった二年間の教育課程。当時の中学校（女子は高等女学校）は受験して合格しなければ入れなかったので、多くは高等科へ進んだ。

行李（こうり）　竹や柳で編んだ箱形の物入れ。旅行のときも荷物の運搬や衣類の保管に使われていた。疎開先に荷物を送るのに多く使われた。柳で作ったものを柳行李という。

国民学校（こくみんがっこう）　昭和一六年（一九四一）公布の国民学校令により小学校を国民学校と改称した。皇国民の基礎的練成を目的とする初等教育機関と位置づけられた。昭和二二年まで存続。

国民服（こくみんふく）　国民が常に着るべきものとして、国民服令（昭和一五年）によって制定された服のこと。色

は軍服と同系色で、儀礼章（ぎれいしょう）を胸につければ礼服としても機能したが、なかなか普及せず、昭和一九年ごろになって広く男子に着用されるようになった。

国家統制（こっかとうせい）　昭和一三年の国家総動員法の公布によって、すべての生活必需品は国家統制の下に置かれた。昭和一三年に電力の国家管理、一四年に米・石炭の配給統制、一五年には米・麦は一日二合三勺（約四一四cc）、砂糖は一月半斤（九〇〇グラム）、酒は切符制、賃金・家賃等は凍結、一六年米通帳制、一七年塩・みそ・しょう油・衣料が通帳、切符制配給と順次配給制が取られた。また、物価統制令に基づき惣菜類最高販売価格が定められて、魚を使った寿司、天ぷら類の値段まで事細かに定めるようになり、ほぼ全製品が統制の対象となった。

在郷軍人・会（ざいごうぐんじん・かい）　ふだんは民間で生業に就いているが、戦時には必要に応じて召集され国防の仕事をする予備役・後備役などの軍人。

師範学校（しはんがっこう）　旧制の教員養成学校。

修身（しゅうしん）　旧制の小中学校の教科のひとつ。教育勅語をよりどころとする道徳教育を行ったもの。

出征（しゅっせい）　軍隊の一員として戦場に出ること。

傷痍軍人（しょういぐんじん）　戦争で身体に傷を負ったり、戦闘や公務で負傷した軍人。

焼夷弾（しょういだん）　燃えやすい焼夷剤（重油・揮発油など）を入れた爆弾。日本の家屋は木造建築が多かったので、米軍は空襲の際、焼夷弾を多用した。木や衣服にも付き、燃やす効果があった。東京大空襲では、いくつもの小さな焼夷弾を束ねたものが空中で散らばるように設計されたものがB29からまかれ、大きな被害を出した。焼夷剤の種類によってエレクトロン焼夷弾、黄燐（おうりん）焼夷弾などがある。戦争末期にはより強力なナフサとパーム油を主原料としたナパーム弾も使われた。

松根油（しょうこんゆ）　戦争末期、航空燃料の不足を補うため、松の根からとれる油を使おうと、子供たちまで動員して松の根が掘られた。しかし、実際にはほとんど役に立たなかった。松の根の株や枝を乾留（かんりゅう）して得られる油。テレビン油やパイン油を含む。

召集令状（しょうしゅうれいじょう）　戦争などが起きたときに、国民兵、在郷軍人（予備兵・後尾兵など）を召集するための命令書。令状の紙の色が赤だったので一般に赤紙とも言われていた。

省線・省線電車（しょうせん・しょうせんでんしゃ）　もと鉄道省（現在の国土交通省）が管理していた鉄道線。省線電車の略。ＪＲの旧称。

照明弾（しょうめいだん）　夜間の攻撃や飛行機の離着陸、偵察のために地上の闇を数秒あるいは数分にわたって照らすための砲弾。火砲から発射、または、航空機から投下する照明用の弾丸。夜間の探索・戦闘・合図などの目的で使用される。

水銀軟膏（すいぎんなんこう）　水銀に無水ラノリン・豚脂・牛脂などを混ぜて作った軟膏。梅毒治療、ケジラミ駆除などに使われた。

スカンポ　タデ科の多年草。山野に自生。花が紅色のものを特に、明月草（めいげつそう）と呼ぶ。若い茎は酸っぱいが、食べられる。根を漢方で虎杖根（こんじょうこん）といい、利尿・通経薬とする。

戦災孤児（せんさいこじ）　戦災で両親を失い、身寄りのなくなった子供。収容施設も作られたが、終戦後、行き先を失った戦災孤児が浮浪児として駅舎、地下道に集まり社会問題となった。

戦時債券（せんじさいけん）　戦争のため急増した軍事費をまかなうため政府は国債を増発したが、軍事産業を主とした生産力拡充に資金が流れたため、債券消化に支障をきたした。そこで、民間人の小口資金の吸収を図るため、昭和一二年に貯蓄債券、昭和一五年に報国債券を発行した。あまり売れなかったので、売り場をたばこ屋などにも拡張し、町内会や隣組を通して強制的に割り当てた。しかしこれらの債券は、日本の敗戦で紙クズ同然となった。

千人針（せんにんばり）　戦場での安泰を祈って、さらし木綿の布に赤い糸で一針ずつ縫って、千の結び玉を作ったもので、慰問袋とともに出征兵士に贈った。結び玉は一人一つずつだが、虎は「千里行って千里帰る」という言い伝えから、寅年の女性は歳の数だけ縫えた。日清・日露戦争のころ始まり、日中戦争以後盛んになった。

疎開（そかい）　空襲・火災などによる損害を少なくするため、都市などに集中している住民や建物を地方に分散すること。戦争初期には、空襲を逃れるために都市から地方に移動することは逃亡であるとして非難されたが、本格的な空襲を受け始めると将来の戦力である児童を地方に移動させることは、後方支援として積極的な意味があるとして「縁故疎開」が奨励され「学童集団疎開」につながった。

このような経緯から、「避難・退避」ではなく「疎開」の言葉が使われた。

第二次世界大戦（だいにじせかいたいせん）　日本・ドイツ・イタリアなどの枢軸国（すうじくこく）とアメリカ・イギリス・フランス・ソ連などの連合国との間で行われた世界的規模の戦争。一九三九年のドイツのポーランド侵攻によって始まり、イギリス・フランスの対独戦争、独ソ戦争、太平洋戦争と拡大した。初め、枢軸国が優勢であったが、のち、連合国が優位に立ち、一九四三年イタリアが降伏、一九四五年五月ドイツが降伏。また、日本もソ連の対日参戦とアメリカによる広島・長崎への原子爆弾投下によって、同年八月に降伏し大戦は終結した。

大八車（だいはちぐるま）　荷物運搬用の二輪車で、二～三人でひく大型のもの。大人八人の代わりをする車とのことから付いたともいう。自動車が一般的でなかった戦前は、荷物運搬用としてよく使われた。

太平洋戦争（たいへいようせんそう）　第二次世界大戦のうち、アジア・太平洋地域で行われた日本とアメリカ・イギリス・オランダ・中国など連合国との戦争。昭和一六年（一九四一）日本の真珠湾攻撃によって始まり、初め日本が優勢であったが、同一七年半ば以降、連合軍が優位に立った。同二〇年、広島・長崎への原子爆弾投下とソ連の参戦によって日本がポツダム宣言を受諾、無条件降伏し、終結した。戦争中、日本では大東亜戦争と称した。

代用食（だいようしょく）　米や麦などの代わりに食べる食品のこと。特に米の代わりにする食品。芋類・めん類など。戦争中、海外からの食料輸入が難しく、配給食料品が不足した。そこで政府は、かぼちゃやじゃがいも、さつまいもなどを代用食とし増産を奨励した。

代用品（だいようひん）　ある物の変わりに使う間に合わせの品物。戦時中は物資が不足したために、さまざまな手作りの器具や代用物が創案された。

竹槍・竹槍訓練（たけやり・たけやりくんれん）　竹ざおの先を鋭く斜めに切り落として、槍の代わりに使う。昭和一九年八月、閣議決定「一億国民総武装」により、全国で竹槍による武装、攻撃訓練が始まった。米軍の本土上陸に備え、竹槍で敵と戦うための訓練は、町内会単位などで女子を中心に行われた。

建物疎開（たてものそかい）　空襲のとき、火災による被害を少なくするために、人口密集地や軍需工場周辺の建物は

強制的にとり壊された。総武線沿い、四つ目通り沿いなどは、早い時期に建物疎開が行われた。

チッキ　駅止め荷物のこと。鉄道などが旅客から手荷物を預かって輸送するときの引換券。手荷物預り証。転じて、手荷物として輸送すること。また、その手荷物。宅配便のような輸送方法がなかったころ、大きな荷物は行き先の駅まで送ることが多かった。

ＤＤＴ（でぃーでぃーてぃー）　殺虫剤の一つ。有機塩素系で、神経毒として強い殺虫効果を示すが、残留性が高く、環境汚染や生物濃縮をもたらす。現在は使用禁止。終戦後、シラミ退治のため、強制的に頭にかけられたこともあった。

伝単（でんたん）　中国語からきた宣伝ビラのこと。第二次大戦中に使われた。戦時中に米軍が日本人の戦意をなくさせることを目的として投下・散布した宣伝ビラで、日本国民に対して降伏を呼びかけた。

天秤棒（てんびんぼう）　両端に荷物をつるし、真ん中を肩に当てて担ぐ棒。

灯火管制（とうかかんせい）　夜間の空襲に備えて、爆撃の目標にならないように、電灯を消したり黒い布で覆たりして、光が漏れないようにした。終戦の実感として、明るい電灯の光を挙げる人も多い。

東京都慰霊堂（とうきょうといれいどう）　関東大震災の犠牲者を追悼するために建てられた。もと陸軍被服廠跡地で、大震災から逃れようとした人々が大量に焼死した地である。その後、昭和二〇年の東京大空襲の犠牲者を始め、空襲による戦災者も合わせて祀（まつ）られることになり、昭和二六年「震災記念堂」から「東京都慰霊堂」と改称された。

隣組（となりぐみ）　第二次大戦下、国民統制のためにつくられた地域組織。町内会・部落会の下に属し、近隣数軒が一単位となって、互助・自警（防火訓練、地域警備）・配給などにあたった。昭和二二年（一九四七）廃止。

配給制度（はいきゅうせいど）　統制経済のもとで特定商品の一定量を特別の機関や方法によって消費者に公平に売ること。戦時体制化の品不足で、食料や衣類などの生活用品は価格が統制され、自由販売の禁止、配給制、切符制が取られた。米、みそ、しょうゆ、砂糖、塩、肉、酒、たばこなどは、通帳、切符などによる配給制となった。

波状攻撃（はじょうこうげき）　寄せては返す波のように、

連隊を組んでくりかえし攻撃や爆撃すること。何回にもわたって繰り返し攻撃を加えること。

半鐘（はんしょう）　釣鐘の小さいもの。本来は寺院や陣中などの合図に使ったが、江戸時代から火の見櫓（やぐら）につるし、火災・洪水・盗賊などの非常時に鳴らすようになった。

B29　Bは英語の爆撃機の略で、第二次大戦中に登場した米国の四発重爆撃機。航続距離が長いため、サイパン島が陥落した後、同島を基地として日本本土を空襲した。当時としては高高度を飛行できたため、日本の高射砲では撃墜が難しかった。広島、長崎に原爆を投下した爆撃機としても知られる。

火たたき　竹の棒などの先に縄などをつけたもの。これで火をたたくことによって消火しようとした。空襲の場面ではあまり効果が上がらなかった。

人だま（ひとだま）　夜間、空中を飛ぶ青白い火の玉。死人の体からぬけ出した魂と考えたことから。

被服廠（ひふくしょう）　軍隊で使用する衣服を作るための軍の簡略なつくりの工場。現在、大正一一年（一九二二年）、東京市は陸軍被服廠の移転に伴い跡地（東京都慰霊堂がある横網町公園）を買収し、公園の造成を進めていた。その最中に発生したのが、翌一二年九月一日の関東大震災である。このとき、この付近の人々が被服廠跡に避難したが、運び込まれた家財道具などが燃えたことに始まり約三万八千人の焼死者が出た。

武運長久（ぶうんちょうきゅう）　戦いの運が長く続き、勝ち続けることを願う言葉。

奉安殿（ほうあんでん）　第二次大戦中まで、各学校で天皇・皇后の写真（御真影）や教育勅語などを収めていた建物。小さな神社のような外観で、台座の上に載せられている。

防火演習（ぼうかえんしゅう）　空襲による被害を防ぐために、実際の状況を想定して行われた訓練。町内会、隣組、学校などで盛んに行われたが、B29の無差別爆撃に対してはほとんど意味がなかった。

防火用水（ぼうかようすい）　防火活動の一つとして、地域や家庭の貯水槽、用水おけ、風呂おけ、バケツにいつも貯めておいた水のこと。

防空壕（ぼうくうごう）　空襲の被害を避けるための穴や地下室。各家庭でも庭や床下につくり、警戒警報や空襲警報

が鳴ると防空壕に避難した。穴を掘って木製のふたをしただけのものから会社などが作ったコンクリート製で数十人が入れるものまであった。

防空頭巾（ぼうくうずきん）　空襲から身を守るために頭にかぶった綿入れの頭巾。防寒用にもなるのではじめは女性専用だったが、次第に男性も使うようになった。一辺六〇センチほどの四角いふとんを二つ折りにして縫い合わせ、学童は必ず持って通学した。現在小学校で使われる「防災頭巾」の原型。

満艦飾（まんかんしょく）　海軍の礼式の一つで祝祭日や観艦式などの際に、停泊中の軍艦が艦全体を信号旗・万国旗などで飾りたてること。そこで、身なりを飾りたてたり、物をいっぱいにつるしたりすることを例えていう。

木炭自動車（もくたんじどうしゃ）　木炭ガスを燃料にして走る自動車。第二次大戦末期から戦後の一時期、日本で走っていた。

もんぺ　はかまの形をして足首が細くなっている衣服。戦争前後は女性の作業衣として使われた。

やみ物資（やみぶっし）　公には認められていない裏の取引によって入手した物資。統制経済のもとで、正式のルート以外で流通し、戦後「やみ物資」を扱う「やみ市」が多く存在した。

予科練（よかれん）　「海軍飛行予科練習生」の略称。旧日本海軍で、飛行機搭乗員育成のため昭和五年（一九三〇）に設けられた制度。一四～一五歳の少年に約三か年の基礎教育を行った。

罹災証明書（りさいしょうめいしょ）　空襲で家を焼かれた人たちに発行されたが、この証明書があっても日用品の支給は充分に受けられなかった。罹災者の増加により、その救護対策に困った政府は、罹災者の集団疎開を推進した。罹災者が疎開先への切符を買うのにも必要だった。

協力者一覧

敬称略

秋月美津江　朝倉　達郎　石井　仁　石井　泰代
石倉　一郎　石谷栄次郎　市川五五太郎　植木　敬一
海老沼賢次　大川　慶一　太田　敏栄　大塚　繁
大塚美枝子　大野　正子　大橋　敏雄　岡野　郷子
岡本　直司　沖田喜代子　小沢　末子　尾野　房江
角田　悦子　勝谷　保　鎌倉　徳之　上野川康子
上村　道子　上蕨　博　加茂　登千　川原田　叶
北橋　秀夫　北村　芳子　城戸　房嗣　城森　満
工藤　愛子　児島　圭子　後藤　代三　小林　勇造
早乙女健一　早乙女達男　酒井喜美子　酒巻　壮宣
佐久間幸子　桜沢　京子　佐々木清江　佐藤　五郎
佐野　弘明　鹿田　嘉正　宍戸　弘明　柴　トミ子
柴山ヒデ子　菅原　哲也　杉田　一雄　杉田　利雄
鈴木　裕子　大黒小の実　髙橋千枝子　髙橋　由春
滝沢　弘子　瀧澤　良仁　武田　英二　田島　静子
田中嘉津子　谷　公子　玉川　雅雄　田村　昇
千葉　脩司　土田　敬子　土屋冨貴子　土屋百合子
角尾　禎昭　徳永　洋子　長岡　瓔子　中島　邦子
長嶋　之夫　中村　靖　中村　洋子　浪川　和夫
並木　孝信　野田とき子　野谷　敏子　橋本　喜雄
羽根田尚三　羽根田　整　早川　巖　林　澄子
林　恒雄　樋口　実　平野　義明　藤本　武雄
星野　光世　牧　康策　牧瀬　正子　正井　伸也
益子　孔一　増田　三枝　松本　章乃　間宮　好枝
丸山　房子　三木　静子　三国　智司　溝口　順重
三宅冨美江　三好すず子　向山　政一　村田　繁彰
村田　庄二　森田　佳伸　八重田賢一　山崎　格
山本　善弘　湯川　鎮雄　吉澤　恒雄　渡辺　桂子
渡辺　貞子

墨田区老人クラブ連合会
次代に継ぐ平和のかたりべ事業のかたりべの皆さん
東京空襲犠牲者遺族会

寄稿者地域別一覧

千葉県	13	墨田区	46	町田市	2
神奈川県	4	江東区	5	多摩市	2
埼玉県	3	江戸川区	5	西東京市	1
山形県	1	足立区	4	稲城市	1
新潟県	1	台東区	3		
群馬県	1	葛飾区	3		
茨城県	1	中野区	3		
熊本県	1	荒川区	2		
長崎県	1	目黒区	2		
		品川区	1		
		渋谷区	1		
		北区	1		
		港区	1		
		杉並区	1		
		新宿区	1		
	26		79		6

合　計　　111人

語りつごう平和への願い
～学童疎開墨田体験記録集～

平成一七年一二月一〇日　発行
発　行　墨田区教育委員会
　　墨田区吾妻橋一丁目二三番二〇号
印　刷　大東印刷工業株式会社

墨田区立あずま図書館
〒131-0044 墨田区文花1丁目19番1号







ひきふね自動出納
31240674